

乙女ゲー世界はモブた
ちに厳しい世界です

鈴木ひまり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

残酷で厳しい世界に生まれ落ちて、散々苦勞して、それでもより良い未来を信じて、一杯時を過ごしていたのはいつでも誰でも同じ。

これは本家本元の物語では捨象された時期、語られることのなかった者たちの物語。

注意

基本的に時系列順で章が進みますが更新の順番はかなりバラけてます。

読みにくかつたらすみません。

※クラリスルートは別作品として分離しました。既にある連載分は残してあります

が、今後はこちら↓<https://syosetu.org/novel/2625>
16 / で連載していきます。

目次

約束された未来は遠く

森の中で

生きるための闘い

帰還、そして出発

奪われた者たち

船泥棒

運び屋

鬼ごっこ

鬼ごっこ II

お別れ

スライス・オブ・スクールライフ I

ルクシオーヌ

ミリーとジェシカ

怨嗟の夏と罅割れる世界

懐飯

助っ人

ヘステイカセブン

夏涼み

スライス・オブ・スクールライフ II

ダンジョンライフ

王子様の憂鬱

ポストウオー・デイズ

古い友人

クラリスルート (旧)

連休

95

106

120

133

148

159

173

184

201

1

14

24

34

44

54

61

72

81

お茶会	216
収穫祭	231
アグレッシブ攻略系お嬢様	245
遅すぎた救援	260
交戦準備	275
攻撃開始時刻	291
公爵令嬢奪還戦	306
黒騎士	326
決着	347
空葬い	364
疑惑	382
掴み取る幸せ	401
新たなる波乱の予感	425

マリエの正体	443
長いお話	464
フェイタルダメージ	490
冬休み I	513

約束された未来は遠く

森の中で

「お兄ちゃん、おんぶ」

「それくらいなら自分で歩ける。背負うと背中が暑いから嫌だ。それにお前、重いし」
前世で膝を擦りむいて兄におんぶをねだり、けんもほろろに断られたのを思い出す。
兄はそのまま自分を置いて行ってしまった。

嘘泣きだったのが本物になり、ずっと泣いた。

結局どうやって帰ったのか、今も思い出せないでいる。

「なんで今になって前世の兄貴のこと思い出すのよ」

マリエは毒づいた。

今のマリエの状況は前世で兄に置き去りにされた時とはわけが違う。

兄姉に呼び出されてあれよあれよという間に馬に乗せられ、森へキノコ狩りに連れて行かれたと思えば——マリエが馬を繋いであった場所に戻った時、馬はおらず、兄姉の姿もなかった。

マリエは森の中に置き去りにされたのだ。

森といつても猛獣と呼べる動物がほとんどいなかった前世の日本の森ではない。

モンスターと呼ばれる凶暴な生物が無数に生息し、時にはドラゴンのような大型モンスターが棲みついて縄張りを作っていたりもする異世界の森である。

（ああ・もう・ことあるごとくに言いがかりつけて意地悪はしてくるし、パシるし、ご飯は横取りするし、挙句こんな森の中に置いてくし！私が何したっていうのよ！）

今世の家族は前世の家族とは大違いだった。

貧乏なくせにプライドだけはやたらと高く、借金ばかりしている両親に、しよつちゅうマリエをいじめる酷い兄妹。

たぶん帰ったところで「お前の分はもうない」と言われて食事にもありつけない。

ここまで邪険にされている理由は実のところ分かっている。

自分は望まれて生まれてきたわけではないからだ。

偶々賭け事で大勝ちして調子に乗った父親が事業を起こしたと思つたら、巨額の赤字を出して失敗。

ストレスを溜め込んだ父親がそれをひたすらに母親の下半身にぶつけ続けた結果、できたのが末娘のマリエだった。

（避妊ぐらいちゃんとしなさいっての！）

転生する前は今世の母親と似たような立場にあったマリエだが、それでも避妊にはちやんと気を配っていた。

それまでの経験で、望まないタイミングで子供ができることは親子双方にとつていいことなしだと思いつたからだ。

その経験とはどんなものかというところ——

兄が死んでから実家を追い出され、大学を中退して働き始めた頃、職場で出会った自称「駆け出しのバンドマン」と付き合っていたのだが——

見てくれはいいがそれに胡座をかいて努力をせず、それでいて夢だけは大きい。

恋人が一途に尽くしてくれているのに他の女に言い寄られれば鼻の下を伸ばす。

むしろ自分から積極的に他の女に言い寄る。

好きなことだけして楽に人生を送りたいと舐め腐った思考をしている。

息を吸うかのようにギャンブルをし、そして負ける。

定職に就こうともせず酒ばかり飲んで、「俺が売れないのはどう考えても世間お前が悪い

！」と文句を言い、空き缶を床に叩きつけて『おい——、そのいやらしい体を使っ

てちよつと金を稼いで来い』と言い出す。

ざつと挙げただけでも六ヶ条にもものぼる問題がある男であり、彼のためにマリエはバ

イトを辞めて夜の世界で水商売に身をやつした。

バイトしていた頃よりも収入は上がったが、給料は入ったそばから彼に使われて生活費もカツカツ状態。

そしてそれを補うために出勤を増やせば、自分との時間を蔑ろにしているなどと文句を言われる。

だが、そんな酷い男でも別れるに別れられなかった。

反抗などすれば怒って暴力を振るってくるからというのもあるが、彼と暮らしている間は孤独を忘れられたからだった。

いとも堂々たる共依存関係である。

そんな暮らしを始めて一年ばかりが過ぎた頃、マリエの妊娠が発覚した。

それを知った男は責任を取るどころか、さっさと墮ろせと言ってきた。

マリエには受け入れ難い要求だった。せつかく宿った命を勝手な都合で殺されるなど耐えられなかった。

そしてあれやこれや理由を並べてなおも逃げようとする男に、堪忍袋の尾が切れた。

いい加減に目を覚ませ、お前は父親になったんだ、と怒鳴りつけ、拙い言葉で懸命にこれから二人で力を合わせて子供を育てていこうと訴えた。

すると男は次の日から帰ってこなくなつた。

お腹の子供共々捨てられたのだと、理解して受け入れるのに一週間かかった。

一人残されたマリエは怒りと恐怖と絶望に苛まれ、何度も墮ろそうかと考えたが、結局できずに子供を産んだ。

元気な女の子だった。無事に生まれてきてくれたことにひたすら安堵した。

子供という自分の命よりも大事なものができたマリエはそれまで以上に必死で働いたが、水商売に身をやつした彼女に仕事と子育ての両立は酷だった。

それまで働いていた店では働けなくなり、マニア向けの店で働いた。

店の仲間たちは時々差し入れをくれたり、マリエが出勤している間子供を預かってくれたりとよくしてくれたが、マリエは自宅での子供との時間を大切にしていた。

だから店にはあまり出勤せず、安全そうな客を見繕って自宅に連れ込んで稼ぐ、という手を度々使った。

手っ取り早く稼ぐために思いついた手だったが、子供が物心ついてくるとその手も使えなくなつた。

いよいよもつて切羽詰まつたマリエは結局子供を手放すことになった。

追い出されてから久しく連絡を取っていなかった両親に預けたのだ。

それが子供のためになると思つた。

本音を言えば子供と一緒にいたかつたが、生活に困窮していたのは事実だったし、自

分の苦勞に子供を巻き込んでしまふのは辛かった。

「どうしてこんなことになつちやつたんだらうね。ごめんね、——。ごめんなさい」
泣きながら、そう言ったのを転生した今でも憶えている。

その経験がトラウマになつてそれ以降、子供ができるのを怖れた。

だが、今世のマリエの両親はそうではない。

なぜか。それは彼らが領主貴族だからである。

領地経営の諸経費と王国への貢献、そして彼ら自身による浪費が上回つて大赤字とはいえ、領地から毎月それなりの税収がある。

また、王国から領主の地位を保障されているため、余程の不祥事でも起こさない限り社会的地位を失わず、路頭に迷うこともない。

庶民と違つて、「忠告」や「叱責」なんてものもさされる機会がない。

貴族社会では他家の家庭環境が劣悪であることなど知つたことではなく、知つたところで悪い噂のネタにしかない。

下手に口を出したり首を突つ込んだりすれば、返事は「貴殿に当家のことに対して口を出される筋合はない」である。

だからこそ、自分たちの行いを省みることもなく、改めもしない。

経済的に苦しい状況であるにも関わらず、体裁にこだわって贅沢をし、借金を作り、その借金を返すためにまた新規借入をし——一時の快楽に身を任せて無計画に子供を作り、増えすぎた子供を疎んで冷遇する。

育った環境のせいといえはそうかもしれないが、冷遇される子供からすればたまったものではない。



（嘆いてたつて始まらない。どうするか考えないと）

一通り悪態を吐いていくらか冷静さを取り戻したマリエは森を脱出して屋敷に戻る方法を考えるが——

「——無理ね」

既に森はだいぶ薄暗くなっている。じきに日が暮れるだろう。

そもそも馬を使つて来た場所だ。徒歩だとどれだけ時間がかかるか。

「遭難したら尾根に出ろ」

前世で聞いた山登りの鉄則だが、生憎とこの森は平坦な場所だ。

元来た道を辿ろうにもその道が獣道同然の道なき道ときている。

間違いなく迷うだろう。

ならば今は下手に動かず、今夜の寝床と飲み水を用意する方が先決だ。

食糧は取ってきたキノコがある。

（そう都合よく雨なんて降ってくるわけないし——川を探すしかないわね。待った、川といえば！）

屋敷の近くには小さな川が流れていた。

たしかその川は森の方から流れてきていたはずだ。

川を見つけれれば、飲み水を確保でき、下流に向かって進んでいけば森を出られる！

「決まりねー！」

方針を決めたマリエは早速寝床を用意する。

あたりに生えている草をむしって周りの木から剥ぎ取ったツタで縛り、布団を作る。そして肉食獣避けのため高めの木に登り、枝を折って葉っぱを敷き、ベッドを作る。

これで夜の寒さや地面に潜む毒虫から身を守る寝床の完成だ。

「意外にいけるわね」

本格的なサバイバルの知識などないマリエだが、それでも前世の記憶持ちである。

知識量は下手な大人より多いし、理性的な判断だつてできる。

チートとは程遠いが、普通の子供とは違うアドバンテージだ。

おまけにこの世界には魔法がある。

水生成魔法を使えば少量とはいえ虚空から真水を召喚して飲むことができ、炎魔法を使えば簡単に火を起こせる。

「魔法ってホント便利ね」

もそもそと火で炙ったキノコを食べながらマリエは呟く。

キノコは淡白な味だったが、ひとまず空腹は満たしてくれた。

「寝よう」

いつの間にか真つ暗になっていた。

ストレッチで凝り固まった身体をほぐしてから、ベッドに横たわり、松明を消す。

疲れていたが、落ちないか、何かが襲ってこないかという不安で寝付けなかった。

眠いののに、眠りたくない——そんな状態から抜け出して眠りにつこうと、星を数える。

「綺麗——」

木の葉の間から見える満点の星空は、さながら無数の宝石を散りばめたかのようにだった。

前世でも見たことがあるかないかというような美しい星空。

でも——その下にいる自分は惨めなものだ。

(なんで私はこんなことをやっているんだろう——ただ幸せに生きたいだけなのに——
なんで?)

泣きたくなくなってくる。

転生してもどん底から抜け出せず、ビクビクしながらその日その日を生きるのに必
死な毎日。

どうして自分はこんな目に遭っているのか。いつからこんな不幸と苦勞の連続が始
まったのか——

「——お兄——ちゃん」

そうだ。——兄が死んでからだだった。

そんなことに思い至るがそこでマリエの思考は睡魔によつて中断する。



翌日。

「全つ然分かんない——」

マリエは焦っていた。

川を目指そうにも、その川がどこにあるのか分からない。

木に登って周りを見渡してみても、目に入るのは森の木々ばかり。

何とか元来た道を辿ろうともしてみたが、ますます迷っただけだった。

そうして彷徨っているうちにいつしか太陽が西に傾き始めていた。

「お腹空いた——」

きりきりと締め付けるような腹痛に耐えかねて、マリエは食べ物を探す。

もうこの際選り好みなんてしてはいられない。木の実でもキノコでも何でもいい。お腹に入るものが欲しい。

血走った目で周りを見回すマリエは視界の端に入ったそれを目ざとく見つけた。

「あ、あつた！」

倒木に一群れの大きなナメコのようなキノコが生えていた。

食べ物——マリエは駆け寄ってそれを取ろうと右手を伸ばす。

「いぎやあああああああ!!」

次の瞬間マリエは激痛に悲鳴を上げた。

ちよつと触っただけで焼けるような痛みが走り、手を離しても全く治らない。

水で洗い流そうとしたが、水が触れただけで骨が粉々に砕けたのではないかと思うほどの激痛に襲われた。

(痛い！痛いよ！助けて！)

誰に助けを求めたのか自分でも分からない。助けを求められる相手など今世にはいない。

それでも、願ひ、祈り、泣き叫ぶことしかマリエにはできなかった。

誰でもいい、何でもいい、何でもするから——助けて！この痛みを治して！！

そう強く念じた。

同時にそう都合よく助けは来ない、泣いても喚いてもない力は湧いてこない、という諦観が頭をもたげる。

私——ここで死ぬのか。

嫌だ！こんなところで死にたくない！私はまだ幸せになつてない！やりたいことだつてまだ——

不意に右手を押さえる左手が光つたような気がした。

次の瞬間、気が遠くなるような痛みが引いていく。

目を開けると左手から白い光が出て爛れた右手を包んでいる。

(嘘!?これって——治療魔法?)

痛みを消し去ることはできないようだが和らいではいた。赤く爛れていた指先も熱が引いている。

(私——治療魔法の才能があつたんだ——)

この世界に生まれて初めているのかどうかも分からない神様に感謝した。

(この才能を伸ばせば私はここから這い上がれる！いいえ、上まで昇り詰めていける！)

マリエの胸中に野心が芽生えた。

自分の治療魔法の才能があの子と同等のものなら、あるいは——

(やってやるわ！絶対に！私はこの力で絶対に幸せになつてやる！)

と、その時だった。

マリエの腹に風穴が空いた。

(——え？)

何が起こつたのかも分からないままマリエは呆然と自分の体に空いた穴とそこから流れ出す血を見ていた。

そのまま意識が遠のき——倒れる感覚と一緒に何か白い蝶のようなものがひらひらと舞っているのが見えた。

視界が闇に覆われていく。

最後に聞こえたのは——内容は聞き取れなかったが人間の男の声だった。

生きるための闘い

目を覚ますと知らない天井が目に入った。

実家の所々傷んだ白塗りの天井ではなく、剥き出しの骨組みに丸太を連ねた原始的な住居の天井。

「うなされていたな」

地を這うような低い声がした。

傍に目をやると小柄な男が器で何かを混ぜながらこちらを見ている。

警戒心が一気に湧き起こる。

「アンタ誰？ここはどこなの？」

マリエの問いに男は淡々と答える。

「俺の小屋だ。俺のことは——ウルツとでも呼んでくれ。カーラックと間違えてお前さんを撃ちちまったもんでな。運び込んで手当てした」

「どうやら自分はこのウルツと名乗る男に誤射され、手当てのためにウルツの小屋に運ばれたらしい、とマリエは悟る。

見ると撃たれた腹には包帯が巻かれ、べつとりとした軟膏のようなものが塗られてい

る。

身動きしようとする痛みが走る。

「あまり動かん方がいい。銃で撃たれた傷は治るのも痛みが引くのも遅い。正直よく生きてるもんだ」

人を誤射で殺しかけておいての淡々とした物言いにマリエは腹が立つが、助けてくれたのは事実なようだった。

マリエは手を銃創に当てて治療魔法を使おうとしたが、魔法は発動しない。

(なんでよ！)

心の中で悪態を吐くが、どうにもならない。

「治療魔法を使う気か？やめておけ。その状態じゃ魔力も足りん」

ウルツはマリエの行動の意図を見抜いていた。

「なんで治療魔法のこと分かったの？」

マリエは視線だけ鋭く虚勢を張って問いかける。

「簡単なことだ。ドクコツバを触れば普通ならソーセイジみたく膨れ上がって気が狂うような痛みが3日は続く。その程度の腫れ具合で済むなど——あり得ん。治療魔法でも使ったのでなければな」

ウルツはマリエの指先を顎で示して言った。

毒キノコを知らずにうっかり触ってしまった腫れ上がった右手の指先。

「そろそろ俺も聞きたいことがある」

ウルツは鋭い目でマリエを見据えて言った。

「お前さんみたいな年端も行かない幼女がなぜこんな森の中で一人でいた？ 連れはいないのか？」

「——」
マリエは答えない。

無理もない。誤射とはいえ自分を銃で撃つて、詫びのひとつも無い、おまけにマリエが希少な治療魔法を使える者だと見抜いているどこの馬の骨とも知れない男を相手にまともな受け答えをしろと言う方が酷である。

そんなマリエの内心を知ってか知らずか、ウルツはあつさりと引いた。

「話したくないなら無理にとは言わん。だが、話が出来なければ助けにもなれんぞ」

そう言い放ち、かき混ぜていた器に薬草のようなものを入れた。

再び攪拌を始めたウルツにマリエはボソリと言った。

「置いてかれたのよ。キノコ狩りに連れてこられて」

ウルツはかき混ぜる手を止めてマリエを凝視し——

「——そりや災難だったな。お前さんを連れてきて置き去りにしたやつはとんだ屑だ

な。顔が見てみたいものだ」

人を誤射しておいて詫びの一言もないお前も大概だけどな、という本音を呑み込む。

「——兄弟よ。いつも私をこき使って、言いがかりつけて虐めて——アンタの言う通りとんだ屑よ」

前世のお兄ちゃんとは大違いよ、と心の中で続ける。

「兄弟？彼らに疎まれているのか？」

「ええそうね——親も大概よ。勝手な都合で私を産んで、邪魔者扱いして八つ当たりして——」

気付けばマリエは饒舌になっていた。

転生してから屑家族への罵詈雑言や愚痴を聞いてくれる話し相手というのは今までにいなかった。

今までの愚痴と罵詈雑言を並べ立てるマリエをウルツは止めずに一頻り話を聞き続け——マリエが少し落ち着いたところで器でかき混ぜていたモノをマリエに超越してきた。

「飲め。傷の治りが早くなる」

ドロドロにすり潰された薬草のスモージーのようなモノ——見るところか、匂いだけで嫌悪感を催すそれをマリエは飲み込んだ。

苦さとエグ味とかすかにミントのような清涼感が混ざった名状し難い不味さにマリエは思わず顔を顰める。

吐きそうになるがなんとか堪え、一刻も早く喉元を過ぎさせるために一気飲みした。

「食え。テトラだ」

ウルツが別の器を差し出してきた。

中身は先程の気持ち悪いスムージーではなく、何かの肉と芋のような山菜が入ったスープだ。

美味しそうな匂いにお腹が鳴る。

マリエは木のスプーンですくって一口食べた。

(美味しい——)

なぜか涙が溢れてくる。

今世に生まれてから一番美味しく感じた。

家族が見栄を張って浪費するしわ寄せは普段の食事に行く。食材は領民から上納されるが、まともな料理人を雇えないラーファン家の食事は酷いものである。

やたらと豪華に仕上げた食堂の装飾を引っぺがして売れば少しは改善するだろうに、と思ったのは1度や2度ではない。

マリエは夢中でスープをかき込んだ。

ウルツはその様子を見てふっと微笑み、「おかわりならあるぞ」と言つて鉄の鍋を持つてきた。

マリエはすぐに2杯目をよそつた。



翌日。

「無闇矢鱈にぶつかいても駄目だ。石がどうやって割れるか、観察しながらやるんだ」ウルツがマリエの目の前でいとも簡単そうに石斧を作つて見せる。

マリエは同じことをやろうとするが、なかなか上手くできなかった。

「石を割ればそこからなんだって作れる」というウルツから森で生き残り、食べ物を獲得方法を教わっているのだが、石器作りから悪戦苦闘している。

「狙つたところに当てようなんて考えるな。かえつて狙いが外れる。狙うところから目を離さずに本能に任せるんだ」

(考えるな——スポーツと一緒よ)

マリエは何十個目かの石を手取る。

石器の材料にする石も、その石を割るための石も、いくつも無駄にしてみました。

もう沢山である。

右手で石を振り上げて、左手で持つ石に狙いをつけ、一気呵成にぶつける。

「できた！」

石はちょうどいい具合に割れていた。

「上々だな」

ウルツが拍手のひとつもなく淡々と褒めてくる。

本音を言えば手を叩いて頭を撫でて褒めちぎって欲しいところだが――

(まあ、似合わないわね)

ウルツはこんな淡々とした態度が似合っているのだと思える。

ウルツはお世辞にも美形とは言えないし、しばらく風呂にも入っていないのか髪は無造作に乱れててらてらしているし、体臭も少しキツイ。

前世の記憶――とついでに感覚と価値観――を取り戻しているマリエにとっては正直「気持ち悪い」奴である。

「よし、次は木の皮で鍋を作るぞ」

「――え？」

マリエの目が点になった。

「――疲れた」

マリエはゴロンと地面に寝転がる。

ウルツの教育はスパルタだった。

木の皮を剥いで鍋を作り、魔法を使わずに木と植物の蔓で作った道具で火を起こし、水を煮沸し、弓矢と罾と防具を作り――。

今こうして仕留めたウサギを捌いて煮込みながら一休みしている。

(本当に――生きるだけで戦いね)

いっそのこと家に帰らないことも考えていた自分を嗤ってやりたい。

「生きる力は上がったと思うがな」

ウルツがマリエの内心を見透かしたように言った。

「お前さんは見たところ人間の集団の中で上手く立ち回る力はあるようだが、それだけじゃ弱つちいまだ。本当に強い奴つてのはな、生きる力が溢れてる奴だ」

ウルツはこれまでとは少し変わって饒舌だった。

「自分で見て、聞いて、考える。手に入れたいものがあれば自分の力で手に入れられる。そういう奴が生き残るんだ。どこでもな」

マリエは寝転がったままウルツの話すことに聞き入っていた。

「お前さんもそういう奴になれ」

「――そのお前さん、つていうのなんか嫌よ。マリエでいいわよ」

マリエはウルツに自分の名前を明かした。

「ではマリエ、お前はもうどうしたい？ どう生きる？」

その問いはやけに重かった。



「川を下って行けば帰れるんだな？」

ウルツが念押ししてくる。

「間違いないわ」

マリエは力強く頷く。

ウルツは森の地理をよく知っていた。

何をしているのかはよく分からないが、マタギ 猟師か何かなのかもしれない。

今、マリエとウルツはラーファン子爵家の屋敷の近くを流れる小川——ボルツ川というらしい——を指して森を進んでいる。

結局マリエは屋敷に戻ることに決めた。

やはり屋敷を出て暮らしていくことはできない。

それにマリエには考えている目標がある。

「この辺りは荒れているな」

ウルツが蔦が無数に絡まった木々を見て漏らした。

「荒れてるの？」

マリエは尋ねる。

「ああ。蔦が茂っていると木が弱る。やがてその木が枯れて腐ってうるができるとモンスターが棲みつく」

ウルツは「く」の字型に曲がった鉞——というよりククリ刀のような刃物を抜き出した。

肉厚の湾曲した刃がギリリと光り、マリエは思わず身が竦む。

「ククリは便利だぞ。生活に根ざした万能の刃物だ。硬い木の枝も幹も打ち払えるし、モンスターと渡り合うことだってできる」

ウルツは生い茂った蔦を切り裂き、道を開いていく。

不意にウルツが動きを止めた。

「マリエ——戦闘準備だ」

何が起こっているのか問う暇もなく、ソレは現れた。

帰還、そして出発

現れたのは巨大な焦げ茶色の熊だった。

奇襲攻撃に失敗してもなお、諦めるつもりはないらしく、雄叫びを上げて突進してくる。

「危ない！」

ウルツがマリエを思い切り突き飛ばした。

熊の顎が空を切る。

「隠れろ！」

「う、うん！」

マリエは急いで近くの生い茂った藪の中に隠れた。

熊は隠れたマリエを追おうとしたが、ウルツが石を投げつけた。

吠える熊にウルツは怒鳴る。

「来い！俺が相手だ！」

ウルツは背負っていた銃を構えていた。

熊がウルツ目掛けて飛びかかろうとした瞬間、ウルツの銃が火を噴いた。

しかし、熊は倒れない。

むしろ怒りを増したようで、あつという間に距離を詰めると、ウルツを薙ぎ倒そうと前脚を横薙ぎに振るう。

ウルツは素早く跳び下がって熊の攻撃を躲し、銃と弾薬袋をマリエが隠れた蔦の茂みに放り投げた。どうやら銃は単発らしい。

「チツ、しぶとい。急所を外したか——」

毒づいたウルツは腰の鞘からククリ刀を抜いて構える。

「マリエ！隙を見てその銃を装填しろ！」

ウルツが叫ぶ。

（はあ!? 何無茶なことやってんのよ!）

銃の使い方は一通りウルツに教わったが、目と鼻の先で熊が暴れている状況で、隠れ場所を出て銃を取りに行くなど——できるわけがない。

「早くしろ! でないとこのまま2人ともこいつの胃袋行きだぞ!」

ウルツが言い終わるや否や、再び熊が攻撃を繰り返す。

凶悪な爪がウルツの頭を狙って振り下ろされるが、ウルツは素早く跳び下がって躲す。

熊は追い立て、再び爪を振り下ろしてきたが、ウルツはこちらも難なく躲し、勢い余つ

て木にぶつかつた熊にククリ刀で斬りつけた。

熊が咆哮し、前脚を振るうがウルツは距離を取つて石を投げつける。

目を狙つた投石を鼻先に受けた熊は悲鳴を上げる。

「今だ！銃を取れ！」

ウルツが叫ぶ。

（ああんもう！）

マリエは銃の所まで走つた。

見かけより重い銃と弾薬袋を抱えて必死に隠れ場所に走る。

熊が追つて来ている錯覚で気が急ぐ。

生い茂つた蔦に飛び込むと、弾薬袋からライフル弾を取り出した。

震える手でボルトハンドルを引いて空薬莖を排出し、取り出した弾を装填する。

「装填できたわよ！」

マリエが叫ぶと、ウルツはククリ刀を投擲した。

熊は前脚で叩き落とそうとしたが、ククリ刀はブーメランのようにカーブして熊の後

脚に突き刺さつた。

熊が痛みで悶えている隙にウルツはマリエの方に走つてきた。

銃を受け取つたウルツは熊に照準を合わせる。

熊は逃げようとしていたが後脚に刺さったククリ刀が足を鈍らせていた。ウルツが引き金を引いた。

熊は一声弱々しく吠えたかと思うと、頭から血を流し始めた。

それでも何歩か進んだ後、横に倒れ、力なく地面に横たわる。

ウルツは倒れた熊に石を何度か投げつけてから近付き、ククリ刀を引き抜いた。

血と脂を拭き取ると、周りの蔦を切つて橇を作り、熊の死体を乗せた。

「それ、持っていくの？」

「ああ、川で解体する。仕留めた獲物を放置することは許されん」

誰に許しを乞うのかとマリエは思ったが、口には出さない。

宗教的なことに口を挟むのはこの世界ではタブーである。



ボルツ川に着いたマリエとウルツは熊の解体に取りかかった。

「大いなる森の狩人よ、その魂はエンテの下へ。肉体は現世に残り、我らの糧となり給え」

祈りの言葉を唱えたウルツはククリ刀を突き立てる。

心臓に悪い光景と集まって来る蠅の羽音でマリエは気分が悪くなる。

「怖いか？」

ウルツが涼しい顔で訊いてくる。

「——うん」

「誰しも生きていくには他の命を奪らなきゃならねえ。食うためにも、着るものを作るためにも、な」

ウルツは重い声で言った。

かと思えば少し明るい声になり、笑顔を見せる。

「熊は強いし、食うにはあんまし向かねえが、金になるぞ。これくらいの熊なら毛皮で800ディアにはなる。肝はもつとずっと高く売れるぞ」

命懸けだが、成功すれば大金が手に入る——本来マリエはそんな仕事は好きではないが、考えさせられる。

金は欲しい。喉から手が出るほど。

でも稼ぐ手段が見つからなかった。ラーファン領にダンジョンはあるにはあるが、冒険者ギルドの許可がないと入れない。

そしてギルドはマリエのような幼女に冒険者登録をさせてくれるわけがない。

でも——森の中で狩りをして稼ぐのはアリなのではないか。そう思えてくる。

治療魔法を鍛えていけば稼げるようにはなるだろうが、それには何年もかかる。

（待てよ——それなら同時に——）

森に狩りに出かければ、食べ物を入力できて、運が良ければ大金を稼げて、怪我をしなくても治療魔法の修行になる一石三鳥だと思ひ至る。

ウルツは考え込むマリエを余所に木の枝で骨組みを作り毛皮を干した。

「よし、できたな」

熊の解体を一段落させたウルツは休む間もなく木を切り倒し、丸木舟を作ってくれた。

マリエは何も手伝えない自分が少し情けなくなる。

「俺はここでこの熊の処理を終わらせないといけない。だから、ここから先はマリエ、お前1人だ」

「うん——大丈夫。川を下っていくだけだから。1人でも行けるわよ」

ウルツは複雑な表情をしていた。やはり心配しているのだろうか。

「まあ、お前ならそう言うかとは思ったが——」

ウルツはふっと息を吐くと少し顔を逸らして言った。

「お前を撃つたのは悪かったな。俺としたことがとんだヘマをやっちゃった」

「もういいわよ。あんたのお陰で——その、生きて戻れそうだし」

謝るのが遅い、という不満はあるが、助けられたのも事実なので水に流すことにした。ウルツは腰に提げていたククリ刀を外してマリエに差し出した。

「このククリをやろう。役に立つぞ」

「いい、いいの？これって大事なものなんじゃ——」

「それが必要なのはマリエ、お前の方だ。コイツも可愛い女の子に使われる方が嬉しいだろうさ」

初めて茶目つ気を滲ませるウルツ。

「——ありがとう。その、大事にするね」

マリエはずしりと重いククリ刀を受け取り、肩から提げる。

（——帰ったらまず洗おう）

——柄や鞘や掛け紐に染みついた臭いはキツイ。

マリエの内心など露知らぬ風でウルツは笑顔を見せる。

「ああ、達者でな」

ウルツはそう言つて丸木舟を押し出した。

丸木舟は川の流れに乗つて進み始める。

「さよなら！ウルツ、ありがとう！」

マリエは大きく手を振る。

小さく手を振り返すウルツはどンドン小さくなっていく。
やがてその姿は木々に隠れて見えなくなった。



「ああ、生きていたのか」

マリエが屋敷に戻って父親が発した言葉がそれだった。

（コイツ——！娘が3日間も森で行方不明になってこんな格好で戻ってきたのにそれだけ!?）

父親に対する怒りが沸々と沸き起こり、マリエは拳を握りしめる。

元々屑なのは知っていたが、ここまで自分に無関心だったのはさすがにショックだった。

逃げるように屋敷を出る。

（こんな家——いつか自分の力で絶対に出て行ってやる！）

怒りを滲ませてマリエは歩く。

目的地は古倉庫。

使わなくなつて、売り物にもならないガラクタを詰め込んだその場所でマリエはラン

タンを灯し、使えそうなものを探す。

壊れたり、装飾を剥ぎ取られた家具に混じって思わぬ掘り出し物が見つかった。

古びて埃を被った銃を手取る。

旧型の単発式ライフル——子供の身体にはあまりにも重いそれを、マリエは脚の欠けたテーブルに運んで分解整備する。

長い間整備を怠ってきたらしく、油と煤が混じった汚れが隙間に入り込んでいる。

その汚れを油を染み込ませた布で丁寧拭き取っていく。

今すぐにこの銃で憎らしい屑家族を射殺したいという気持ちが一瞬湧き上がるが、すぐに頭から追い払う。

2度目の人生をそんなことで犠牲にしたくはない。

部品の一つ一つを入念に観察しながら慎重に作業を続ける。

(今夜はここで泊まろう)

当分家族と顔を合わせる気にはなれそうにない。



1週間後。

「装備よし、銃よし、ククリ——よし」

木の皮でできた簡単な鎧に身を包み、銃を背負い、腰にはウルツから貰ったククリ刀を差したマリエは目の前に広がる森を見据える。

もう怯えて嘆いて絶望するだけの情けない生き方はやめだ。

これからは欲しいものは自分で掴み取ってみせる。

差し当たり家を出される食事よりマトモで腹一杯食べられるもの——それをこれから取りに行く。

「よしー行くわよマリエー！」

自分に活を入れてマリエは森の中へと踏み込む。

奪われた者たち

船泥棒

それは15歳になった年のこと。

俺「リオン・フォウ・バルトファルト」はボート同然の小さな飛行船で故郷の浮島を離れて旅に出た。

きつかけは親父の正妻ゾラの策略で50過ぎのバツ7妖怪婆——ゾラ曰く「歴史ある家の娘さん」——との見合い話を持ち込まれたことだ。

このままでは俺は学園に通えなくなるところか、軍人として死ぬまで働かされ、死んだら遺族年金は妖怪婆のものになる。

そんなの絶対に嫌だ。

だが、いかんせん状況が悪かった。

俺の実家であるバルトファルト家は離島の貧乏領主貴族。

学園に通うには食費、交際費、寄附金諸々ととにかく金がかかるのだが、その金が工面できない。

大体王都で贅沢に暮らしているゾラとその家族——長男のルトアートと長女のメル

セ——への仕送りのせいなんだがな。

全くもって腹立たしい。今すぐにも射殺してやりたいところだが今の俺には無理だ。

まあそれはさておき、既にルトアートとメルセ、そして次兄のニックスを学園に通わせているせいもあって、バルトファルト家の懐事情はかつてないほどに悪かった。

だから学園に通うための金を稼いで見合い話をナシにするべく、俺は冒険者になると決めたのだ。

目的地は10年前に書き出していたとある浮島の座標。

前世で妹にプレイさせられていた乙女ゲーで課金アイテムの飛行船「ルクシオン」の回収ポイントとして登場した浮島だ。

主人公がそこに訪れるのは学園2年生の終盤。

今そこに行けば手つかずのまま残っている可能性が高い。

そう踏んで俺はそこを目指している。

主人公には悪いが、俺の命と幸福のためにチートアイテムは頂戴しよう。

いつか恩返しすればそれでチャラだ。——チャラと言ったらチャラなのだ。

その目的地へ行くための手段として親父が用意してくれたのはボート同然の小さな飛行船と武器弾薬、最低限の道具と軍資金だけだった。

冒険道具としてはなんとも貧相だがこれでも必死で揃えてくれたのだろう。

例えば俺が肩から提げているたすき型の弾帯——に入ってる魔弾なんて1発で100ディアは下らないし、それを撃つための軍用ライフルなんて5000ディアを超える値がする。

それまでバルトファルト家の軍が装備してた銃なんてどれも旧型で、実家の倉庫にあつた銃も使い物になるのは2挺くらいしかなかったことを考えると相当な無理をしたのだと思う。

他にも1ヶ月分ほどの水と食糧、鉈やロープといった道具、途中で補給に立ち寄った時のための金とかの総額を想像するとこっちまで頭が痛い。

なんとしてもこの旅で何かしら持ち帰らなければ。

そう思っていた矢先、俺はとんだ災難に遭った。



船出してから1週間ばかりが過ぎた時のことだった。

催した俺は海面に降りて用を足している途中でヒレの生えた巨大なワニみたいな水棲モンスターに襲われた。

大慌てで船に嘯み付いたモンスターに斧を叩き込み、怯んだ隙に船のエンジンをふかし、追いつがるモンスターに貴重な手榴弾まで投げつけて逃れたはいいものの、荷物を固定していたカバーがはがれて水と食糧がだいぶ海に落ちてしまった。

回収しようにもさっきのモンスターが執念深く海面近くを泳ぎ回っている。

——随分恨めしげな目で。

なんだよ。先に襲ってきたのはそつちで俺は身を守るために防衛行動を取ったのに逆恨みもいとこじやないか。

かといってモンスターを倒そうにも火力不足だ。銛や爆雷などという水中の敵を倒すための武器は持つてきていない。

残念だが、諦めてどこかに寄港するしかなさそうだ。

幸い軍資金は肌身離さず持つていたので無事だった。足りるといいけど。

俺は地図とコンパス——方位だけじゃなく目的地への方角まで示してくれるファンタジーなやつ——を頼りに定期航路の寄港地に向かった。

その寄港地、ポルトーガ港に着いた時、食糧は尽きていた。危なかった。

水先案内人も雇えないまま混雑した一般向けの区画——貴族向けの区画も使えるが料金が払えない——に向かう。

ちようど空いていた棧橋があつたのでそこに入港する。

上陸して役人に料金を納めて商業地区に向かう。

この港では船旅に必要なものは何だつて手に入る。まずは食事してその後食糧を買つて——そんなことを考えていた俺は気が緩んでいた。

「ない！ない！なんでだあああ！」

飛行船に戻つてきた俺は叫んだ。

積み込んであつた武器弾薬がなくなつていた。肌身離さず持つていた剣を除けば、荷物になる武器弾薬は全部船内に置いてきたのだが、それが仇になつた。

ここは日本じゃない。スリや車上荒らし——船だから船上荒らしか？——の類は珍しくもなんともない。

警察だつてあつてないようなものだ。

ボート同然の小さな飛行船に値の張るライフルと魔弾を置きつ放しにするなんて盗んで下さいと言わんばかりだ。

「クソツツ！どうすれば——」

はつきり言つてこの状況、詰みだ。

買い込んできた食糧では目的地の浮島までは保つだろうが、上陸したところで武器がなければどうにもならない。

浮島にはそこにある遺跡を守る敵がいるのだ。

古代から稼働し続けているロボットらしいが、そいつらに普通の武器は効かない。だからこそ無理を言つて魔弾なんてものまで揃えてもらったのに。

なら、故郷の浮島に戻るの？

論外である。今回の船出だつて親父には相当無理をさせてしまった。もう一度の船出などまづもつて不可能だろう。

俺に待つているのは妖怪婆に売られて軍人として使い潰される運命。逃げる？

これも論外。そもそもどこに逃げる？

それに俺が逃げたら弟のコリンが俺の身代わりになる。

かわいい弟を地獄に落として自分ひとりで逃げるなんて俺にはできない。

どうすればいい!?

思考は堂々巡りを続けるばかりで時間ばかりが過ぎていく。

ついついていくのは後悔と気が緩んでいた馬鹿な自分への呪いだけ。

本当に、この世界はモブに敵しい。



「ねえアンタ」

不意にそんな声が出たかと思つたら頭をポンと叩かれた。

振り返るとそこにいたのはウエーブのかかった臙脂色の髪をした女だった。

頭にはヘアバンド代わりの布を巻き、ラフな船員服からのぞく肌は日に焼けている。どうやら船乗りらしい。

年は俺より少し上だろうか——18から20歳くらいに見える。

「ちよつと協力してくんない?」

こんなピンチ状態の俺に何を期待しているのか?

「何に? てか誰だよあんた?」

思わずつつけんどんな態度を取つたが、女は気にした様子もなく話し始める。

これが貴族家の女ならブチ切れて巫人の使用人をけしかけて来かねない。

「あーしはアラベラ。見たとこアンタ船泥棒にやられたんでしょ? あーしもやられた。アンタは荷物、あーしは船。泥棒に盗られた者同士で手組んでみない? 犯人の目星は付いてつから、あんたの船にあーしを乗せてくれたら取り返しに行けるぜ?」

弱つているところにつけ込む悪い詐欺師の臭いがしないでもないが、しよせん追い詰められてた身だ。

この際乗つてやれ、というやけくそに近い気持ちで俺は返事をする。

「分かったよ。俺の船にあんたを乗せればいいんだな？」

「話早いね！助かるよ！じゃ、早速出航しようか」

アラベラはパツと明るい笑顔になると、もやい綱をほどき始めた。

「は？出航って今からか!？」

俺は思わず聞き返した。

既に日が暮れ始めている。夜の飛行は航路が狂い易くて危ないし、何より夜は寝るもんだろ。

「あつたり前でしょ！このボロ舟じゃ今から出なきゃ追いつけないよ。それとも何？もしかして夜が怖いのか？」

「——分かったよ」

悪かったなボロ舟で。文句あんなら親父に言えよ。

心の中で悪態をつきつつも俺は買い込んだ食料品を船底に固定し、防水カバーを被せる。

アラベラは手際よくほどいたもやい綱をまとめると我が物顔で舵輪のところに陣取る。

だが俺の船を勝手に操作させるわけにはいかない。

「ちよつと待てそこは俺の席だ。代われ」

「あーしが舵とつた方がいいって。目的地だつて分かつてるしさ」

「はあ!? 冗談じゃねーよ。目的地も知らずに舵取りなんか任せられるか!

こちらら泥棒に遭つたばかりだぞ。そう簡単に相手を信用なんてできるわけない。

そつちの提案に乗つてはやるが、主導権を握られるわけにはいかないのだ。

「勘違いすんなよ! ここは俺の船で、俺の船を操作すんのは俺だから!? あと目的地が

分かつてんなら俺にも教えるよ。それが嫌なら船を降りるんだな」

まくし立てる俺にアラベラは渋々といった顔で舵輪の前を譲る。

「む——分かつたよ。目的地はアークロワイアル。知つてるでしょ?」

アークロワイアル。たしか地図のグリッドレイ伯爵領にそんな地名が書いてあつた

な。

「ああ。たしかグリッドレイ伯爵領の港町だろ?」

「そ。あーしらちよつとした用事があつてそこに行くはずだつただけどね。相方が

あーしを置き去りにしてくれやがったんだよね」

額に筋を浮かべた笑顔でアラベラは言う。

うん、割と本気で怖い。

今さら気付いたがアラベラはけっこう美人だ。美人が怒ると迫力がある。

「そりや——災難だな」

俺はアラベラから距離を取りつつエンジンを始動させる。

「そーいうことだから急ぐよ。針路は北北東！」

アラベラは舳先の方へ移動して案内を始めた。

やれやれ。

妖怪婆に売られかけて、冒険者としてボート同然の小さな飛行船で船旅に出て、船に泥棒に入られたかと思ったたらどこの馬の骨ともしれない美女と2人つきりでまた船旅に出るとは。

俺の人生ってほんとどうなってんのさ。

運び屋

「なんだよこの場所?」

思わずそんな声が漏れる。

それも仕方ないだろう。何せそこら中に大小の岩が漂っていて、ちよつとでも操船を間違えたらぶつかって船体が砕けるか、挟まれて船ごと押し潰されるかという肝が冷えるような場所なんだから。

「心配すんなよ。あーしら飛行船乗りの間じや近道で知られてっからさ」

「いや、飛行船乗りなら普通避けるだろこんなどこ!」

こんな機雷原さえ可愛く思えるような難空域をうまく切り抜ける自信は俺にはなかつたので、不本意ながらアラベラに舵輪を握らせている。

彼女と一緒に船旅に出てから丸2日が過ぎていた。

この空域に入ってから俺は気が気じゃない。

「アツハツハーリオンって臆病だよね! 冒険者のくせにさ!」

アラベラは恐怖なんてカケラも見せずに俺を笑っている。

飛行船に乗って生きてるやつは度胸が違うということだろうか?

「お前と違つてこれまでずっとオカで暮らしてきたんだよ」

俺と違つてアラベラは小さい頃から飛行船に乗つてたらしく、飛行船の扱いや風の読みも俺よりずっと上手い。

ただアラベラは——何というか、真つ当な飛行船乗りじゃないような気がする。

冒険者によつて建国され、今でも冒険者が尊ばれるホルファート王国において仲間を「置き去りにする」というのは冒険者の末裔たる貴族のみならず、一般国民からも忌避される所業である。

なのにアラベラの「相方」とやらはそれをやった。まともな飛行船乗りなら絶対にしないことだ。

そしてそんなヤツと一緒に仕事していたというアラベラは——もしかするとカタギじゃない、深く関わりとヤバい女かもしれない。

だとすればこんな難空域を「近道」として使うことにも辻褄が合う。

最悪なのは——

「——空賊」

「え!? 空賊!? どこ!?」

アラベラが慌てた声を出した。

声に出てしまったらしい。

「い、いや、なんでも。つい口が勝手に、じゃなくて！あれ？」

必死で言い訳を考えるが思いつかない。

アラベラが真顔になる。

「ねえリオン。あーしが空賊かもしれないって考えてた？」

鋭い。

俺は白状する。

「ああ」

「そっか。冒険者様に相方に置き去りにされたなんて言った上に、ここを通ったら勘付かれても仕方ないか」

アラベラは俺から視線を逸らして言った。

「でもあーしは空賊じゃないよ。誓ってね。カタギだと言えば嘘になるけど」

飛行船を止め、再び俺と目を合わせてアラベラは言う。

力強い橙色の瞳に吸い込まれそうになるがここは至ってシリアスな場面だ。

場合によってはここで船の奪い合いになりかねない。

「じゃあ、なんだ？」

視線に眼力をありつたけ込めて俺は問いかける。目を逸らしてはいけない。

「——運び屋。開けちゃいけないモノを運ぶタイプの、ね」

アラベラは淡々と答えた。

だが——安堵と同時に拍子抜けしたような気分になる。

「ハハ、ハハハ！なんだよ。ヒヤヒヤさせやがって。マフィアかなんかかと思つたわ」

「まふいあ？」

アラベラがきよとんとした顔になる。

不覚にも可愛いと思つてしまった。

「あー気にすんなよ。俺に地元の言葉。密輸業者と空賊の合いの子みたいなものだよ」

「あー、犯罪ギルドのこと？あーしは運びの仕事は頼まれりやするけどそいつらの仲間じゃないよ」

どうやらこのアラベラという女はグレーゾーンで仕事してる人間らしい。

クロでないなら別になんてことはない。俺を軍人として使い潰して遺族年金をせしめようと企んでる「淑女の森」とかいう組織の変態婆どもに比べれば可愛いものだ。

「えつと、リオンは平気なの？」

アラベラは複雑な表情で俺に問うてくる。

そりやそうか。前世持ちという身の上で忘れかけてたが、今世での俺【リオン】はまだ15歳。

ホルファート王国基準では一応成人と認められる年だが、アラベラからすれば世間知

らずで純情な青二才に見えるのだろう。

だが俺は前世と合わせると既に30年以上は生きてるし、変に凝り固まった正義感とか遵法意識なんてものは捨て去っている。

「世の中にはな、15歳になったばかりのいたいけな男子を50過ぎの妖怪婆に売りつけようとするクズとか、結婚相手の男を戦死させて遺族年金を貰うことを繰り返すような鬼畜が人の姿でのさばってるんだよ。そんなのに比べりゃ、運び屋とかなんでもねえよ」

「アンタ、その年で一体どんな人生送ってきたの？」

アラベラがドン引きした顔で聞いてくる。

今の話が俺のことだと見抜いたらしい。

「聞きたいか？反吐が出るような話だぜ？」

「んー聞くと後悔するような気がするけど——この空域を出た後にでも聞かせてもらおうかな？ほら、近道って言ってもぐずぐずしてたら追いつけなくなるし、ね？」

アラベラが困ったような笑顔で言う。

残念だ。この愚痴は誰かに聞いてもらいたかったのだが。

「そうだな。じゃ、アラベラ、引き続き操船を頼むぜ」

「任せてよね。それとあーしのごとはベルでいいよ」

アラベラ——改め、ベルは明るい笑顔に戻り、エンジンをふかし始めた。



「——で、そいつが目端は利くんだけど手癖の悪いヤツでさ。ちようどこの船の隣の棧橋に停めたんだけど、あーしが届けモンしてる隙に自分の分だけ補給して船盗んでいきやがった。アイツは魔装具とかも扱ってたからアンタの船にあつた軍用ライフルと魔弾の価値だつて一目で分かると思うんだ」

隣に横になるベルが自分のこれまでの旅を話してくる。

彼女は親父さんから独立して自分の飛行船を持ち、仕事を始めて間もない新人の運び屋だつたらしい。

経験不足で相方の報酬を独り占めしようとする黒い欲を見抜けず、みすみす飛行船を持ち逃げされたのだ。

それはまたなんとも同情する話だが——俺は寝かせてほしい。

おっと、今の状況を説明しようか。

これまで別々に寝ていた男女がいきなり同じ寝袋で寝ることになった。

これまで寝袋はベルに貸してやっていたのだが、今夜はベルと一緒に入ろうと言って

きたのである。

マントだけじゃ寒いのでありがたいのだが、美女と寝袋で密着状態のまま寝ろというのは——俺にはちよつと無理な相談である。

前世の妹とゾラとジェナ&フィンリーで女の暗黒面を嫌と言うほど知っている俺だが、今の俺の身体は思春期真っ只中の15歳。

さつきから心臓の鼓動が激しくなってるし、俺の意思に関係なく身体が熱を帯びている。

身じろぎすると目の前にベルの顔があつた。

思わず目を逸らす。

近くで見るとさらに美人だった。恥ずかしながら直視できない。

「あ、目逸らした。そーいうところはまだまだ子供だねえ。かーわいい♪」

ベルが俺の反応を見て面白がっている。

クソ。なんでこのベルという女はこうも美人で、しかも俺に対して優しいんだ！

このままじゃ興奮状態の身体に引つ張られて本気で惚れかねない。

ベルにとってこれは単なる旅仲間への厚意であつて、期待するだけ無駄だと分かり切ってるのに！

そもそも俺は運び屋とかいう超絶リスクな職業の女と付き合いたいなんて1ミリ

も思っていないのに！



結局ほとんど眠れないまま出発の時間になった。

「今夜には接触できると思うから、作戦を考えないとね」
舵輪を握るベルが言う。

一緒の寝袋で寝たことくらいまるで気にしてない顔で。

人の気も知らないで呑気なものである。

まあそれは置いといて、作戦、ねえ。

——正直思いつかない。

ベルによれば持ち逃げされた飛行船はスループといって俺の飛行船より二回りほど大きく、速度も出る種類らしい。

エンゲージのチャンスは一瞬だけだ。失敗すれば追いつけない。

おまけに向こうには俺から盗んだ軍用ライフルと魔弾、爆発物がある可能性が高い。なかつたとしても船内には自衛用の槍や拳銃が積まれている。

剣一本の俺には分が悪い。

ベルはナイフを持っていたが期待できない。

あと使えるものといったら魔法だが——俺は攻撃に使える魔法なんて筋力強化くらいしかできないし、シールドだつて張れない。

使えるのはせいぜい飲み水を作るための浄化魔法とか、火起こし用の炎魔法、ぬるくなつた飲み物を冷やすための冷却魔法くらいなものだ。

悲しくなるほど低レベルなものばかりだな。

「ベル。お前は魔法使えるのか？」

ちよつと期待してみるが返ってきた答えはにべもない。

「無理。あーしには魔法の才能なーい！」

はーつつかえねー。

「接近戦に持ち込めれば組み伏せる自信はあつけどね」

前言撤回。期待できるな。

「格闘術とかできるつてことか？」

「そ。ママに叩き込まれたからねー。力で敵わなきや力の使い方勝つてつてうわー何その母親。逞しすぎやしないか？」

いや、運び屋なんて仕事をやってる一家ならそれくらいするだろうか？

まあいい。とりあえず作戦の大まかな形は決まった。

「じゃあ俺がそいつの気を引いてる隙にお前が取り押さえる。それでいいか？」
「そうだね。それしかないよね」

ベルが同意する。

さてと、ベルの相方とやら、俺の武器とベルの船を返してもらおうか。

鬼づつこ I

「来たーあと300ー!」

望遠鏡を覗いていたベルが叫んだ。

指差す先にいるのは前世の飛行船に似た構造の飛行船だ。

フグの胴体のような浮き袋の下に水上船のような船体が吊り下がっている。

船体に付いたプロペラは俺の飛行船より多く、サイズも大きい。

遠目でもかなり速いのが分かる。

「いい? 合図で全速急降下だかね! レバーがへし折れるくらい押し込んでよ!」

触先でタイミングを窺うベルが大声で念押ししてくる。

「ハン! 折れたら修理手伝えよな!」

こつちも大声で返す。

ポルトーガからアークロワイアルへと向かう航路は一本しかなく、それも先日俺たちが通ってきた岩石地帯を迂回するものだったから、先回りして待ち伏せが可能だった。

速度でもサイズでも上回る飛行船と接触するためにベルの立てた作戦はこうだ。

①浮き袋を持つ飛行船にとって死角になる真上から急降下してまず浮き袋を破る。

こうすればそれまで推進に振り向けていたエンジンパワーを高度維持にも振る必要が生じ、船速が大幅に下がる。

②その隙に俺の飛行船を船体に横付けし、乗り込む。

この作戦を実行するために俺はベルの飛行船を発見すると同時に全力で上昇し、高度で飛行船の浮き袋を畳むというハイリスクなことをやっている。

「浮遊石」なる天然の反重力デバイスが存在するこの世界で飛行船が浮き袋を付ける理由は浮遊石を浮かべる「魔石」のエネルギーを節約するためだ。

浮遊石といっても魔石からエネルギーを供給しなければ浮かびはしない。

つまり、飛行船がどこまで上がれるかは魔石のエネルギー量に依存しているのだが、民間の飛行船に搭載されているような魔石は純度が低い粗悪品——外れ玉と呼ばれてる非力でエネルギー量に乏しいやつなのだ。

だが、そんな粗悪品でも結構な値段がする——冒険者ギルドや鉱山を持つ領主貴族が販売を独占してるせいだとベルは言っていた——ので、なるべくエネルギーを節約しながら使わなければならない。

だから飛行に必要な工程のうち「浮かべる」という役割はガスや熱い空気を詰めた浮き袋に任せて、浮遊石へ供給するエネルギーを出来るだけ少なくする、というやり方が

一般的らしい。

ちなみに俺の飛行船の魔石は親父が無理して質の良いものを積んでくれているが、それでも高高度では浮き袋の補助がないと高度を保つだけで精一杯になる。

かといって浮き袋を付けたままでは急降下なんてできやしない。

だから俺は空気抵抗を減らすため、浮き袋を畳んで船体に括り付けている。

(いつの間に俺はアクション映画に出演してんだか)

高度を保つために魔石は浮遊石に大量のエネルギーを送り続け、マゼンタ色の強い輝きを放っている。

爆発とかしないだろうな？

「真下に入るよ！3でマーク！」

ベルが叫ぶ。

俺は魔力回路制御装置と上昇・下降用のレバーに手をかける。

「1！」

制御装置のリミッターを外し、エンジンにエネルギーを送り込んで加速。

魔石は電球の何倍も明るく輝き、直視できない。

「2！」

浮遊石へのエネルギー供給をカット。エンジンにエネルギーを振り向ける。

飛行船は気持ち悪いほどゆっくりと落下し始める。

「3!!」

制御装置のリミッターを戻し、レバーを限界まで押し込む。

飛行船は触先を下に向け、猛スピードで降下していく。

凄まじい風圧が俺の身体にかかるが、レバーを押し込む手は緩めず、跳ね上がろうとする飛行船の頭を押さえつける。

目標の飛行船がどんどん近づいてくる。

相手が気づいたらしく、回避行動を取り始めた。

だが全速で急降下中の飛行船はろくに針路調整ができない。特に横方向には。

俺の飛行船は真つすぐに相手の浮き袋目掛けて突っ込んでいく。

(当たれええええええええ！)

船底が浮き袋を擦ったかと思うと小さな衝撃が走る。

船体まで擦ったらしいがすぐにレバーを引き、今度は上昇に転じる。

(やった！手応えあった！)

だが上を見上げると——相手の浮き袋は健在だった。

(効いてない！まさかミスった!?)

一気に冷や汗が噴き出る。

「プロペラがもげてる！そのまま上昇して！」

だがベルの口からは予想外の言葉が出てきた。

見ると相手の船体後部のプロペラが1基なくなっている。

ああクソ。死角になるほかに被害が少なく済むからという理由もあつて浮き袋を狙ったのに、浮き袋を破らずに大事なプロペラをもぎ取っちゃうとは。

飛行船のプロペラは高価な部品なのだ。

ベルのやつあとで損害賠償とか請求してこないだろうか？

一抹の不安を抱えたまま俺は飛行船のエンジンを全開にしてベルの飛行船を追いかける。

だが相手の飛行船も追われていることを悟ったらしく、増速し始める。

距離が縮まらなくなってくる。

「このままじゃ引き離されっぞ！」

「もう・リオンがドジやるから！」

ベルは悪態をつきながらも次の手を用意していた。

俺の飛行船の錨を投げ縄みたいに頭上でぐるぐる回したかと思ったら、身体の捻りを加えて投げた。

錨は見事に相手の船体と浮き袋を繋ぐ索具に引っ掛かった。相手の飛行船にこっちの飛行船が引っ張られる形になる。

ベルは素早く錨のロープを船首に掛けると、舵輪の前に移動してきた。

「操船代われ！」

ご命令通り、俺は素早くベルと交代する。

こんな状況だ。ジェナに命令された時みたく口答えする気は起きない。

ベルが舵輪を握ったのとはほぼ同時に相手が船体を左右に揺らし始めた。

ロープで繋がったこっちも同じように、いや、小さくて軽い分もつと大きく揺れる。

だがベルはすぐに舵を巧みに調節し、相手の動きと同調する。

ベルの見事な操船で俺の飛行船は水平状態を保つ。

だが問題はどうやって相手との距離を縮めるか。

俺は魔法で筋力を強化して必死にロープを引っ張り、手繰り寄せようとするが、ちっ

とも距離が縮まらない。

クソ！なんでキャプスタンのひとつもないんだよこの船は！

誰が冒険に出る俺にこんな頼りないボートを寄越してくれやがった!?

親父だった！

そんな悪態が浮かんでくるほどビクともしない。

「リオン！引つ張つても無駄だ！それよりそのロープを伝つてあっちに移れ！」
は？コイツ今なんて言った？

「はあ!!正気かよ!!?どう考えても途中で落ちるだろ!」

「アンタ冒険者でしょ!それに男なんだし、それくらいの度胸見せなさいよ!」
嗚呼凄まじきなことわざになるくらいにの社会観念。

こんな危険なタスクを「男は度胸」で乗り越えろ、とは!

しかも冒険者つつつても俺はなりたくてなつたんじゃないのに!

「成功させたらさつきあーしの船からプロペラもぎ取つたの、チャラにしてやるからさ
!」

やっぱり請求する気だったのかよ!

まあ俺のミスと言えなくもないし、仕方ない気もするが。

「ああ!もう!分かつたよ!約束だからな!」

俺は腹を括ることにした。

(なんでモブの俺がアクション映画の主人公みたいな真似しなきゃいけないんだよ!)

船首に括り付けられたロープをさらに巻いて補強すると、俺は再び魔法で肉体を強化してロープに両手足でぶら下がる。

空中の鬼ごっこはまだ、終わらない。

鬼ごっこ II

下を見るな。

手足に意識を集中しろ。

俺は今度こそ田舎で山ナシ谷ナシののんびり引きこもりスローライフを送るんだ。

こんなところで海に落ちて死んでなんていられない。

そんなふうに関に自分に言い聞かせながら少しずつロープを渡る。

悠長に命綱を用意している暇はなく、手や足が滑ったら死を覚悟するしかない。

「急いでリオン！ アイツロープを切りに行ってる！」

ベルが警告してきた。

マジかよ！ ロープ切られたら確実に落ちて死ぬ！

急げ俺！

心臓の鼓動が恐怖で早くなる。

俺は必死で腕を動かし、身体を引っ張る。

早く！

早く！

1秒でも早く！

気はこれ以上ないほど急ぐのにロープの先は遠く見える。

ふとロープの先に剣を持った男が現れるのが見えた。

錨が絡まった索具をよじ登り、錨に繋がったロープを切ろうとする。

「やめろおおお！」

無駄だとは思うが叫ばずにはいられない。

しかし、男は無情にも剣を振り下ろし、ロープに大きな切れ込みが入る。

そのまま、ロープはどんどん裂けていく。

ヤバイ！

どこかに捕まる場所は——！

あった！

すぐ横に飛行船の方向舵があった。

ちなみにそのすぐ上には船室の窓。

(許せべル！)

俺は腰の剣を抜いて思い切り方向舵に突き立てた。

剣が木製の方向舵を貫通し、即席のハーケンになる。

ほぼ同時にロープが切れ、力なく落ちていく。

間一髪で俺は剣の方に体重を移し、方向舵にしがみつく。

(助かった——)

束の間の安堵で大きく息が漏れる。

だがぐずぐずしてはいられない。

俺は突き立てた剣を踏み台にして方向舵をよじ登り、船室の窓ガラスを叩き割る。

割れたガラスが手の肌を切り裂き、痛みが走るがぐつと堪えて窓枠に手を掛けて身体を引っ張り上げる。

船室に転がり込んだ俺は周りを見渡すが、武器はない。

仕方なく丸腰のまま船室のドアを開け、タラップを昇って甲板に出ようとしたところでさっきの剣を持った男と鉢合わせした。

「てめえ！あのアマの犬か！死ね！」

犬とは心外な。

俺は素早く身をよじり、突き出された剣をかわす。

間髪入れずに男の手首を掴み、思い切り引っ張る。

「うおっ！」

男はバランスを崩し、タラップに頭から落ちてくる。

そのままタラップの下まで転がり落ちた男に俺は馬乗りになり、組んだ両手を後頭部

に振り下ろす。

気絶した男から剣を奪い取ると、急いで甲板へ上がり、舵輪のところに向かう。

魔力回路制御装置を見つけるとエンジンへのエネルギー供給をカットする。

プロペラの回転が止まり、飛行船は減速を始める。

後ろを見ればベルが駆る俺の飛行船が追いついてきている。

心臓が破裂するかと思うほどのアクシオンだったがなんとかやり遂げた。

幸い相手は銃を持ち出してこなかったので案外簡単に倒せた。

グッジョブじゃないか俺？

そう思った矢先、背後に気配を感じた。

振り返る暇もなく鈍器で殴られたような衝撃が走る。

さっき倒したと思った男に猛烈なタックルをくらった俺は派手に吹っ飛ばされて手

すりにぶつかる。

「やりやがったなクソガキ！」

男の怒声が聞こえる。

「あのアマに籠絡されやがったのか!?俺の儲けの邪魔しやがって！」

油断した。

縛り上げるなりしておくべきだった。

しかし——盗人猛々しいとはこのことだろうか。

「はあ!? お前がアラベラを置き去りにしたのが事の始まりだろうが! 人の船持ち逃げするとか最低だな!」

「抜かせ! 俺には金が要るんだ! 邪魔すんじやねえ!」

男がどこからか持ち出してきた槍を構えて怒鳴る。

金が要る、か。

金が要るのは俺も同じだ。というかみんなそうだろう。

だが、金が要るからといって他人から奪うという手段に走るヤツが俺は大嫌いだ。

ここで気になっていたことを質問する。

「金、か。じゃあ俺の船からライフルと魔弾を盗んだのもお前か!」

「!———そうかよ。アレの持ち主はてめえか。だがあんなお宝ぜつてー返さねえぞ!」

やっぱりコイツが泥棒だったか。

「だったら尚更返してもらおう!」

俺はさつき男から奪った剣を鞘から抜く。

剣と槍じゃ間合いが違いすぎて剣の方が不利だが——俺は腰に括り付けていた軍資金の袋を投げつけた。

袋から飛び出した硬貨が目眩しの役割を果たしてくれる。

金に男の意識が向いた一瞬で俺は一気に懐に飛び込み、槍を掴んで穂先を逸らす。そのまま鳩尾に剣の柄頭を叩き込もうとしたが、男は膝で俺の鳩尾を蹴り上げた。

「ぐっ！」

悲鳴も上げられないレベルの激痛が走る。

俺は甲板を転がり、鳩尾を抑えて悶絶する。

「肉体強化魔法が使えんのはこっちも同じなんだよガキ！あんな魔法の才能もねえ生意気なクソアマと分け前半分こなんてしてられっか！」

クソが。魔法がなんだってんだ。

分け前とかいうのは契約だ。個人の力の優劣がどうだろうが関係なしに契約した内容を守るのが社会人の常識だろうが！

悪態が次々に頭に浮かんでくるが声にならない。

とにかく腹が痛い。

こんな痛みを味わうのは前世でも今世でも初めてだ。

まさか俺は痛みや苦勞を味わうために転生させられたのか？

「生意気なクソアマで悪かったなこのクズ！」

不意に頼もしげなハスキーボイスがしたかと思うと、男の身体が吹っ飛んだ。

——ものすごく痛そうである。こっちまで寒気がしてきた。

いつの間にか男は気絶したらしく、静かになっていた。

「フン、しばらくそのままにいるんだな。リオン、コイツの足ふん縛るの手伝って？」

ベルが狂気的な笑顔で俺に向けてくる。

やめろ！そのスマイルは怖いからやめてくれ！

「あ、ああ。でもお前、意外となんていうか、その——アグレッツィブだったんだな？」

俺はしどろもどろになりながらロープを用意する。

「ねえリオン。アンタ今すごくあーしに失礼なこと思ったでしょ」

ベルがジト目で睨んでくる。

「——さて、さっき俺のライフルと魔弾を盗んだこと告白してたから探しに行かないと

ベル、貨物室つてどこかな？」

俺はそれとなく視線をベルからずらして話を逸らす。

この手の質問なんてどう答えても正解じゃないんだし。

「まかしたね!？」

ベルはそう言いつつも本気で怒ってはいないようだ。

「いーだよ。たぶん隠し倉庫の中に入れてると思う」

ベルが甲板に張ってあった簀子を外す。

ベルに続いて中に続くタラップを降りると、狭い通路の両脇に木の箱がぎっしり詰まっている。

ベルは通路の突き当たりで屈むと何かを押すような仕草をする。

直後に突き当たりの壁が手前に向かって開いた。

「よくできてるな。ただの一枚板の壁にしか見えなかったぞ」

俺は素直に感心する。

「運び屋の船には大体こういうのがあるんだよ。ま、あーしのはパパの特製だからよくできてるのはその通りだけど♪」

ベルは自慢げに言って明かりをつけた。

隠し倉庫の中には戸棚があり、いくつか妙なトランクと——俺の武器弾薬が収納されていた。

「あつた！よかつた〜」

ほっと安堵の息が出る。

「嘘！本物の魔弾？アンタどんだけ難しいダンジョンに行く気だったの？」

ベルが魔弾を見て興奮を隠せないでいる。

「ロストアイテムが手に入るところだ。それ以上は言えないな」

俺は勿体ぶるが、実際教えるわけにはいかない。

「ロストアイテム?!——そっか。まあ、頑張つてね。応援するよ!」

どこか哀れみと諦めを含んだような目でベルは言う。

無理もないか。

ロストアイテムが手に入る場所なんてどこにあるかも分からない、あつたとしても例外なく高難易度なダンジョンだし。

「あ、そうだ。あーしの船に突き刺した剣、回収しといたから。あとで舵の修理手伝つてよね。その代わりあーしもアンタの船直すの手伝うから」

ありがたい。剣の回収をしておいてくれるとは気が利くじやないか。

ん?俺の船を直す?

俺の船に大して損害はなかったはず。

「おい、俺の船を直すつてどこ壊した?」

俺の質問に対してベルはしれつとした顔で答える。

「追いつくために制御装置のリミッターもつかい切っちゃつてさ。エンジンがオシヤカになつちつた。メンゴメンゴ」

はあああああ!?

この女俺の船に何してくれてんだあああ!

固まる俺にベルは申し訳なさそうに、でも反省も後悔もしていない目で言う。

「そーいうわけだからアークロワイアルに着くまでまたしばらく一緒によろしく、ね♪」
ばっちーん、とでも効果音が出そうなウイंकをするベル。

(ちつくしよおおおお!!)

飛行船の命と言つてもいいエンジンを壊されて、おまけにとんでもなく太々しい態度を取られてるのに怒りきれない。

この女がああタイミングで来てくれなかったら俺は死んでたかもしれないし、ライフと魔弾を取り返せたのもこの女のおかげだし——

——さっきのウイंकはちよつと、いやほんのちよつとだぞ？

——可愛かった。

船旅はまだ続く。

お別れ

発煙筒1個。

それがランダル——俺の武器とベルの船を盗んでこの浮島に置き去りにされることになった男——に持たされた全てだった。

船に収監して食糧を消費されるのも困るということだ。ランダルは途中で浮かんでい
た無人の浮島に置いていくことになった。

飛行船乗りが無人島に置き去りにされる時は手ぶらではなく、何かしら持たされるの
がしきたりらしい。

助けを呼ぶための発煙筒というのはいかにかなり温情がある方だろう。

これが他の運び屋とか空賊だったら自決用のピストル1挺・弾1発、あるいは手榴弾
だったりするらしい。ベルは優しいな。

ランダるは時間をかければどうにか自力で解ける程度に縛られ、猿ぐつわをされたま
ま島の縁に置き去りにされて小さくなっていった。

何か叫ぼうとしていたような気もするが命を助けてくれたことへの感謝に違いない。
恨みのこもった目をしていたようにも感じたが、きつと気のせいである。



「今夜はちよつと奮発しちゃつたよ！」

エプロン姿のベルが得意げに料理を運んでくる。

肉に卵に魚の燻製、乾燥させたブドウみたいな果実に、柑橘系の果物を輪切りにしたものをごちゃ混ぜにして盛りつけた色鮮やかな料理だ。

「こりやまた、豪勢だな」

俺は船旅に出てから久しく目にしていなかった彩り豊かな食事に唾が湧いてくるのを我慢できない。

「サルマガンディっていうんだ。祝い事の時に出すんだけどね。今日のは大事な商売道具の奪還祝いってとこだよ！スピリッツだってあるぜ？」

ベルが茶色い液体の入った瓶を置いた。

「いや、悪いが俺は飲まないようにしてんだ。ベルが全部飲めよ」

「そうなの？じゃ遠慮なく♪」

ベルは金属製のコップに酒をなみなみと注ぐ。

俺は水。せめてウーロン茶でもあってくれないものか。

ベルがコップを掲げて音頭を取る。

「じゃ乾杯！あーしら名コンビの活躍に！」

「——素晴らしき未来に」

まあ、名コンビかどうかはさておき、この女と共闘できて良かったとは思う。

あとは俺の冒険を成功させて、平和で安泰な学園生活&その後ののんびり快適スロースライフを実現できれば。

やっこの素晴らしい世界に祝福を送る気になれるだろう。

「か——ッ！祝い酒は格別だぜ！」

ベルがハイになっている。

オッサンかよ。

前世の会社の飲み会思い出すわ。

たしか酔っ払って今のベルみたいな変なテンションになった挙句、寝落ちしたヤツをおぶさって帰ったっけか。

今となつては飲みに行った居酒屋の名前も参加してた同僚の顔も名前も思い出せないが。

その夜は2人で夜通し飲み食いしまくった。



アークロワイアルは実家の港とは比べ物にならない、ポルトーガよりもだいぶ大きな港町だった。

大型の棧橋に飛行船を横付けしてもやい綱で係留する。

ベルの取引相手は棧橋の前で待っていた。

「妹の誕生日には何を贈る？」

「11月の薔薇を」

合言葉を確認して隠し倉庫にあった妙なトランクを相手に渡すベル。

相手はトランクをさっと検分すると提げていた鞆をベルに渡した。

そのまま相手はそそくさと去っていく。

どう見てもあの妙なトランクの中身は何かヤバイものに思えるが俺は見なかった。だから気にしない。

「任務たっせーい!!いやー解放された気分！」

ベルが大きく伸びをしながら船に戻ってくる。

「さて、ジャンクヤードに行こうか。修理部品が格安で買えるよ！あーしの船のプロペラとりオンの船のエンジン」

「勘定を考えると今から頭が痛いんだがな？」

俺は上機嫌のベルにちよつと嫌みをぶつける。

エンジンをオシヤカにしてくれちやつたのはこの女である。

おまけに相方がいなくなつて今回の「仕事」とやらの儲けは全部独り占めしていた。

まあ、俺が分け前を寄越せというのもなんだかなあ、つて感じだが。

「ん〜じゃあこうしよう。エンジンはあーしが持つからさ。リオンはプロペラ。それで交換条件、おあいこつてことで」

「ふざけんよ、俺にそんな金ねえよ！」

「何を言つてるんだリオン君。その魔弾を2、3発売れば合わせて充分足りるじゃないか？」

コイツ、俺に魔弾を売れと言いやがった。

それは無理な相談というものだ。

「魔弾を売るとか無理だ。足りない分は貸しにしてくれないか？」

「——貸し、ね。個人的には信用してもいいけど何か担保が欲しいかな」

ベルが言う。

俺には担保にできるものは——あれを使うか。

俺は懐からバルトファルト家の家紋を刻んだ貴族用の通行手形を取り出した。

「俺の本名はリオン・フォウ・バルトフアルト。バルトフアルト男爵家の三男坊だ。バルトフアルト領の景気が良くなったとか言う情報があつたら、バルトフアルト領に来てみてくれ。借りはそこで返す。利子だつて付ける」

ベルは通行手形を見て少し驚いた顔をして――

「――分かった。契約成立だね。利子は年20パーセントで頼むよ」
貸しを了承してくれた。

おまけに利子は月利にして1.7パーセントくらいとこの世界じゃ良心的な方。
だが年利になるまで借金している趣味はない。

「1年もかけてられるかよ。2、3ヶ月ありや返してやる」

「ふふ、言ってくれるじゃない。じゃあそれくらいの時期に行こうかな。それにしても、リオンって貴族様だったんだ。全然そんな感じしないけど」

「離島の田舎領主なんて平民とおんなじだよ。領主自ら毎日毎日畑仕事やって自給自足してるんだぜ？」

「あはは！何それ！なんでそんなことになんのよ？」

ベルが俺の実家について知れたがったので俺たちは実家の状況を愚痴りながらジャンクヤードまで歩いた。

ベルは俺の話を楽しそうに、時々同情しながら聞いていた。

貴族家の人間なら実家の窮状を話しても鼻で笑うだろう——少なくともゾラの一家はそうである——が、コイツはちゃんと話を聞いてくれる。

転生してからこの方、親父やニツクスくらいしかまともなこういう話ができる相手はいなかったからなかなか饒舌になれる。



『ネヴィル工廠製1137式32型』

長つたらしい製品名をしたエンジンは思いの外、すぐに見つかった。

ベルの船のプロペラも同様だ。

ジャンクヤードには墜落した飛行船から剥ぎ取った部品から討伐された空賊の飛行船・鎧まで色々と入ってくるらしい。

経営しているのは「スクラップパーギルド」なる目利き集団。

彼らの手にかかれば一見粗大ゴミ置き場にしか見えない敷地の中から注文の品がすぐに見つけ出されて客の前に届けられるのだ。

スタッフは一体どういう頭をしているのやら。

ちなみに部品は手に入るが本格的な修理などは専門の工場でないといけないらしい。

ジャンクヤードはあくまでも現地修理用の部品や再利用品を売っているだけ。その点、俺の飛行船はあまりに小さいことが却って幸いし、エンジンが丸ごと手に入ったのだった。

台車を押して栈橋に戻ると早速修理に取りかかった。

オシヤカになったエンジンを取り外し、買ってきたエンジンを取り付ける。

魔力回路を繋いで動くかどうか、確認。

問題なし。

これで俺は俺の冒険を再開できる。

ベルとはここでお別れだ。

翌朝。

ベルは俺を見送りに来てくれた。

「じゃあな、ベル。世話になった。おかげで冒険が続けられる」

「ああ。あーしこそ船を取り返して儲けも受け取れた。リオンのおかげだ」

ベルが優しい笑顔を見せる。

「そうだリオン、これ持ってけよ。あいつの代わりに運び仕事手伝ってくれたから、その礼にやるよ。軍資金が要るだろ？」

ベルが札束をひとつ、俺に渡してきた。

なるほど。俺の分け前というわけか。

ありがたく貰っておこう。

「助かる。ありがとな」

飛行船に乗り込んでエンジンを始動する。

プロペラが回り始め、船はゆつくりと棧橋を離れていく。

お別れのキス——みたいなロマンチックなものはない。

全く期待してなかったと言えば嘘になるが、変に情が湧いても困る。

困ってた者同士で共闘しただけだ。

それでいい。

俺はエンジンのパワーを上げた。

随分と道草を食ってしまったので急ぎたい。

俺が目的地に着いたのはそれからさらに半月ほど経った頃だった。

スライス・オブ・スクールライフ ルクシオーヌ

「なあ——お前って人型のボディ用意できるのか？」

その何気ない質問がとんだ事態を引き起こすことになった。

ルクシオン。かつて滅んだ旧人類の造った宇宙戦艦の人工知能は俺の所有物であり、名相棒であり、家族も同然なのだが——形が形である。

金属色の球体に赤く発光するセンサーアイが一つ。

最近では慣れたがどうにも会話している実感が無い。生きている人間と違って喋っていてもどこも動かないし、アニメみたいにセンサーアイが点滅するわけでもない。

そもそもなんでこの形になったのかというと——



『覚醒シークエンス完了。自発呼吸、正常。心拍数、正常。脳波、正常——』
目が覚めて最初に聞いたのはそんなセリフを並べる機械音声だった。

俺はカプセルのようなものに入れられて仰向けに寝ていた。

（——ああそういうえばあいつに殺され——いや、生きてるから殺されかけた、か）
さつきまでの記憶を辿る。

たしか、よく喋るロボット相手に死闘を繰り広げた末になんとか無力化し、その後そいつに転生の経緯を話したんだった。

あいつ最後「興味深い」とか言ってたな。

『お目覚めですか？ マスター』

マスター？

見るとさつき死闘を繰り広げたロボットがホログラムで映し出されている。

「お前はさつきの——ルクシオンか？」

そういうえば回収しに来た宇宙船が名無しのままだったので、ゲームと同じ「ルクシオン」という名前を付けたんだったと思ひ出す。

『はい。貴方、「リオン・フォウ・バルトファルト」をマスター登録しましたが、直後に吐血し、意識不明となったため、医務室へ搬送しました。先ほど治療が完了したところです』

ルクシオンが俺にこうなった経緯を説明する。

立ち上がったが、俺の体に異常は感じられず、痛みもない。

吐血したということは内臓がやられてたんだらう。

どうやったたらそんな状態からこんな完璧に回復できるのか疑問だったが、死なずに済んだのは喜ばしい。

これで迷惑かけっ放しの両親にも親孝行ができる。

「よかった——よし、帰ろう。ルクシオン、すぐに発進できるか?」

『チエック完了済みです。ご命令くださればすぐにでも発進できます』

「よし。ルクシオン、発進!」

『発進します』

なんだか飛んでいる気がしない。

「なあ、本当に発進してるのか?」

俺は虚空に向かって問いかける。

『疑うのであれば艦橋にご案内します』

医務室の扉が開く。

外に出ると太陽光のような照明に照らされた廊下だ。

前世の蛍光灯とかLEDみたいな「なんちやって太陽光」とはレベルが違う。

『床のマーカールについて来て下さい』

床を見ると青色の光点がある。

光点を追っていくと見慣れた通路に入り、ルクシオンと交戦した場所にやってきた。

『そのまま右へ。エレベーターに乗って下さい』

見ると前には見かけなかったドアが開いている。

中に入るとスツと音もなくドアが閉まり、かすかに慣性を感じたと思っただけに開く。

『航行艦橋です。眺望をお楽しみ下さい』

ルクシオンが言う「航行艦橋」とやらは全天周スクリーンが備えられた球形の部屋だった。

いや、部屋だと言われなければそうと分からないだろう。

それくらい、臨場感のある映像がスクリーンに映っていたのだから。

「すげえな。ここ本当に部屋なのか？」

『部屋でなければ今頃マスターは風圧で吹き飛ばされ、落下しています』
虚空から随分と嫌味つたらしい返事が返ってくる。

空中に浮かんでいた椅子が俺の方へ移動してくると、座面を俺の方に向けた。

俺はドサッと座り込んだが、椅子は全く揺れず、そのまま部屋の中央に移動して静止した。

「お前のすごさはよく分かったよ。ところでお前、あのロボットはどうしたんだよ。俺

をここまで治せるんならあのロボットだって直せるんじゃないのか？」

虚空から声が聞こえてくると言うのもなんだかあまりいい気分じゃない。

相手と会話しているとと言う実感がないのだ。

『自立型サブフレーム——子機のことでしょうか？修復自体は可能ですが、マスターはあの形状をお望みでしょうか？』

言われてみれば。あのロボットの姿のままでは大きすぎやしないか？

もつとこう、小さくて親しみやすい形にしてくれないものか。

「じゃあ、もうちよつとコンパクトな、その、子機とやらを作ってくれよ。今のままだと話してる実感がないんだ」

『おや、それは「寂しい」と言う感情でしょうか？』

「まあ、そういうことだな」

『——かしこまりました。では作成に取りかかります。1時間頂ければ完成します』
「たった1時間!？」

『はい』

淡々と答える機械音声。

コイツの底力はどんなものなのか想像もつかない。

1時間後。

『マスター。子機の作成が完了しました』

「本当に1時間で作ったのかよ。まあいいや。見せてくれよ」

『どうぞ』

椅子が入り口の方を向く。

そこにいたのは――

『お初にお目にかかります。移民船ルクシオンの自立型サブフレーム2号機です。この形はお気に召しましたか？』

赤いひとつ目を持った灰色の球体だった。大きさはソフトボールくらい。

コンパクトにしろとは言ったがさっきのロボットから縮小しすぎではなからうか。

こんなののできるならなぜ最初の子機をあんなロボットとして作ったんだらう。

――考えても仕方ないか。乙女ゲームの設定だし。

「ああ。さっきのロボットに比べれば随分可愛げがあるじゃないか」

『可愛げ？それは私に女性としての役割を求めている、ということでしょうか？』

「どう解釈したらそうなるんだよ。まあいい、これからよろしくな」

『気に入って頂けたようですね』



あの時の俺はああ言ったが、やはり赤いひとつ目の球体が流暢に喋るといふのは妙な感じが拭えない。

前世にもS●riとかA●x●aといった喋る人工知能はあったが、イントネーションやら区切り方が機械らしく頓珍漢だった。それが愛嬌になってたのだが——ルクシオンは音声こそ機械っぽいが人間と変わらない流暢さで喋る。

そして皮肉屋で、嫌味を発すればその見た目との相乗効果でダメージが大きくなるというおまけ付きだ。コイツのつける傷はやけに治りが遅い。

デコレーションすれば嫌味が薄れるかと思つて、一度仮装用のうさ耳カチューシャを付けてみたが、『屈辱』と言われた。

結局大して効果がなかったので外したのだが——球体ボディをデコレーションしても意味がないなら球体ボディでなければいいのではないか？

例えば、人型——アンドロイドなら、どうだ？

ルクシオンの能力ならアンドロイドのボディを用意することは簡単にできるだろう。そう思つて俺は冒頭の質問を投げかけたわけである。

『それを聞くことにどんな意図があるのですか？』

ルクシオンは訝しむように俺を見る。

「聞いてみただけだ。たまにお前が人間だったらって考えることがあってな」
だがルクシオンは素っ気ない。

『私に女性としての役割をお求めでしたらお応えできませんね。前にも言いましたが、私には性別の概念がありませんので』

つれないやつめ。だがこういう時はちよつと煽つてやればいい。

「そうか。できないってことか。残念だな。お前でもさすがに人間そっくりなボディは作れないか。いやー残念だな」

するとルクシオンはムキになったように言い返して来る。

『聞き捨てなりませんね。そこまでおっしゃるのでしたら作成して差し上げましょう。

1時間あればできますので是非とも感想をお聞かせください』

ほーら火がついた。

ルクシオンはまくし立てた直後、溶けるように消えてどこかに行った。

1時間後。

『マスター。ご注文通り、女性型のボディを作成しました。寮の庭のベンチに来てください』

ルクシオンの声が聞こえてきたので外に出て指定された場所に向かう。

「え？お前——ルクシオン——なのか？」

「はい」

そこにいたのは黒髪ポニーテールの美少女だった。学園の制服を着ているので学園の女子生徒だと言われても全く違和感がない。声だつて人間の女性にそっくりに偽装している。

スタイルもかなり俺にとっては好みである。スレンダーなのに^ポ出てるとこは^ポ出て、ちようどいい具合の身長差で――

つて落ちて着け俺！こいつはルクシオンだぞ！

皮肉屋でマスターをマスターとも思つてなくて、ことあるごとに『新人類を殲滅しましょう』とか『この大陸を沈めます』とか物騒なことを言い出す機械だぞ。ときめいてちや駄目だろ。

「やるじゃないか。70点つてとこだな」

採点結果を伝えてやるとルクシオンが皮肉で返してくる。

「マスターは手厳しいですね。胸部の数値はマスターの好みに合わせたのですが」

「おいおい、俺は胸だけで女性を判断してるわけじゃないぞ」

「どうでしょう。オリヴィアやアンジェリカと会う度に視線が何度も胸に移動していますか？」

カウントしてたのかよ。趣味の悪いやつめ。

「いや、あれは本能みたいなものだから。無意識的なものだから」
言い訳していたら、ふと悪戯を思いついた。

「お、そうだ。ちよつと明日一緒に学園に行ってみないか？」

「何のために女性の姿で新人類に囲まれて過ごす必要があるのでしょうか？」

「ゴミを見るような表情をするルクシオン。」

「まあまあそう言うなよ。別に愛想振りまけつて言ってるわけじゃないんだしさ。ちよつとほかの連中の反応が見てみたいだけだよ」

「——マスターは本当に良い趣味をしていますね」

「渋々といった感じでルクシオンはため息をつく。」

「呼吸まで再現してるとか凄いやね。」



パシんツ！

いい音が廊下に響く。

「下心に塗れた視線を向けるな。穢らわしい」

冷たく言い放つルクシオン。

(あいつ馬鹿か！なんてことを！)

ルクシオンを甘く見ていた。

人型のボディをしていても新人類憎しの意識を隠そうともしてなかった。

上級クラスに紛れ込んだルクシオンだったが、俺の予想を上回る勢いで有名になった。

考えてみれば美人でスタイル良くて専属使用人も連れてない女子つて上級クラスじゃ激レアだもんな。

名前を聞かれて「ルクシオーヌ」と名乗ったルクシオンは結婚相手探しに必死な男子たちからたちまちアブローチを受けた。

特にミリーやジェシカといった性格の良い女子との婚約に惜しくも失敗した金持ち連中の攻勢は凄まじく、お茶会への誘いからまさかの「土下座」まで多彩な攻め方を披露してくれた。

俺は物陰からそれを見て必死で笑いを堪えていたがルクシオンはすぐに我慢の限界を迎えたらしい。手を握ってきた子爵家の跡取り男子の手を振り払い、派手な平手打ちと心を砕く冷たい台詞をお見舞いしたのだ。

平手打ちと言つても女子がやるようなものではない。機械による、下手したら首が捻れて折れるようなパワーでの攻撃だ。

そんな攻撃をくらった男子は派手に吹き飛び、壁に激突してのびてしまった。

「私を口説くなど無駄なこと。私の従う主はマスターだけだ」

いや、台詞は嬉しいが弱い女子——に見えるやつが相手を派手にぶっ飛ばして言う台詞じゃないと思うぞ。

保健室に運ばれていく男子を見て明日ルクシオンに謝らせようと決意する。

しかし、事態は俺の予想をまたしても裏切った。

昨日ルクシオンにぶっ飛ばされた男子が瞳からハイライトが消えて口元だけが笑っている不気味な表情で呟いているのだ。

「ルクシオーヌさん、いい——」

「ルクシオーヌさん最高——罵りたい」

「ルクシオーヌさん、どこ——？」

おいしいおいしい！誰だよこの気持ち悪いマゾヒストを作りやがったのは！

ルクシオンだった！

いや、元を辿れば俺のせいか！金持ち組ムカつく、ちよつと罵られてこいとか思ったけどここまでになるとは予想外だった！

ヤツの目に入る前にルクシオンを学園の建物の外に出さなければ。

「逃げるぞルクシオン。寮まで戻るんだ」

俺はルクシオンの手を取って走り出す。

だが——すぐに上級クラスの男子生徒に見つかった。

「ルクシオーヌさん!——とバルトファルト!? お前らどういう関係だ?」

ああクソ。なんて面倒くさいことになってくれやがった!

「ちよつとそこの——ルクシオーヌさん? 貴女見かけない顔ね。クラスと学年は?」

ヤバイ! 先生まで!

「すみません失礼します!」

強行突破することにした——が、すぐに捕まってしまった。

「逃さんぞ! 説明しろおお!」

「お前らが思つてるような関係じゃねーよ! いいから離せ!」

「やめなさい貴方たち!」

「なんだなんだ?」

「おい! ルクシオーヌさんだ!」

「バルトファルト? ルクシオーヌさんと手を——」

勘弁してくれ! ギャラリーがこれ以上増えたら本気で洒落にならない!

「ルクシオン何とかしろおお!」

「——結局最後は私頼みですか」

ルクシオンの頭から電撃が迸り、ギャラリーを気絶させていく。

「ぎゃあああああああああ！」

「なんだどうなってるんだあああ！」

「くあwせdrftgyふじこいっ！」

野郎どもの悲鳴が校舎に響く。

ついでに俺も痛い電撃を貰った。

「お、お前——俺まで巻き込むのかよ——」

意識はしばし途切れた。

その日の放課後、俺はルクシオンに人型ボディを辞めさせた。

やっぱりコイツは球体のままが誰にとっても一番いいのだろう。

ミリーとジェシカ

周りの女子たちを見てみると馬鹿じやないのかと思えてくる。

男子たちに恨まれて、蔑まれるようなことをして何になる？

そうやって自分の首を絞めていることにも気付かないとはおめでたいことだ。

お茶会への招待をけんもほろろに断る同級生の女子生徒を見て、ミリーこと「ミリセント・フォウ・ホーカー」は思った。

彼女は表向き誰にでも優しい性格の良い女子として通っている。

だが——何も善意だけでそうしているわけではない。可能な限りの優良物件と婚約を取り付けるためにそう振る舞っているのだ。

なるほど男子たちは結婚に必死で、どんな女子にでもアプローチがあるだろう。

でもそれに胡座をかいてあからさまに見下した態度を取ったり、搾取に走ったりするのは長い目で見ればロクなことにならない。

人から買った恨みはいずれ地獄の業火として自らに降りかかる。そうミリーは言い聞かされて育ってきたし、今でもそう信じている。

逆に自分を律し、他者に優しく接していればその先には果報がある。

それは現在進行形で証明されている。

「今日はハイゼル君、か」

お茶会の招待状を確認する。

ミリーには金持ちの男子生徒から熱いラブコールが掛かっている。

ミリーとしては期待した通り——否、それ以上の状況である。

実家は決して裕福な方ではないし、ミリー自身も正妻の娘ではなく、妾の娘である。

婚約する相手は裕福な方が良いに決まっている。

それに——正妻の子供たちを見返すという目的もある。

我儘に振る舞い、会う度に自分を見下してくる異母姉妹たちよりもいい男子と婚約して、今まで言われてきた嫌味と悪口のお返しをしてやるのが、ミリーの密かな目標である。



招待されたお茶会の部屋はだいぶ派手に仕上げられていた。

学生のお茶会には過ぎた、見るからに「高級品です」と主張しているインテリアや茶道具の数々。天井には後から付けたらしい巨大な金細工のシャンデリア。

(趣味悪すぎでしょ——気持ち悪い)

財力自慢をしているとしか思えないレイアウトに思わず嫌悪感を抱くが、もちろんおくびにも出さない。

「ようこそお越しくできました」

招待してきた子爵家の跡取り「セドリック・フォウ・ハイゼル」が気合の入ったボウ&スクレープを披露する。

——努めて笑顔を見せているのが丸分かりだ。

笑顔の裏に丸見えの必死さを隠して媚びて来る者に対する本能的な忌避感が生じる。この時間がミリーは嫌いだった。

本音を言えばさっさと婚約を済ませて解放されたいのだが、最優良物件を見極めるためにはまだまだ我慢しなければならぬ。

ミリーは見事なカーテシーで返して満面の笑顔で返事をする。

「お招きありがとうございます。ハイゼル君」

堅苦しい礼儀作法では冷たい印象を与え、かといって馴れ馴れしくても「軽い」と不快感を抱かれる。

塩梅を見極めるのが重要だが、ファミリーネームに君付けで呼べば、大体外れはない。ちゃんと敬意を持っている印象があるし、それでいて親しげにも聞こえる。

心中「ないな」と思っているも呼び方は常にファミリーネームに君付けで笑顔を崩さない。

関係を進める気がない男でも、自分の情報を拡散させるピボットとして利用できるからである。

今回も効果は靦面だった。

セドリックは耳が赤くなるのを抑えられていない。

「さ、お席にどうぞで」

差し出された手は微かに震えていた。

「はこ」

ミリーは笑顔でその手を取る。

ミリーが席に着くとセドリックが給仕を始める。

家庭教師でも雇っていたのか、丁寧で無駄のない所作だ。

学園のマナー教師もこの男子相手には大して教えることなさそう、とミリーは思う。

どこかの馬鹿な三人娘たちと違って勝手に勝手にお茶請けをとって食べ散らかすなどという無粋なことはしない。

セドリックが切り分けたチーズケーキを出してくれるまで行儀良く待つ。

男子相手にマナーのなっていない女子も多いため、これだけでも好印象である。

お茶が入るまでのこの時間はお茶会の中でもマシな時間だ。
お茶が入ったら、自分と結婚するメリットをさりげなく提示する——という体で長つ
たらしい自慢話が始まる。



(あー疲れた——)

お茶会が終わり、礼を言つて部屋を出たミリーは大きく伸びをする。

(今回もパス、かな)

頭の中でセドリツクの序列を決める。

何もミリーは裕福度や身分だけを基準に優良物件かどうかを判断しているわけでは
ない。

性格や能力なども経歴や普段の言動・所作から推測している。

そうやって点数を付けて最高得点を出した男子と婚約する、とミリーは決めていた。

(えーと、明日は——)

手帳を取り出し、予定表を確認する。

(毎日お茶会つてのも疲れるなあ——)

このままではお菓子の食べ過ぎでブクブク太るのではないかと内心ヒヤヒヤしている。

「あ、ミリー。やほー」

馴染みのある声がした。

「ジェシー、あんたもお茶会帰り？」

「そだよー。今日もあそこ行く？」

ミリーがジェシーと呼ぶ【ジェシカ・フォウ・フリント】はミリーと境遇も価値観も似ていて親友と言える間柄だ。

「行こう！今日は飲みたい気分」



学園に来てから馴染みのある王都のバー。

少し見つきりにくい場所にあるが、食事は美味しく、静かで、ついでにマスターがイケメンで2人は気に入っている。

「いらっしやいませ」

マスターがカウンターから声をかける。

店内にはほかの客はいないようだ。

ちよつと得した気分、と思いつつミリーは注文する。

「いつものを」

「かしこまりました」

マスターが低アルコールカクテルを作り始めると、ミリーとジェシカはお喋りを始める。

「昨日ミリーを誘つてたアーキンつてやつ、いたでしょ」

「あー、いたいた」

「あの人結構胸見てこなかった？」

「あー、うん。ムツツリつてやつだよ。ちよつと気持ち悪かった」

「私もー。今日お茶会に誘われたんだけどね、視線が何回も胸に来ててさ、それを隠そうとして俯き気味で余計に気持ち悪くてさ。で、どこ見てるの、つて言ってみたらさ——」

「え、聞いたの？ 聞いちやつたの!?! で、なんて言つてたの?」

「ふふ、当ててみて?」

「えー、どこも見てないよ! とか?」

「ブー、ハズレ」

「えー何気になる! 言つて言つて?」

「やだ、思い出しただけで笑いが——」

「ちよつとー、思い出し笑いか余計気になるよー」

「んーちよつと耳貸して？」

ジェシカが耳打ちしてきた内容にミリーは思わず頬が緩み——

「何それ予想の斜め上！」

「でしょー！笑い堪えるの大変だったんだよ？」

2人して笑うミリーとジェシカ。

「あーやつぱり楽しいね。こういうの、いいよね」

そうだろうそうだろう。ミリーは頷く。

面白かったことや楽しかったこと、あるいは面白おかしく仕立てた愚痴をお喋りで共有することが楽しくない人間などいるだろうか。否、いないと断言できる。

2人が少し落ち着いたところで、マスターがカクテルを出してきた。

2人はグラスを軽くぶつけてひと口飲む。

爽やかな甘酸っぱさが口の中に広がる。

不意にジェシカが少し恥ずかしげに、しかしちよつと自慢げに微笑んで言った。

「そういえば、今度の週末、デート行くんだ」

「お、それってひよつとして——」

「えへへ」

「えー、ほんとに？誰？」

「ほら、この前話したでしょ？——アルリック君」

「おおー本当か。いいなー、私もデートしてみようかなー」

「絶対その方がいいよ。勉強も大事だけど、せつかくの休みなんだよ？勿体ないよ」

「そうだねー。また男子が殺到して来る予感がするけど」

「ミリーはデートしてみたいって思える人、いないの？」

「うーん、そうは言ってもね??」

「いつそデートは別口って事でこっちから誘うのもありなんじゃないかな？」

「ん——確かにね。お茶会しててそこそこいいなって思えた人とか——」

「別にそういう基準とか拘りなくても良くない？私たちとお茶会してる人なんて全体か

ら見れば少ないしき。例えばそうね——バルトファルトなんてどうかかな？」

「あー確か冒険で新しい浮島とロストアイテムの船見つけたって有名になってたよね」

「うんうん。辺境出身だけど意外と狙い目かもしれないよ？独立して男爵位を貰うこと

になつてるとって聞くし、実家も投資で発展して裕福になつてるとみたいだし」

「うーん、でもねえ——バルトファルトって私たちのこと見てないと思うよ」

「そう？方々にお茶会の招待とか出してるじゃない？」

「そうなんだけど、最近特待生の子と仲良さげにしてるしね。たぶんあれは相当入れ込んでるよ」

「え、そうなの？でも結婚できないでしょ？」

「そうなんだけど、たぶんそういう損得勘定抜きで入れ込んでるんだよ。確かにあの特待生、気立てはすごく良いしね。——良すぎるくらいに」

「あ——なるほどね。それは面白くないって思う人が相当いそう」

「そうなの。現実問題、今バルトフアルトに粉をかけたら、色々と良くないことになりそうだし、やめとくよ」

——この判断をしたことにミリーは後に安堵決闘し、その更に後には後悔出世することになるのだが、彼女はまだそれを知らない。

ジェシカは微笑んでまた別の話題を振ってくる。

「そっか。あ、今日のお茶会はどうだった？」

「またあの時とおんなじパターンだったよ。金持ち自慢が凄くてさ——」

また賑やかなお喋りが始まる。

女3人集まれば姦しいというが、2人でも十分だろう。

女性は本質的にワイワイ楽しくお喋りがしたい生き物で、ミリーとジェシカも例外ではない。

いつの間にか時間が経って店に人が集まり始めても2人のお喋りは止まらなかった。

怨嗟の夏と罅割れる世界

懐飯

夏休み。

領地の浮島、その波止場で俺はベンチに座って待ち人を待つていた。

「暇だな——」

思わず呟く。

オリヴィアさんとアンジェリカさんは温泉、ルクシオンも実家で立ち上げている工場に行つてしまつているので、話し相手もない。

待ち人、というのは俺が雇つた密輸業者である。

勘違いしないで欲しいが、別に禁制品を入手しようとしているわけではない。

ただ前世で好物だった食べ物を作るための原料が欲しいだけである。

前世では当たり前のように手に入れられたものがこの世界にはない。

♪はあご飯がねえ！お出汁もねえ！醤油もお味噌も作つてねえ！油揚げえ！豆腐もねえ！そもそもお米も大豆もねえ！俺アこんな世界嫌だく俺アこんな世界嫌だく

そんな替え歌まで作つてしまつたくらいだ。

だが嘆いているばかりではない。

この間ルクシオンが白米とお吸い物を用意してくれたし、これから到着するであろう密輸業者からは大豆と海苔が存在するとの報せを受け取っている。

既に畑と養殖場はルクシオンに用意させてあり、密輸業者の到着を待つばかりである。

その密輸業者とは――

「おーいー！リーオーン！」

雲を乗り越えて近づいてくる飛行船から俺を呼ぶ声が聞こえてくる。

「やっと来たな。ベルのやつ待たせてくれやがって」

そう、俺が雇った密輸業者とは運び屋のベルことアラベラである。



半年ほど前。

ルクシオンを手に入れる旅から帰還し、学園入学の準備と領地の開発とバルトファルト領への投資が始まって間もない頃。

俺は親父のお抱えの御用商人たちとの商談でバルトファルト領の港にいた。

退屈で面倒なので、いくらかの確認事項を片付けた後は親父に丸投げして波止場をブラブラしていたら、御用商人たちの飛行船とは違う船がちらほらいるのが見えた。

御用商人を通じて建築資材やら飛行船やら魔石やらを大量に購入しているので、その噂を聞きつけて商売にやって来たのだろう。

これから情報が広まればどんどん景気が良くなりそうだと思っていると、不意に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「よう、久しぶりだなリオン」

声の主を見て俺は言葉を失った。

「どうしたんだよ？冷えちまったパイでも見るような顔して」

「お前——ベルか？」

「そうだぞ？船泥棒に遭って、アンタに拾われて、小さなボートで2人つきりで大空を旅したベルだぞ」

言い方が妙に冗長だがたしかに声も顔も体つきもベルことアラベラその人である。

ただ——

「いや、お前変わりすぎだろ。一瞬誰だか分からなかったぞ」

目の前にいるベルは俺が見知ったベルとはだいぶ違う。

ラフなポニーテールだった髪は左右で長さの違うショートヘアになり、髪の色も彩度

が上がつて暗めのマゼンタ色になっていた。

ついでに洒落た三角帽子まで被っている。

「フッフッフ、女子3日会わざれば刮目して見よ、だぜ?」

芝居がかった仕事で宣うベルに俺はツツコミを入れる。

「いやそれ男子じゃなかったか? それよりお前、その髪はどうしたんだよ? 正直どぎついんだが?」

「酷いな!? そこそこ流行ってる色だぜ?」

——流行りね。うん、分かん。

というか、染髪技術があるってことはもしかして、攻略対象男子の色鮮やかな髪もそういう色に染めてるのか?

「あーしはナウでヤングでトレンドイナイ女だからよ。新しいモンに目がねえのさ」

——何言ってるんだコイツ? 確かに若くて流行に敏感ではあるのだろうが、良い女とはとても思えない。というか、良い女って自分で言ってる時点でどうかと思う。

まあ、いいや。ツツコんでも多分無駄だし。

「で? ここにいるってことは貸しの件だろ?」

要件を切り出すと、ベルは破顔した。

「覚えてたか! それは結構! さあ、利子4ヶ月分と合わせて2352ディアきつちり返

してもらおうか！」

「はいはい。これでいいか？」

俺は札束をポンと渡す。

しかし、ベルは受け取つても下がるところか、更に近づいてきた。

「確かに受け取りました。それとなんだけど、この前デカイクライアントがお縄になつて仕事が減つちやつてさ。このままじゃ金欠になりそうなんだ。ここで運びの仕事があるならちよこつとあーしに回してくんない？何だつて運ぶぜ？」

そんなの答えは決まっている。

「断る」

「おーありがとう！助かるよー！」

「聞こえなかつたみたいだな。もう一度言おう、断る。わざわざお前に運ばせるものなんてない！」

するとベルは涙目で俺の両肩を掴んで揺さぶつてきた。

「頼むよ！お願いしますよ！一晩抱かれてあげてもいいですからあー！」

——枕営業やめろ。

バルトフアルト家に運び込まれる物は発注を受けた御用商人が一括して購入し、運んでくるのだ。自営業の運び屋が入り込む余地などない。

「いらん！他を当たれよ！てか揺さぶるのやめろ！」

途端に揺さぶるのをやめたベルはしおらしくなって絞り出すような声で言った。

「——それができたら苦労しないよ。パパもクライアントと繋がってたつてんで豚箱にぶち込まれたし。あーしが頼れるヤツなんてもういねえよ——」

「——は？お前——それ本当かよ？」

ベルは頷く。

コイツの親父は一体何をやらかしたのか。

「何があつたんだ？」

「マリファナの非正規品を密輸してたんだ。あーしらみみたいな学も才能もねえ貧民街のドブネズミにはそれくらいしか稼げる仕事かねえ。それも今回の摘発で全部オシヤカさ。リオンの所に行けばそんなのとは違う仕事が貰えるかもしれないと思つたけど——無理だったか」

辛そうなその顔を見ているとどうにもいたたまれない。

俺はそういう顔をしてるヤツを見るのが嫌いなのだ。

「——しようがないな。バルトファルト家で雇うのは無理だけど俺個人で雇つてやるよ」

途端にベルは怖いくらいの笑顔に戻り、鼻と鼻がぶつかるくらいに顔を近づけてき

た。

「それマジ？雇ってくれんの？」

「お前、切り替え速すぎねえか？」

ドン引きする俺にベルはからからと笑う。

「あつははは！あーしがそうしおらしく悲劇のヒロインやるわけないだろ？で、何を運ぶんだ？武器か？珍味か？それともクスリか？」

コイツの話はどこが嘘でどこが本当なのか分からなくて困る。

しかもコイツが挙げた品目、全部密輸品じゃないか。

「まあ——珍味の類だろうな。俺が欲しいのは——」



棧橋に見知った飛行船が接舷する。

船長は様変わりしても飛行船は変わっていない。

ベルと一緒に俺のボートでこの船を追跡して取り返したのは、今となっては懐かしい思い出である。

——二度は御免被るが。

タラップが下ろされ、ベルが大きな木箱を抱えて下りてきた。

ベルが運んできたのは期待を上回る物の数々だった。

「どうよ！南方で買い付けた希少な豆だぜ？それとこつちは緑の茶木と例の水草だ。それとな——」

ベルは大豆やら茶木の苗やら海苔らしきものやらを脇に置くと、木の箱を開けて小さな瓶を一本取り出した。

「コイツは魚醬つていうやつらしいぜ？リオンが言つてた醬油に似てるんじゃないか？」

魚醬!?そんなものがあつたのか？

瓶を開けてちよつと指先に垂らして舐めてみる。

醬油とは違うが、懐かしい旨味が口に広がる。

「ああ、そうだな。これ——美味しいな」

「え?ちよつと?泣くほど?」

ベルがドン引きした顔で指摘してきた。ついつい涙ぐんでいたらしい。

でも仕方ないと思うんだ。

こつちの世界に生まれてからロクな飯が食えてない。

朝は堅いパンに目玉焼きとお粥かスープ、お昼はパンだけで夜はシチューとかパイと

か。おまけに調味料は塩やハーブくらい。

日本人の俺にはあまりに酷だった。

これはあの憎き浪費家揃いのゾラの一家のせいでもあるが、食文化の違いが大きい。

この世界の主食はパンで米や大豆を食べる文化はないのだ。

「リオンさん？その人誰ですか？」

不意に聞こえてきた優しい声で俺を感傷から引き戻した。

見るとオリヴィアさんとアンジェリカさんが立っていた。

ベルが俺を泣かせたと思ったのか、アンジェリカさんは少し表情が険しい。

「ああ、こいつはアラベラ。俺の——御用商人！」

咄嗟に嘘を吐いた。さすがに密輸業者などと言うわけにはいかない。

「御用商人？随分と若いのだな」

アンジェリカさんが訝しむような視線を向ける。

それに対してベルはあろうことか、不敵な笑みを浮かべて挑発的な言葉を繰り返した。

「若い、それがどうしたと言うのでしょうか、貴族様。冒険者として旅をし、それなりに修羅場も潜り抜けてきたリオン様が他の者を差し置いて選んだのが私です。私を疑うということはずまり——リオン様の目を疑うということになりますか？」

おい馬鹿やめろ！アンジェリカさんを怒らせるな！首が飛ぶぞ！

内心大慌ての俺だが、アンジェリカさんは涼しい顔で俺に問うてくる。

「そうなのか？」

「——はい、そうです」

俺はそう答えるしかなかった。

本当は元旅仲間の情に絆されてなし崩し的に雇ったのだが、それを言っても誰も得はない。

「——そうか。何を買ったのだ？随分と珍しい物のようだが」

アンジェリカさんは特に追及するでもなく、ベルが持ってきた品物に興味を示した。

さて、わざわざ密輸業者を雇ってまで手に入れた珍しい食品についてはどうやって説明したものか。

「えーっと、これはですね——」



夜。

バルトファルト家の厨房で俺はフライパンと睨めっこしていた。

フライパンの中には細かく刻んだ玉葱とベーコンと卵と白米が混ぜこぜになって湯気を立てている。

領地から持ってきたしゃもじで切るように混ぜる。

——そろそろ頃合いかな。

ベルが持つてきた魚醤を入れる。

そもそも俺が厨房で料理しているのも、アンジェリカさんが魚醤の使い道を知りたがって、俺の好物を作るためだと言ったら、自分も食べたいと言いつ出したからである。

両親に、ニックスに、ジェナに、フィンリーに、オリヴィアさんとアンジェリカさんと、大人数分作ったせいで、魚醤の瓶の中身は半分程に減ってしまった。

またベルに発注しないとな。

少し味見してみる。

うん、完璧だ。俺にとっては。

「じゃあこれ、取り分けて運んでください」

所在なげに待機していたアンジェリカさんの使用人たちに配膳をお願いし、俺は厨房を離れた。

「何だこれ——美味しい！」

「何ていうのかしら——言葉にできないけど美味しいわね」

「リオンさん、料理もできたんですね！」

「これは見たことも食べたこともないな。どこの料理だ？」

両親が絶賛し、オリヴィアさんがまた俺に対する幻想を上乘せし、舌が肥えているであらうアンジェリカさんでも目を丸くするその料理。

その名も――

「炒飯チャーハンっていうんです。遠い遠い国の料理です」

前世では一人暮らしだったから料理だってそれなりにしていた。

朝はご飯と味噌汁がジャステイスな俺だが、手取り早く作れて美味しく腹を満たせる炒飯も大好きで晩飯によく作った。

「ちやーはん？聞いたことがないな。どこで知ったのだ？」

「ああ――旅の途中で外国人の商人に教えて貰ったんですよ」

嘘である。

この世界のどこを探しても炒飯なんてないだろう。

だが前世の記憶を頼りに作ったなんてとても言えない。

「私も作り方知りたいです」

オリヴィアさんが目を輝かせている。

断るなんてできるわけがない。

「簡単だよ。今度教えてあげる」



バルトファルト領から少し離れた浮島と呼ぶにはあまりに小さい小島にベルは飛行船を繋ぎ、甲板で夜食の包みを開いた。

「ベル。今回の報酬とこれは個人的な礼だ」

そう言つてリオンは報酬と一緒に大きな葉に包んだチャーハンなる料理を渡してきた。

わざわざリオンの領地からバルトファルト領にまで来させられた理由はこの料理を渡したかったからのようだった。

夜食にちょうどいい大きさだったので夜に食べることにしていた。

「本当に——不思議なやつだな」

ふつと笑いを漏らすとベルは葉を開けてリオンがくれた料理をひと口食べてみる。

「——美味しいや」

こんな軽い夜食としてではなく、豪勢に夕食として食べられるリオンの家族と彼についていた2人の令嬢を羨ましく思う。

「本当に——貴族って何なの——」

ベルにとつて貴族とは自分たちのような貧乏人を便利な道具としていいように利用して使い捨て、その犠牲を知りもせずのうのうと生きている者たちだった。

アンジェリカに対して挑発的な言動をしたのもその鬱屈した感情の現れである。でもリオンは他の貴族とは違った。

元々貴族らしからぬ気質を持っているとは思っていたが、報酬に加えて自分で作った料理までくれた。

だからこそ、羨ましい。あんないい貴族の傍にいられる者たちが。

——自分はビジネス上の関係でしかいられないのに。

「でもまあ、贅沢だよね。あんないいクライアントと縁ができてるだけでも」
そう自分に言い聞かせるように呟き、夜食の残りを腹にかき込むベルだった。

助つ人

ある年の夏休み。

ホルファート王国各地のダンジョンには学園生の姿が例年とは比較にならないほど多く見られた。

彼らの目的はただひとつ。金を稼ぐことである。

「なぜだあああ！なぜ進めない！」

高く売れる高純度の魔石を求めてダンジョン深部を目指す学園生徒たちの一人が叫んだ。

「入り組んでて道が分からない！モンスターも多い。この先は無理だ！」

別の生徒が叫ぶ。

実際その通りである。先ほどから同じところをぐるぐる回ってばかりいるのだ。

おまけに壁や天井に無数に空いた穴からワームやゴブリンといったモンスターがひっきりなしに飛び出して襲ってくる。

「来るぞ！ゴブリンだ！20体以上いる！」

「くそっ！——一旦退くか」

生徒たちは目眩しの魔法を使って敵を足止めし、急ぎ足で退却して行った。



「クソツ！稼いでも稼いでも足りない！」

子爵家の跡取りである学園1年生「アルヴィン・フォウ・カルバート」は空になったジョッキを机に叩きつけて叫んだ。

彼の言葉と一緒に飲んでいた仲間たちが頷く。

彼らは連日ダンジョンに挑んで金を稼いでいるが、借金はなかなか減らない。

どうして学生の身でそんな借金を背負い込んだのかというところ——絶対に勝てると思つて注ぎ込んだがギャンブルで予想外の負けを出したからである。

成り上がりの男爵位持ちの1年生男子——たしか「リオン・フォウ・バルトファルト」と名乗っていた——が公爵令嬢アンジェリカの代理人としてユリウス王太子殿下たちと決闘することになった時、彼らはユリウス殿下側に賭けた。

こんな儲け話はないと思つたので、チマチマした額ではなく全財産を賭けた。仲間の中には借金してまで賭けた者もいる。

ところが、予想に反してリオンが対戦者全員をあつさりとして下して決闘に勝利したこと

で、ユリウス殿下たちに賭けていた生徒たちは揃いも揃って大損したのだ。

金持ち連中はそれでもなんとかなったが、残念ながらアルヴィンたちはそうはいかない。

実家のカルバート子爵家は裕福ではないからだ。親にも泣きついたが、「自分で作った借金は自分で返せ」と突っぱねられた。

2学期以降の諸経費を工面できない危機に直面したアルヴィンたちは夏休みを利用してダンジョンに潜り、必死で金を稼いでいた。

「愚痴つても借金は減らねえよ。もっと入念に準備してまた挑戦しようぜ？な？」
対面に座る「ホーレス・フォウ・クレヴァリー」がアルヴィンを励ましてくる。

ホーレスはアルヴィンに比べれば借金の額は少ないが、夏休みになってから毎回アルヴィンと共にダンジョンに挑んでいる。

ホーレスの実家はカルバート家よりも貧乏なため、これまでアルヴィンはホーレスを内心見下していたが、今では良き友人になっている。

共通の困難と「仇敵」によってアルヴィンたちの結束はかつてないほどに固い。

彼らの心に浮かぶのは、あの忌々しいずんぐりむつくりの鎧の姿。そしてその操縦者リオンが発する嘲笑の声。

（何が賭け事は程々にねーだ。そもそもあんなことになったのもあのスコップ野郎が自

分に大金を賭けやがったからだろうが！」

賭けに負けて絶叫する自分たちを清々しい声で煽ってきたスコツッ野郎ンは絶対に許せない。

いつか復讐してやりたいが、まずは借金を返さなければならぬ。

「でもよ、あの地形とあの数のゴブリンはちよつとキツくないか？」

「先輩方と一緒にいかせてくれるように頼んでみるか？」

「いや、無理だろ。先輩方は稼ぎの良い場所を俺たちに教えちゃくれないと思うぜ」

明日の方針を議論するアルヴィンたちだが、いい手は出てこない。

「待ったー！ びつたり助っ人がいたぞ！」

不意に仲間の一人「クラーク・フォウ・オリヴァー」が手を打って言った。

彼はアルヴィンたちのグループの中で最も五十歩実家百歩が裕福だであり、グループ内の序列は高い。

ただしその分借金の額も最高であり、稼ぎの良い高難度ダンジョンに行こうと言いだしたのも彼である。

「助っ人って誰だ？」

「【ヘステイカセブン】だよ」

「ヘステイカセブン？ ヘステイカセブンって、あの噂の変わり者連中か？」

アルヴィンが難色を示す。

「いや、あいつらが俺たちを助けてくれるか？」

「無理だろ。あいつら仲間内以外と冒険するの嫌がつてるっていうぜ？」

「そもそもどうやって接触するんだ？」

仲間たちも次々に疑問の声を上げるが、クラークは自信たつぷりに言った。

「心配ない。連中をまとめてるヘステイカ先生は俺の叔父上の嫁なんだ。あの人にちよつと口添えして貰えば——」

思わぬところで人の縁に助けられるアルヴィンたちだった。

ヘステイカセブン。

妙に痛いグループ名をしたそれは王国貴族には珍しく、自分で働くことと冒険が大好きな変わり者の女子生徒の集まりである。正確には女性教師1人と女子生徒6人。

彼女らは上級クラス、普通クラス、学年を問わず「顧問」の「ヘステイカ・フオウ・オリヴァー」の下に集い、ダンジョンにしょつちゆう潜っているという噂だ。

彼女たちにアプローチを試みる男子は少なくないが、彼女たちの多くは授業中を除き、どこにいるのかすらほとんど分かっておらず、情報はかなり少ない。

また、熱心——を通り越して狂信的なファンがいるメンバーもおり、見つけても接触が極めて難しい。

そんな彼女らが助っ人に来てくれるかもしれない、という希望に彼らは期待と不安が入り混じった複雑な気持ちになる。



1週間後。

アルヴィンたちは港でヘステイカセブンの到着を待っていた。

「遅くね？」

「ああ。待ち合わせの時間はとっくに過ぎてるな」

アルヴィンは懐中時計を見て舌打ちしたくなった。

女子相手のお茶会で慣れているとはいえ、待ち合わせ時間に遅刻されるといのは気分が悪い。

「ん？おいあの飛行船、入港するにしちや速すぎないか？」

「ん？おいちよつと待てこつちに向かつてくるぞ！」

猛スピードでアルヴィンたちのいる棧橋目掛けて突っ込んでくる飛行船にホーレスたちが騒ぎ始める。

しかし、飛行船は寸前で巧みに減速し、流線型の船体を棧橋に横付けした。

「最新型か？すごい動きだったぞ」

「これって——ウインド・ランナー級高速艇じゃないか！」

興奮する男子たち。貴族とて年相応に鎧や飛行船といったメカの類は大好きである。

飛行船からタラップが伸びる。

降りてきたのは完全装備のプレートアーマーに身を包んだ4人の女子たちだ。

彼女たちが続いて降りてきたのは、冒険の授業でよくお世話になっているヘステイカ先生。

「ごめんなさいね。待たせてしまつて」

ヘステイカ先生が降りてくるとアルヴィンたちの方へ歩いてくる。

「いえ、助力ありがとうございます。義叔母様」

クラークが挨拶する。学園の外では先生ではなく義叔母として接する。

「今回は助けてあげるけど、これに懲りてもう賭け事はやめておきなさいね。貴方たちが借金を返すだけじゃことの始末は付かないのよ」

説教される男子たちをヘステイカセブンの女子たちは様々な目で見ていた。ある者は冷ややかに、ある者は面白そうに、ある者は同情的に。

ひとしきり説教が終わると、ヘステイカ先生は連れてきた女子を紹介する。

「この娘はメルセデス。3年生でこの娘たちのリーダーをやつて貰つてるわ」

メルセデスと呼ばれた女子はセミロングの赤毛を無造作なオールバックにしてカチューシャで留めていた。

ファツション性などどこかに置いてきたらしい実用主義的な装備を纏っており、絵に描いたような「冒険者」である。

「私は「メルセデス・フォウ・ランカスター」。3年生だよ。先輩には敬語ね」

メルセデスは名門ランカスター伯爵家の令嬢だが、とてもそうは見えない。

格好もそうだが、かなり気さくで面倒見の良さそうな雰囲気である。

「あ、そういえば君たち、鎧龍を見たことはある?」

メルセデスがアルヴィンたちに質問してきた。

「——いえ、ないですけど」

「なら君たちは幸せ者だね。あの鱗はこの剣でも貫けなくて苦戦したよ」

メルセデスは腰に提げていた肉厚の剣を抜いて見せた。

余計な装飾などない、ただ相手を切り裂き命を奪うことに特化した武器が放つ威圧感にアルヴィンたちは気圧される。

しかし、メルセデスの隣にいた大柄な黒髪の子は平然とメルセデスに皮肉を飛ばす。

「でもあれアンタが戦いたいなんて言った途端に起き出してきたわよね? おかげで寝首

掻く作戦が台無しになったじゃない」

「い、いや私のせいじゃないでしょ。言霊なんて使ってなかったし、あのタイミングで起き出してきたのは偶然だよ。——たぶん」

メルセデスが言い返しつつも目を逸らし——

「あ、この娘はレベッカ。鎧龍にトドメを刺したの。普通クラスだけど、私と同じ3年生だからちゃんと敬語だね。それと力比べはしない方が身のためだよ。令嬢というより猛獣だからねこの娘は」

「それはどういう意味かしら？」

「令嬢が戦利品とか言って鎧龍の角を素手で引っこ抜くと思う？」

メルセデスと痴話喧嘩のようなやりとりをする。「レベッカ・フォウ・フリップ」は普通クラスの生徒だが、砕けた口調でメルセデスと会話している。

「まあ結局引っこ抜いた角は煙になって消えちゃったんですけどね」

会話に入ってきたのはダークグレーの髪を編み込んだ小柄な女子。

「あ、私は「エリス・フォウ・セヴァリー」。君たちと同じ上級クラス1年生だよ。よろしくね」

アルヴィンは彼女に見覚えがなかった。同じ学年で同じクラスと言っているが、今まで見かけなかった。

「この娘は私らと違つて強くはないけど、魔法とモンスターの知識なら誰にも引けは取らないよ。あと鍵開けとスリに長けてるから貴重品に気を付けてね」

「ちよ、メルセデス先輩!?!冗談キツイですよ」

「あはは!あ、最後のこの娘はシビル。普通クラスの2年生。下手に怒らせたらヘッドショットされるから言葉には気を付けてね。1キロ先でも百発百中の腕前だから逃げられるとは思わない方がいいよ」

メルセデスに冗談交じりに紹介される「シビル・ファイア・セーラム」だが、エリスと違つて否定しない。

鷹のような鋭い目付きと短い銀髪、お世辞にも美人とは言えない細面が合わさつて近寄り難い雰囲気纏つている。

「まあ、今回モニカとロイスは来られなかったけど、君たちの稼ぎに付き合うだけなら4人で十分でしょう。それで、君たちが挑もうとしてるダンジョンはどこかな?階層は?区画は?どんなモンスターが出る?」

ワクワクした顔でアルヴィンたちに詰め寄るメルセデスをヘステイカ先生が制する。

「とりあえず現地向かきましょう。詳細はクラークたちから説明させるから」

乗合馬車でダンジョンへと向かうアルヴィンたち。

ふとアルヴィンは睨めつけるようにこちらを見てくるシビルに気付く。

「何ですか？俺の顔に何か付いてますか？」

見つめ続けられるのも良い気分ではない。

するとシビルは目を逸らして地を這うような低い声で言った。

「——縁故で楽ができて羨ましいなと思って」

「つーそれってどういう——」

問い詰めようとするアルヴィンをメルセデスが制する。

「まあまあ、ヘステイカ先生との縁があるのいいなあつてことだよ」

すかさずヘステイカ先生が話題を変える。

「はいはい。みんな目的とする場所は同じでしょう？変な争いは起こさないで。クラク、目的地の説明をお願い」

話を振られたクラクは頷き、ダンジョンの見取り図を取り出して広げる。

「俺たちが攻略しようとしているのはここ、地下12階、Bブロックの突き当たりの広間です。地下6階までの探索とルート確保はできましたが、7階以下に多数のゴブリンが棲みついていると思われます。入り口で複数回襲撃を受けました。また、見取り図にない横穴や縦穴が多数あり、ワーム型のモンスターが棲みついています」

見取り図を覗き込むメルセデスが質問する。

「7階への入り口ってのは君たちが挑んでいる場所しかないのかな？」

「ここにもう一箇所あるにはありますが、ひどく遠回りですよ」

「探索はしたの？」

かぶりを振るクラークにレベッカが苦言を呈する。

「遠回りっただけで探索対象から外すのは感心しないわね。まずは判明してるルート全てを探索してどのルートが攻略しやすいか考える。これ、冒険の基本のキよ」

「ツ！仕方ないじゃないですか！これまで授業以外でダンジョンに潜ったのなんて王都のだけですし——それに俺たち時間がないんです」

レベッカの説教に思わず言い訳を始めるアルヴィン。

「あのね、アルヴィン君。早くお金が必要なのは分かるけど、そのために危険を減らす努力を怠るのは駄目よ。急がば回れと言うでしょう？」

ヘステイカ先生が嗜める。

その様子を見てシビルが「これだから上級クラスのお坊ちゃんは——」と毒づき、エリスがすんでのところで彼女の口を塞いだ。



「ちよūdいいい機会ね。私はここで待つわ。生徒だけのチームで協力して目的地を目指

しなさい」

ダンジョンに入ると言う時になってヘステイカ先生が急にそう言い出した。

「待つてください！義叔母様も一緒と言う話では？」

クラークが抗議するがヘステイカ先生は折れない。

「貴方たちはこの機会に自分たちのグループ以外の人との交流と協力を学びなさい。いつも同じ面々でつるんでばかりいるから視野が狭くなるの。無謀な賭けをして大損して今苦労しているのも元はと言えばそれが原因よ」

クラークは俯いた。

アルヴェインもホーレスも、何も言い返せない。

ヘステイカ先生はメルセデスたちの方に向き直り、彼女らにも訓示を垂れた。

「これは貴女たちのためでもあるの。これまで私が教えてきたことを今度は彼らに教えてあげなさい。人に教えられて初めて知識は真に身についたと言えるのよ」

「——はい。分かりました。必ずお宝を手に入れて生きて戻ります」

メルセデスが力強く返事をする。

ヘステイカ先生は満足げに微笑み、若き冒険者たちを送り出す。

「さあ、行ってらっしゃい」

ヘステイカセブン

「なるほど。これは確かに難所だね。狭い上にこの入り組みよう、それにモンスターも多すぎる」

「弾幕張つてもこれってどんだけいるのよ」

殿のメルセデスとレベツカが毒づく。

メルセデスはショットガン、レベツカはロストアイテムを研究して作られた特注品の連射銃を使つて大量のモンスターを屠り続けているが、倒しても倒しても際限なくモンスターは湧いてくる——どころかむしろ増えているような気もしてくる。

「直上ですー!」

エリスが警告してきた。

天井の穴から飛び出してきたワーム型のモンスターがレベツカに襲いかかるが、寸前で頭を撃ち抜かれて消えていく。

エリスとシビルが天井からの敵に対処しているため、ほかのメンバーは水平方向の敵に集中できる。

見事なチームワークを披露するヘステイカセブンの4人だったが、彼女たちがいても

なお、敵はあまりにも多く、強大だった。

「うわっ！おい、そっち任せてただろ！」

「仕方ねえだろ！多過ぎてこっちも捌ききれねえよ！」

一方で、退路を切り開くアルヴィンたちはチームワークで遠く及ばなかった。



威力偵察を切り上げて地下6階入り口まで撤退してきた一行は盛大にため息をついた。

「何なのあそこ——」

レベツカが両脚を投げ出してアーマーを脱いだ。

「あんなところに挑んだ君たちは本当に勇敢だよ」

シビルが皮肉を言う。

「やっぱり駄目でしたか——」

アルヴィンは落ち込む。

期待していたのにまた失敗した。

「ヘステイカセブンのメンバーが4人いてもこれって、やっぱりこっちのルートは難し

すぎるな」

ホーレスが呟いた。

「稼ぎがいいって聞いたからここに来たけど——これじゃかえって損してるんじゃない」

弱音を漏らした仲間の一人「キース・フォウ・ローバー」にクラークが嘯み付いた。

「はあ？俺のせいだって言いたいのかよ」

「いや、そんなことは——」

「言ってるのと同じじゃねえかよ！」

言い争いを始めるキースとクラーク。

「やめろよ！お前ら！」

アルヴィンは仲裁に入る。

「俺たちがここに来るのを選んだんだ。そのためにメルセデス先輩たちも呼んだ。ここで引き下がったらそれこそ今までの苦勞がふいになるだろ！」

だが、そのアルヴィンの言葉を上から目線だと思つたのか、キースは言い返してくる。「そう言つて一体何発の弾を使つて、いくら金を掛けるんだ？今までの稼ぎは殆ど弾代と武器代と、治療費で溶けたじゃないかよ！仮にここから先に進めたとして？掛かった金と、抱え込んだ借金全部賄えるだけの稼ぎができる保証なんかどこにあるんだよ！」

「んだとてめえ！」

喧嘩が勃発しかけた時、アルヴィンとクラーク、そしてキースは強い力で引き離される。

尻餅をついた3人は頭に思い切り水をぶっ掛けられた。

やったのはメルセデスとレベッカとエリス。

「な、何するんですか！」

ずぶ濡れになり、アルヴィンは思わず食ってかかる。

「内輪揉めに頭と体力使うとか馬鹿だろ。頭冷やせよ」

メルセデスが先ほどまでとは打って変わった底冷えのするような低い声で言った。

「アンタたちはこのダンジョンを攻略して、お宝を見つけて稼ぎたいと思った。そうでしょ？ 動機が借金返済のためだったとしても。なのに、なんでみんなで知恵出し合うなり、チームワークを改善するなりしようとしなないわけ？ お互いに責任を転嫁し合って、仲間内で言い争って——そんなんじゃないや私らがいても絶対にダンジョン攻略なんてできないよ」

メルセデスの説教が始まり、アルヴィンたちは言い返せずに俯いてしまう。

その様子を見ているレベッカとエリス、そしてシビルは失笑すら起こさずに背景に徹していた。それほどに怒ったメルセデスの迫力は凄まじかった。



数十分後。

メルセデスの説教は終わり、アルヴィンたちは別ルートの探索に向かう。

王都のダンジョンと違い、崩落防止用の板や柱はなく、剥き出しの岩肌から鋭い金属結晶が無数に突き出た歩きにくい通路だ。

とはいえモンスターは出ず、比較的安全なルートではあるようだ。

何事もなく大広間のような部屋に到着する。

「ここで少し休もうか。クラーク君、見取り図を」

「あ、はい！」

メルセデスとクラークは見取り図を出して位置の確認を始め、アルヴィンたちは一息つく。

ホーレスは大広間を歩き回っている。

「おいホーレス、ここには何も無いぞ？」

アルヴィンは言ったが、ホーレスは折れない。

「隠し宝箱とかあるかもしれないだろ？」

こうなつたホーレスは誰が止めても意見を曲げない。アルヴィンは止めるのを諦める。

ホーレスはランタンを掲げて広間の隅々まで見て回っていたが、不意に足を止めた。「あつたぞ！ 宝箱だ！」

「何！ 本当か！」

宝箱と聞いてアルヴィンたちは一斉に立ち上がり、ホーレスの下に駆け寄る。やや遅れてエリスもやって来た。

宝箱は石の棺のような形をしていた。大の大人が2人ほどは入れそうな大きさだ。

「どうやって開けるんだこれ？」

「これが蓋、だよな？」

「ちよつと待つて。トラップとかないか調べないと」

すぐに開ける方法を考え出すアルヴィンたちに対して、エリスは宝箱を検分し始める。

「見たところそういうのはなさそうだけど？」

ホーレスが疑問をぶつけるが、エリスは真剣だった。

「馬鹿だね。本物のトラップはそれと見て分かるようなもんじゃないよ」

エリスは宝箱から目を逸らさずに言い放ち――

「取り敢えず大丈夫そうだね。鍵もないみたいだし、蓋を横の方に押せば開くと思うよ」
エリスからゴーサインが出た。

アルヴィンとホーレスの2人が息を合わせて蓋を押す。

中にあつたのは――

「これって――剣だよな?」

「変わった形だけど――」

アルヴィンたちは口々に疑問を口にする。

それくらい、宝箱の中身は奇怪な姿をしていた。

櫛のような深い凹凸が等間隔に並んだ峰に、鑿のみのような切先を持つ肉厚の片刃剣。

およそアルヴィンたちが知る「剣」とはかけ離れた見た目である。

「あー、これってソードブレイカーだね」

エリスが正体を看破した。

「それってどういう?」

ホーレスの疑問にエリスが得意げに答える。

「銃が発達する前に使われてた武器だよ。剣で戦うときに、相手の剣をここの凹凸に噛ませて押し折るんだ。膂力と技量が要るけど、この大きさなら今の騎士剣だって――」

エリスの解説に一同が気を取られたその時だ。

いきなりソードブレイカーが振り上げられたかと思うと、ホーレス目掛けて斬りつけたのだ。

完全に反応できなかったホーレスは袈裟斬りにされて悲鳴を上げた。

「うああああああああああ!!」

鮮血が迸る。

「離れて!」

エリスが叫び、アルヴィンたちは咄嗟に後ずさる。

ホーレスから宝箱に視線を移したアルヴィンは目を疑った。

宝箱から伸びた蛸のような触手がソードブレイカーを振り回しているのだ。

「しまった! ミミックか!」

エリスが臍を嘔む。

(ミミック?)

聞いたこともないモンスターだ。

宝箱からさらに多数の触手が伸びてホーレスの足首に巻き付いた。

そのまま触手は箱の方にホーレスを引きずり始める。

「この野郎!」

アルヴィンは剣を抜き、触手に斬りかかった。

「よせー」

エリスの制止も聞かずにアルヴィンは振り下ろされてきたソードブレイカーを躲し、ホーレスを引きずり込もうとする触手に剣を振り下ろす。

しかし、触手は信じられない素早さでアルヴィンの剣をソードブレイカーで絡め取り、あっさりと押し折ってしまった。

(はっ!?)

折れた剣を見て唾然とするアルヴィンをエリスがタツクルで突き飛ばした。

一瞬前までアルヴィンがいた場所にソードブレイカーが振り下ろされる。

「ソードブレイカー相手にそんな剣効くかよ！馬鹿なのか!?馬鹿だろお前！」

エリスがまくし立てるが、アルヴィンの耳には半分も入ってこない。

触手が地面にめり込んだソードブレイカーを引き抜き、アルヴィンとエリス目掛けて振り下ろしてくる。

アルヴィンは思わず目を瞑った。

しかし、ソードブレイカーはアルヴィンに届く直前で甲高い金属音を発して止まった。

目を開けると、ソードブレイカーは見覚えのある剣によって防がれていた。

「早く離れて！」

メルセデスが剣を傾けてソードブレイカーをいなし、地面に激突させて隙を作る。アルヴィンは慌ててその場から離れた。

「ミミックなんて珍しいわね」

レベッカがハチエツトを手にメルセデスに並んだ。

「うん——しかもあんな武器振り回す奴なんて初めて見るよ」

メルセデスは触手を睨みつける。

触手の方はホーレスを放し、メルセデスとレベッカの方を向いて臨戦態勢を取っている。

「銃は効きそうにありませんね。やはり接近戦しか——」

シビルが宝箱を見て言った。

メルセデスとレベッカは一瞬目配せすると——

「はああッ！」

メルセデスが触手に斬りかかった。

触手はメルセデスの剣もソードブレイカーで絡め取ったが、肉厚の剣は折れなかった。

メルセデスは自分の剣ごとソードブレイカーを地面に叩きつけて上から踏みつける。

その機を逃さず、レベッカがソードブレイカーを持つ触手を切断した。

ぎあああああ、と耳障りな悲鳴が宝箱から上がる。

残った触手がレベツカに襲いかかり、ハチエツトを奪おうとするが、今度はメルセデスがそれらを剣で斬り払った。

形勢不利と見たのか、触手は箱に引っ込んで蓋を閉じようとするが、シビルがライフのストックを差し込んで阻止した。

間髪入れずにエリスが手榴弾を取り出すと、安全ピンを引き抜き、箱の中に投げ込む。シビルがストックを引き抜いた直後、箱の中で手榴弾が爆発し、蓋が上に吹っ飛んだ。中のミミックは爆発で死んだらしく、黒い煙が箱の中から上がる。

「ホーレス！おい！しっかりしろ！」

アルヴィンたちの方は倒れたホーレスに駆け寄っていた。

かつてないほどの重傷にオロオロする。

「ホーレスが！血が！早く手当てしないと！」

「どいて！」

レベツカがホーレスの装備を剥ぎ取り、診断する。

「これは酷い怪我ね。とりあえず血を止めるけど、早く医者に診せないと」

レベツカが応急処置を始めたが――

「待つてください。入り口付近、感知魔法に感ありです」

エリスが接近してくる敵の存在を看破した。

「ゴブリンです。さっきのホーレス君の悲鳴を聞きつけて来たようです。数40以上」

「——入り口付近か。逃げるのは無理そうだね」

メルセデスが顎に手を当てて考える仕草をするが、アルヴィンやクラークたちは大慌てである。

「迎撃しないと。ホーレスを守るんです！」

アルヴィンたちは銃を手に取ってホーレスを囲もうとしたが、メルセデスはそれを止める。

「落ち着きなよ。わざわざ接近してくるのを待つまでもない。ここならむしろ向かって行った方がいい。レベッカ、エリス、シビル。【壊衝波】で行くよ！」

メルセデスの指示に3人の女子は頷き、素早くフォーメーションを組んだ。

レベッカ以外の全員が銃を手にする。

「私らはゴブリンをやる。君たちは手当てをしていて」

メルセデスが言い終わるや否や、奥からゴブリンの大群が現れる。

「よし、かかろう」

4人は横1列でゴブリン目掛けて走り出した。

不意にゴブリンたちが立ち止まり、矢の雨を浴びせて来た。

しかし、その矢は全てレベツカが展開したシールドに弾かれる。

お返しとメルセデス、エリス、シビルが発砲し、次々にゴブリンを倒していく。

「ストップ！」

メルセデスの指示で4人はピタツと止まり、防御円陣を組む。

エリスが眼に魔法陣を浮かべてゴブリンたちを観測する。

「45、仰角47です！」

「45、仰角47——」

メルセデスがエリスの報告を復唱しつつ卵型の手榴弾を投擲する。

放物線を描いて飛んでいった手榴弾がゴブリンの群れの直上に到達した瞬間——シビルが手榴弾を狙撃し、空中で炸裂させた。

魔法で爆発の威力を強化した破片手榴弾が破滅的な破片の雨を降らせ、ゴブリンを大量に殲滅する。

メルセデスたちは少し前進し、再び止まる。

「25、仰角17です」

「25、仰角17——」

メルセデスが2発目の手榴弾を投擲する。

ゴブリンたちが足元に転がったそれを拾い上げる前にシビルが撃ち抜き、再びゴブリ

ンを吹き飛ばす。

不意にシールドに赤い光弾が直撃する。

「^{術者}シヤーマンだ！ 散開！」

メルセデスが指示を飛ばし、レベツカがシールドを解除すると、4人はバラけて各個にゴブリンの残党に突撃する。

術者のゴブリンが再び魔法攻撃を放とうとするが、メルセデスが素早く懐に飛び込んで剣で貫いた。

もう1体の術者ゴブリンはメルセデスを攻撃しようとするが——
「よそ見しないでくださいませー！」

レベツカに剣で貫かれ、そのまま体当たりを受けて壁に叩きつけられる。

——戦いは終わった。

40体はいたはずのゴブリンの群れは全て黒い煙に変わっている。

「これが私らのやり方だよ」

メルセデスが兜を脱いで髪を掻き上げる。

「す、すごいんです?！」

アルヴィンは驚愕がおさまらない。

それはほかの仲間も同じだった。

一体どうやったたらった4人で10倍の敵を屠るなんてことが可能になるのだろうか？

そして——自分たちは彼女たちの足を引っ張ってばかりいるという無力感と屈辱感が湧いてくる。

「さあ、誰か、ホーレス君を担いで！ さっさと撤退するよ」

メルセデスは手を打ってアルヴィンたちを急かす。

アルヴィンとクラークが慌ててホーレスを担ぐと、メルセデスたちが四方を固める。

一行は速やかにダンジョンを入り口まで引き返したのだった。

夏涼み

「暑いよお——べとべとするよお——」

作業着に身を包んだジエナが泣き言を漏らす。

脅されてのこととはいえ、俺を爆殺しようとしておいて畑仕事で許されるのだから泣いて感謝して然るべきであるのに、この体たらくである。

「俺たちが小さい頃から毎日やってたことだけ？」

嫌味をひとつ、ぶつけてやる。

俺たちが陽射しに焼かれながら汗水垂らして働いてる間、コイツは涼しい部屋で過ごしていたばかりか、畑仕事から帰った俺たちを労いもせず、汗臭いなどと小馬鹿にしてくるのである。

何度それで喧嘩になったか分からず、13歳を越えたあたりから面倒臭くて放置していた。

「はあ!? そんなの男なんだから当たり前じゃない! 働いて女を養うのが男の役目でしょ!」

(——腐ってやがる)

やっぱりこの世界の貴族の女は害悪でしかないな。

例外はアンジェエくらいなものだ。

こうなつたら少し脅してやろう。

「そうか。ならお前の分のスイカはなしにするからな。働かざる者食うべからずつてのが俺のルールなんだ」

するとジエナは急に手を動かし始めた。

「わ、分かつたわよ」

効果覲面である。

やりたくもない畑仕事をやらされて仕事終わりのスイカも食べられないのは堪えるらしい。

その程度で堪えるとか、今まで蔑まれながら働き続けた俺からすれば噴飯ものだが。

ちなみにこの世界には元々スイカはなかった——似たようなものはあったが、赤くなくて甘さが足りなかった——のだが、ルクシオンが用意した。

どうやって用意したのかは難しすぎて分からなかったが、重要なのは夏に甘いスイカが食べられることだ。

そしてその甘いスイカは俺の領地でしか栽培していないので、全て俺の所有物である。

つまり——俺の機嫌を損ねれば食べられない。

うーん、この甘味をちらつかせて相手を屈服させる感覚——癖になりそうだ。

学園に戻ったらお茶会で高級店のお菓子を使つてやつてみるのも良いかもね。

ダイエツトしてる女子の前に高級なお菓子を並べてその面を見て嗤つてやるとか。

——そもそもお茶会に女子が来ないから無理だけどね。



2ヶ月ほど前。

夏休みが近づき、うだるような暑さが続いていた頃。

「やつぱり夏はスイカと花火だよなあ！」

『いきなり何を言い出すのですか？ ストレスで発狂しましたか？』

ルクシオンが辛辣だ。

でも元とはいえ日本人からすればスイカと花火がない夏なんて暑苦しいだけではないか？

ちなみにこの世界には魔法を使ったエアコンのようなものがあり、冷暖房が使える。

だが、そうじゃないのだ。

そんな文明の利器で涼しくなるのは身体だけで、心まで涼むには甘いスイカのシャリシャリ感と瑞々しさと、華やかな花火の楽しさと侘寂的な美しさが必要なのだ。

ちなみにスイカは三角にカットしたやつを外の風に当たりながら齧るのが鉄板で、花火は混雑した花火大会などではなく、庭先でやる手持ち花火が望ましい。

注文が多いと感じるだろうが、俺はそれを渴望しているのだ。

スイカは手で持って齧るから美味しさが引き立つのだし、花火大会は割に合わない疲れが出る。

「領地に植えたスイカは収穫できそうか？」

『お待ちを——はい。現在20玉ほどが順調に生育中です』

20玉か。結構な数だな。

「1人じゃ食べ切れないな。実家に持って行くか。将来的には輸出して荒稼ぎするのも良いかな」

『商魂逞しいようですね。ですが、長くは続きませんよ』

「え、なんでさ？」

『種を取れば誰でも栽培できますからね。ノウハウがなくとも総当たりで試せばすぐに正解に辿り着くでしょう。この国に農作物の品種に関する特許制度はありませんので取り締まりもできませんね』

夢を潰すリアルに心が沈む。

というかその問題、種苗法改正前世でもあつたように思うのだが。

とまれ、この世界はそんなモブの小さな反逆など押し潰してしまうようだ。

だったら尚更傷ついた心を癒すためにスイカと花火が必要だ。

「ルクシオン、手持ち花火を作ってくれ」

キリツとした顔でルクシオンに頼むと呆れたように皮肉を言われる。

『生成される元素を任意に選択可能な核融合炉を持つ私に命じて作らせるのがたかだか火薬と発色剤とは——その無欲さに敬意を表しますよ』



夕方。

暑さが和らぎ始め、無数のトンボが蚊を喰いながら飛び回っている。

畑仕事を終えた俺たちは屋敷の庭に置かれたテーブルと椅子に集まってスイカを食べながらくつろいでいた。

「んんっ！美味しい！」

シャワーを浴びてきたらしいジエナが濡れた髪のままスイカにかぶりつく。

コイツの仕事量は俺たちの半分にも満たないのに次から次へとバクバク食べていく。全くもって凶々しい。

それに比べて次兄ときたら——

「仕事終わりに食うから余計に美味しいな」

良いこと言うじゃないか！

働いて食うものだから美味しいというのは同意だ。

確かに元の味付けも重要だが、疲れて空腹なら粗末な食事でも美味しく感じられるものである。

「今日は何だか一際良い音ですね」

リビアが目を閉じて耳を澄ませている。

そよ風に乗って聞こえてくる澄んだ音色は屋敷の窓に吊り下げておいた風鈴だ。

風鈴の音の良さが分かるとはリビアはなかなか良い感覚をお持ちのようである。

「リオン、煙が出なくなっているぞ」

アンジェが足元を差して指摘した。

足元には大口を開けた豚の置き物——蚊遣りが置いてあり、鬱陶しい害虫を追い払って来ていたが、見ると確かに煙が出ていない。

拾い上げて覗き込むと中身が燃え尽きていた。

テーブルの下から新しい蚊取り線香を取り出し、蚊遣りの中にぶら下げてマッチで火を着ける。

細い煙が上がり始めた。

蚊取り線香を焚いて、風鈴の音を聴きながらスイカを齧る。

「これこそ夏！つて感じがする。」

「さあて、お楽しみの花火タイムだ！」

テーブルに大量の手持ち花火をぶちまけて俺は言った。

「これが花火なのか？どうやって打ち上げるんだ？」

アンジェが顔に疑問符を浮かべている。

「違うんです。打ち上げ花火じゃないんです。」

「えっと——手で持つんですか？爆竹は手で持つと危ないですよ？」

「違うぞりビア。爆竹じゃないから。」

「ていうか打ち上げ花火も爆竹もあるのになんで玩具花火がないんだよこの世界は。」

「こーやるんだよ」

蠟燭に火を灯し、花火を一本持って先端を火で炙る。

すぐに火が着き、シューツと音を立てて鮮やかな火花が飛び散る。

「わあ！凄いい！」

コリンがはしゃいでいる。

「だろ？ほら、やってみ？」

「うん！」

コリンが真つ先に花火を手を取って蠟燭にかざす。

すぐに花火が火を噴き出した。

「わああ！」

コリンが元気に花火を持って走り出す。

火花がコリンの後ろに尾を引くかのように飛び散っては消えていく。

これだ。これなのだ。

パツと光つて闇を鮮やかに彩ったかと思えば消えていくこの儚さがあるからこそ、花火に心惹かれるのだ。

だがおそらく俺のこの日本人的な感覚はこの世界では理解されないだろう。

いつの間にか庭にいた全員が花火を手にしていった。

コリンはニックス相手に花火を振り回して遊んでいる。

「くらえ！インパクト！」

「うおおお！やめろおおお！」

——アロガンツの真似か？

覚えの良さが垣間見えて何よりだが、距離には気を付けるよう言っておくべきだろう。

「——馬鹿みたい」

フィンリーがそんなコリンを見て呟いていたが、自分は花火を二刀流で持っていた。片つぼが燃え尽きるとすぐに新しいのを手に取って貫い火を繰り返している。

そのせいでフィンリーの花火の消費速度はコリンより速い。

素直にはしゃげば良いのに女子つてのは素直じゃないな。

「頑張れ頑張れ！」

「負けるな！気合を見せろ！」

リビアとアンジェは線香花火で勝負をしていた。

どっちの火玉が長く落ちずに持ち堪えるかの勝負だ。

こっちは見えていてほっこりするな。

「あつ、落ちちやいました」

「今度は私の勝ちだな」

「でも本当に綺麗ですよ。この、線香花火つて」

「ああ。——リオンのお陰だな。こんな楽しいことができるのは」

「あ、リオンさんも一緒にやりませんか？」

嗚呼麗しき約束の地よ！

だがそこにいる天使——いや、女神に俺は手が届かない。

花火はいつの間にか綺麗さっぱりなくなっていた。

——楽しかった。

今年の夏は今世で一番楽しいかもしれない。

あとはこのまま問題なく爵位返上して学園を退学できればハッピーエンドなのだが——未だ音沙汰がないのは少々不安である。

◇◇◇

深夜。

『夏はスイカに花火に風鈴に蚊取り線香——マスターは注文が多いですね』

寝息を立てる主人を見下ろしてルクシオンは呟く。

『ですが——フェイクは全て見破られていますね。人間の感性の分野は専門ではありませんが、あの時の言葉や表情に嘘は見受けられませんでした』

ルクシオンは度々記録にあるものとは違うものを用意してリオンに見せていたが、ここごとく違和感を指摘された。

それも演技している風でもなく、心からそう思っているような口調で。

『審査期間は1年ほどを予定していましたが——予定よりも早く済みそうですね』

到底信じ難いが、このリオンという男は旧文明時代の日本をよく知っていることが証明されている。

ルクシオンは主人の上から離れながら一言、呟く。

『実に面白い』

スライス・オブ・スクールライフⅡ
ダンジョンライフ

「いるな。ゴレムだ。数、大体30体か」

ルクシオンが用意した暗視ゴーグルはダンジョンのような暗い閉鎖空間でも昼間と対して変わらないくらいに見える優れものだ。

おまけにリーダーのようなものまで積んでるらしく、岩肌の影や横穴に潜む相手も発見可能だった。

だが同行者たちには暗視用の魔装具としか言っていない。

「おいリオン、さすがに多くないか？ここは一旦退いて——」

レイモンドが弱気な発言をするが俺に退却する気はない。

だってリビアが見てるから。

自分に期待している女の子にカッコいいところを見せて、「すごい」と言われたいのには男のサガというもの。

「心配ねえよ。30秒でカタを付けてくるから。お前らはリビアを守りながらついてきてくれ」

俺はライフルを構え、ダニエルとレイモンドにリビアを任せる。

「あの、リオンさん、無理はしないで下さいね？」

心配してくれるとはリビアは優しいな。

「ああー！」

俺は元氣よく返事をして走り出す。

視線でゴーグルを操作し、ストツプウオッチをスタートさせた。

視界の右上に表示された数字が時を刻み始める。



「もつと金がいるー！」

ダニエルがそう叫んだのがきつかけだった。

神社で大金を投じて良縁を願い、帰り途にファンオース公国の艦隊とモンスターの大量に襲われ、抵抗ひとつせずにアンジェを人質に差し出した臆病で卑怯な似非貴族の糞ガキどもを煽り立てて戦いに参加させ、そのゴミ屑どもの予想以上の奮闘もあってパルトナーの到着まで持ち堪え、公国の艦隊を破り、最強の敵黒騎士と戦い、辛くも勝利を収めて全員で生還した波乱万丈の修学旅行が終わり、学園での日常が戻ってきた頃。

俺の部屋で男同士の集まりで飲み食いしていた時にお茶会に関する愚痴が出てきたのだ。

お茶会というものはとにかく金がかかる。

部屋を借り、内装やレイアウトを整え、食器と茶器を揃え、高級な茶葉を買い、有名な店にお菓子を特注で作らせ——前世で言うなら新品のバイクが1台買えるくらいの額がたった1度のお茶会で吹っ飛ぶ。

そんな風に手間と時間と金をかけてお茶会を開き、女子に招待状を送っても無視されることの方が多い。

来たとしても最初のお茶会みたく、時間潰しとして勝手気ままに飲み食いされたり、ケチをつけられたり——やりきれない話だ。

だがお茶会は開かないという選択肢がない。

お茶会も開けないような男だと噂されたらそれこそ今より婚活が難しくなる。

結局のところ男子はお茶会で金を使いまくるのを避けられない。

「王都のダンジョンは安全だけど魔石とか金属くらいしか産出しないもんね」

レイモンドが憂鬱な顔で言う。

「くそ、もつと稼ぎのいいダンジョンに行きたい！」

「郊外のダンジョンは希少な魔石が産出するって聞いたけどね——」

「ならそこに行かないか!? お前も首が回らないって言ってたじゃないか!」

「でもそのダンジョン、ケイブドラゴンとかサラマンダーが出る高難度ダンジョンだよ? 僕らじゃまだ無理じゃないか?」

ダニエルとレイモンドが郊外の高難度ダンジョンに行くかどうかで議論している。

「なありオン、お前ここのところしよつちゆうダンジョンに行つてるよな? 一緒に郊外のダンジョンに行つてくれないか?」

ダニエルが俺に協力を依頼してきた。

だが俺としては別に郊外のダンジョンに挑む理由がない。

「そうだけどき、わざわざ郊外に行かなくてもいいだろ? 王都のダンジョンだって深くまで行けばけっこう儲けになるとこあるんだぞ? この前リビアと——」

つい口が滑った。

「儲けになる所があるのか? しかもお前、オリヴィアさんと2人占めしてるってことかよ!」

「僕たちにもその場所教えてくれないかな? 僕たちもお金が必要なんだよ」

ダニエルとレイモンドが獲物を見つけた狼みたいな目をしている。

まあ、いいか。1人や2人よりは4人の方がもつと奥まで進めるし。

ルクシオンはアロガンツやパルトナーの整備にかかりきりでサポートは期待できな

いし。

その週末、俺はリビアとダニエル、レイモンドを加えた4人でダンジョンへと潜った。



「そこにいるのはわかってるぜ！」

岩陰に潜んでいた1体の不意打ちをかわし、発光する心臓めがけてライフルを撃ち込む。

ゴーレムは砂のように崩れ、黒い煙になって消える。

それを見た他のゴーレムが呻き声のような音を発しながら俺を追いかけてくる。

俺はリビアたちからゴーレムの群れを引き離すため、奥の下り坂になった通路へと走る。

ゴーレムは目を赤く光らせて俺を追う。

かなり速い。追いついてくる。

「怒ってるなあ。まあだだぜッ！」

追いついてくるほど速いなら、逆に前に押し出してやればいい。

俺は素早く岩陰の横穴に飛び込んで身を潜める。

先頭のゴーレムたちは俺を見失ってうろろし始める。

そこに後続のゴーレムたちがぶつかってドミノ倒しのようにバタバタ倒れていく。

「もういいよつと。そして死ね！」

倒れたゴーレムたちに手榴弾を2つ投げつけ、一気に吹き飛ばす。

間髪入れずにライフルを構え、爆発で倒せなかったゴーレムを撃ち抜く。

スピンコックアクションで次弾を素早く装填し、次々に倒していく。

うーん、爽快だ。

レバーアクションライフルでのスピンコックって憧れあったんだよね。

今まで実行に移したことはなかったけど。

だが俺は修学旅行帰りに黒騎士と交戦し、負けそうになって以来、鍛錬を兼ねてかなり本気で練習した。

黒騎士との戦いで俺に絶望的に足りてなかったのは対集団戦の技術——反応速度、状況判断、処理速度、どれを取っても俺は未熟で凡庸だった。

今まではアロガンツという絶対的な優位に立てる機体の性能がそれを補って余りあつたが、黒騎士を相手にして分かった。いくらアロガンツの性能が良くてもそれだけでは勝てない相手がいるのだと。

白状しよう。俺はアロガンツの性能にあぐらをかいて慢心し、鍛錬を怠っていた。

ヘルトルーデは捕らえて、魔笛も手中に収めたが、やはり不安は拭えない。

ヘルトルーデや、黒騎士の爺さんや、公国の兵士の言動から察するに、王国を相当憎んでいるようだったし、公国が戦争をやめる保証はない。

だから、もしまた公国が仕掛けて来ても、対応できるように備えはしておくべきだろう。

またあの爺さんのような強敵が現れないとも限らないし、俺もレベルアップしておかなければ。

「あいつ、マジかよ——」

「すごいな——」

ダニエルとレイモンドはリオンの戦いぶりに舌を巻いていた。

ゴーレムは心臓以外ならどこが傷ついてもすぐに再生する凄まじい生命力と、常に群れで行動する習性を併せ持ち、集団で獲物を追い込んで殺しにかかる厄介なモンスターだ。

それをリオンは一人で相手取り、しかも翻弄している。

「右です！」

不意にオリヴィアが叫ぶ。

横穴からゴーレムが3体、出てきた。

「任せろ！」

レイモンドがライフルで1体を撃ち抜く。

すり抜けた残り2体が襲いかかるが、ダニエルが銃剣で1体の心臓を突き刺し、オリヴィアがもう1体に魔法攻撃を命中させた。

3体のゴーレムは崩れて黒い煙になって消える。

「痛っ！」

崩れる直前のゴーレムに最後の足掻きとばかりに殴られたダニエルが悲鳴を上げる。

「大丈夫ですか!？」

オリヴィアが駆け寄る。

「大丈夫。ただの打ち身だよ。ありがとね」

ダニエルはすぐに立ち上がる。

「急ごう。リオンに置いてかれる」

遠のいていく銃声を追って3人は走る。

「これで最後ッ！」

飛びかかってきたゴーレムを華麗に避けて蹴つ飛ばし、壁に激突させて後ろから心臓を撃ち抜く。

いや、最後じゃなかったな。背後にまだもう1体いるのが音で分かった。

振り向きざまにライフルのストックでゴーレムの頭を殴りつけて転倒させる。

ゴーレムは仰向けに倒れ込み、突き出た金属の結晶が体に突き刺さって動けなくなる。

何の苦もなく心臓を撃ち抜く。

ストツプウオツチを止める。

「36. 2秒か。まだまだだな」

またタイムアタック失敗だ。

「おい！リオン！ちよつと待ってくれ！」

ダニエルたちが追いついてきた。

俺は来た道に戻って彼らと合流する。



「すごいな——」

「うん。こんなの見たことないよ」

「綺麗ですね」

たどり着いた場所は無数の魔石が星のように光る大広間だった。

所々に六角柱型の金属の結晶も突き出ている。

「俺が見つけたんだ。取り放題だぜ」

「よーし！掘るぞー！」

「負けるか！」

ダニエルとレイモンドが先を争ってスコップを取り出し、魔石を掘り出していく。

リビアも小型のツルハシで一所懸命魔石を掘り出そうとする。

頑張ってる女子っていじらしくて可愛いと思う。

「一緒にやろう？」

俺がスコップを持って手伝いを申し出るとリビアは明るく笑う。

「はいー」

嗚呼守りたい、この笑顔。

「重いな——」

「耐えるんだよ。金の重みだと思って——」

背囊一杯に魔石を詰め込んでダンジョンの出口を目指す俺たち。

つい調子に乗って集めすぎたせいでもものすごく重い。たぶん40キロくらいあると思う。

鍛えているとはいえ、背負って歩き続けるにはつらい重さだ。

だが、これは相当な儲けになるはずだ。

「なあレイモンド、お前この儲けで何買う？」

「そうだね、差し当たり新しいティーセットかな」

「茶葉とかも見ときたいよな。この前まずいとか言われて帰られたし」

「お菓子もだね。もっと高いのじゃないと喜ばないよとかアドバイスみたいに言われても困るよ本当に」

何を買うかの話からいつの間にか愚痴を言い始めるダニエルとレイモンド。

お前ら——同意すぎて泣けてくる。

コイツらにはリビアやアンジエのようにコンスタントに来る女子もいないのだ。

その点、俺は恵まれているのだろう。

相変わらず結婚相手は見つからないけど。

「立ち入り禁止？」

ダニエルが立ち入り禁止の看板を見つけた。

(ここだったのか！)

俺にとっては見覚えがある。

この先に縦穴があつて、それを降りていった先で“聖なる腕輪”が手に入るのだ。早いとこ回収したいと思っていたのだが、今まで見つけれないでいた。

もう少し鍛えてからまた探しに来るとしよう。ルクシオンがない今の俺ではおそらく腕輪まで辿り着けない。

ゴーグルを操作して座標だけ記録する。

腕輪が既にマリエによって持ち去られていたと俺が知るはこの数ヶ月ほど後のことである。



「乾杯ー！」

大衆向けの居酒屋的な店で祝杯をあげる。

持ち帰った高純度魔石はかなりの額で売れた。といってもお茶会3回ほどでなくなるだろうけどね。

ちよつと気の毒だったので祝杯の分は奢ってやることにした。

「いやーありがとな。リオン」

「気前良いのはリオンの数少ない美点だよね」

「おいレイモンド、それ以上はよせよ。あいつ機嫌損ねたら奢るのやめるぜ？」

「おいおい、嫌味のひとつやふたつで俺が機嫌損ねるわけないだろ？」

伊達に口の悪い皮肉屋の人工知能と普段からやり合っただけではない。

「それより今日は食おうぜ！」

体を動かした後はたっぷり食って体力づくり。

「体動かした後はご飯が美味しいですね」

リビアがステーキを美味しそうに食べている。既に4枚目だ。

リビアアッてけっこう大食いなんだな。

ダンジョンに潜ってモンスターと戦って、重い戦利品をひいこら言いながら持ち帰り、ギルドで換金して、居酒屋で祝杯をあげる。

異世界らしい日常——ダンジョンライフとも呼ぼうか。

それが俺は嫌いじゃない。

だから俺はこう言うのだ。

「また行こうぜ」

その言葉にダニエルとレイモンド、そしてリビアも答える。

「おう！」

「ああ」

「はい！」

この日常は大事にしよう。

そして願わくば、この日常を過ごした仲間に幸あらんことを。

王子様の憂鬱

遺伝子レベルで美男美女の集まりである貴族たちの間でさえも異性獲得競争は存在する。

否、美男美女の集まりだからこそ、その競争はより激しくなる。

望むレベルが高くなるのは当然として、「見栄の張り合い」もまた原因のひとつである。

貴族たちは——現れ方こそ様々だが——誇り高い。それに加えて子供の頃から家のメンツというものを背負っている。

ステータスを競い、使えるものはなんでも使ってマウントを取り合う水面下の泥仕合が常に行なわれている。異性ですらもそのための道具として利用するほどだ。

学園で上級クラスの女子生徒の大半が専属使用人を連れ回し、田舎の領主貴族出身の男子生徒が女子生徒にほとんど見向きもされない、その理由のひとつがこのような事情だった。

とある領主貴族出身の、仮とはいえ爵位持ちの男子生徒は、このことを知って「くつだらね——」と呆れていたが、そう思っているのは彼だけではなかった。

学園で女子生徒にもてはやされるのは、何もイケメンあるいは金持ちの男子生徒だけに限ったことではない。

日々美貌の裏で見栄を張り合う学園の女子生徒たちとて、本質的には思春期の女子。暇で多感で即物的である。

当然、スポーツや勉強、オシヤレ、などという生ぬるいもので満たされるわけもなく、多くは朝から晩までエロいことを考えている。

それは日々エロい妄想を働かせている思春期男子とそんなには変わらない。

否——機械的な刺激でもコトが済む男子より女子の方がずっと変態的である。

どこそこへの刺激で快感がどうのと言うことより、恋だ愛だの妄想や、キャーキャーしたファンダム精神や、泣いたり怒ったりする少女漫画的な行動の方の比重が高い。

男子と違って簡単に欲求を消化できない分、周囲を巻き込み、面倒臭いことになる。それでも学園は男女共学である。

比較的まともと言われる普通クラス——騎士家や準男爵家出身の女子生徒たちとの行動はそこまで異様ではない。

同学年の男子と結婚を意識した交際をするか、お気に入り先輩にキャーキャー騒ぎ立てる、そんな感じだ。

対して、普通クラスより格段に激しい見栄の張り合い・マウント合戦が渦巻く上級クラスの女子生徒たちがその思春期をどう解決するのかというところ。

きちんと現実と将来を見据えて、お茶会やら、学園祭やら、課外活動やらで男子生徒と向き合う、現実的かつ行動力のある女子生徒たちもいるにはいるが極めて少数派である。

多数派は美形の専属使用人を購入して性欲に走る女子。

妊娠の心配がなく、何でも言うことを聞く自分好みの奴隷——そんな理想的な存在が容認されている状況で、購入するなど言う方が少々無理のある話である。

他には文学やアイドル的存在の美形男子生徒に群がり、貴族社会のドライな現実をドラマチックに補完する妄想力に長けたタイプの女子もいる。

時には腐の趣味に走って倒錯した性欲に走る女子もいる。彼女らのオカズや妄想ストーリーの題材は——とある男子生徒が腐のスパイラルと表現した現象によって——意外に身近に、それも毎年のように存在しているのである。

そして意外に毎年多く存在しているのが、なんとなく「かつこいい」という形容詞が似合う女子を生贄にして王子様に見立て、それに恋してキャーキャー騒いで妄想して、貢物を押しつ——ゲフンゲフン、捧げて崇め奉るといふ擬似性愛に勤しんでいる女子たちである。



ある年の上級クラスには一部の女子たちから「王子様」と呼ばれる女子生徒がいた。彼女の名は「ロイス・フォウ・シエフィールド」。シエフィールド伯爵家の末娘である。ホルファート王国貴族には珍しい女当主を母に持ったロイスは中性的な容姿と天賦の運動センスを持った才媛だった。

そんな彼女にはある悩みがあった。

「恋がしたい!!」

もはやストーカーの領域に入っている親衛隊から逃れてやっと自室で一人になったロイスは思わず叫んだ。

ロイスは貴族令嬢にしては珍しく、恋愛結婚をしたいと考えていた。心の底から好きになれる人に愛されて相思相愛で結ばれたい、と。

だが、もう3年生になるのにロイスには婚約者どころか、アプローチしてくる男子すらいない。

理由はいくつかあるが、そのひとつが親衛隊である。

ロイスに接近しようとする男子を殺人鬼のような形相で睨みつけて追い返したこと

は1度や2度ではない。

それに負けずにロイスにお茶会の招待状を渡したり、デートに誘ったりした男子がいた日には、政敵を陥れるかの如く相手のアラを探してロイスに吹き込み、なければ——として自発的に身を引いていただく。

そんなことを繰り返している彼女らはロイスの幸せなどよりも、自分たちの理想が詰まった偶像を守ることを大事にする、独善的かつ自己中心的な者たちだ。

だがロイスの方にも全く過ちがないかというところでもない。

こんな末期的な状態になるまで止めようとしなかった———というか、今もしていないロイスは間違いなく親衛隊の暴走を助長させた犯人である。

正直言つて親衛隊の存在は鬱陶しいのだが、今更彼女らを止める手立ては見つからない。

結局ロイスはまだ見ぬ好きな人を想像してため息を吐くしかないのだ。

「(一)機嫌が悪いので？」

専属使用人のダフネスが声をかけてくる。

彼女はロイスが私費で購入したエルフの専属使用人である。口数が少なく、クールな性格だが勘が鋭く、的を射た発言が多い。ついでに空気を読まない。

好き嫌いの分かれるタイプだが、ロイスはこの使用人を気に入っており、相談相手に

するほどだった。

「恋がしたい——」

机に突つ伏して繰り言を垂れる。

「そもそもロイス様、女子としての振る舞い方すら分かつておられないのでは？」

早速心に突き刺さる皮肉を放ってくるダフネス。

だが言い返せない。

実家や寄子の家には年の近い男がいなかったし、学園では入学して間もない頃から王子様扱いで男子との接し方が分からない。

それに容姿のせいもある。線が太い凛々しい顔立ちで、スポーツの時邪魔になるという理由で髪は短く、体は肩幅が広くて筋肉質で出ているところがないに等しい寸胴体型、そして下手な男子よりも身長が高い。

要は女性らしい要素がかなり少ないのだ。

当然下心のある無しに関わらず、アプローチしようとする男子の絶対数が少ない。

そうしてますます男子と接する機会が減り、交際ができない。負のスパイラルに陥っているのがロイスである。

どうすれば女として認められて、男子から本気で求められる？

「女らしくなったら何か変わるのかな？」

「変わりますとも。なんだかんだ言つて男性は記号に惹きつけられます。長くて綺麗な髪ですとか、柔らかそうな唇ですとか、大きくて丸みのある形の良い胸やお尻ですとか——そのどれも今のロイス様にはありませんが」

いちいちのはつきり言つてくる使用人である。

だがロイスは本気で嫌ではない。問題を解決する第一歩は認識することだと分かっているから。

「と、取り敢えず髪、伸ばしてみようかな」

「それとバストアップも推奨します。効果のある食材を食事にお入れしましょうか?」

「ええ——そうね。そうして頂戴」



数ヶ月後。

「カッコいい——」

ロイスは初めて恋焦がれた。

「お前らに流れる貴族の——冒険者の血は偽物か!? 公国にいいように弄ばれ、死ぬのを待つだけの情けない死に方が望みか!」

先程まで自分を含めた学園生たちを口汚く罵り、今は櫂を飛ばす後輩の男子生徒は、物語の騎士のように優雅で気品に溢れてなどいなかったが、それでもこの場にいる誰よりも誇り高く、勇敢に思えたのだ。

彼の言葉で公国の軍勢に怯えるばかりだった自分が恥ずかしくなり、甲板で他の学園生たちと共に襲い来るモンスターの大群と戦い抜いた。

だが、ロイスが恐怖を拭い去れないまま、男子や専属使用人に囲まれて遠距離からの攻撃魔法で戦っていた時、彼はエアバイクで単身敵旗艦に突撃し、捕らえられていた公爵令嬢のアンジェリカを見事救出していた。

さらには敵の旗印たるヘルトルーデ王女を捕らえ、所有するロストアイテムの飛行船で豪華客船に乗っていた全員を救出した。

さらにさらに戦いの後、公国の新型飛行船や鎧も多数鹵獲して王国に献上。所有権を主張できるにも関わらず、それをしなかった彼は「滅私奉公」を体現していた。

冬休み初日、ロイスたちに勲章が授与された。

後輩の彼は特段功績大なりとして四位下の子爵に出世を果たしていた。

六位上の男爵から四位下の子爵に1代で出世するなど前例がない。

ロイスには彼が途方もない大人物に思え——是非ともお近づきになりたい、お付き合いしたい、そして彼さえよければ結婚したいと思つた。



3学期。

「それでね、まずはお茶会に誘ってもらうのが良いかと思うのだけど——」
「でしたらなぜ2学期中にやらなかったのですか？」

「そ、それは——子爵になるなんて知らなかったから——」

ロイスは件の子爵に昇進した後輩男子に手紙を出そうとして悶々としていた。
そんなロイスに対してダフネスは相変わらずクールで辛辣である。

「今更出しても地位や財産目当てに媚を売ってくる者の一人としか思われないでしょうね。事実子爵の居室には手紙が山ほど届いているようです」

「わ、私はただ身分が釣り合わないから、出しても迷惑にしかならないんじゃないかと
思って遠慮してただけなのに！」

事実である。男爵である彼は伯爵家出身の自分とはどう足掻いても結婚できない、ならば自分のために彼の貴重な時間を割かせるのは気の毒だ——そう思って今まで何もしてこなかったのだ。

「——今頃は媚を売ってくる女子生徒たちに辟易しているでしょうね。それに、彼の周

囲には有力貴族の令嬢が複数います。彼に推薦状を出したアトリー家のクラリス様、ローズブレイド家のデアドリー様、そして以前から彼の後ろ盾となつてゐるレッドグレイブ家のアンジェリカ様——ロイス様が入り込んで彼を手に入れられる可能性は極めて低いと考えます」

嗚呼、恠い焦がれる相手と結婚できる可能性が出てきたというのに、強敵と障害はあまりに多い。

「で、でもそれで諦めたくなんかない！」

珍しく駄々をこねるロイスにダフネスは一つ献策する。

「でしたらいつそロイス様が子爵をお茶会にお誘いしてはいかがですか？」

「その手があった！」

天啓を得たかのように跳ね起きるロイスにダフネスは若干呆れるのだった。

「——むしろ今まで考えつかなかったのですか？」



「手の平返しもここまで来ると清々しいな」

リオンは手紙の山を前に思わず漏らした。

どれもこれも上から目線な内容で10通も開けないうちに読む気が失せた。

いつの間に俺はツ○ツターの裏垢女子になったのだ？否、裏垢女子の方がまだマシかもしれない。ここまで酷い内容のリップやDMなんてそうは貰わなかっただろうし。

なんだよ。王都に使用人数十人規模の屋敷を用意して愛人たちの面倒も見ろとか。

相手の立場に立って物事を考える能力ってのがないのか？——いや、学園の女子に期待した俺が悪いか。

しばし「愛とは？」という哲学的な思考に走って現実逃避したりオンは届いた手紙の山をゴミ箱に放り込むのだった。

ポストウオー・デイズ

古い友人

政治犯を収容する王宮の地下牢。

そこに捕らえられていたのは「マルコム・フォウ・フランプトン」侯爵。——否、元侯爵である。

彼は反逆罪、及び外患誘致罪で逮捕され、裁判で死刑判決を受けた。

そして今、地下牢で処刑の時を待っている。

瞳には生気がなく、化粧をしていない顔は肌荒れが目立つ。

身体の上を虫が這う。

それを払いのけることすら、彼はしようとしなない。

不意に扉が開き、看守と共に一人の男がやってきた。

看守が扉を閉め、鉄格子を隔てて男はマルコムと向かい合う。

「こうしてサシで話すのは何年ぶりだろうな」

見知った声にマルコムの目に微かに生気が戻る。

「——ヴィンスか。私を嗤いに来たのか？」

つい先月まで政争に明け暮れていた敵対派閥の主、「ヴィンス・ラファ・レッドグレイブ」——彼は未開封のボトルをマルコムに見せる。

「二杯付き合わんか？ お前の好物だったろう？」

ボトルの中身はマルコムが愛飲していた銘柄の酒のようだ。

（——毒入りか？ いや、杯が2つある——よそう。考えても意味はないな）

マルコムは答えることなく身体を起こす。

ヴィンスが栓抜きを使うと、木製の栓がポンツ！と勢いよく飛んでいった。

すかさず金属製の杯に発泡酒を注ぐヴィンス。

杯を受け取ったマルコムは中身を一口飲む。

辛さの中に柑橘系の爽やかさとほんのりとした甘さ——愛した味が口の中に広がる。

「——美味しいな」

マルコムは呟いた。

目に久しぶりに生気が宿り、夢中で杯の中身を飲み干すマルコム。

ヴィンスも杯の中身を一口引つ掛けていたが、すぐに杯を置いてボトルを手に取り、空になったマルコムの杯に再び発泡酒を注いだ。

「——お前と最初に会ったのは確か6歳の時だったな」

ヴィンスが懐かしげに呟いた。

マルコムは記憶を探り、目の前の男との初対面の場面を探す。

「そうだったな。あの時からだ。あの時から——私はお前のが嫌いだった」



パーティーが嫌いだった。

ちやほやされる者と、それを羨望と嫉妬の眼差しで見るとの残酷な隔たりを見せつけられるから。

——否、自分が後者だったからである。

寄ってくる者は侯爵家の跡取りという地位に惹かれて集まってくる下卑た者共ばかり。

一方で純粋に素敵な異性として見られてちやほやされる——簡単に言えばモテる——者がいた。

「——レッドグレイブ」

憎らしく、そして羨ましい相手の名を呟く。

彼——ヴィンス・ラファ・レッドグレイブのことがマルコムは大嫌いだった。

生まれ持った美貌のみならず、しよつちゆう冒険者として旅に出たりダンジョンに挑

んだりし、その冒険話で周囲を大いに賑わせるため、彼の周りには常に大勢の女性がい
た。

それこそマルコムが彼と初めて会ったパーティーでも年上の貴族令嬢たちに群がら
れて可愛がられていたし、長じるに連れて精悍になっていくと益々彼の周りに集まる女
性は多くなつた。

彼女たちの目は実に綺麗で、打算抜き純粋な好意がありありと見て取れた。

それがマルコムにはどうしようもなく苦痛だつた。

そしてそんなヴィンスが自分のことをマルコムと名前で呼び、親交を持つてくるのが
煩わしかつた。

彼の分け隔てない接し方を見ていると、自分の存在の矮小さを教えられているような
気になるからだつた。

学園に入つてもそれは変わらなかつた。

この頃にはマルコムには家同士で決められた婚約者がいたし、ヴィンスもそれは同じ
だつたが、マルコムの心中で燻っていた嫉妬心は消えるどころかさらに大きくなつてい
た。

学園はマルコムたち大貴族にとって、将来有益となる知己を得る場でもあつたため、
お茶会を開いたり、学期末に開かれるパーティーに出たりして積極的に交流を図るのだ

が——ここでもヴィンスとの差を見せつけられるのだ。

もちろん大貴族故の宿命として権勢のおこぼれに与ろうと擦り寄ってくる者が多いのは同じだったが——打算抜きの好意を向けられるのはヴィンスの方だけだった。

目を見れば、声を注意深く聞けば分かった。

自分に笑顔を向けてくる女子の目はよく見るとチラチラと別の方向に動いていた。

自分の身に着けている服飾品や、お茶会に使われている食器のブランド——皆自分の後ろにあるものしか見ていなかった。

調子の良いことを言つて煽ててくる声も、よく聞くと用意した場所や物、それを用意できる家の力を褒め称えるものばかりで、マルコム自身のことは聞こえてこない。

——誰も自分自身を見てくれない。

それはまだいい。貴族なんてそんなものだとか小さい頃から知っている。

でも、ヴィンスを見るとその諦観が揺らぐのだ。

ヴィンスに見惚れ、彼の冒険話に瞳を輝かせて聞き入る女子たちの視線はまっすぐヴィンスの顔に向いていた。

——そうか。お前らそんな目ができるんだな。

——そんな風に心の奥底から笑えるんだな。

——そんなに綺麗で純粹になれるんだな。

ヴィンスに対して上げられる黄色い声はヴィンス自身の魅力に対する反応だった。益々磨きがかかった美貌と話術——どちらもマルコムにはない。

——奴が憎い。

——憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い。

——奴を見つめる女子たちも嫌いだ。

——あの美貌に見惚れて、恋する澄んだ綺麗な目が嫌いだ。

——気持ち悪い。

——燻る嫉妬心と擦り寄ってくる者たちへの嫌悪感を隠して生きていくのが辛い。色々と努力もした。

——身分の低い地方領主貴族の子弟がやるように女子の気を惹くためにらしくもなく身体を鍛えたり、頻繁にお茶会を開いたり、プレゼントを渡したりもした。

——そしてその全てが逆効果だった。

——女子たちはどこまでもマルコムを「都合の良い人間」としか見なさなかった。

——それに反比例するかのようにヴィンスのことは益々「魅力的な男性」として見ていた。女子の陰口を偶然聞いてそのことを知った時——心が折れた。

——それ以降「無駄な努力」をやめた。

——どうせ頑張っても奴のようにはなれないのだ。

もう期待しない。どうだつていい。

最初から自分の人生はこんなものなのだ。

地方領主貴族の真似事なんてして、本当に滑稽だよな。

気を惹こうと必死で媚びる必要なんて本来ないのに。あいつらは苦勞に苦勞を重ねて「妥協してくれる」人間しか得られないが、俺はあいつらと違って苦勞しなくても人は寄つてくるのだ。

それもこちらが媚びた末に相手が妥協するのではなく、向こうが媚びてくる。

それでいいだろう。

何を必死こいて奴と張り合おうとしていたのだろうか。

そうして自分を納得させようとして——できなかつた。

愛をくれよ。

愛してくれよ。

お世辞や媚びを売る言葉では癒されなかつた。

今日も満たされない渴きに苦しみ、明日もまた飢えに喘ぎ、それでも生きる。



「時は来たー！」

国王陛下の声がホールに響き渡る。

大勢の貴族や騎士が整列するホールで、これから戦いに赴く者たちに訓示を垂れているのだ。

「我々は今こそ卑劣なるファンオース公国の侵略によつて無念のうちに散つた幾多の戦士たち、そして殺戮された無辜の民たちの仇を討つ！そして長きに渡つて続いた血塗られた戦の時代に終止符を打つのだ！我らと奴らの先祖が残した遺恨の連鎖という負の遺産を、我らの子や孫に引き継がせることは許されない！諸侯たちよ、命捨てども勝つは今ぞ！」

自らも軍服に身を包み、サーベルを掲げて檄を飛ばす国王陛下に貴族や騎士たちが歓声で応える。

ファンオース公国とそれに呼応した周辺国との戦争が四年目に突入して多くの犠牲が出ているにも関わらず、彼らの士気は高かった。

長きに渡つて苦しめられてきたラーシエル神聖王国方面の戦闘が終結する目処が立ち、二正面戦闘から解放されて、いよいよ本腰を入れてファンオース公国に対処できるからだ。

これでは公国だけ。公国さえ叩き潰せば戦争は終わる。

誰もがやがて訪れるであろう平和の時代への希望を抱きつつ、最後の戦いに向けて気を奮い立たせていた。

それに今回の戦いには心強い助っ人も参戦するのだ。

若くして【剣聖】の称号を持つ麒麟児、【ウイリス・ファイア・アークライト】を筆頭に、ラーシエル神聖王国方面に引き抜かれていた強者たちがファンオース公国方面に合流する。

正規軍からも歴戦の部隊が抽出される予定だ。

彼らに加われれば、一進一退の攻防が続く公国との戦いも王国側有利に傾くだろう、とこの場にいるほぼ全員が確信している。

「私は国の全てを預かる身故王宮に留まらなければならぬが——心は常に諸侯らと共にある。共にこの戦いを終わらせ、未来を創ろうではないか！ 諸侯らの健闘に期待する」

国王陛下が演説を締め括ると、一斉に貴族たちが敬礼する。

（とんだ茶番だ）

マルコムは内心吐き捨てる。

（こういう時だけは都合良く仲間意識を煽り立てる）

ともすれば野心を持つて暴れ回り、王国に牙を剥きかねない危険な地方領主たちを軍事力による庇護及び脅迫という餌と鞭でどうにか束ねているのがホルファート王国の

実情だ。

支配者側の王国からすれば貴族たちなど端から信用できない者たちであり、いずれは無くすべき煩わしい存在——その【密教】を教えられたのは学園を卒業してすぐだった。

それを知った時、胸中にあつたのは恐怖ではなく、解放感だった。

奴らはいずれ消えゆく泡沫の如きちっぽけな存在だったのだ、自分はどうしてそんな奴らの機嫌一つに一喜一憂していたのだ？と。

ただ——上とはこうも寒い所なのかと思つたことは記憶に残っている。



「あ、悪魔だ——」

誰かがそう呟いた。

窓の外では無数の鎧が激戦を繰り広げている。

その戦場の中で一際目立っているのは公国の紋章が描かれた黒い鎧。

その手には漆黒の大剣が握られ、それが振り回される度に味方機が破壊されていく。手練れが挑もうが、数で囲もうが、射程外から弾の雨を浴びせようが、意味はない。

まるで戦場の全てが見えているかのようにあらゆる攻撃を躲し、予想だにしていな

かった所を潜り、それでいて彼方の攻撃は必ず当たり、確実に命を刈り取っていく。不意に黒い鎧の動きが止まった。

見ると空色に塗られた鎧が白銀の大剣を手に黒い鎧に斬りかかっていた。

その肩部にはアークライト家の紋章が描かれている。

二つの鎧のぶつかり合いに思わずマルコムは見入った。

「劍聖——一騎打ちする気か」

負けた。

劍聖は負けた。

王国も負けた。

双方共に膨大な戦力をすり減らして、結局戦いは王国軍の撤退という形で幕を下ろすことになった。

単純な軍事力だけなら王国軍が勝っていて、実際多くの犠牲を出しつつもじわじわと公国軍を追い込んでいた。

しかし、王国軍はいきなり背後から公国軍の別働隊と彼らが引き連れてきたモンスターの大群に襲われたのだ。

高速艦で揃えた公国軍別働隊と彼らを餌食にしようと追ってきた無数のモンスター

により、後方にいた輸送船団とその護衛艦隊が壊滅し、補給を断られた王国軍は撤退せざるを得なくなつた。

そして襲いかかってくる無数のモンスターを必死に駆逐しながら逃げる王国軍に公国軍本隊が追撃をかけてきて、モンスターを交えた三つ巴の乱戦になつた。

王国・公国双方の多くの軍人がモンスターの餌食になつているにも関わらず、両軍に共闘という選択肢はなかつた。

補給と共に正規軍の司令部までやられた王国軍は指揮系統が殆ど麻痺してしまい、部隊ごとバラバラになつて戦いながら逃げるしかないという最悪の状態だつた。

「駄目です！ 囲まれています！」

「後続艦より援護要請！ 艦内にモンスターが侵入した模様です！」

「直ちに鎧の援護を！」

「駄目だ！ 見捨てろ！ 犠牲が増えるだけだ！」

「しかし！ あの艦には——」

マルコムの乗艦のブリッジも騒がしかった。

これが初陣のマルコムには部下の騎士たちの論戦に口を挟むことはできなかつた。ただ箔付けのために参加した何もできないお飾りの大将——それがマルコムだ。

恐怖で回らない頭を必死に回して考えても、答えは出ない。

そうこうしているうちにマルコムに乗艦にもモンスタールが群がり始めた。

（くそっ！こうなつては致し方ない。俺は今ここで死ぬわけには——）

マルコムが命令を下そうとした時、通信機から力強い声が響いた。

『諦めるのは早い！』

次の瞬間、周囲のモンスタールが吹き飛んだ。

見ると後続艦に群がっていたモンスタールも次々に駆逐されている。

『こちらにはレッドグレイブ公爵家のヴィンス・ラファ・レッドグレイブ！我が旗を目にしている王国軍各艦に告ぐ！誘導する！我に続け！』

見ると周囲にはレッドグレイブ家の紋章が描かれた鎧が飛んでいた。

その鎧が合図した先にはホルファート王国の旗とレッドグレイブ家の旗を掲げた艦隊が見える。

周囲を多数の小型艦と鎧で固め、旗艦を守ること指揮系統を維持し、周囲の味方の撤退を援護しているのだ。

「ヴィンス——お前——」

マルコムが呟いたかと思えば、艦長がレッドグレイブ艦隊の後を追うよう指示し、マルコムに乗艦はゆっくりと向きを変えていく。

他にも多くの飛行船が集まってきていた。

『離れるな！一塊となり、敵を突破するのだ！』

力強く味方を鼓舞し、導くヴィンスの姿は視認できなかったが——視えていたならきっと輝いて見えたに違いなかった。



——負けた。

マルコムはまたしてもそう思い知らされた。

戦争という功を立てる絶好の機会で自分は部下に任せて戦況を眺めるか、恐怖しているばかりで何も為せず、一方でヴィンスは多くの味方を救った勇氣ある行動を讃えられて勲章を貰っていた。

十数年来の劣等感がぶり返してくる。

もしまた戦いに参加する機会があれば、奴よりももつとすごい功績を上げてやるのに。

——そうだ。戦いとは何も戦争だけではないではないか。

それ以来、権力争いでヴィンスを下すことを夢見るようになった。



いつの間にかボトルは空になっていた。

「長かったな——お互いに」

「——ああ。本当に——ままならんものだな」

ヴィンスの眩きにマルコムは力なく眩きを返す。

最後にこれを美味しいと思ったのはいつだろうか。

きつと十年以上も前だ。

この味を知った頃はこれを飲むのが楽しみだった。

それがいつしか、何かから逃避するために、気を紛らわせるために飲むことが多くなった。

そして——今ではこんなに美味かったのか、いつの間はこの味を忘れていたのかと驚いている。ヴィンスに追いつき、追い越そうと必死でいつしか好きな味さえ忘れてしまっていたらしい。

皮肉なことにあれだけ妬み、疎み、憎んだヴィンスが覚えていたというのに。

もし——つまらない劣等感や見栄に縛られずに、ヴィンスと良き友人になれていたなら、このように飲みに付き合う機会ももう少しはあっただろうか。

もう戻れない頃に思いを馳せる。

いつの間にかおそろしくつまらない大人の世界にどっぷりと浸かってしまっていた。切っ掛けは子供染みた嫉妬と羨望だったのに、それを糧に積み上げてきたものがいつの間にか他人や自分の命よりも大事になった。

権力を追い求めたのは自分を見て欲しいからだだったのに、いつの間にか権力を握ること自体が目的になった。

そして陰鬱な政争に明け暮れ、心の隅で失脚や暗殺の恐怖に怯えながら日々を過ごした。

その結果がこの破滅だ。

——運命の神は残酷だとマルコムは思う。

もし自分とヴェインスの立場が逆だったならば、自分は生涯心を縛りつける嫉妬を抱くこともなく、全く別の——ずっと良い生涯を送れただろうに。

そこまで考えてマルコムはふっと笑う。

人の魂は生まれた時は透明な水と同じで、生まれ持った容姿、生まれ育った場所によつて色付いていくのか——あるいは元々色が付いていて生まれの如何に関わらず、決してなれない色があるのか。

確かめようはないが、面白い命題だとマルコムは思う。

自分がヴィンスの立場に生まれていたとして、自分はヴィンスと同じく成功していただろうか。あるいはヴィンスよりも上手くやっていただろうか。

扉が開き、看守と武装した騎士たちが地下牢に下りてきた。

どうやらお迎えが来たらしい。

手錠をかけられ、牢から出される。

「マルコム」

ヴィンスの呼びかけにマルコムは立ち止まり、振り返る。

騎士たちは止めなかった。

これがヴィンスが自分に発する最後の言葉になる、そう悟ってマルコムは言葉を待つ。

「——輪廻の果報のあらんことを」

ヴィンスが古い友人に対する同情と哀しみを含んだ表情で言った。

「——ああ」

マルコムは小さく笑った。

「——達者でな」

そう言つてマルコムは再び歩き出す。

クラリスルート（旧）

連休

「貴方は捻くれてるけど優しいのね」

今にして思えばクラリス先輩がこの台詞を発した時、彼女は既に俺のことが気になっていたのかもしれない。



学園祭最終日。

その時の俺は保身のためにクラリス先輩の元婚約者「ジルク・ファイア・マーモリア」——事もあろうにマリエという転生者の女に夢中になってクラリス先輩との婚約を手紙ひとつで一方的になかったことにしやがった挙句、彼女の恨みを買ってエアバイクレースでボコボコにされた男——の代理人としてエアバイクレースに出るといふ損な役回りを演じていた。

そしてレースで——それと喫茶店を馬鹿共に荒らされたのと、「カーラ・フォウ・ウエ

イン」がリビアを通して俺に空賊討伐を依頼してきたのも付け加えておく——散々な目に遭つて得たものは賭けで儲けた家が建ちそうな大金——という虚しさしかない有様。

無能な働き者が勝手な判断で余計なことに首を突っ込んでしつべ返しを受けたと言えよそれまでだが、俺はその当時まだ男爵。しかも王太子ユリウス殿下を決闘でボコボコにした挙句、説教まで垂れるという、下手しなくても極刑モノの暴拳をやらかした後で、アンジエの実家が後ろ盾になつてくれなければ命が危うい状況だった。

ジルクの代役が用意できなければ学年の代表たるアンジエの評価が下がる、という話を聞いて、「俺が出なければアンジエパパを怒らせてしまう、そうなったら俺が死ぬ」と考えた当時の俺を諍る気にはなれない。

ルクシオンはそんな俺をモブとは程遠い「立派な取り巻き」と揶揄してたけど。

——まあそんなこんなで学園祭が終わつた後の俺はブルーな気分だった。

おまけに俺がエアバイクレースで酷い目に遭つている間にリビアとアンジエの関係に亀裂が入つてしまつていて、そつちの対処も面倒だった。



リビアには辛い思いをさせるだろうとは思つたが、俺は彼女に詳しい話を聞いた。

俺がエアバイクレースに出ている最中にあの腹立たしい「フェリシア・フォウ・オフリー」なる伯爵令嬢——亜人奴隷を引き連れて俺の喫茶店を荒らしてくれた挙句、王妃であるミレーヌ様を「おばさん」だの「婆」だのと呼びやがった糞女——がアンジェに喧嘩を売ったらしい。

おまけに1度ならず2度までも止めに入ったりリビアに「平民風情が」などという言葉をつつけ、「アンジェが取り巻きに裏切られたことで平民であるリビアにすり寄った」などと吹聴しやがったんだとか。

アンジェはそれに反論できなかつたらしい。

まあ、無理もないか。公爵令嬢ともなれば俺の実家のように普段から平民と接する機会なんてないだろうし。

以前のアンジェが平民のことなど気にも留めていなかったと言われても俺は驚かない。

でもリビアは——そうじゃない。

「なあ、リビア。——しばらく休まないか？」

俺は悲しげな顔をするリビアを放っておけなかった。

「え？ 休むって——学園祭が終わったら連休ですよね？」

リビアが至極真つ当な返答をしてくる。

「休むってというのは——少し、学園を離れるって意味だよ。リビアにはしばらく学園を離れる時間が必要。俺にはそう思えるけどな」

さつきリビアはアンジェともう一度話をしてみると言っていたが、そのアンジェは今学園にいない。

フェリシア嬢と派手な取っ組み合いを演じて実家に呼び出されたらしい。

多分連休が終わるまで帰ってこないだろう。

ちなみにフェリシア嬢はルクシオンに調べさせたところ学園にいる。

となると、フェリシア嬢がアンジェのいない隙を突いてリビアに嫌がらせを行う可能性が高い。

俺への嫌がらせに失敗したらそれを逆恨みしてアンジェにぶつけるような女だ。次はリビアを狙うことは十分あり得る。

できればすぐにでも家ごと消してやりたいが——オフリー伯爵家は空賊と組んで悪事を働いているにも関わらず、王国に見逃されている。

つまり、王国の中でも実力のある誰かが庇っている。下手に関われば面倒になる。

それとゲーム的な理由もあって、中盤——学園2年生時——の重要イベントに関わる、というのがあがるが、このイベントは既に起きている。

カーラが俺に空賊討伐を依頼してきたのがそれだ。

既にゲームシナリオから大幅に外れている中で、これ以上予想がつかなくなるような下手な真似はできない。

となると——リビアの安全のためには彼女にしばらく学園を離れてもらうしかない。アンジェがいらない以上、俺がついていても限度がある。

俺は男子で女子寮には入れないのだから。

「リビア、今回の件で分かっただろ？この学園には普段見えないだけで悪意が渦巻いている。アンジェが学園にいない今はリビアにとつて危険なんだよ。アンジェが戻るまでは学園を離れてた方がいい」

俺はリビアを説得する。

「でも私は——」

逃げたくありません、とでも言おうとしたのだろうか？

でも結局リビアはその先を口にしなかった。

リビアはその日のうちに簡単に荷物をまとめて故郷に帰っていった。

「帰省だと思えばいいよ。夏休みだって帰ってなかっただろ？」

俺はそう言って港までリビアを送って行き、定期船の切符を買ってあげた。

リビアは連休中図書館で勉強するつもりだったらしいが、俺は少々強引に押し切った。

帰って来る日には港に迎えに行く約束して俺はリビアと別れた。
さてと——空賊討伐依頼の方を片付けないな。



空賊——ウイングシャークとかいうモンスターみたいな名前だった——の討伐はす
ぐに終わった。

攻略対象のうちの2人、「ブラッド・フォウ・フィールド」と「グレッグ・フォウ・セ
バーグ」という予想外の助っ人もあったが、全く有り難くはない。むしろ邪魔だ。

だから船賃代わりにイカサマトランプで金を巻き上げて役に立つてもらった。

金ヅルの役にしか立たないとは、空賊討伐が聞いて呆れるな。

実際、最初に空賊と接敵した時、2人は何をするのかすら分からずにいた。

これだから料がるだけのボンボンは！

まあそれはさて置き。

最初に現れた一団をあつさり蹴散らしてウエイン領に着いてみたら、いきなり銃を
向けられて囲まれたので、俺たちは話が違くと抗議した。

カーラが助けを求めてきたから来たのに銃を向けてくるとは何事か！つてね。

そしたらカーラの親父さんが娘を庇って誤魔化そうとしてきたので、ちよつと脅しをかけたら、カーラは洗いざらい白状してくれた。

フェリシア嬢の仕業だった。俺たちを騙して空賊に襲わせる算段だったらしい。

やってくれるじゃないか。

リビアを帰省させておいて正解だった。計画ではリビアも空賊討伐に巻き込んで、万の時は責任を押し付けることにしていたらしい。

というか、今回の俺、超ファインプレーじゃないか？

『単なる偶然をこれ幸いと自分の手腕と捉えるとは、感心ですね。さすがはマスターです』

ルクシオンは相変わらず辛辣だった。

翌日。

残る空賊本隊を討伐するか、2年生の半ばまで放置するか迷っていた俺は向こうから攻めてこられて討伐を決断した。

さすがに本隊とだけあって数が多く、おまけに頭と思しき奴がアロガンツと同じくらい大きなパワータイプの鎧に乗っていたので、少しばかり苦戦したが、勝利できた。

不本意ながらも空賊から奪った鎧に乗せて戦闘に参加させたブラッドとグレッグも思いの外、よくやってくれた。ちよつと見直したよ。

俺たちは分捕り品の飛行船と鎧、そして空賊が溜め込んでいた宝を手に入れたが、俺の目的は別の物だ。

空賊の頭が持っていた【聖なる首飾り】。これをリビアにどうやって渡そうか。

誕生日プレゼント？　そういえばリビアの誕生日っていつだ？　もう過ぎてたらこの手は使えない。

クリスマスプレゼント？　それもダメだ。この世界にクリスマスはない。

攻略対象の誰か——例えばブラッドかグレッグをリビアとくつつけて渡させるか？

——難しいだろうな。あいつらはマリエに夢中だし。

結局俺があいつらの役割を代行しなきゃいけないってことかよ。

それもこれもあのマリエが逆ハーレムなんか作ってリビアのポジションを奪うからだ！

本当に何なんだあの女は！

悶々としていたら、オフリー伯爵家の艦隊が迫ってきてまた小競り合いになった。

どうやら空賊と繋がっていた証拠を取り返そうと追ってきたらしい。

俺は逃げることにした。

目的のものは手に入れたのだ。これ以上の戦闘は無用と判断した。

どうせ押収した証拠を王宮に突き出せばオフリー伯爵家は潰される。俺が手を汚す

までもない。

パルトナーの機動力は優秀だった。

空賊から分捕った財宝やら鎧やらを貨物室に詰め込み、大小の飛行船を7隻も引つ張りながら、オフリー艦隊を振り切ったのだ。

向こうは鎧を出してきたが、俺とブラッド、グレッグの3人で撃退した。

◇◇◇

報告書を書いて押収した証拠と一緒に王宮に提出し、手に入れた飛行船と鎧はスクラップパーギルドに高値で売り飛ばし、捕らえた空賊はジェナがアプローチしていた男子の実家に鋳夫として売り渡した。

目的のものは手に入れ、おまけにだいぶ儲かった。

学園に戻ってきたリビアは久しぶりに家族と過ごせて嬉しかったのか、だいぶ元気になつていた。

アンジエとも仲直りできたらしい。

よかったよかった。

——ここまでがいい。

「どうしてこうなったああああ!!」

俺はまたも意に反した出世をってしまった。

「くそっ! やっぱりあいっら俺のこと嫌いだろ!」

存外ともに戦ってくれた上に、意外に努力家で色々考えてるのだと分かったブラッドとグレッグを元の地位に戻そうと考えたのが間違이었다。

俺としては廃嫡によって果たすのが難しくなったゲーム上の役割——すなわち、リアの相手を2人のどちらかに果たさせることを狙ってやったのだが。

俺は「空賊退治に加え、ブラッド、グレッグ両名の実家との復縁に貢献——」なる理由で六位上の宮廷階位が五位下にながってしまった。

攻略対象の代役から降りたいと思ってわざわざあいっらの廃嫡を取り消させる工作をやったというのに!

出世するだなんて望んだ結果と真逆じゃないか!

『まさか昇進するとは思いませんでした。マスターは私の予想の斜め上に行くのが得意ですね』

ルクシオンが昇進を告げる書状を読んでも言う。

「得意ってなんだよ! あの流れでなんで昇進になるんだよ!」
憤慨する俺にさらなる追撃がかかった。

「バルトフアルト男爵、お手紙と贈り物が届いております」

男子寮の女性職員が緊張した様子で俺に頭を下げる。

職員の案内で外に出てみたらそこにあつたのは——豪華な大型エアバイクだった。

エアバイクと手紙の差出人はアトリー家。クラリス先輩の実家だった。

手紙には学園祭での一件の謝罪とクラリス先輩が元気になったこと、そして——

「う、嘘だろおい——」

俺は力が抜けて膝をつく。

『五位下から五位上への昇進は卒業までお待ち下さい』

手紙の最後にはそう書いてあつた。

嗚呼、夢にまで見た領地でのんびり引きこもり生活が手の平から零れ落ちていく。

「そうだ。旅に出よう。知らない国へ冒険の旅に出る」

現実逃避する俺にルクシオンは容赦なく現実を突きつける。

『明日から授業なので無理です』

「あーそうでしたそうでしたねえ！ちつくしよおおおお!!」

思わず窓を開けて抱えてる想いをひたすらに叫んだ俺はそれをリビアとアンジェに

見られたのだった。



「全く——気が狂ったのかと思つたぞ」

アンジエがドン引きした目で俺に言う。

うう、穴があつたら入りたい。

つてか、いつそ誰か俺を殺してくれ！

「ああああああ!!もうこんな世界嫌だあああ!こんな人生嫌だあああ!来世は日本で平穩無事なモブライフを送らせてくれえええええ!!」

俺のこの叫びは通りがかりのリビアとアンジエにバツチり聞かれていた。

くそ。よりもよつてこの2人に聞かれるとは!

不覚だ。一生の不覚だ!

『後先考えずに衝動的に行動し、激情をほとばしらせた結果、しつぺ返しを食らう。いつものマスターですね。抱腹絶倒もののギャグ体質です』

人の不幸を嘲笑うとか、底意地悪すぎだろこの人工知能!誰に似やがった!?

「えつと、リオンさん、偉くなつて嬉しくないんですか?」

リビア、やめてくれ。俺に何を期待しているんだ。

俺はただの引きこもりたいモブだぞ。

「偉くなればその分負担も増えるんだよ。俺にはそんな負担背負えないよー」

この2人の前ではこんな愚痴言いたくはなかったのだがバレてしまったのは仕方ない。

この際、少し俺から距離を取ってもらおう。

今までこの2人と親しくし過ぎた。

どう足掻いたってリビアは平民で将来は聖女様、アンジエは公爵令嬢で俺と結ばれることは決してない。

俺は俺の身の丈にあつた相手を早く見つけなければならぬ。

——憂鬱な婚活がまた始まる。

次のお茶会には誰を招待しようかな——。

俺は洗いざらい白状した。

本気で出世したくないこと、高度な政治判断など抜きにして俺が出世しないために功績を押し付けたこと、学園を卒業したら貯めた銭コアで領地に引きこもつてのんびり暮らしたいと思つてること——そして出世すると余計に婚活やら貢献やら何やらがキツくなることへの愚痴。

出来るだけ情けないヤツに見えるよう演技したつもりだった。

今まで俺に抱いてきたであろう幻想を全部ぶち壊す気で。

「リオン——」

アンジェが何か言おうとする。

あまりダメージのない言葉だといいいけど。

「ありがとう」

ん？聞き間違いか？

「え？あり——がとう？えつ？」

予想外の答えに狼狽する俺に苦笑しつつもアンジェは優しい表情で言った。

「決闘の時、代理人に名乗り出てくれてありがとう。——私と一緒にいてくれてありがとう。あの時間は——楽しかったぞ」

——やめてくれよ。未練が残っちまうだろうが。

「だから——お前はもう1人で我慢するな。自分の望みに正直に生きろ。望まない出世をすることも、余裕がないまま私たちと時間を過ごすことも——負担になるといいうならやめていいんだ」

——なんでだよ。

なんで前世も含めれば40年近くも生きてる俺が15歳の女の子に諭されてるんだよ。

「わ、私も、リオンさんといられてよかったです！あの時——最初にお茶会に誘ってくれ

た時、すごく嬉しくて、ほっとしたんです」

リビアの純粹な声が刺さる。

「私には何も無いのに、純粹な厚意で助けてくれて、お金もかかるのにお茶会に招いてくれて、私には何もお返しができなくて、それでもリオンさんは笑顔でした。だから私、リオンさんにはずっと笑って欲しいんです」

——なんだよ。なんで2人とも、そんなに俺に優しいんだよ。

俺は泣いた。

モブに厳しいこの世界でこんなに優しくされたのは初めてで、あんな情けない振る舞いを見せても軽蔑の目を向けてこなかった2人が尊すぎて——

そしてそんな2人と結ばれないのが悲しくて、悔しくて、泣いた。

お茶会

『結局マスターは何もしないのですね』

ルクシオンが言う。

『家族がどうの、世間体がどうの、ゲーム世界がどうのと言いつつ、自分の幸福実現のための努力を怠り、口先だけの不平不満ばかり垂れ流す。そのくせそれを解消するために抗議や抵抗などの行動に出ることもない。驚くべき主体性の無さですね。学園に入学して以来マスターの幸福度は下降の一途を辿っています。今後上昇に転じる可能性は極めて低いでしょう』

俺は幸せになれない。そう言われている。

「言ってくれるよな。前世でも同じようなこと言われたわ」

思い出すのは前世の20何年分の記憶の中でも最後のあたり。

「——君ってホント典型的な社畜だよな」

比較的仲の良かった同僚の女性社員にそう言われた。

その後続いたセリフはルクシオンが俺に投げかけたものほとんど同じ内容だった。

——良くも悪くも俺は異世界転生しても前世とちつとも変わらなかつたのだ。

『マスターは平穩無事な生活を希求していると言いますが、そのためのビジョンは全て自分に都合の良い幻想に過ぎません。目先の面倒を避けて問題を放置した結果大事になり、解決に費やす労力を増やす。そしてそれを私の力で解決すればマスターは他人から頼られ、利用される。私を手に入れてからマスターはこの繰り返しです』

——耳が痛いな。

思えばルクシオンを手に入れたこと自体、生活に必死で無気力になつたまま追い詰められていったのが理由だった。

ゾラの飛行船を盗んで家出してでもルクシオンを早くに回収していればまた違う人生が待っていたかもしれない。

実家はもつと早くに潤い、「淑女の森」とかいう変態婆共に俺やコリンが狙われることもなかつたかもしれない。

正直なところ自分でも分かつてる。俺は損な性格をしていると。

高潔でも賢明でもなく、怠惰で欲望にもまみれていて、カタルシスに酔うのが大好きな俗物だが完全に利己的にもなりきれない。

だからこの世界がゲームオーバーで滅ぶリスクを放つて置けない。

『いつそのこと全てをリセットしてはいかがですか？ご命令くださればすぐにもホル

フアート王国を滅ぼし、マスターの理想とするような国家を作り上げますが？」

その提案に乗ってしまいたくなるのが怖い。

でも俺はそこまでする勇氣はない。

俺がしたことで大勢の人が死んだら、俺はきつとその重みに耐えられない。

「却下だ。そっちの方が俺にとっては不幸せだよ。精神的に保たなくなる」

『———そうですか。マスター、貴方は損な方ですね』

「だろ。でも俺はそんな自分が嫌いじゃない。泣いて泣き喚いて泣き止んだから、ちよつとは氣力も戻ったし。もうしばらくこの世界の面倒みてやるさ」

降格とのんびり引きこもりライフの実現方法はゲームクリアした後にも考えよう。

今はまだ——俺個人の夢の夢のために行動するよりリビアやアンジェ、そして今世の家族の生きるこの世界を滅亡させない方が大事だ。

さて——マリエと彼女に誑かされた馬鹿共のせいで、シナリオから大きく外れたゲームをクリアするのに、俺に出来ることはまだあるだろうか。



翌日。

「お茶会の——招待？」

俺はお茶会に招待されるという珍しい事態に思わず声が漏れた。

普通お茶会というのは男子が女子を誘うもので、男子は招待される側にはならない。

男同士でのお茶会はどうかのかつて？

男同士でのお茶会はお茶会じゃなくてただの集まりなのだよ。

予定が合うときに何となく集まって好きなものを飲み食いし、駄弁るだけだ。

大層な準備はしないし、招待状なんて出さない。

そういうわけだから男子である俺にお茶会への招待状が来ることはあり得ないはずだったのだが——。

「差出人は——クラリス先輩から!？」

封筒の裏にあった署名は「クラリス・フィア・アトリー」。

招待状に書かれていたのはいつどここの部屋でお茶会をするのでお待ちしています、という普通の内容だったが「話したいことがあります」という気になる一文があった。

「行かないってわけにはいかないよな」

話したいこととは何なのか分からないからちよつと怖いが、断るのも怖い。

クラリス先輩の招待を断ったなんて噂でも流れたら忠誠心あふれる取り巻き連中が押し掛けて来かねない。

ジルクみたいな目には遭いたくないので行くことにした。
承諾の返事を書く。

「一番マトモな返事が自分で書いたヤツとか泣けてくるな」

これまでお茶会の招待状は無視されるか、おそろしく上から目線な内容でしかも字まで雑な返事が返ってくるのが関の山だった。

『出す相手を間違えているからでは？ マスターがこれまで招待状を送ってきたのは男爵家から子爵家の女性です。一番酷い層ですよ』

ルクシオンが冷静な分析結果を伝えてくる。

「そうだけど、俺は男爵だぞ。その層からしか嫁は貰えないんだって。何度も言ったら？」

『いっそのこともう一度大きな功績を立てて子爵にまで陞爵してはいかがですか？ そうすれば伯爵家以上の女性を選択肢に入りますよ。その招待状を送ってきたクラリスも』
クラリス先輩と結婚——魅力的な話だが実現性は低いと思う。

だつてクラリス先輩と俺はこれまでまともに接点なかったんだぞ。

それにアトリー家だつてクラリス先輩を俺に嫁がせるなんて認めてくれるわけがない。

アトリー家は代々大臣を務めてきた家系だ。身分上は結婚できてもやはり格が違い

すぎる。

「いや、クラリス先輩はないだろ。そもそも1代で男爵から子爵とか流石に——」

準男爵でバルトフアルト家の寄子になるはずが、仮とはいえ入学前から男爵の地位を与えられ、今や正式な男爵で宮廷階位は五位下、卒業したら五位上。

1代でこんな出世は聞いたことがない。

これ以上出世させることは流石にない——はずだ。

『どうでしょうか？ マスターのその手の予想が当たったことは1度たりともありませんが？』

相棒が不吉なことを言う。

「言わないでくれよ。心配になるだろ」

せっかく功績を譲ってやったのに変な気を遣ってくれやがったブラッドにグレッグ、そしてなぜかアトリー家から推薦されて六位の壁を越えたばかりか、四位の壁まで見えてきた。

俺には——いや、それどころかルクシオンにすら——こうなることは全く予想できなかつた。

同じようなことが今後二度とないかと言われると——不安になる。

二度あることは三度あるっていうくらいだし。

「まあいいや。とりあえず今はコイツを女子寮まで届けてくる」

俺は身支度をしてクラリス先輩の部屋がある女子寮に向かう。

クラリス先輩への返事を女子寮の職員に渡せば部屋まで届けてくれる。

◇◇◇

お茶会当日。

クラリス先輩が俺を呼んだ部屋は小さいが見晴らしのいいお洒落な部屋だった。

学園の建物にあるお茶会用の部屋の中でもかなりグレードが高い部屋だ。

ノックすると、返事が聞こえてクラリス先輩が出てきた。

「リオン君。来てくれたのね。ありがとう」

クラリス先輩は前とは見違えるような優しい表情でそう言った。

「え、えつと——その、先輩、随分見違えましたね」

どもってしまった。

でも仕方ないと思うんだ。ギャルとか不良みたいな格好でも似合うくらいだったクラリス先輩がちゃんとオシヤレしてたら——アンジエといい勝負の美人さんだった。

アンジエと違って見慣れてないので緊張してしまう。

「ふふ。ありがとう。さ、座って。今お茶を淹れるから」

クラリス先輩が部屋の中央のテーブルを示した。

「お邪魔します」

今までマトモな女子がお茶会に来なかったこともあって招かれた側の作法が分からない。

リビアやアンジエを呼んだ時はフランクな感じだったし。

「そう畏まらないでいいわよ。2人だけだしね」

クラリス先輩がフォローする。

確かに部屋にはクラリス先輩と俺の2人だけ。取り巻きも専属使用人もいない。

「えっと？なぜ2人だけなんでしょう？使用人はどうしたんですか？」

俺は思わず質問する。

クラリス先輩はティーポットにお湯を注ぎながら答えた。

「——全員解雇したわ。貴方の言った通りにね。本来私にはあんなのは必要なかったの」

それは喜ばしい。他の女子も是非そうしてくれるとありがたい。

専属使用人共の舐め腐った態度にはつくづく腹が立っていたところだ。

「そうですか。それで、今日はどういった話で？」

「まあそう急かさないで。まずはティータイムを楽しみましょう」

クラリス先輩はそう言つて優雅な仕草でポットに茶葉を入れ、お湯を素早く注いで蓋をし、脇に置いてあつた砂時計を返す。

無駄のない洗練された動き。惚れ惚れする。

師匠が紳士ならクラリス先輩は淑女つてところか。

「お茶請けはどれがいいかしら？」

クラリス先輩がケーキスタンドの前に立つ。

並べられたお菓子はどれも美味しそうだ。迷つてしまう。

「——クラリス先輩のおすすめで」

結局日和つた。

「それじゃこのレアチーズケーキをどうぞ」

クラリス先輩はナイフを手に取ると、真つ白な丸いチーズケーキを切り分けて皿に載せる。

なんてことだ。ケーキを切る姿まで優雅で華麗じゃないか！

学園の女子のこんな姿見たことないぞ！

「頃合いね」

クラリス先輩は銀製の茶漉しをセットしてカップにお茶を注ぐ。

(なっ!?)

またしても衝撃を受ける。

俺のお茶とは漂ってくる香りからして違う!

まさか師匠の教えを受けたのか?

嗚呼早く味わいたい!

「さあ、召し上がれ」

クラリス先輩のお許しが出たので俺は即座に一口飲む。

(すごい!)

俺の淹れたお茶より格段にハイレベルだ。

やはりお茶を始めたばかりの俺とは年季が違うってことか!

「いかが?」

クラリス先輩が得意そうな顔で感想を求めてくる。

「すごいです! 緑残る干し草のような香ばしさとお香のような甘さが醸し出すハーモ

ニーが絶妙です!」

仰々しいが、何のことはない。師匠が使っていた表現の受け売りを組み合わせただ

け。

語彙力の無さがもどかしい!

「口に合ったようね。淹れた甲斐があるわ」

クラリス先輩が満足げに微笑む。

女神かこの人！

俺はしばし話そつちのけで夢中でお茶とお菓子を堪能した。

そんな俺をクラリス先輩は微笑みながら見つめていたが、俺が少し落ち着いたタイミングですかさず切り出した。

「リオン君、修学旅行の行き先はどこにするの？」

俺はその質問に思わずカッパを持つ手が止まった。

問1：これまで大して接点がなかった女子の先輩からお茶会に招かれ、その席上で修学旅行の行き先を問われました。先輩の意図を読み取り、適切なりアクションを取りなさい。

俺はお茶とお菓子で緊張を解されて気が緩んだところでいきなりこの問題を出題された。

え？なんで？なんでクラリス先輩が俺の修学旅行先なんて知りたがるんだ？

これってまさか——俺と一緒にの旅行先に行きたがつてることか？

だとしたらどういうことだ？

俺に気があるのか？

そういえばクラリス先輩がひどく落ち込んでた時、メソメソ泣かれて面倒くさいことになってたので俺なりにフォローしたけど——まさかあれで？

いやいや待って待って早まるな俺。

大して美形でもない、正直だけが取り柄のモブの俺にクラリス先輩が惚れ込む要素なんてどこにある？

いや、でもこのお茶会に2人つきりつてことは少なくとも俺に心を許してるってことだよな？

分からん！クラリス先輩の意図が分からん！

——顔に愛想笑いを貼り付けたままそんな思考をすること約2秒。

ルクシオンが俺にだけ聞こえるように言ってくる。

『ヘタレですね。マスター程度の頭では変に深読みをしても逆効果です。潔く真摯に向き合い、当たって砕けた方がよろしいかと』

この人工知能、俺のこと主人と思ってるやないだろ！てか砕けたら泣くぞ！

——いや、元々身分上釣り合わないから当たりもしないんだけどさ。

「スメラギ島ですけど」

とりあえずストレートに答えることにした。

南の方にある温暖な浮島で日本風な街並みと文化があるらしい。

「人気の高い所を選ぶわね。やっぱり夏祭り目当てかしら？」
クラリス先輩は更に質問してきた。

夏祭りとかやってたのか？今2学期で秋、もうすぐ冬だよな？

「夏祭りやってるんですか？夏はもう過ぎてますよね？」

「知らないで行こうとしていたの？季節が違うのよ。あつちは今が夏なの」

こつちが秋で向こうは夏、ねえ。

北半球と南半球で季節が逆、みたいなやつか？

乙女ゲー世界はよく分らない。

気候とかどうなってるんだか。

難しそうだから別に詳しく知りたいとは思わないけど。

「祭りですか——楽しそうですね」

嘘である。

この俺、開催されること自体知らなかったことから分かる通り、夏祭りとかやらない興味はほとんどない。

なのにそのスメラギ島に行きたがる本当の理由はステータスの成長率が劇的に向上するレアアイテムが手に入るからである。

ゲームでは最も効率的にキャラクターを育成する方法がそのレアアイテムを使うこ

とだったので、是非とも1年生のうちに手に入れておきたい。でないとその先の戦闘パートがキツくなる。

他の行き先でもレアアイテムは一応手に入るが、少々面倒なイベントを経なければいけない。

その点、スメラギ島はレアアイテムが比較的楽に入る。その代わり入手方法がガチャ同然だが、なんのことはない。買い占めれば良いのである。

だがそんなことを言ったら確実に頭が変だと思われる。

ついでに言うのと抽選に漏れないように教師の買収を企てているなど——自分から見ても正直ドン引きする。

「ねえリオン君、ハツランドの収穫祭に興味はないかしら？」

クラリス先輩が唐突に別の目的地を提示してきた。

ハツランドといえば北方の農業地帯だ。

修学旅行の行き先の1つでもあるが、俺はさして気に留めていなかった。当然収穫祭のことも知らない。

「収穫祭、ですか？それってどういう？」

「今年の収穫を感謝する神事よ。醸造酒とご馳走で盛大に祝うの。見世物だったくさんあるし、お酒と食事は美味しいしで毎年賑わうのよ。特に人気なのは——」

クラリス先輩が饒舌に収穫祭について説明してくれる。

——あれ？これってもしかしてあれか？ギャルゲーで見たことあるパターンだ。

この後分岐と好感度イベントが出てきて隠しキャラルートが始まって——

って何を考えているんだ俺は！いくら乙女ゲー世界とはいっても二次元とリアルを
ごつちやにするなよ！

思い出せ！女性に優しいフワフワした設定の乙女ゲー世界が現実になるとどれだけ
酷かったかを！

ゲームのような恋愛はできないと俺は知ってたはずだ。

クラリス先輩みたいな美人で身分も高くて聡明で優しい素敵な女性にお祭りデート
に誘われるなんて展開、俺のようなモブには——

「それでね？リオン君さえよければ収穫祭、一緒に行かない？」

——まさか本当にあつたとは。

収穫祭

修学旅行当日。

俺は他の大勢の学園生と共に豪華客船に乗っていた。

俺はついにクラリス先輩のお誘いを断る言い訳を思いつかず、修学旅行の行き先を変更していたのだ。

正直スメラギ島に行きたかったが、まあいい。少々面倒でもイベントをクリアすればレアアイテムは手に入るし、そのための装備も持ってきている。

クラリス先輩とデートできるなら楽しいだろうし、断ったら後が怖そうだし。

さて——修学旅行とはいっても遊んでるようにしか見えない。

カジノに温水プールにオーケストラに社交ダンスと娯楽には事欠いていないのだから。

俺にとっては、プールはカースト上位の連中が占領してるし、オーケストラは眠くなるだけだし、社交ダンスは——相手に足を踏まれた挙句、逆ギレされたトラウマがあつて行く気がしないので、カジノをぶらぶら回っている。

3年生の「ヘクター・フォウ・バーデン」先輩と一緒だ。

ヘクター先輩はルクル先輩の友人で俺たちと同じ底辺グループの男子生徒だ。

「修学旅行は男子にとつてはチャンスなんだ。エスコートができればグツと距離が縮まるからな。リオン、お前も頑張り時だぞ」

こう言うヘクター先輩は知らない。

俺がクラリス先輩とデートの約束しちやつてること。

つまり、俺に他の女子にアプローチするチャンスなんてないに等しい。

俺はまたしても婚活に絶好——かどうかは個人的には甚だ疑問であるが——のタイミングで全く婚活の役に立たないことをやっているわけである。

——別にいいけどね。

人気の女子は男連中が取り囲んで口説こうとして近づけないし、そうでない女子は専属使用人にチャホヤされてご満悦だし。

それに下手な女子をエスコートするよりクラリス先輩とデートしてる方がずっと楽しいだろうから。

そのクラリス先輩だが、今は俺と一緒にではない。

さつきチラツと見かけたが、取り巻き連中に囲まれて劇場に入っていた。

忠誠心あふれる男子の取り巻きではなく、信用を取り戻そうと必死な女子の取り巻きに。

まあ、連中の努力は無駄だと思うけどな。

「婚約破棄されたクラリス先輩に散々陰口叩いて、不良堕ちまでさせるに至り、一方的に見限って離れていったのだ。」

「今更何をしたところで信用は回復しない。むしろ露骨に媚びへつらつてると下がる一方だと俺は思う。」

「取り巻きつて本当に何なんだろうね。くれるといつても欲しくないわ。」

「今回の行き先はダニエルやレイモンドとも違うし、リビアやアンジェとも違う。」

「なので俺の顔見知りほとんどいない。退屈だな。」

「ルーレットでもやるか?」

「ヘクター先輩が俺をギャンブルに誘ってきた。」

「遠慮しときます。賭け事は好きじゃないので」

「ヘクター先輩が信じられない、と言った顔で俺を見る。」

「だが事実である。俺は勝つか負けるかも分からない勝負などしない。」



「前世で言うとおクトーバーフェストってところだろうか。」

ハツランドは王国最大の直轄領で肥沃な農業地帯が広がる浮島だ。

ちよūdō収穫が終わる時期にあり、収穫祭で今年の収穫を感謝し、来年の豊作を祈願するのだそうだ。

港町の大通りを酒樽を積んだ馬車の隊列が郊外の会場まで行進し、神官たちの宣言によつて収穫祭は始まる。

会場には開始前から大きなテントがいくつも並び、数え切れないほどの種類の発泡酒と美味そうな匂いを漂わせた料理が並んでいる。

はずれの方から歓声が上がった。馬車の隊列が到着したようだ。

俺は歓声から離れ、クラリス先輩との待ち合わせ場所に向かう。

クラリス先輩は俺より先に来ていた。

5分前行動をしていた俺より先に来るとは、この世界の貴族女性とは思えない行動だ。

「すみません！待たせちゃいましたか？」

俺は詫びを入れながら駆け寄るが、クラリス先輩は笑つて許してくれた。

「いいのよ。私に来るのが早すぎただけだから」

やっぱり女神かこの人！

女神かといえば見た目もだな。気合が入ったナチュラルメイクで、シニヨンと三つ編

みを組み合わせたようなお洒落な髪型をしている。

耳には小さなイヤリング。不良スタイルの時みたいにくつも着けるようなことはしておらず、清楚で上品に見える。

見惚れていたらクラリス先輩が「どうしたの？」と聞いてきた。

「先輩、すごく——お美しいです」

吸い込まれそうな緑の瞳から目が離せないまま、俺は本音を漏らす。

たぶん今の俺はハートを抜き取られた放心状態で、無表情なのに目だけがギラギラしてて、間違っても目と目が合う瞬間好きだと気付く、なんてことにはならないだろう。

「あ、あのリオン君？近すぎないかしら？」

ほら見ろ、クラリス先輩がちよつと引いてるじゃないか！

「すみません、つい」

ようやく顔を逸らすことに成功(?)する。

「もう——でも、ありがとう」

褒められたのは嬉しがつてくれたようだ。

いかん、このままじゃミレーヌ様の時みたいに勢い任せで口説いてしまいそうだ。

「行きましようか。そろそろ開会式始まりますし」

「そうね」

2人で並んで開会式が行われる広場を目指す。

エスコートができればグツと距離が縮まる、とヘクター先輩は言っていたが、今の俺たちは無言状態でただ一緒に歩いてるだけ。

ただ——結構距離が近い。肩がしよつちゅう触れ合うくらいに。

これつてもしかして手とか繋ぎたがってるのか？

だとしたらここは男の俺から提案した方がいいよな？

周りは混んでるし、はぐれないようにつて言えば自然に繋げるか？リビアやアンジェとクレープの屋台に行った時も混んでたら手握られてたし——いやでも違いかもしれないし、断られたら気まずくなるし——。

悶々としているとルクシオンの声が聞こえてきた。

『ヘタレなマスターが深く考えても逆効果です。ストレートに提案することを推奨します』

この人工知能、さらつと俺を見下してきやがった。

だがアドバイスは聞き入れるとしよう。

「あの、先輩。混んでるのではぐれないように手繋ぎませんか？」

俺はなるべく自然体を装って言う。

前世でもこういうのは経験済みだろ！しっかりしろ俺！

「いいわよ。エスコートをお願いね」

クラリス先輩が俺の手を握——らずに腕を絡めてきた。

それはちよつと予想外なんですけど!?

「ん?どうしたの?」

クラリス先輩が俺の顔を覗き込んでくる。

目が楽しそうに笑っている。人の気も知らないで!

あれ?もしかして分かってて聞いてるんですかクラリス先輩?

もしかしてこの人Sなのか?

「先輩——この体勢恥ずかしくないんですか?」

せめてもの抵抗。

たしかに美人の先輩と腕組んでてハッピーな状況なのだが、真意が読めないのは看過しかねる問題である。

「あら、嫌かしら?私はむしろ楽しいのだけど」

「——そうですか」

俺はクラリス先輩と腕を絡めたまま人混みを掻い潜って進む。

だが俺はクラリス先輩がどういう意図で俺に腕を絡めてきたのか、そればかり考えていた。

仮にクラリス先輩が俺に好意があるとして、俺が彼女の気持ちに応えられるかという
と——答えは否である。

たしかに今クラリス先輩はジルクとの婚約を破棄されてフリー状態だが、身分が釣り
合わないので俺とは結ばれない。

俺は独立した領主の男爵で、クラリス先輩は政界の重鎮である伯爵家の令嬢。

結ばれようと思ったら俺が子爵に陞爵するか、クラリス先輩が実家を追い出されるか
の2択になる。

前者は——もしかしたら可能かもしれないが俺の意に反する。

今でさえ卒業後の王国への貢献で頭が痛いのに子爵にまでなったら——俺の領地
じゃ絶対に賄えない。

宮廷貴族になって政治活動をやるのも面倒なのでパスしたい。

後者は——それこそゲームでのユリウスルート・逆ハーレムルートでのアンジェみた
いな不祥事（と見做されること）でも起こさないと実現しないだろう。

そしてクラリス先輩がそんなことをしたら大勢の人に迷惑がかかる。

現にアンジェが俺を代理人にして決闘を起こした後、彼女の実家のレッドグレイブ公
爵家は落ち目になっている。

アトリー伯爵家は落ち目どころでは済まないだろう。

最悪、大臣の失職——アトリー家の寄子や関係者、その親族の人たちも致命的なダメージを受ける。

——第3の選択肢として駆け落ちという手もあるにはあるが、その後を考えるとやはり取ることはできない。

だとしたら、クラリス先輩は俺をどうしたいのだ？

今のクラリス先輩は、どう見ても俺を誘惑しているように見えるのだが——。

もしかして愛人にでもするつもりか？結婚後も愛人を認めさせる女性は多いと聞くが——いやいや、それは男爵家から子爵家までと一部の伯爵家の女性だけだったはず。

クラリス先輩がそんな存在を欲しがるとはちよつと考えられない。

——やつぱり分からん。そして彼女の真意が分かったとして、その時俺はどうすればいい？どうしたい？

俺がそんな風に考え込んでいる時、クラリス先輩がどんな表情をしていたのか、俺はいまだに知らない。



開会式が行われる広場は窪地状の遺跡だった。

学園の闘技場と同じように階段状に設けられた席が並んでおり、上の方にはVIPルームのようなガラス張りの部屋まである。

修学旅行の学園生は好きな席を選んで着席していいことになっていて、クラリス先輩は眺めの良いボックス席を取っていた。

取り巻き共に邪魔されなかったためだったのだろう——そこで俺は仇敵共とご対面を果たした。

俺の期待を裏切り、意に反した出世をプレゼントしてくれやがったブラッドとグレッグ、そして全ての元凶、マリエである。

「バルトフアルト——とクラリス先輩？」

ブラッドが驚いたような声を上げる。

なんとという偶然か、彼らは隣のボックス席だった。

クラリス先輩を見たマリエはそれとなく視線を逸らしている。

「げ——お前らの隣だったのかよ」

俺が悪態を吐くとブラッドが筋を浮かべた笑顔を向けてくる。

「げ、とは——挨拶だね」

「空賊と一緒に戦った仲じゃねえか」

グレッグまで——お前らは俺の指示がなきやろくに動けなかっただろうが！

悪いが俺はお前らを戦友と思っっちゃいなからな。

「言ってくれるな、だが俺は——」

「ここで喧嘩する意味はないわよりオン君。荷物を置いて、乾杯用の飲み物を受け取りに行かないと」

火花を散らす俺たちを仲裁したのはクラリス先輩だった。

出世させてくれた恨みを込めてネチネチ嫌味でも言っつてやろうかと思っただが。

収穫祭の開会式では神官の音頭に合わせて参加者全員で乾杯するらしい。

ちなみにその乾杯用の飲み物は醸造酒——ビールである。

ジュースとか烏龍茶はないのかと言いたくなるが、この世界では15歳で成人と認められ、飲酒だつてできる。

異世界はこういうところ、戸惑う。

「どれがいいかしら?」

クラリス先輩が品定めするかのよう到大テーブルを物色する。

大テーブルに並んだビールは金色や茶色といった前世でも馴染みのある色から、黒や緑、青といったエキゾチックな色まであり、実に多彩だ。

「学園の貴族様ですか? でしたらこちらのフーハルデンはいかがでしょう。爽やかで飲みやすいですよ」

ビールを配っていたスタッフの男が親切に教えてくれた。

「じゃあそれにするわ。リオン君は？」

これは——あれだ。飲まなきゃいけない空気だ。20歳まで酒は飲まないようにしていたのだが——

『問題ありませんよ。マスターの肉体はアルコール分解酵素が既に豊富にあります。認めたくはありませんが、新人類の肉体は旧人類に比べて発達が早く、再生能力も高い』
ルクシオンは問題ないと言うので急性アルコール中毒を起こさない程度に慎重に飲むことにした。

「——同じ物を」

「はい喜んで——」

どつかで聞いたようなフレーズを口にして男はジョッキにビールをなみなみと注いで渡してきた。

ミニテーブルを挟んで席に座る。

ジョッキを置き、広場の方に目をやると歓声と共に酒樽を積んだ馬車の隊列が入場してくるところだった。

馬車の隊列が中央の祭壇の前で停まると、神官たちが酒樽と麦の束やら豚の丸焼きやらを祭壇にお供えしていく。

空中に神官たちの姿が大きく映し出され、代表らしき白髭の神官がスピーチを始めた。

「私は言おう、私の兄弟、友のために。あなたのうちに平和と幸福のあらんことを」
長つたらしいスピーチは聞く気が起きないが、俺は必死で欠伸を堪える。

10分くらい続いた口上の後、2人の神官が酒樽を1つ、代表の前に持ってくる。

「ホルファート王国収穫祭の伝統に則り、この酒樽を割って開会の宣言とする！この祭りに集いし兄弟並びに友たちよ、手に酒を！」

代表の音頭に合わせて俺たちはジョッキを手取る。

代表の神官は装飾のついた白金の斧を振り下ろし、鮮やかな一撃で酒樽を叩き割った。

「乾杯!!」

噴き出す酒を前に神官たちが叫ぶと、集まった人たちが一斉に歓声を上げ、広場は歓喜の声に満たされる。

「乾杯」

俺とクラリス先輩もジョッキを突き合わせてグビりとひと口やる。

なんてことだ！これは本当にビールなのか？

ビール特有のコクや苦味がほとんどなく、軽い酸味の中にオレンジのような爽やかさ

を感じる優しい味だ。

前世での飲み会なんかで飲んだビールは正直好きじゃなかったが、これはクセになりそうな美味しさである。

「美味しいわね、これ」

クラリス先輩も気に入ったようだ。

「美味しいいいい！今日は飲むわよ！」

——隣がうるさい。

とうにかマリエって酒好きだったのか。どうでもいい情報だが、あいつの前世はどんなだったんだろう。

近いうちに話を聞く必要があるな。

「リオン君、早く飲んで出店を回しましょう。人気の店は売り切れ早いわよ」

クラリス先輩がワクワクした表情で俺を急かしてくる。

収穫祭は始まったばかり。お楽しみはこれからだ。

アグレッシブ攻略系お嬢様

「何が嘘よ！あんな女に誑かされて！私を捨ててまでそんなに欲しかったの？どうしてあの女なのよ？どうして——私じゃ駄目なのよ！」

激情の波が、理性を乗り越え、今までどうしても言いたくなかった言葉が喉から飛び出した。

（なんてみつともないんだろう）

そんな風に思う自分があることにも気付いている。

——惨めだ。

「貴女は駆け引きは得意でも恋は下手であらせられる」

占い師はそう言った。

「貴女は聡明かつ情に厚き素晴らしい気質の持ち主。されど、こと色恋沙汰に対しては大貴族令嬢としての域を出ること能わず。其が貴女の敗因」

「貴女は献身的に彼を支え、尽くした。然るにその行いが彼の重荷となった」

占い師の言葉は傷を抉る。

だが、婚約者を奪われた実例がある故に反論できない。

それでも——理不尽と感ずるのは仕方がない。

「私は！ただ、彼に喜んで欲しかっただけに——」

「つまるところ貴女は彼に貢いでいた。人は己に貢ぐ者を恋うることはない。されど己をして貢がせる者に心奪われ、これを追い求む。此れ恋の心の妙也」

「貴女は——彼に追い求められたことがお有りか？」

最後の問いかけで雷に打たれたような衝撃が走った。



開会式が終わって自由時間になり、俺たちは出店を冷やかしながら広い会場を歩く。

「お、学園の貴族様ですな？一杯いかがですか？この黒ビールは——」

「ジビエのアヒージョはいかがですか！」

「是非是非！うちのスペアリブは絶品ですよ！」

貴族相手でもバンバン声がかけてくる店主の親仁連中の商魂には脱帽である。

「あら、美味しそうね。頂こうかしら」

クラリス先輩がスペアリブに興味を持ったようだ。

「お、ありがとうございます！ついでにこちらの黄金ビールもいかがですか？スペアリブ

「ブにはよく合いますよ」

「じゃあそれも頂くわ。2人分、お願いね」

「はい喜んでー！席に座ってお待ち下さい。ロイ、貴族様方を席にご案内しろ！」

またそのフリーズか。収穫祭では承る時に「はい喜んでー！」という決まりかしきたりでもあるのか？

「貴族様、こちらの席にどうぞ」

ロイと呼ばれた店員の青年が空いた席に案内してくれる。

クラリス先輩のために椅子を引いてあげていた。俺より気が利くやつである。後でチップをやっておこう。

「ありがとう」

ミニテーブルに向かい合って座ると、木製のサービングプレートに載った骨付き肉と金色のビールの入ったジョッキが2つ、運ばれてくる。

運んできたのは恰幅の良い髭面の親仁——店主である。

「お待たせしました！当店自慢のスペアリブと黄金ビールでございます！」

「おお——」

「美味しそうね——」

こんがりと焼けたあばら肉が湯気を上げているのを見て思わず生唾を呑み込む。

「え、えっと、それじゃ、乾杯しましょうか」

「そうね」

ジョッキを手に持つ。

それを見た店主の親仁がニコニコしながら問いかけてきた。

「失礼ながら貴族様方、お2人はお付き合いらつしやるので？」

俺はビールのジョッキを持つ手が止まる。

そして気付いた。店中から初々しい学生カップルを祝福する生暖かい目線が俺たちに注がれていることに。

「ふふふ、ご想像にお任せするわ。でもこうして2人つきりで収穫祭を回っている、ということは、ね？」

ちよつとクラリス先輩!?それってどういう意味で言っただんですか?

内心狼狽する俺をよそにクラリス先輩は悪戯っぽい微笑みを浮かべている。

「おや、青春ですな。よおし皆の衆!若いお2人の将来に乾杯だ!」

「「「「おうー!」」」」

店主の親仁が音頭を取り、周囲の客たちが一斉にジョッキを掲げた。

俺はかなり気恥ずかしいが、クラリス先輩は嬉しそうな表情で俺とジョッキをぶつける。

「乾杯♪」——「乾杯」

スペアリブと黄金ビールは確かに絶品だったが、俺はクラリス先輩の先程の発言でどこか心ここに在らずだった。

デザートは別腹、というのには貴族令嬢でも同じなようだ。

クラリス先輩の希望で俺たちは神聖魔法帝国風の焼菓子「シュトルーデル」を売っている店に向かった。

毎年出店している有名店で、おやつ時に開店するらしい。

その人気は絶大で、1日目ですべて売り切れてしまうほどなんだとか。

シュトルーデルは、紙みたいに薄い生地在林檎やらナッツやらレーズンを散りばめて、ロール状に丸めたのを焼いたお菓子で、「渦」と言う意味があるそうだ。

クラリス先輩は蜂蜜がけ、俺は生クリーム添えを注文した。

「うーん、美味しいわね！」

クラリス先輩が幸せそうに目を細める。

確かにこれはすごく美味しい。

外側はサクサクパリパリしてて、フィリングに近くなるととろけるよう——帰ったからお茶会に出してみようか。

「ねえ、少し交換しない？」

クラリス先輩が生クリーム添えを味わいたがっているようだ。

あーん、などというカップルめいたことはしない。普通にナイフで端っこを切つて、相手にフォークで取らせる。

「うん、生クリーム添えは柔らかな味わいね。蜂蜜がけはどうかしら？」
「甘いです。とつても」

——この世界もこのお菓子のように甘く優しくあつてくれないものか。
「あら、リオン君。頬にクリームついてるわよ」

クラリス先輩が手を伸ばして指先で俺の頬を拭う。

ここまではいい。ドキツとしたが、お礼を言つて終わりだっただろう。

だが問題はその後。クラリス先輩は拭い取つたクリームをそのまま口に運んで舐め取つたのだ。

前世でもされたことがないものだから思わず顔が紅潮する。耳が熱い。

今の俺は耳が茹でダコみたいになつてるだろう。

「え？あ、あの先輩？」

「どうかしたの？」

なんでこの人はこんななんでもない風なんだよ！

いや待てよ。耳が熱くなつて気付いた。

クラリス先輩、顔は涼しげだけど耳が妙に赤い。つてことは意識してはいるのか。やっぱりクラリス先輩の真意が分からない。



夕方。

「沢山食べたわね」

「そうですね。もう食べられないです」

「ホテルに戻って少し休みましょうか」

腹が膨れた俺たちは会場を出てホテルに戻るために歩いていった。

「——乗り合い馬車はもう混んでいるわね」

乗り合い馬車、といっても修学旅行中の学園生専用を用意された豪華なものである。

一般向けとはまるで違うが、学園生の数も多いのでやはり混む。

「空くまで待ちますか?」

「そうですね。でもここにいたら——」

「あ、お嬢様!」

言い終わらないうちに聞こえてきた女子生徒の声にクラリス先輩が反応した。

「リオン君、走るわよ」

俺の返事も待たずにクラリス先輩は俺の手を取って走り出す。

そのまま俺たちは未だに賑わう収穫祭会場へと逆戻りする。

「「待ってくださいお嬢様あ！」「」

ええー何この状況。なんで俺は美人な先輩の手を握って先輩の取り巻きから逃げ回ってるんだ？てか腹が痛い。このまま疾走してたらリバースしかねない。

——なんで俺がこんな目に！クラリス先輩からデートに誘われて、断れないからお受けただけなのに！

すぐにでもルクシオンを呼び出したいが、そうするとあいつの存在がバレる。

——どうしろってんだあ！

「お嬢様！」

不意に追ってくる取り巻きとは違う、太い声が聞こえた。

見るとエアバイクレースで鎧を削ったあの首の太い3年生の先輩がエアバイクで降りてくるところだった。

会場にはエアバイク乗り入れ禁止じゃなかったか？

「エリオット!?!」

クラリス先輩が驚いた表情をする。

エリオットと呼ばれた先輩は素早くエアバイクを降りてクラリス先輩と俺を手招きした。

「お嬢様、これを使ってください！」

エアバイクは2人乗りのようだ。

「でも先輩は——」

「俺のことはいい！行けバルトファルト！早く！」

エリオット先輩——犠牲は決して忘れません！

俺はクラリス先輩を後席に乗せてエアバイクのエンジンをふかす。

クラリス先輩を追ってきた取り巻き連中と騒ぎを聞きつけてやって来た警備員たち、そして俺たちを逃がすために地上に残ったエリオット先輩を後目に俺たちは空へ舞い上がった。

「危機一髪だったわね」

クラリス先輩がどこか楽しげに言う。

それより俺には1つ疑問がある。

「エリオット先輩、でしたか？ナイスすぎるタイミングでしたね」

冷静になってみれば、なんであのタイミングでエアバイクが助けに来るんだか。

「尾けてたみたいね。本当に心配性なんだから」

どうやらずっと俺たちは尾けられていて、クラリス先輩の危機を察知したらすぐに取り巻き男子たちが助けに来られるようになっていたらしい。

——何それなんか怖い。

「あ、花火が上がるわよ!」

クラリス先輩がそう言った直後、大きな爆音と共に無数の色鮮やかな火の花が夕闇の空に咲く。

前世で見た花火と同じものもあれば魔法を使っているらしいものもある。

アニメーションみたいに動く花火なんて、前世では映画でしか見たことなかった。

「花火を横から見るのって新鮮ね」

クラリス先輩が言った。

上がっている花火はエアバイクとほぼ同じ高度だ。打ち上げ花火を横から見るのは前世を含めても初めてだ。

周囲には花火を横から見るための飛行船が浮かんでいるので、邪魔にならないよう、移動する。

クラリス先輩は俺の背中に抱きついたまま次々に上がる花火を眺めていたが、不意に顔を寄せて耳打ちしてきた。

「ね、後で2人でプールに行かない?」

耳がくすぐったい。

てかこの人2人でプールって言ったか!?

「え? 2人でプール、ですか?」

プールと言ったら——水着。

クラリス先輩の、水着。

正直、すごく見たい。クラリス先輩スタイル良いし。

クラリス先輩はその欲望を見透かしたらしい。

「私の水着、見たくない?」

なにこの肉食系女子。

エアバイクレースの後は元の優等生っぽい感じに戻ったとばかり思っていた。

全然戻ってないじゃないか!

俺ってやっぱり狙われてるの? なんで?

思考がこんがらがって頭に疑問符をいくつも浮かべていると——

「11時にホテルのプールにいらっしやい」

クラリス先輩はそう囁いた。



夜11時。

俺は誘惑に負けて水着を買い、ホテルのプールに来ていた。すつかり夜になり、人気はない。

消灯時間になり、学園生たちはそれぞれの部屋に戻っているのだ。

プールの照明も落とされ、水中の色付き照明だけが幻想的に光っている。

前世のネットで見えた「ナイトプール」に似た雰囲気だ。

「なんだか世界中に2人だけみたいね」

振り返るとクラリス先輩がいた。

青と白のパレオが橙色の髪と白い肌に映える。所々に入った赤いラインがいいアクセントだ。

要するに何が言いたいかというところ——

「先輩、すごく綺麗ですね」

つい口を突いて本音が飛び出す。

「ありがとう。選んだ甲斐があったわ。さあ、泳ぎましょう?」

クラリス先輩と、消灯時間過ぎに、2人つきりでナイトプール。

なんだこのシチュエーションは。イケないコトしてる感が半端ない。

ちなみに本来この時間は閉まっているのだが、クラリス先輩が支配人を買収したらしい。

——クラリス先輩って見かけより腹黒だな。

「——まずは準備体操ですよ」

せめてもの抵抗。

クラリス先輩のペースに乗せられると何か取り返しをつかないことになる気がする。そう思った俺だが、直後に逆効果だったことに気付く。

「そうね。じゃストレッツチしましょう。脚を開いて——」

なんてことだ！

パレオで隠れていたクラリス先輩の太ももとか胸の谷間とかが見えてくるじゃないか！

視線が釘付けになる。もう本能だから制御できるようなものじゃない。

近くに出すところ出してたわわになってる生足魅惑のマーメイドがいたら自動的にロックオンするのが男である。

クラリス先輩は気付いていないのか、それともわざと見せつけているのか、のびのびと身体の各所を伸ばし、「お先に！」とプールに飛び込んだ。

俺より泳ぎは上手いらしく、優雅に平泳ぎしてどんどん進んでいく。

「リオン君も早く！気持ちいいわよ」

振り返って呼んでくる。

俺は手足と関節を急いでほぐして水に飛び込んだ。

確かに温水プールで肌寒い夜に泳いでも気持ちいい。

クラリス先輩は俺の近くに寄ってくると――

「えい！」

水を掛けてきた。

「わっ！」

思わず目を瞑る。

「ふふ。こういうの一度やってみたかったの」

「やりましたね」

俺も反撃する。

両手の指を絡ませて、掌の間にたまった水を圧力で発射。前世から覚えている簡単な

水鉄砲だ。

「ひゃっ！ね、それどうやるの？」

「見て覚えてください！」

「ハ、ハ、ハ、こうかしら!？」

クラリス先輩が見様見真似で水鉄砲を飛ばして来る。

——楽しい。これじゃ本当にカップルみたいだ。

しばらく水鉄砲を撃ち合ったり、泳ぎで競争したり、浮き輪に乗って流されたりしたりピアアやアンジェともしたことない遊びをして、楽しい時間を過ごした。

こんな楽しい時間がずっと続けばいいのに——そんなことを思った。

◇◇◇

翌日。

収穫祭2日目にして修学旅行最後の1日。

その日も、俺はクラリス先輩と回る約束をしていたが、果たすことはできなかつた。

『マスター！緊急事態です。ファンオース公国がホルファート王国に対し、宣戦布告しました』

どうやらこの世界は俺に平穩無事なモブライフも、キャツキャウふふなりア充タイムも送らせてくれる気はないらしい。

遅すぎた救援

どうして？なぜ？なんで今？早すぎるにも程があるだろ！

ルクシオンの報告は俄かには信じられないものだった。

「確かか？」

『王国籍の船からの救難信号を傍受しました。「スメラギ島より帰還中、モンスター多数を伴う公国の艦隊の襲撃を受けた。彼らは第一王女ヘルトルーデ・セラ・ファンオースの名において王国に宣戦を布告。本船には修学旅行中の学園生徒が多数乗船している。至急救援を請う」だそうです』

「何だと!？」

他人事のように喋るルクシオンに憤りを覚えるが、今はそれどころではない。

スメラギ島から帰ってくる学園生を乗せた船といたら——リビアとアンジエが乗っている船じゃないか！

『如何しますか？本体とパルトナーはドックで待機中ですが』

「すぐに出せ！救援に向かわないと！このことは王国に伝わってるのか？」

ルクシオンは歯切れの悪い返事をする。

『ジャミングを受けているようだ。信号が微弱です。宣戦布告は既に王宮に伝わっているものと考えられますが、船の方は——』

「分かったもういい！情報収集を続ける！パルトナーの到着にはどれくらいかかる？」

『急ぎますが、やはりすぐというわけには——』

「俺も向かう。あのエアバイクは飛ばせるか？」

あのエアバイク、とは先日アトリー家から頂いた大型エアバイクのことだ。

ルクシオンが改造のために離れなかったのと、レアアイテム入手ポイントの探索に使うために持つて来ていた。

『可能です。今から出れば途中でパルトナーと合流可能です』

「よし。今から船に戻って——」

『いえ、それには及びません。ここまでは無人飛行させます。光学迷彩も装備していますので目撃される心配は無用です』

「そうか——じゃあ頼む」

それにしても、なぜ1年のこの時期に公国の相手をしなきゃならない？

どこで予定が狂った？

まさか——俺のせいかな？公国と裏で繋がった空賊とオフリー家を潰したから？

「あ、リオン君。先に来ていたのね。待たせたかしら？」

クラリス先輩が現れた。

俺は知っていることをクラリス先輩に言うべきか、しばし悩んだ。

「リオン君？」

クラリス先輩が怪訝そうに俺の顔を覗き込む。

下手な言い訳なんて思いつかなかった。

「クラリス先輩。たった今情報を得ました。ファンオース公国が王国に宣戦を布告したとのことです。学園生の乗る客船が公国の艦隊に襲撃されたとも。すみません。俺は行かないといけません」

クラリス先輩はしばし呆然としていたが、みるみる驚愕の表情に変わる。

「それ、確かなの？」

「確かです。詳しい説明はできませんが、俺はこれから襲われた船の救援に向かいます。アンジェとリビアを助けないと」

襲われた船がどうなっているのかはまだ分からないが、おそらく拿捕されているだろう。最悪、既に撃沈されているかもしれない。

だとすればリビアとアンジェは人質か、海の上か——どう考えても無事では済まないだろう。とにかく急いで助けに行かなければ。

「救援って、間に合うはずないでしょう？ 落ち着いてリオン君」

クラリス先輩が子供をあやすような口調で止めてくるが、翻意はない。

『シユヴェールト、到着しました』

「シユヴェールト？」

ルクシオンの奴、エアバイクに名前を付けていたらしい。

空中に突然、エアバイクが出現し、俺のすぐ横に降りてくる。

面食らうクラリス先輩をよそに俺は素早くシユヴェールトと呼ばれたエアバイクに乗り込み、ヘルメットを被ると操縦桿を握りしめる。

「リオン君!」

クラリス先輩が我に帰って引き止めようと手を伸ばしてくるが、その手は俺に届かなかった。

シユヴェールトが一気に上昇し、エンジンを唸らせて突き進む。

(クラリス先輩と収穫祭回って、その後レアアイテム探しに行くはずだったのに、どうして!)

俺を嘲笑うかのように風がびゅうびゅう唸る。



「——行っちゃった」

リオンが飛び去った方角の空を眺めてクラリスは眩く。

リオンが言っていたことは俄かには信じられなかったが、彼が動くときは何かがある。

クラリスの直感はその言ったことが事実だと告げている。

(すぐに確認を取らないと)

クラリスは通信機を使うため、急いで船へと戻る。

ふと、彼が言った言葉が頭をよぎる。「アンジェとリビアを助けないと」と、彼は言った。

(リオン君はあの2人のこと、本当に大切に想ってるのね)

アンジェリカに気に入られているからと遠慮しては可能性はゼロだと思い、思い切つてアプローチを試みたが、リオンは自分に転ばなかった。

彼自身は認めないだろうが、やはりアンジェリカとオリヴィアのことは好きなのだろ
う。自分に入り込む余地はないように思えてくる。

(——本当に馬鹿ね。後から入ってきたくせに、凶々しい)

だが、好きになってしまったのもう取り返しがつかない。

アンジェリカとオリヴィアに対する嫉妬とそんな自分への嫌悪感が混ざって、足取り

は重くなる。



パルトナーに着艦した俺はすぐにパイロットスーツに着替えてアロガンツに乗り込む。

『偵察機からの情報では客船と乗客乗員は無事です。ですが会話を分析した結果、アンジェリカが公国との交渉のため単身公国艦隊に投降したとのことです』

「何?!」

思わず俺は声を上げた。

客船に纏まっていくれた方が救出しやすかったのに。

アンジェリカの意図はなんとなく分かる。自分の身柄と引き換えに他の皆を見逃してもらおうとしたのだろう。

健気なものだが、正直余計なことを、と思ってしまう。

こうなったら救出計画の変更が必要だな、と考えながら俺はコンテナに大量の浮輪とゴム製の救命筏を詰め込んだアロガンツを発進させる。

コンテナの外側に追加のスラスタが搭載され、速力が大幅に向上しているが、それ

でも到着まであと20分ほどかかる。

そして——現実には待つてはくれない。

『マスター！公国艦隊が客船への攻撃を開始しました。人質はアンジェリカー人で十分と判断したようです』

恐れていた事態が起きてしまった。

「くそっ！とにかく急ぐぞ！」

操縦桿を目一杯押し込むとアロガンツは空気抵抗を限界まで減らす姿勢を取る。

早く！

早く！

1秒でも早く！

だが——ルクシオンは非情な報告をしてきた。

『客船、撃墜されました。不時着水を試みていますが、船体の損傷が甚大です。長くは浮いていられないでしょう』

間に合わなかった。こうなったら救助に切り替えだ。

「ルクシオン、本体は公国への陽動に使い。客船から公国の艦隊を遠ざけるんだ。その際にパルトナーとアロガンツで救助をやる」

『了解です』

「それとリビアはどこだ？」

『偵察機の情報によると牢屋に閉じ込められています』

「は？」

予想外の返答に俺は驚愕する。なぜリビアが牢屋に閉じ込められている？

まさか——アンジェがいなくなって、残された学園生のタガが外れたのか？

——助ける気が失せたが、そう都合よくリビアだけを救出する手段もない。

『本体、先行します。これより陽動任務を開始』

光学迷彩を解除したルクシオン本体がアロガンツを超える高速で水平線の彼方へと飛んでいく。パルトナーと外見上はそっくりだが、速度他の性能は比較にならない。

「言っとくけど引き離すだけだぞ！無闇に攻撃はするなよ」

『——了解です』

釘刺しておいて良かったな。明らかに渋々という感じの返事だった。

確かに公国の連中はリビア——と学園生の乗る飛行船を襲って、アンジェを攫ったが、ルクシオンに奴らを攻撃させるわけにはいかない。

ルクシオンにやらせたら、それこそ嬉々として殲滅するに違いないし、そうなったら厄介事が増えてしまう。それ以前にアンジェも攻撃に巻き込まれかねない。

だから今は公国の軍勢への対処ではなく、リビアを助けることに集中する。

構えると銃口に巨大な魔法陣が出現し、海面近くのモンスターの群れをロックオンする。

『雷属性、炸裂式、ヘルブラスト——どうぞ』

ルクシオンからゴーサインが出る。

「吹き飛ばー！」

引き金を引くと銃口から大口徑弾が飛び出し——魔法陣を抜けた途端に青白い光を発して飛んでいく。

弾はモンスターたちの頭上で炸裂した。

無数の雷撃が下方に降り注ぎ、モンスターたちを消滅させていく。

一気に大量の敵を殲滅する高火力魔法だが、雷撃はロックオンしたモンスターにのみ当たるので、生存者たちへのコラテラルダメージはない。

もつとも、非常に高度で扱いが難しい上に魔力を桁違いに消耗するのでルクシオンの補助がなければとても使えないのだが。

2発、3発と続けて撃ち込み、海面のモンスターを次々に屠る。

大量のモンスターを倒したことで膨大な黒い煙が巻き起こる。

その中から攻撃を生き延びたらしいモンスターが飛び出してくるが、すかさずドローンが追い立ててトドメを刺していく。

『モンスターの8割を殲滅しました。今が好機です』

「よし。急いでリビアの救助に向かうぞ」

コンテナを開けて浮き輪と救命筏を投下する。

空中に放り出された浮き輪と救命筏は自動で膨らみ、沈みゆく船の周囲に満遍なく落ちていく。

学園生や船員たちが我先にとしがみつくのを後目に、俺は沈みゆく豪華客船に肉薄する。

「ルクシオン、リビアのいる牢屋は？」

『特定済みですが——既に浸水しています』

「ツ！とにかく助け出すぞ」

クソ。どうしてこうも俺はブレるんだ。

リビアだけ助けられればいいと思ってたのに、あいつらの悲鳴とモンスターに喰われていく姿を見て——助けるために貴重な時間を割いてしまった。

『バトルアクスを使用。切り開きます』

アロガンツがライフルを格納し、代わりに斧を手に持つ。

そして豪華客船の船体を叩き壊しながら船内の奥へと進み始める。

見えていて少し不安になる。

「おい、大丈夫だろうな？」

『これが最短の救出手段です』

ルクシオンは淡々と答える。

既に浸水した区画に到達し、アロガンツは腰のあたりまで水に浸かっている。

『牢屋まで到達した後はマスターが救出してください。アロガンツは崩落防止のため動けないと予想されます』

「分かったから早くしてくれ！」

思わず大声で急かす。

ルクシオンは言い返さなかった。

アロガンツが何度目かの斧を振り下ろすと、牢屋の天井を突き破った。

『今です！』

ハッチが開く。

外に飛び出し、開いた穴から水で満たされた牢屋に飛び込む。

——リビアは力なく水中に漂っていた。

(リビア！)

魔法で肉体を強化してリビアのところまで泳ぎ、抱きかかえて穴に戻る。

穴をくぐって水面に顔を出すと、アロガンツが俺たちを拾い上げた。

「おい！リビアは生きてるのか？助かるのか!？」

『落ち着いてくださいマスター』

ルクシオンが冷静にリビアの身体をスキャンし、指示を出してくる。

『心肺停止状態です。速やかに心肺蘇生をしなければ完全に死亡します』

「分かった!」

心肺蘇生法なら前世で習ったのを覚えている。

胸骨圧迫30回と人工呼吸2回。これを5回やるごとに呼吸を確認する、だった。

ルクシオンがレーザーで示した位置に掌を当て、その上にもう片方の手を重ねて体重をかけて圧迫する。

『マスター、リズムが遅すぎます。もっと早くしてください』

ルクシオンが口出ししてくる。

そういうならお前がやれ!と言いたくなるが、球体ボディには無理である。

こんなことなら人型ボディを用意させておくんだった。戯れとはいえ、せつかく作ったのに。

30回圧迫するとリビアの頭を少し上げさせて気道を確保して鼻を塞ぐ。

口移しで空気を吹き込む。

2回息を吹き込むと、胸骨圧迫を再開する。

また30回やって、2回息を吹き込んで、胸骨圧迫。

腕が疲れてくる。なんだよこの根性なしが。動け。動けよ。

視界が滲む。目に入ったのは汗か、海水か、それとも別の何かか——

頼むから目を覚ましてくれよリビア！君がいないと世界の危機なんだ！

願いながら懸命に心肺蘇生を続けるが、リビアは息を吹き返さない。

視界を滲ませる何かが唇に到達した感触がする。

——まさか今世でのファーストキスが溺れた主人公様への人工呼吸になるとは。

こんなの不本意にも程がある。俺はどこで間違った？

『マスター、パルトナーからメデイックが到着しました。後は任せてください』

ルクシオンの声で我に帰る。

焦りで一瞬思考がフリーズしていたらしい。

いつの間にか到着していた小型艇からロボットたちが降りてきて、医療カプセルのようなものにリビアを収容し、手早く運び去っていく。

ロボットたちが乗り込むと、小型艇はすぐに発進して上空へと消えていった。

『オリヴィアは本体の医務室に運びます。それで命は助けられるでしょう。ですが——』

ルクシオンが言い淀んだ。

「なんだよ？」

先を急かす俺にルクシオンは残酷な宣告をしてくる。

『オリヴィアは意識を取り戻さない可能性が大です』

「——は？それって——植物状態、ってやつか？」

『はい。残念ですが、低酸素状態が長すぎました。脳へのダメージが深刻です』

全身の力が抜けて俺は膝をついた。

目の前が真っ暗になったように錯覚する。

『マスター……マスター……！』

ルクシオンの声が遠くなっていき、世界がどんどんぼやけていく。

——どうしてこんなことになった？

——何がいけなかったんだ？

——本当にこの世界はモブに敵しい。

交戦準備

強い衝撃と鋭い痛みで我に帰る。

『マスター……この船はもう沈みます！直ちに脱出を』

センサーアイに電撃を纏ったルクシオンがまくし立てている。

さっきの痛みはこいつなりのシヨック療法だったらしい。

ふらつく足で立ち上がり、アロガンツのコックピットに乗り込む。

アロガンツは自動操縦で浮かび上がる。

既にパルトナーからいくつも小型艇が飛んできて生存者を拾い上げている。

理不尽なものだ。世界を危機から救うはずのリビアは牢屋に閉じ込められたまま溺れて意識不明の重態になって、なんの役にも立たなかったらしい——そしてこれからもゴマをするだけの役立たずな——臆病で卑怯な似非貴族共が助かっている。

皮肉なことに、こみ上げてくる怒りが俺を放心状態から引っ張り出した。

いつそ見捨ててやろうかと思つたが、やはりできなかつた。

アンジエが自分一人で公国に投降してまで守つてやろうとした連中だ。ここで見捨てたらそれこそアンジエが報われない。

「あいつらを收容したらアンジェの救出に向かわないとな。できるだけ急いでくれ」
『了解です』

操縦席の背もたれに寄りかかる俺だが、ルクシオンがまた新たな報せを持つてきた。

『マスター。4キロほど離れた海域に鎧を確認しました。撃墜されているようです』

「あの船に積んであったやつか？」

『不明です』

つまり行つて確かめるしかないつてか。

——まあいい。ここで似非貴族共が救助されているところを見て胸糞悪い思いをす
るよりマシだろう。

俺は身体を起こし、操縦桿を握った。

「お前は——」

沈みかけていた鎧の胸元をこじ開けた俺は絶句した。

搭乗者は青髪 of 駄眼鏡、じゃなかった、剣豪のクリス——「クリス・ファイア・アーク
ライト」だった。

飛び散った破片が身体のおちこちに突き刺さつて出血しているがまだ息はある。

どうやらこいつは客船を守ろうとたつた1人で鎧に乗つて戦つたらしい。

——馬鹿だろ。なんで艦隊と無数のモンスターを相手に鎧1つで立ち向かうなんて

発想が出てくるんだよ。

アンジエといい、クリスといい——なんでそう自分1人を犠牲にするんだよ。そんなのちつともカッコよくもなんともない、ただ——ただ悲劇的ただけじゃないか。

心の中で悪態を吐きながらも俺は涙腺が緩んでいた。

剣の修行に全てを捧げ、殺し合いである決闘をお上品な試合と勘違いし、散々不幸我慢と謙遜を装った剣術自慢をしてきた駄眼鏡にこんな気概があつたなんて——助けてやりたいって思ってしまうじゃないか。

鎧の胸元を閉め、アロガンツに戻ると鎧ごと持ち上げる。

そのまま俺はパルトナーへ向かって飛んだ。



「ん——はっ、ここは!? え、パルトファルト!」

パルトナーの一室で目を覚ましたクリスは俺を見て目を見開いた。

「随分男前になつたじゃないか剣豪様」

皮肉混じりに挨拶してやるとクリスは自分の頬をつねった。

「——幻を見ているわけではないようだな」

「現実だ。撃墜されて海に浮かんでたお前を俺が拾った。泣いて感謝していいぞ」

「助けられたことには感謝するが——なぜお前がここに？待て、ほかの皆はどうした？船は？無事なのか？」

クリスは思い出したように学園生たちの心配をする。

「残念だが俺が来た時には船は沈みかけて、モンスター群れに囲まれていた。人数は分からないが——だいぶ犠牲が出たみたいだ。でも生き残った連中は救助してこの船に収容してる」

「そうか——」

クリスは目を閉じた。

祈りのような仕草をする。犠牲になった人たちへの祈りだろうか。

祈りの仕草が終わると俺は気になっていたことを質問する。

「それよりお前に聞きたいことがある。襲撃されたとき何があつたんだ？公国の連中は何と言っていた？」

こいつの証言から何か手掛かりが得られるかもしれない。

なぜ公国がこのタイミングで王国に攻めてきたのか、なぜ豪華客船を襲ったのか——その手掛かりが。

クリスは俯き、難しい顔をして話し始める。

「スメラギ島が見えなくなつて程なくしてモンスターの大群が現れた。その後公国の艦隊が現れて——奴らがモンスターを従えていた」

おそらくモンスターを操る「魔笛」の効果だろう。

だが、俺が知っている効果はラスボスの召喚で、モンスターの大量を操れるなんて知らなかった。

「そして——ああそうだ。敵旗艦と思しき飛行船から映像でヘルトルーデ王女が宣戦を布告してきた。その後使者がやつて来た。そいつは最初こう言つたんだ。男爵家以上の者は捕虜として扱う、それ以外の者は必要ないと。だが——」

クリスは話を区切り、右手で顔を覆う。

俺はクリスが再開するまで考え込んでいた。

ヘルトルーデ、か。あの乙女ゲーのラスボスだ。正確にはラスボスを召喚する者。

ゲームでは旗印として公国軍の陣頭に立ち、王国軍との決戦でラスボスを召喚していた。

その彼女が率いていた公国艦隊が客船を襲つた目的は——男爵家以上の者は捕虜として扱う、という発言から推測するに、貴族子女を人質に取つて王国との交渉材料にすること。

だとしてもなぜピンポイントで学園生の乗った客船を襲った？ いや、襲えた？
クリスが話を再開し、俺の思索は中断する。

「アンジェリカが名乗り出た。人質は自分一人で十分、他の者たちは見逃せと。それで単身交渉に向かった。私には——何もできなかった。情けない限りだ」

再び怒りが沸いてきた。

「——そうかよ。誰も反対しなかったのか？」

「できたと思うか？ 公爵令嬢の判断に異を唱えられる者など——お前くらいなものだぞ。増してあの状況で、アンジェリカの身柄と引き換えに命が助かるかもしれないという希望を持っていた者も大勢いた。普通クラスの者たちだ。彼らに諦めて死ねと言うことなど——」

——命の天秤、か。

大勢の無能な似非貴族&舐め腐った亜人奴隷とアンジェ——どちらかしか助けられないなら、俺は迷わずアンジェを助けるが、そう考えるのは俺だけだということか。

「——声を上げたのは特待生だけだった。その特待生は——女子生徒の一人と喧嘩して投獄されたよ」

——そうか。そういうことか。

たぶんアンジェはリビアを助けるために一人投降したのだろう。

そしてリビアの方は——アンジエを差し出せば助かるかもしれないという誘惑に屈しなかった。

——本当にやりきれない話だ。リビアと他の大勢の命を救うために1人勇気を出したアンジエに俺は何と言えればいい？

客船は撃沈され、大勢の犠牲が出て——一番守りたかったはずのリビアは今意識不明の重態。

——いや、今考えても仕方ないか。

「でも結局——」

「そうだ。公国の奴らは私たちを攻撃した。人質はアンジエリカー1人で十分、貴族らしく散ってみせろと。私は鎧で突破を試みたが——このザマだ。私に話せるのはここま
でだ」

クリスは再び俯いた。

俺は溜息をひとつ吐いて部屋を出る。

「バルトファルト——」

背中越しにクリスが声を掛けてきた。

「お前——アンジエリカを助けに行くつもりか？」

俺は答えずにドアを閉めた。

部屋を出た俺はブリッジに向かう。

クリスの証言からは大した情報は得られなかったが、何のことはない。公国の連中に直接問い質せばいいのだ。

「ルクシオン、王国軍は動いてるか？」

『お待ちを——捉えました。フィールド領及び王都から艦隊が出動しています』

「よし、その艦隊と交信できるか？」

ルクシオンが光学迷彩を解除して右肩辺りに出現して言った。

『理由をお聞きしても？ アンジェリカの救出、公国軍の制圧共にアロガンツとパルトナーだけで可能ですか？』

「アンジェの救出はもちろん俺がやる。でも公国の艦隊とモンスターの相手まで俺たちだけでやると後々面倒なことになりかねない。ここは共闘した方が得策だと思う」

ルクシオンは少しの間レンズを動かし、考えるような仕草をする。

『——了解です』

どうやら納得してくれたようだ。

「公国艦隊は捉えてるな？」

『偵察機が追跡中です。本体を攻撃しようとしていましたが、見失い、本来の針路に戻っています。王国艦隊との接敵まであと一時間弱と予想されます』

「よし。こっちはどれくらいで追いつける？」

『10分以内には』

「よし。王国艦隊と通信を繋いでくれ」

『直ちに』

ルクシオンがこちらに向かつて来ているという王国軍艦隊に通信を繋ぐ。

「交信成功しました。音声通話が可能です」

通信機の受話器を手取る。

ザザザ、というノイズの後に男性の声が聞こえて来た。

『軍用周波だぞ。何者か？』

訝しむような声。まあ無理もないか。

「ホルファート王国籍、飛行船パルトナー。現在公国艦隊を追跡中です」

『——操艦責任者は誰か？』

「ホルファート王国学園1年生、リオン・フォウ・バルトファルトです」

『学生？ふざけるのも大概に——は？ハッ！直ちに！』

向こうの通信士が何か慌てたような返事をする、見知った声が聞こえて来た。

『フィールド艦隊司令、「アーヴィング・フォウ・フィールド」だ。君はあのリオン・フォウ・バルトファルト男爵か？』

ブラッドとグレッグの廃嫡を取り消させる工作をやった時に顔を合わせたブラッドのパパさんだ。

「そうです。こちらで公国艦隊を捕捉しています。応援をお願いしたく」

丁寧をお願いする。

『その声、やはり君か。だが、君は修学旅行中ではなかったのかね?』

「公国艦隊の襲撃を受けたとの通信を傍受しまして。パルトナーを出して救助に向かった次第です」

通信を傍受したのはルクシオンだがそれは内緒だ。

『——その話が本当なら君の船は随分速い見えるね。おまけに君自身も耳が良いよ。うだ。——まあ良い。救助に向かったと言ったね。生存者を収容しているのか?』

「はい」

『よし、ご苦労だった。公国艦隊の相手は我々がする。君は救助した生存者を王国に送り届けるんだ。いいね?』

アーヴィングさんは自分たちだけで公国の艦隊を相手取るつもりのようなのだ。

だが俺は言われた通りにするつもりはない。

「承りかねます!」

『何?』

明確な拒絶にアーヴィングさんは驚いた声を上げる。

「救助した生存者の1人、クリス・フィア・アークライトの証言によると、レッドグレイブ公爵家のアンジェリカさんが公国の人質になっています。自分はこれから彼女の救出に向かいます」

「何と！正気かね？やめておきなさい！君だけではどうにもなるまい？そもそもどうやって救出するつもりかね？」

「アロガンツを使います。アロガンツで殴り込みをかけます」

「君の鎧か？強力だとは聞いているが1機だけでは無理だろう。ここは我々から部隊を編成するから——」

「いいえ結構です。むしろ俺1人の方がいい。公国艦隊の現在位置と針路、速力の情報を送りますので応援よろしく！」

『おい、君！待ちた——』

アーヴィングさんが言い終わる前に俺は通信を切った。

「ルクシオン、公国艦隊の情報を送信しろ」

『送信します』

合図するとルクシオンが情報を送信した。

「まあ、後でお咎めがあるだろうけどアンジェを救出できれば文句ないだろ。ルクシオ

ン、アロガンツの準備は？」

『補給・点検共に完了しています。出撃は30分後が良いかと』

随分間を置くな。一刻も早くアンジエを助けに行きたいのだが。

「王国艦隊とタイミングが合わないか？」

『はい』

——アンジエにはもう少しだけ待っていて貰わないといけないな。



公国艦隊。

アンジエは旗艦の一室に監禁されていた。

椅子に力なく座り込み、その表情は酷くやつれている。

「私の投降で見逃すはずでは？」

「面白いことを言うのね、アンジエリカ。ゲラットは1度でも見逃すなんて言ったかしら？」

「私は思うの。人質は貴女1人で十分じゃないかしら？」

ヘルトルーデの言葉にアンジエは愕然とした。

「何だ?! 男爵家以上の子弟だぞ! 人質に取らずに殺すつもりか!」

騒ぐアンジエに公国の騎士たちが剣を向ける。

ヘルトルーデは淡々と言い放った。

「貴女が連れ去られた時抵抗しようとしたのは一人だけだったそうね。なんて薄情で氣骨がない者たちなのかしら。貴族に相応しいとはとても思えないわね」

「何を言っている——」

「貴女にはこれから全てを見せてあげるわ。ここから王国が滅ぶさまを、ね」

この会話の1時間後、公国艦隊の砲撃が始まった。

個人単位での小規模な抵抗もあつたが、焼け石に水。客船はたちまちシールドを貫かれ、ボロボロになって海に落ちていった。

落ちた船にモンスターが群がり、学園生や船員が大勢抵抗虚しく喰われていった。

アンジエはその光景を見てヘルトルーデを怒鳴りつけた。

「この人でなしが！貴様こそ貴族に相応しくなどない！卑劣な殺戮者だ！」

荒れ狂ったアンジエは公国の騎士たちに取り押さえられ、監禁された。

（こんなことになるとは——私は何もしない方がよかつたのか？）

その問いに答える者はいない。

浮かぶのは最後に見たりビアの顔。

「アンジエ！行かないで——」

アンジェが公国の使者と共にボートに乗り込む直前、リビアはそう言った。誰かの専属用人に取り押さえられて悲痛な表情で。

そのリビアは今頃海に沈んだか、モンスターに喰われたか——

「すまない——リビア」

たった一人、自分を案じて引き留めようとしてくれた友人を思い、アンジェは涙を流す。



格納庫に待機させていたアロガンツの前で出撃のタイミングを待っていると、ルクシオンが報告してきた。

『マスター。収容した生存者の一部がブリッジ前で騒いでいます。マスターを出せと』
「放っておけよそんなの」

『よろしいのですか？周囲を扇動し、許容範囲を超える騒乱行為を起こした場合、鎮圧せざるを得ませんが』

——仕方ないな。

ブリッジ。

俺を呼びつけたのは3年生の女子だった。

毛先がドリルになった巻き髪で、気が強そうな顔立ちも相まって女王様に見える。

「貴方、どういうつもりかしら？」

開口一番、上から目線な台詞を吐いてきた。

怒りが再燃し、俺は思わず口調が荒くなる。

「助けて貰ったくせに随分態度がでかいじゃないか。そつちこそ名前と用件を先に言つたらどうなんだ？」

「私を知らないと言うの？ 私は『ディアドリー・フォウ・ローズブレイド』よ。ローズブレイド伯爵家の娘！」

ディアドリーと名乗った女子は苛立ちを見せる。

「知らねえな。ローズブレイドだかローズマリーだか知らんが、所詮臆病で卑怯な似非貴族の1人だろうが」

「なっ！何ですって？」

顔を真っ赤にするディアドリー先輩。

だがここで罵り合っても始まらないので俺は話を戻す。

「それより用件は何だ？俺も暇じゃないんだが？」

「ツ！貴方、どこに向かうつもり？剣豪に聞いたわよ。アンジェリカの救出に向かうつ

もりかしら?」

——チツ。あの駄眼鏡め。思ったより口の軽いやつだ。

「だとしたらどうだつて言うんだ?」

「正気!?! 私たちを乗せたままこの船で公国の軍勢と戦うなんて問題外よ。まず私たちを安全な場所まで送り届けるのが先でしょう!?!」

——ふざけるなよ。アーヴィングさんみたく第三者から言われるならともかく、アンジエを見捨てておめおめと生きて帰ろうとした奴に言われたくはない。

「嫌なら船を下りろ。泳いで帰ればいい。出来るもんならな」

「何を言つて——」

そうだ。いいこと思いついた。

俺は艦内放送用のマイクを手にとってオープン回線にした。

これで艦内全ての場所に俺の声が届く。

俺は深呼吸すると声を張り上げる。

「全員、耳をほじつてよく聞け! 俺はこの船の所有者、リオン・フォウ・バルトファルトだ! この船はこれから公国の手に落ちたアンジェリカ・ラファ・レッドグレイブを奪還するため、公国艦隊を追う!」

攻撃開始時刻

俺の宣告に対する反応は2種類だった。

ふざけるなど騒ぎ立てるか、だんまりを決め込むか。後者は男子が多かった。

モニターからに映る騒ぎを見て俺は溜息を吐いた。つくづく腐った連中だ。

だからこそ——コイツらには落とし前をつけてもらおうとしよう。

俺はマイクを握り直し、かつてないほどの声で怒鳴った。

「ガタガタうるせえんだよこの似非貴族共が!!」

一瞬で騒ぎが静まる。

再び騒ぎ出す前に俺は言葉を紡ぐ。

「お前らは自分たちが何でこんな目に遭うのかって思ってるだろうが、俺に言わせれば簡単だ。お前らが情けない腰抜けばかりだったからだ!」

その言葉に再び怒号が飛び交う。

『似非貴族とはなんだ!』

『何にも知らないくせに!』

『腰抜けはお前の方だろうが!出て来い!』

『大体アンジェリカが悪いのよ！一人だけ助かろうとしたのよ！』

キャンキャンよく吠える奴らだ。頭にくる。

特に最後の方は殺意すら覚えるね。

「はあ？どう考えてもそうだろうが。俺は知ってるぞ。アンジェがその身を公国に差し出した時、お前らが何してたか。安堵していたんだよな？黙って嵐が過ぎ去るのを待ってたわけだ。冒険者ってのは仲間を見捨てるという行為を軽蔑するんだつたな。なのにその末裔のお前らときたら何だ？どいつもこいつも臆病で、卑屈で、卑怯で勇敢さや気高さの欠片もない！小賢しいネズミみたいな似非貴族だ！」

その罵倒に真っ先に反応したのは――
「取り消しなさい！」

デアアドリー先輩だった。

だが俺は鼻で笑って拒否する。

「嫌だね」

そしてマイクに向き直り、清々しい笑顔で言ってる。

「本当の敵である公国軍にはロクな抵抗もできずにやられつ放し。おまけにみんなを助けるために、たった一人でその身を差し出したアンジェを助けに行こうともしない。そればかりか罵る声まで出てくるとは何という体たらく！お前らの先祖は苦勞して成功

した冒険者なんだろうけど、今のお前らにはまるで価値がない！」

いつの間にか怒号は止んでいた。

——当然だな。言い返す言葉もないだろう。

「公国が人質はアンジェだけで十分と判断するわけだ。お前らには冒険者の末裔であるホルファート王国貴族に相応しい資質はまるでない。果てしなく広い大空に飛行船で旅に出た勇氣も、ダンジョンを攻略した知恵も、モンスターを屠ってきた力も——何ひとつとして受け継げなかった情けない弱虫の出来損ないがお前らだ」

「小さい頃からご先祖様たちの冒険話を聞いて育って、学園に入って英才教育を受けて——それで今まで一体何を学んできたんだ？ 見栄を張り合って、空気を読むスキルだけか？ 先祖の功績にすがって威張り散らすくせして、攻撃されたら何もできずに蹂躪され、助かったら助かったで敵の手に落ちた仲間を見捨てて、安全なところまで逃げようとする。そんなんじや立派なご先祖たちも泣いて——いや、笑ってるね！」

学園の生徒たちが怒気を纏い始めたのがモニター越しに見えた。

——作戦成功だ。あともう一押し。

「腹を抱えて笑っているだろうな！ 嗚呼、俺の子孫たちはなんて情けないんだろうって！ 貴族なんて名ばかり、冒険者の血筋だけが取り柄の情けない奴らだ、ってさ」

俺は高笑いしながら先祖と比べて生徒たちを嘲る。

「お前らの素晴らしいご先祖様たちは頑張つて貴族になつたけど、それも全て無駄だつたな。だつて跡を継ぐのがお前らなんだから。何の抵抗もせずに公国に負けて、今も逃げようとしている腰抜けの根性なしどもだ。ご先祖様たちの素晴らしい功績はお前らの情けなさで上書きされる。これぞまさに泥を塗る行為だね。ご先祖様の功績に泥を塗つて、子々孫々にまで大恥かかせるわけだ。きつとこのまま帰つたら、お前らはこう言われるぞ。貴族の面汚しつてな！」

貴族の最もデリケートな部分——冒険者の末裔であることへの誇りを煽つてやる。効果はたちまち現れた。

「ば、馬鹿にするな！俺は——先祖に恥ずかしい思いなんかさせない！家名に泥を塗つてたまるか！」

男子の1人がようやくその誇りを思い出したらしい。遅いんだよ。

「随分とご立派な心意気だな。だがここで何もしていないなら同じことだ。胸に手を当てるて聞いてみるよ？聞こえないか？お前らに流れてる冒険者の血が情けないつて笑つてる声が！」

多くが胸に手を当てるている。船員や、専属使用人まで。

「ほらどうだ？聞こえないか？ゲラゲラ笑つてる声が。それとも悲しんでるか？呆れて肩をすくめてないか？中には笑わせてくれてありがとうつて言つてる人もいるかもね。

だがな、これだけは確かだ。立派なご先祖様ならこう言うぜ。喧嘩を売られて、何もできずに叩きのめされた挙句、仲間を見捨てて逃げる。そんな臆病者に貴族を名乗る資格はないってな！」

言い返せる奴はいなかった。

いたとしても笑いやにしてやるだけである。

俺は真顔になって怒鳴る。

「既に王国の艦隊も出動している。公国が艦隊と接敵すれば、アンジエは間違いなく生きた盾にされる。そうなる前に俺たちの手でアンジエを取り返し、公国の目論みを挫く！地に落ちた名誉と誇りを少しでも回復したいと思っているのなら！アンジエを取り返すのに力を貸せ！嫌ならさっさと俺の船から下りろ！どっちにするか、今ここで選べ！」

それを聞いてディアドリ先輩が言葉を発した。

「——そうね。ローズブレイド家の娘ともあろう者が何もせずには蹂躪されて、おめおめと逃げ戻ったなんて末代までの恥だわ。みんなはどうなのかしら？このまま好き放題言わせておいていいの？この男が言うように、本当にご先祖様に合わせる顔がないわよ！」

すると次々に男子たちから声上がる。

「舐めるんじゃないぞ糞野郎！」

「俺らがどれだけダンジョンで鍛えてきたと思ってるんだ！一年のくせに！上級生の實力を見せてやる！」

「偉そうにペラペラと！お前に言われるまでもねーんだよ！」

「武器庫はどこだ！武器を持ってこい！」

男子たちがやる気になった。

やはり女子に激励された方がやる気出るらしい。

最初からやる気出せ馬鹿共が！

「ここまで言ったのだから当然何か考えがあるのでしようね。貴方はどうやってアンジェリカを奪回するというのかしら？」

ディアドリー先輩が腕を組んで問うてくる。

よくぞ聞いてくれた！

「よく聞け馬鹿共！お前らに敵旗艦に乗り込んでアンジェを救出する、なんて大役は務まらないだろうから、それは俺がアロガンツを使って1人でやる。だがそれには敵の目を逸らさせる陽動が必要だ。それをこの船とお前らでやる！」

「たった1人で乗り込む気？貴方正気なの？」

ディアドリー先輩が予想外という顔をする。

「正気だ。公国艦隊がよだれを垂らしてこの船に夢中になつてる隙にかつさう。その後は王国艦隊と合流して公国に思い切り殴り返してやるのさ」

本気か？という声が囁かれるが、デアアドリー先輩は笑い出した。

「いいわ！貴方、すごくいい！それから——なんで女子は誰も声を上げないのかしら？ここで逃げるような臆病者は私が絶対に許さないわよ！」

デアアドリー先輩が女子に向かつて檄を飛ばす。

うんうん。男子にはプライド、女子にはボスに対する恐怖。実に効果的な組み合わせじゃないか。デアアドリー先輩が生きていたのは好都合だったな。

女子も渋々覚悟を決めたようだ。

「さあ時間がないぞーさっさと戦闘準備にかかれー！」

艦内が騒がしくなる。

俺の意図を汲んだルクシオンの指示でロボットたちが武器を配り、受け取った男子生徒たちや船員、専属使用人や女子たちまでも持ち場へと走る。

『戦える者は武器受領の後、誘導に従い、速やかに指定された持ち場につくように』ルクシオンがアナウンスを流す。その声は人間の女性に偽装されたものだ。

詳細な戦力配置はルクシオンに任せておく。

銃を持った射手は艦内各所の窓から狙撃、その他は甲板で槍だの剣だの魔法だのでモ

ンスターを迎撃するか、シールドを展開。

本当はそんなことしなくてもパルトナーは十分な防御力を持っているのだが、わざわざ教えてやることもない。

ただ死人が出ないようサポートはさせておこう。

懐中時計を見る。随分長く感じたが、デアアドリー先輩に呼び出されてから今まで20分と経っていなかった。



「バルトフアルト！」

格納庫に向かっていると声を掛けられた。

声の主はクリスだ。

「何だよ？」

「この船に他の鎧は積んでいないのか？ 積んでいるならば使わせてくれ！ 公国の奴らは人が相手にできないような大型のモンスターも引き連れていた。鎧の援護がなければ対処が難しい」

——知っている。

だがコイツは既に満身創痍だ。ルクシオンが動けるようになるまで治療したが、鎧での戦闘には無理があるだろう。

救助した連中にしたって、戦えないほど重傷な奴は医務室に残している。

「あるにはあるけど——その状態で戦う気か？ 冗談は止せよ」

「そこを頼む！——これは私のけじめだ。大勢を救うためと言い訳して、貴族としての誇りを見失い、アンジェリカを生贄にして逃げようとした。お前が言った通り、ここで戦わなければ私は死んでもあの世で先祖に顔向けできない！」

——けじめ、ねえ。

正直言つて無謀だし、コイツが懸念している大型モンスターはパルトナーの対空砲で対処しようと思っていたのだが——止めても無駄か。

「——ついて来い」

俺は溜息をついてクリスを手招きし、歩き出す。

アロガンツのほかに積んであった鎧というのは「ウィングシャーク」なる空賊団を退治した時、分捕ったやつだ。

アロガンツに似たマツシブなパワータイプの鎧で、買い手が付かずにパルトナーに積んだままになっていたのだ。

俺はその鎧を指してクリスに言った。

「これを使え」

「こ、これは——お前の鎧に似ているな」

クリスは複雑な表情をする。

「性能はアロガンツに及ばないけど、喰らい付かれても壊れないし、振り解けるパワーもある。今のお前じゃ空戦機動なんて無理だろうから丁度いいと思うぞ」

大体、現在主流の高機動スリムタイプの鎧は脆すぎるんだ。速力は装甲の代わりになんてならない。兵器なら防御力が最優先だろうが。

「それはそうかもしれないが——剣はないのか？」

クリスは鎧の背中に装備された大鉈を見て言った。

「文句が多い奴だな。同じ刃物だろうが」

俺は言い捨ててアロガンツに乗り込む。

胸元のハッチが閉まり、周囲の映像が映し出されると、クリスがタラップを昇って鎧に乗り込むのが見えた。

慣熟のためか、いくつかの動作を試している。

俺は再び懐中時計を見た。

出撃まで、あと5分少々。



甲板。

「見えたぞ！」

誰かが叫ぶ。

遠くからでもそれと分かるモンスターの大群。

『全員戦闘用意。これより同航戦に向け前進する』

アナウンスが流れ、全員が気を引き締める。

だが恐怖を拭いきれない者も中にはいた。

震えている者、呼吸が荒い者、逃げちやダメだと自分に言い聞かせるように呟いている者――。

ディアドリーはつい先程までの自分と彼らを一瞬重ね合わせる。

そして深呼吸して言い放った。

「どうやら皆勘違いしているようね。これから死ぬかもしれない――そう思いかしら？」

答える者はいないが、否定しないと言うことはそうなのだろうと、ディアドリーは判断する。

「その考えは今すぐここで捨てなさい。私たちはとつくに死んでゐるわ。この戦いは——
——私たちが生き返るための戦いのよ！」

デイアドリーは声を張り上げる。

「襲撃されて、何もできずに蹂躪される臆病者だった私たちは船を沈められた時に死んだ！ならば今ここに居るのは誰かしら？ 情けないままステュクスを渡り損ねた亡霊？ 違う！今ここに居るのは、勇敢な冒険者の末裔、誇り高き王国貴族として生き返る者たちよ！ 私たちはそれを証明するために戦う。卑劣な敵に、冒険者の血を引く者たちの勇姿を見せつけてやるのよ！」

デイアドリーはひと息ついて——静かに言った。

「王国の——旗を掲げなさい」

男子生徒の誰かが「旗を掲げろ」と呟く。

すると別の男子も同じことを呟き、また別の男子も呟き、その言葉は伝言ゲームのよう
うに広がっていく。

「旗を掲げろ」

「旗を掲げろ」

「旗を掲げろ！」

声は甲板に満ち、大きさを増していく。

するとどこから操作しているのか、巻き上げ機が動き出し、マストにホルファート王国旗を掲揚する。

揚がっていく旗を見て武者震いし、周囲に旋風を纏い始めたデアドリーが力強く叫ぶ。

「旗を掲げろ!!」

甲板に集まった生徒たちや船員が一斉に武器を掲げ、鬨の声をあげる。

甲板だけではなく、窓に配置された射手たちや医務室に残された負傷者たちまでもが声を上げる。

旗が揚がりきつてもその声は止まらない。



「——すごいもんだな」

俺はアロガンツのコックピットに映し出された映像で甲板の様子を見て感心していた。

よくもまあ、こうまで扇動できるものだな、と。

『マスターにはとても務まらない役ですね』

ルクシオンは通常運転で皮肉を言ってくる。

「俺には似合わねえよあんな役。俺はモブだし。さつきみたいに裏方で支える方がよっぽど向いてるだろ」

俺がディアドリー先輩と同じこと言っても、みんなマトモに聞かないだろう。

だから俺は煽るといふやり方を選択したのだ。決してあいつらへの怒りと軽蔑をぶつけたかっただけじゃないんだぞ。——本当だぞ。

ちなみに「さつき」というのは甲板でみんなが「旗を掲げろ」と叫んでた所でルクシオンに王国旗掲揚の指示を出したことだ。

実に素晴らしい演出をして差し上げた。俺って気が利くよね。

『ふ——モブ、ですか。マスターは自己認識が実態と致命的に乖離していますね』
ルクシオンが鼻で笑うような効果音付きで言った。

「——言ってる。さてと、そろそろだな」

出撃は秒読み段階だ。

『最終計算、完了。カウントダウン、開始します』

タイマーが表示され、数字が減り始める。

格納庫の扉が開き、アロガンツは飛び出す構えに入る。

『バルトファルト——』

クリスの声が聞こえてきた。

『幸運を祈る。この鎧、使わせて貰うぞ』

「お前こそ、な。死んでも鎧のせいにするなよ」

皮肉混じりの返答にクリスはふっと笑った。

『生きてまたマリエの笑顔を見るまで死ぬつもりはない』

——最後にオチをつけやがった。お前、アイツのどこがそんなに良いんだ？

「ハッ、そうかよ。——絶対に死ぬなよ」

そう言い終わるや否や、カウントダウンが終了する。

アロガンツは大空へと飛び出した。

待っててくれアンジエ。俺が必ず無事に連れて帰る。

敵の視認範囲外の高空を目指してアロガンツは上昇する。

『パルトナー、攻撃を開始します』

ルクシオンがそう言うと、下方でパルトナーの主砲が火を噴いた。

戦いが——始まる。

公爵令嬢奪還戦

——戦いが始まる少し前。

「何ですか？あの船は？」

部下から新たな艦影を視認したとの報告を受けたゲラット伯爵は双眼鏡を覗き込んで訝しむ。

「不自然な形ですね。それに——大砲が2門だけ？」

隣で同じように双眼鏡を覗き込む部下も不思議そうにしている。

艦砲は手数を重視して舷側の砲郭に搭載されているものであり、旋回式の砲は小型艦にしか搭載されていない。

なればこそ、目測で700メートルはある巨大な敵艦が旋回式の砲を2門しか搭載していない、というのは彼らにとつては不可解だった。

しかもその船はこちらに砲門を向けてどんどん接近してくる。

「どうやら王国籍の船のようです。如何しますか？」

部下が伺いを立ててくる。

「沈めなさい。あんな品のない、武装も貧弱な飛行船で我々に挑む愚を教育してやるの

です。よろしいですね？殿下」

ゲラットがヘルトルーデに同意を求めると、ヘルトルーデは頷く。

「全艦転進！濡れ鼠どもは捨て置き、あのデカブツを攻撃するのです！」

ゲラットの命令で一齐に艦隊はエンジンを唸らせて敵艦目掛けて進み始める。

だが、敵艦はあっさりと回頭して逃げ出した。追っても追っても距離は縮まらず、大砲の射程内に収めることは遂にできなかつた。



「また現れたのですか？目障りな」

ゲラットは再び姿を見せた巨大な敵艦を見て舌打ちする。

「伯爵。どうやら今回は交戦の意思があるようです。その証拠に王国旗を掲げて、甲板にも兵員と思しき人員を配置しております」

部下の報告が事実であると双眼鏡で確かめたゲラットは少し考え――

「いいでしょう。来るならば叩き落とすまでです。今度は逃げられないようモンスターに包囲させましょう。よろしいですね、殿下？」

ゲラットはヘルトルーデの方に向き直りながら言った。

ヘルトルーデは頷き、次女に合図して魔笛を持つてこさせると、吹き口に口を付ける。名状し難い不思議な音色が響き渡ると——モンスターたちが一斉に動き出し、敵艦目掛けて突き進んでいく。

「いくら何でもこの数のモンスターに襲われれば身動きできなくなるはず。その隙に距離を詰めれば——」

ゲラットはニヤリと笑つて髭を撫でる。

「全艦戦闘用意！同航戦に備えろ！」

艦長が命令を伝え、通信士が僚艦に発光信号で伝達する。

「全艦面舵回頭！右舷各砲台要員は速やかに持ち場につけ！」

公国の艦隊が見事な単縦陣を組み、敵艦に向かって進む。

「敵艦との相対速度変わらず！有効射程まであと2分ほどです！」

部下の報告にゲラットは満足げに髭を撫でる。

「さあ——来るのです」

そう言つた直後——

「敵艦発砲!!」

部下が叫ぶ。

「馬鹿な！この距離で当たるわけが——」

言い終わらないうちに砲弾が先頭を走っていた軍艦に着弾する。

砲弾はシールドに当たって爆発したが、その爆発の大きさにゲラットたちは戦慄する。

『シールド消滅!』

被弾した軍艦からの悲鳴のような通信を通信士が伝えてきた。

『後続艦と交代させる! 全艦シールド出力を最大に! 有効射程に入るまで持ち堪えろ!』

別の軍艦に乗っていた指揮官が慌てて命令を下す。

騒がしくなる通信にゲラットは内心焦り始めた。

直後、部下が叫ぶ。

『敵艦再度発砲!』

『何!? 早すぎるぞ!』

『衝撃に備えろ!』

砲弾は後続艦と交代しようとしていた先頭の軍艦に再度直撃した。

『被弾! 機関部壊滅! 舵取機室も被害甚大! 航行不能!』

あつという間に1隻が脱落した。

最新型の戦闘艦に優秀な乗員を乗せていたというのに、たったの一撃でシールドを失

い、さらに間髪入れずにもう一撃であっさり航行不能に追い込まれたのだ。

「ええい、化け物ですか——！」

ゲラツトは歯ぎしりをする。



一方その頃、パルトナーでは歓声が上がっていた。

たった2斉射で公国の軍艦を1隻脱落させた。パルトナーの火力に、生徒たちは勇気付けられ、士気は大いに上がる。

「凄い火力だ！」

「これならいける！」

「いったれオラア！」

熱狂する男子生徒たちに対してディアドリーは幾分か冷静だった。

（あの火力——やはりロストアイテムは伊達ではありませんわね）

門数こそ極端に少ないが、既存のあらゆる砲より長射程かつ高威力で、ほとんどの方向にも全火力を指向できる主砲を持つ飛行船——王国がその価値を見抜いたなら、誰がどう動くか想像もつかない。

別の問題の予感を感じつつも、ディアドリーは目の前の敵に意識を戻す。

敵は大量のモンスターをこちらに向けて放っている。それらがパルトナーに到達するまでもはや幾ばくもない。

「モンスターが来るわよ！ シールドを！」

ディアドリーの合図で女子生徒たちが口々に呪文を唱え、シールドを展開し、パルトナーのシールドに重ねる。

その直後にモンスターたちから放たれた魔法の光弾が次々にパルトナーに着弾したが、シールドは難なく持ち堪えた。

『これより同航戦に移行する。全力でモンスターを迎撃されたし』

アナウンスが流れ、パルトナーは向かってくる公国艦隊とモンスターの大群に舷側を向け始める。

そして――

『クリス・フィア・アークライト、出撃する！』

クリスの乗る鎧が空中に飛び出し、モンスターたちに向かって行った。

『大物は私が仕留める！』

そう言っただけでクリスは再び魔法攻撃を放とうとしていた巨大なエイのようなモンスターに斬りかかった。

鎧に握られた大銃が青白く輝き、モンスターを左右に両断する。

甲板で再び歓声上がる。

『各射手は任意に射撃を開始されたし』

アナウンスが流れると、パルトナーの主砲が再び火を噴いた。

砲弾が空中で炸裂し、一気に大量のモンスターを殲滅する。

更に舷側に並んだ対空機関砲も一斉に射撃を開始し、次々にモンスターを貫いていく。

窓に配置された射手たちもめいめいが射撃を開始したらしく、あちこちから銃声と白煙が上がっている。

その猛烈な弾幕を前にモンスターたちは近づいてきた傍から黒い煙に変わっていく。的が小さい小型モンスターはそれでもすり抜けてくるが――

「小物は俺たちがやるぞ！女子を意地でも守れ！」

槍を持った男子生徒が甲板に辿り着いたモンスターをひと突きで倒す。

それに負けじとばかりに他の男子生徒や船員、更に専属使用人たちも雄叫びを上げてモンスターに立ち向かう。

デイアドリーも彼らに続いて前に出ると――

「吹き飛びなさい！」

腕を横薙ぎに振るう。

発生した風の刃がモンスターを切り裂いた。

一気に数十のモンスターが煙になるが——その煙を突き破って新手のモンスターが次々に現れる。

「全方位から来るぞ！」

既にバルトナーは無数のモンスターに包围されつつあり、弾幕をすり抜けて甲板まで襲いかかってくる小型モンスターもどんどん増えている。

「くそッ！なんて数だ！」

「怯むな！押し返せ！」

「こつちに手が足りねえ！誰か手を貸してくれ！」

「今行く！」

「バルトフアルトは何してるんだ！」

「口ではなく手を動かさない！」

短い間に甲板は戦場と化していた。



「よし、思ったより奮戦してくれてるな」

俺は高高度からパルトナー周辺の戦闘を眺めて呟いた。

人が相手にできない大型モンスターはクリスの乗る鎧とパルトナーの対空砲が倒し、更に接近したモンスターは射手たちに狙撃され、甲板に辿り着いたモンスターも接近戦で倒されている。

『マスター。公国艦隊がパルトナーと並走しました。間もなく攻撃が始まるでしょう』
ルクシオンが言った直後、公国の軍艦から一斉に爆煙が噴き出す。

パルトナー周辺に無数の爆発が生じる。シールドに当たった砲弾が炸裂しているのだ。

「シールドは大丈夫だろうか？」

念のために確認する。

『マスターは心配性ですね。現在のパルトナーの機能は30%まで抑えてあります。まだまだ余裕ですよ』

機能を抑えるように指示したのは俺だ。

できるだけ長く艦隊とモンスターを足止めして、公国に戦力を吐き出させればその分アンジェの救出は楽になる。

パルトナーの機能をフルに使えば公国艦隊を殲滅することだってできるが、それだと

色々と面倒なことになる。何より怒りに任せて大量虐殺をやって後悔したくはなかった。

「頃合だな。行くぞ」

『失神しないでくださいね』

「抜かせ」

俺は操縦桿を押し込み、公国の旗艦目掛けて急降下を開始した。

空気抵抗を抑えるため、アロガンツは頭を下にし、両腕を後ろの方に流す姿勢を取る。

自由落下ではないため、操縦者である俺には強烈なマイナスGがかかるが、目は公国の旗艦から離さない。

旗艦は鯨のような巨大モンスターの上に建物が載ったような姿をしている。

浮島を使った飛行船なら見たことがあるが、モンスターを飛行船にするなんて聞いたこともない。

『減速します』

ルクシオンが告げると、アロガンツはスラストを吹かして減速し、戦闘態勢に入る。

両手には斧が握られている。

「さあお姫様を返してもらおうぞ！」

建物の壁に斧を叩きつける。

金属製の壁はたちまち切り裂かれ、人が数人は一度に通れそうな大穴が開く。

アロガンツのハッチを開けると、俺は短機関銃を手に飛び出し、船内に乗り込んだ。

「外は任せたぞー！」

『マスターこそ、中で迷子にならないでくださいね』

アロガンツはルクシオンの操縦で旗艦から離れていく。

そのまま駆けつけてきた公国の鎧と空中戦を始めた。

「さてと、アンジェのいる部屋はこの向こうか」

ゴーグル型の端末がアンジェの監禁されている部屋までの道を示してくれる。

俺は急ぎ足で通路を進むが、曲がり角で公国兵に出会した。

「誰だ貴様は!？」

誰何してきた公国兵に俺は問答無用で短機関銃を撃ち込む。

発射されるのは非殺傷のゴム弾だが、衝撃で気絶させるくらいの威力はある。

公国兵はたちまち昏倒した。

更に通路を進むと、銃声を聞いて駆けつけてきたらしい公国兵の集団が現れる。

「おい貴様! 何者だ!」

「生まれ! 生まれんと撃つぞー!」

公国兵たちが前方に立ち塞がり、拳銃を向けてくる。

俺は怯まず短機関銃の引き金を引く。

「邪魔だどけえええええ！」

短機関銃の弾幕が公国兵たちを薙ぎ倒していく。

その連射速度に面食らったらしい公国兵たちは一発も発砲しないまま全員倒れた。空になった弾倉を素早く交換する。

倒れた公国兵たちを踏み越えて俺は止まることなく進み続ける。

◇◇◇

時計の針は少し戻り、公国艦隊旗艦の艦橋。

ゲラットは焦れていた。

モンスターを使って敵艦を取り囲み、身動き取れなくするという作戦はうまくいっている。

既に公国艦隊も敵艦目掛けて猛攻撃を始めているが、一向に沈む気配がない。

「何をしているのですか！ さっさと沈めるのです！」

通信士から受話器を奪い取り、発破をかけるゲラットだが、返ってくるのはゲラットを苛立たせる情けない言い訳ばかりである。

『シールドが固すぎます!』

『こちらの砲撃が通りません!』

『モンスターも迎撃されております!』

『待つてください、奴ら沈めた船に乗っていた餓鬼どもです!』

特に最後の方はゲラットの逆鱗に触れる。

「何を寝惚けたことを言っているのです! 亡霊を相手に戦っているとしても言うつもりですか! 手の込んだ言い訳を考える暇があったら撃つのです!」

ゲラットは怒鳴る。

『で、ですが伯爵、本当です! 奴ら王国の学園の制服を——』

「まだ言いますか。グダグダ言っていないで全火力で沈むまで撃ち続けなさい! これは命令です!!」

ゲラットが受話器に怒鳴りつけていると部下がゲラットの肩を叩く。

「伯爵! 敵と思しき鎧が本艦に向け急速接近中です!」

「ツ! ならばさっさと鎧を出させなさい! 早く!」

ゲラットは痲癩を爆発させた。

部下が慌てて伝声管で命令を伝える。

窓の外を見ると飛び立った公国の鎧が灰色の大きな鎧を追い回し始めるのが見えた。

「損害は？」

「艦橋外壁に穴を開けられたようですが、それだけです」

部下たちのやり取りを聞いたゲラットは人質を奪還しに来たのではと推測する。

「誰か、念のために人質を見てきなさい」

ゲラットの命令で数人の騎士が艦橋を駆け出していく。



アンジエがいる部屋の前まで迫り着いた俺は入り口に立っていた騎士2人をあっさりと昏倒させると、腰のホルスターから実弾入りの拳銃を抜いた。

「アンジエ！ドアの近くにいますら離れて！」

「リオン!? お前、リオンか!？」

中から驚いた声がある。間違いない。アンジエだ。

「説明は後だ！ドアから離れて！」

「わ、わかった！——離れたぞ」

俺は拳銃でドアの鍵を撃ち抜いて破壊し、全体重をかけて体当たりする。

ドアが勢いよく開き、俺は思わず前につんのめる。

アンジエは部屋の隅にいた。

「リオン！なぜここに!？」

アンジエは驚きと喜びの入り混じった表情で言う。

「助けにきた。ほら、さっさとここを出るぞ」

「あ、ああ。だが、私が乗っていた船は沈められた。そちらの救助は——」

敵に囚われて監禁されてもなお、自分よりあいつらの心配とか本当に——アンジエは健気だ。

「それならもう済ませた。拾った連中はバルトナーに乗せてある」

「そうか——リビアは？」

「——心配ない。ちゃんと助けたよ」

俺はまた一つ、嘘を吐いてしまった。

「そうか、よかった——本当によかった——」

アンジエはホッと息をついた。

心が痛む。リビアが本当はどうなったか知ったら——いや、今考えても仕方ない。

俺はアンジエの手を引いて部屋の外に出る。

アロガンツとのランデブーは来た時に開けた大穴。

「ルクシオン、迎えに来てくれ」

『了解です』

「ルクシオン？」

アンジェが怪訝な表情になるが無視して通路を進む。

不意にアナウンスと共に艦内に警報が鳴り響く。

『緊急事態！人質が逃げたぞ！探せ！』

アンジェがいなくなったことに気付いたらしい。まあ、この状況で侵入者が現れたら人質を見に行くよね。

だが、もう遅い。

大穴に着くと、アロガンツは追いつがる公国の鎧を撃ち落とし、こちらに飛んできた。

「ちよつと失礼するぜ」

アンジェの肩を掴み、膝の下に腕を差し入れて抱き上げる。

いわゆるお姫様抱っこの状態で俺はアロガンツに乗り移った。

「り、リオン!？」

アンジェが顔を真っ赤にしているが、我慢してもらおうしかない。

「悪いけどしばらくこのままで我慢して」

アロガンツのコックピットは決して広くはない。座席をもう一つ作っている余裕もなかったので、アンジェの座る場所は俺の膝の上しかない。

視界が遮られないように横向きに座ってもらう必要があるの、お姫様抱っこそのままというわけだ。

茹で蛸状態のアンジエを余所に俺はアロガンツを発進させた。
すぐに追っ手がかかる。

『待てえ！』

『逃がさん！』

公国の鎧が続々と発進して追ってくる。

振り切って逃げようかとも思ったが、かなりスピードが出るらしい。

——仕方ないな。

「待てって言われて待つ馬鹿がいるかよ！これでもくらえ！」

振り向きざまにライフルを撃つ。

公国の鎧は弾を躲すが、弾は軌道を変えて鎧を追っていき、その手足を吹き飛ばした。
残った鎧は一瞬怯み、その隙に俺は大きく距離を離す。

公国の鎧はそれでも諦めずに追ってくるが、今はお預けだ。

「ルクシオン、ドローンで足止めしろ」

『全ドローンを射出します』

コンテナと大腿部から多数のドローンが展開する。

追ってくる公国の鎧目掛けてマシンガンや光学兵器を撃ちながら突撃していく。

『な、なんだこいつは!』

『叩き落とせ!』

『素早いぞ! 当たらない!』

『ぐああああ!』

公国の鎧は突然現れたドローンに面食らったらしく、数機が攻撃をもろに受けて叩き落とされる。

すぐに態勢を立て直そうとしていたが、そうはさせじとドローンが内懐に飛び込む。

そのまま乱戦になり、公国の鎧は追って来なくなつた。

さてと——さつさとパルトナーに着艦するとしよう。

俺は操縦桿を倒し、パルトナーに向かって全速力で飛ぶ。

パルトナーはモンスターに取り囲まれ、公国艦隊に袋叩きにされていたが、シールドで防ぎつつ撃ち返している。

公国艦隊の方もパルトナーの反撃を何重にも重ねたシールドで辛うじて防ぎつつ、必死で大砲を撃ちまくっている。

うまい具合に膠着状態が維持されていた。

『パルトファルト! 戻ってきたか! アンジェリカは?』

クリスがアロガンツを視認したらしく、通信を送ってきた。見るとクリスの鎧がこちらに向かつて飛んでくる。

「バツチリだ。こつちのことは心配するな。自分で着艦する！」

『——分かった！』

クリスの鎧が反転してモンスターの群れに斬り込んでいくのを傍目に俺はアロガンツにライフルを構えさせる。

「ルクシオン、道を開けるぞ」

『了解です。ヘルブラスト、どうぞ』

ライフルの銃口に魔法陣が出現する。

「公爵令嬢のお通りだ！道を開けろ！」

ライフルを発射すると炸裂した弾から雷撃が迸り、モンスターの群れが消し飛ぶ。

格納庫の扉が開き、俺は素早くアロガンツを滑り込ませた。

アロガンツを追ってきたモンスターが雪崩れ込んでくる前に格納庫の扉は閉まる。

やった。やり遂げた。

一番助けたかった人を救い出せた。

俺はどつと溜息を吐きたくなるのをなんとか堪えた。

「さ、降りるよ」

ハッチが開き、俺はアンジエを抱っこしたままアロガンツを降りた。

アンジエを下ろすと、彼女は俯き気味に言った。

「リオン——お前は本当に——ありがとう」

恥じらいながらも安堵の表情を浮かべて感謝を伝えてくるアンジエに思わずドキツとする。

そして——

『マスター、王国の艦隊が到着しました』

タイミングバツチリだ。

「よし——これでこっちの勝ちだ！」

「増援が来たのか!？」

アンジエが聞いてくる。

俺はニヤリと笑って答える。

「ああ、今度はこっちが公国に殴り返してやる番だ！」

黒騎士

既に空は暗くなり、夕焼けが夜の闇に押されている。

俺はパルトナーのブリッジでその景色を横目に到着した王国艦隊と交信していた。

『バルトフアルト男爵。君は自分が何をしたか分かっているのかね?!』

ブラッドのパパさん——「アーヴィング・フォウ・フィールド」辺境伯が俺を非難する。

「分かっているも何も、最善だと思いう選択をしただけです。みんなの同意も得ていません。お陰でアンジエリカさんを無事奪還できました。しかも死傷者は出ていません。結果オーライじゃないですか」

ブリッジで王国艦隊と交信する俺は、それだけ言つてアンジエに受話器を渡した。

受話器を受け取る時、アンジエは呆れた顔をしていた。

アンジエがアーヴィングさんと話しているのを傍目に、窓の外を見ると、さつきまでパルトナーと派手に撃ち合っていた公国艦隊が逃げに入っている。

「どうやら旗艦と浮島を改造した大型艦——輸送船か補給船だろうか?——に合流した後、夜陰に紛れて逃げるつもりのようなのだが、そうは問屋が卸さない。」

甲板で戦っていた学園生や豪華客船の船員たちに船内に入るようアナウンスを出した後、バルトナーを転舵させ、追撃態勢に入る。

王国艦隊も追撃を行うようだ。

転舵が完了すると、バルトナーは王国艦隊と併走する形になる。

『——まあ良い。バルトファルト男爵の査問は帰ってから行うとしよう。誠に情けない話だが、どうかしばし我々と肩を並べてくれ。正直心許ない戦力でね』

「感謝します。フィールド殿。我らに武運のあらんことを」

交信が終わったようだ。

暗くなった空に照明弾が打ち上げられる。

王国の艦隊から多数の鎧が飛び出してくるのが見えた。

彼らが放った魔法攻撃で立ち塞がるモンスターは一掃され、発生した黒い煙が無数の雲を形作ったかと思えば、すぐに消えていく。

公国の艦隊からも鎧が飛び出し、空中戦が始まる。

見たところでは王国側が優勢のようで、落ちていくのは殿軍を務める公国の鎧が多い。

アンジエが受話器を置き、俺に話しかけてくる。

「リオン、フィールド艦隊との共同交戦許可は取り付けた。この船はまだ行けるか？」

「当たり前だ。楽しいパーティーを一抜けするかよ」

サムズアツプすると、アンジエは少し笑顔を戻した。

窓の外でパルトナーの主砲が火を噴く。

最後尾の公国艦のシールドが消滅し、丸裸になった公国艦に王国の鎧が次々にライフルや魔法を撃ち込む。

エンジンと方向舵を破壊されて脱落する公国艦に王国艦隊が砲撃でトドメを刺す。

船体の至る所から炎と煙を吐きながら落ちていく公国艦。

乗客が15乃至18歳のガキばかりの民間船を襲って、アンジエを人質に取って、結局沈めた上、生存者をモンスターに喰わせ、リビアを溺死同然の状態に追い込んだ敵が——圧倒的な戦力で叩きのめされている。

嗚呼なんて——惨いのだろうか。

舐め腐った亜人奴隷共を叩きのめした時とは訳が違う。

懸命に防戦しながら逃げる公国艦隊を王国艦隊と一緒にリッチしても、溜飲は下がらない。

命を奪り合う戦いは、ゲームと違って爽快感も高揚感も——元々あの乙女ゲーの戦闘パートにそんなのは期待できなかつたが——全くない。

決して短くない人生で苦勞に耐えて力をつけて、何かしら積み上げてきて、国に残し

てきた家族がいて——そんな人たちが次々に、笑ってしまうくらい呆気なく死んでいく。

映像で見たら大興奮必至のスペクタクルも、現実になるとこうも惨いものだ。

せめてもの救いは今のところ俺自身の手で相手を殺さずに済んでいることくらいか。

「そういうえびり——」

「さてと、俺はやることがあるから。アンジエはここにいて」

言いかけたアンジエを遮り、俺はブリッジを出る。

——たぶんさつき言いかけてたのはリビアのことだろう。

リビアはパルトナーにはいない。本体の医務室に運ばれて治療を受けているはずだ。

「ルクシオン、リビアはどうだ？」

小声で確認を取る。

『心拍と自発呼吸は回復しましたが意識は戻っていません。植物状態です』

俺はまた目眩がしそうになるのをなんとか堪えた。

リビアがこのまま意識を取り戻さなかったら、ラスボスを召喚された時に打つ手がないではないか。

やはり——やらなければいけないようだ。

「ルクシオン、アロガンツは？」

『武器弾薬の補給は完了していますが——足止めに用いたドローンは全滅しています。予備機を搭載していますが、今少し時間が必要です』

「ドローンは今積んである分だけでいい。すぐに出撃するぞ。今度はヘルトルーデと魔笛を確保する」

『ですがマスター、自ら危険を冒す必要は——』

「いいから！それで戦争が回避できるならやるしかない！」

『王女と、魔笛——それを奪えば公国が王国への侵攻を止めると？』

「ああ、それさえ奪えば公国は王国に勝てなくなる」

俺は格納庫へと走りながら、ゲーム終盤の公国戦についてルクシオンに説明する。

これは千載一遇のチャンスだ。

たしかゲームではラスボスは公国軍が王国本土に到達したところで召喚されていた。空を飛んだり海を渡ったりする能力はなかったと記憶している。

ならば今ここで召喚される危険はないはず。

ここでヘルトルーデと魔笛をこちらの手中に収めることができれば——公国最大の切り札を奪ったも同じだ。

魔笛とそれを操るヘルトルーデ無しでは公国は王国に勝てない。

——見える。見えるぞ。戦争を回避できる希望が！

「せっかくゲーム知識を持ったまま転生したんだ。今使わずにいつ使うんだ」
『——了解です』

ルクシオンの声色は不服というより哀しげだった。



公国艦隊。

『ブリュンヒルデ！ 応答せよ！ 聞こえるか！』

『フリースラム、大破！ 戦闘継続不能！』

『スカバー・フォーメーション維持できません！ 喰い破られます！』

『援護要請！ 援護要請！ 完全に挟まれました！ 全方向より鎧による攻撃を受けています

！ シールドは展開不能！ もう船体が持ちませ——ザ——ザザザ——』

通信機から聞こえてくるのは被弾した艦や鎧への呼び掛けと悲鳴のような援護要請の嵐。

（こんなはずでは——）

ゲラット伯爵は頭を抱えていた。

先程からヘルトルーデが魔笛を使ってモンスターを増援を送り続けているが、焼け石

に水。

ただでさえ強力なフィールド辺境伯家の艦隊に馬鹿み^バたいな高火力^ルの大型飛行船^トが加わり、公国の艦隊が押されている。

飛行船も、鎧も、モンスターも、損耗が目を覆いたくなるほどに大きくなっていった。切り札に使うはずだった人質の公爵令嬢はいなくなっており、交渉もできそうにない。

となると——切れるカードはもはや一つだけ。

「——ゼンデン子爵を呼びなさい。彼に出て貰います」

「で、ですがゼンデン子爵は出撃させるなどの命令が——」

「目の前の状況が見えていないのですか！この状況をどうにかできるのは彼しかいません！——」

「待ちなさい。バンデルを出すわけにはいかないわ」

言い争うゲラットと部下にヘルトルーデが割り込んできた。

ゲラットは一瞬凄まじい不機嫌顔になるが、すぐに表情を取り繕う。

「お言葉を返すようですが殿下、当初の予定とは状況が違います。現在の状況ではこれが最善手です。このままでは味方艦隊は壊滅します。我らは命を賭して王国に勝利するためここまで来たのです。然るに戦力を出し惜しみして徒に犠牲を重ねるは愚行

に他ならないかと。今なお外で戦っている彼らの犠牲が犬死にならないために、何卒子爵の出撃許可を頂きたく——」

頭を下げるゲラットだが、内心では「ハイと言えハイと言えハイと言えハイと言え——」と、念じまくっている。

彼が守りたいのはヘルトルーデでも味方でもなく、自分の命だけが、味方と王女を想う忠義者を演じる。

そしてゲラットは賭けに勝つ。

「——分かったわ」

ヘルトルーデが渋々許可を出した。

ゲラットは破顔し、小躍りしそうな勢いでまくし立てる。

「よくぞご決断下さいました！彼ならばその期待に十二分に応えてくれるでしょう。何しろ、公国最強の騎士ですからね」

公国は最強のカードを切った。



出撃した俺は戦闘空域を迂回して公国の旗艦を目指していた。

今なら公国の目は王国艦隊とそこから出撃した鎧に向いている。

アンジエを助け出した時と同じく、奇襲攻撃をかけて電撃的にかっさろう。

絶対に公国に逃げ帰らせるわけにはいかない。

だが——状況は俺に味方しなかった。

『緊急！緊急！』

『そんな！なぜ奴がここに——』

『こちらー！番隊。敵新手と交戦中！敵は——黒——騎士——うああああああ!!』

味方が発した通信は悲鳴を最後に途切れた。

通信が一気に騒がしくなる。

『黒騎士だと！』

『何!?!奴はまだ現役だったのか!?!』

『馬鹿な!』

ルクシオンも報告をしてきた。

『マスター。新たな敵戦力を確認。機体色はブラック。敵精鋭部隊と思われます』

映し出された映像を見て俺は戦慄する。

【黒騎士】——あの乙女ゲーに登場する最強の敵だ。

接近戦でクリスが敵わず、遠距離戦ではジルクが相手にならない公式チート。

しかも——ただでさえ強い黒騎士がなんと5機もいた。

いやちよつと待つて。そんなにいるとか聞いてないんですけど！

——だが敵は待つてはくれない。

『こちら6番隊、これより黒騎士とエンゲージ——ぐあああああ！』

黒騎士5機に立ち向かつていった王国の鎧9機がたちまち溶けた。

8機が回避機動を完全に読まれてあらゆる進路上に弾をばら撒かれ、あえなく爆散。最後に残った隊長機も黒騎士の隊長機らしき鎧に叩き斬られて力なく落ちていく。

——なんだよあれ。強すぎるだろ。

公国との国境を預かるフィールド辺境伯家の騎士団といったら、王国でも指折りの精鋭だぞ？それを一瞬で——。

啞然とする俺や味方を余所に、5機の黒い鎧は王国艦隊の先頭を進んでいた大型の軍艦に襲いかかる。

隊長機らしき鎧が大剣で軍艦の底部を切り裂き——残りの4機が破口にライフル弾を撃ち込む。

軍艦が膨張したかと思うと、内側から大爆発を起こした。

弾薬に誘爆したのかもしれない。一瞬周りが昼のように明るくなり、思わず目を細める。

原型を留めないほどに砕け散った軍艦——だったものは黒い煙の尾を引いて海に落下していく。

『おのれ！黒騎士！』

『よくもドーントレスを！』

『奴を追え！これ以上味方艦を狙わせるな！』

味方の鎧が黒騎士を追いかけ始めるが、次々に返り討ちにされて落ちていく。

「ツー！ルクシオン！黒騎士をやるぞー！」

このままあのチート共を暴れ回らせたなら、冗談抜きでまずい。

ヘルトルーデと魔笛を確保する前に味方が総崩れになりかねない。

だがルクシオンは反対してきた。

『賛成できません。それよりも味方が黒騎士と交戦している隙に旗艦を強襲、ヘルトルーデ王女を奪い、人質とする方が有効と判断します』

「ツー！」

味方を黒騎士に囷としてぶつけて、その隙にヘルトルーデと魔笛を——ウイングシャーク空賊団の頭が俺に対して取っていたような、味方を駒として使い捨てる非情な戦法を提案してきたルクシオンに怒りが湧く。

その時——

『アークライト殿?!』

不意に通信から聞こえてきた名前に俺はピクリと反応した。

「クリス!」

見るとクリスが黒騎士の隊長機に接近戦を挑んでいた。

防戦一方になっていたが、鎧の重装甲とパワーを活かしてなんとか鏢ぜり合っている。

——否、相手の攻撃を辛うじていなしていると云った方が正確だろうか。

黒騎士の隊長機が持つ大剣はクリスの鎧が持つ大鈍よりも長く、クリスは間合いで不利を強いられている。懐に飛び込もうにも隙がない。

味方の鎧が助けに入ろうとしているが、他の黒騎士がそれを阻んでいる。

「あいつ——！無茶しやがって!」

操縦桿を倒し、反転する。

「ルクシオン、ライフルとブレードだ!」

アロガンツの両腕にライフルとブレードが握られる。

俺は全速力でクリスの応援に向かう。

アロガンツに気付いた黒騎士の1機がライフルを撃ってきたが、アロガンツの装甲が弾く。

「どけよ!!」

お返しにライフルを誘導魔法付きで撃ったが、黒騎士はあろうことか弾を空中で撃ち落としてしまった。

銃では効果がないと悟ったらしく、黒騎士は背中に背負っていた剣——鎧の全高と同じくらい長いやつ——を抜いて距離を詰めてきた。

『死ね!侵略者!王国の外道め!』

斬りかかってくる黒騎士から凄まじい殺気を感じる。

随分と王国が憎いらしい。俺たちが生まれる前——今から20年ほどの昔に王国が公国に侵攻したのを根に持つてる設定だったか。

なんでそんな重たい設定を持つてるんだよあの乙女ゲーは!

攻め込んだ王国はたしかに公国に外道と言われるような酷いことをしたかもしれないが、公国も公国だ。

一方的に被害者ヅラして、何もしていない、どころかその当時生まれてすらいらない子供世代にまで憎しみをぶつけて、虐殺までしやがって。

そういうえば前世でもそんな国があったな。「千年恨む」だったか?

「はあ!?今侵略して来てるのはそっちだろうが!」

そう言い返した直後、黒騎士の剣がアロガンツのブレードとぶつかり合う。

相手はアロガンツの胸部、つまりコックピットを殴りつけてきたが、もちろんビクともしない。逆に黒騎士の拳がひしゃげてしまった。

『ツ！』

相手が焦ったのが分かる。

「いいからどけよー」

アロガンツのパワーで黒騎士を押し返し、ライフルを撃ち込んだ。

黒騎士は避けようとしたが、軌道を変えて追ってきた弾に手足を吹き飛ばされる。

黒騎士がダルマ状態になったのをチラッと見て確認すると、俺はクリスに斬りかかる黒騎士の隊長機に後ろからライフルを撃ち込んだ。

クリスに気を取られてる今なら——そう期待した俺は甘かった。

どこに目が付いているのか、黒騎士はグリーン！と振り向いて弾を斬った。

「五〇門かよ!？」

思わず前世のアニメキャラの名前が飛び出してしまった。前世の人名なんてろくに思い出せなかったのに、なんでだ？

ってそんなこと考えてる場合じゃない！

黒騎士の隊長機はライフルを持っている俺の方が脅威度が高いと判断したのか、反転して俺の方に襲いかかってきた。

とんでもないスピードだ。あつという間に距離を詰められる。ブレードで受け止めようとしたが――ブレードが斬られてしまった。

「はあ!？」

すんでのところまで機体を滑らせて致命傷は回避したが、アロガンツは盛大な袈裟斬りを喰らう。

火花が飛び散り、アロガンツの胸部装甲に特大の斬撃痕が刻まれる。

そのまま黒騎士はアロガンツに体当たりを仕掛けてきたが、なんとか躲して距離を取る。

「なんだあの剣!?アロガンツの装甲が抉れたぞ!」

やはり黒騎士は現実でも凄まじい強敵だった。決闘の時のユリウス殿下たちや空賊共といった、これまで戦って叩き潰してきた相手とは装備も技量も別次元だ。

ルクシオンが解析結果を伝えてきた。

『どうやら敵の持つ剣は「アダマティアス」で造られているようです。この世界特有のファンタジー金属ですね』

「お、お前もファンタジーの塊みたいなものだけだな」

軽口を叩いたつもりが思わず口が震える。さつきは冗談抜きで死ぬところだった。

『バルト、ファルト!来てくれたか!先程は、助かった、ぞ』

クリスが通信で呼びかけてきた。

「無茶してんじやねーよ！そんな体で——」

アロガンツに合流してきたクリスの鎧はボロボロだった。

両脚と左腕は使い物にならず、機体のあちこちに斬撃痕が走っている。得物の大鉈も折れてしまっていた。

『ああ——返す、言葉もないな』

クリスは青息吐息だった。気力だけでなんとか保たせているのが分かる。

「お前は戻れ。あの大剣持ちの黒騎士は俺がやる」

『大丈夫なのか？一人では——』

私も手伝う、とかまた無茶を言い出しそうだったので遮る。

「そんなボロボロじゃかえって邪魔だ。さっさと戻れ」

言い終わるや否や、こちらを窺っていた黒騎士が再び突撃してきた。

ライフを撃ち込むが、弾は全て躲されるか迎撃される。

「来い！俺が相手だ！」

パルトナーへと帰還していくクリスから黒騎士を引き離すように飛びながら、ライフを撃ち込んで挑発する。

黒騎士は乗ってきた。

人間が乗つてるとは思えない動きでライフル弾を躲しながら迫つて来る。

回避機動をルクシオンが予測し、それに従つて弾をばら撒いているため、数発は命中コースを辿るが、全て叩き斬られる。

「なんなんだあいつは?!」

思わず叫んだ。

アロガンツを使ってこんなに苦戦するとは夢にも思わなかつた。

技量に差がありすぎて機体性能の差が埋まってしまっている。

相手にこちらの装甲を貫ける大剣がある以上、接近戦は不利。相手の機体に触れることさえできれば奥の手——衝撃で相手の鎧を破碎するやつ——が使えるがそんなのは期待できない。

かといって遠距離攻撃も全く効かない。

——こんなのでどうやって勝てというんだよ!

頭を抱えそうになったその時、味方から通信が入った。

『こちら13・14番隊! バルトファルト男爵、援護する!』

同時に進行方向右側からの火線が黒騎士に殺到する。

タイミングと照準を各機で少しずつずらし、目標がどの方向に逃げてもヒットするように形成された「火線の檻」とでも言うべきそれを黒騎士は芸術的な機動で掻い潜った。

『なにいいい!?!』

『あ、あれを躲しただど!?!』

『化け物か!?!』

撃つた味方が驚愕の声を上げる。

必殺の飽和攻撃を放つたのに1発も当たらなかつたのが信じられないらしい。

驚愕のあまり動きが止まった味方の鎧に今度は公国軍の鎧からの攻撃が殺到する。

「退避しろ!!」

俺が叫ばなかつたら犠牲はもつと多かつただろう——4機が攻撃を受けて爆散する。

散開した味方は公国軍の鎧に追いかけて回されていた。

一方の黒騎士は何もなかつたかのように追いかけて回されて来る。

俺はライフルの引き金を引くが弾は出ず、モニターに「残弾数 0」と表示されたウイ

ンドウが現れる。

「くそ、弾切れか」

俺はライフルをコンテナに収納する。新しい武器を取り出す余裕はない。

そもそも黒騎士の大剣とまともに打ち合える武器がない。

思い返せば、アロガンツの装甲すら斬れる黒騎士の大剣を凌いでいたクリスはやはり

剣豪なのだろう。

すまんクリス。俺ちよつとお前のこと見くびつてたわ。

「こうなつたら仕方ない。なんとか懐に飛び込んで奥の手を使うか」

『リスクが大きすぎます。本体の使用許可を求めます』

ルクシオンは反対する。

「駄目だ。お前を使つたらもつと厄介なことになる！」

ルクシオン本体を使えば黒騎士は簡単に消し飛ばせるだろうが、それだとルクシオン本体の存在が王国にバレる。

そしたら公国どころか、王国まで敵に回すことになりかねない。

『——つくづく損な方ですね。敵、来ます！』

素手での勝負に出た俺を見て黒騎士が距離を詰めてくる。憤怒に燃えているのか、鎧の背中からマゼンタ色の炎が噴き出している——不覚にも綺麗だと思ってしまう。

そして——戦場は一瞬でも気を取られれば死の篩が待っている。

『後ろです！』

「ッ！」

背後から別の黒騎士が剣を手にアロガンツ目掛けて突っ込んできた。避けられない。

左腕でガードすると、相手の剣が砕け散る。

だが、相手はそのままアロガンツを羽交い締めにしてきた。

『——マスター——！』

ルクシオンがアラートを鳴らす。

マズい！俺を追い回していた黒騎士が大剣の切っ先を向けて突進して来る。

「クソツッ！放せ！放せよこの野郎！」

アロガンツを羽交い締めにする黒騎士を振り解こうとするが、関節を決められていて思うように動けない。

突進して来る黒騎士の大剣がどんどん迫ってきて——モニターが黒く染まる。

あ——これ死ぬ。頭が一瞬でそう理解する。

視界に映る何もかもがスローモーシヨンのようになる。走馬灯つてやつだろうか。

——はあ。

本当に、ロクな人生を歩んでこなかったな。

前世ではガキの頃から妹に振り回されて損な役ばかり、大人になったら休む間もなく働かされて心身を擦り減らし、最期はあんな情けない死に方をした。

今世では贅沢と他人の侮辱しか能のない穀潰しの正妻家族と我儘な姉妹のせいで散々苦汁を舐めさせられ——否、吞まされ、妖怪婆に売られかけて、何度も死を覚悟するような冒険の末にチートアイテムを手に入れて、学園に行けたと思ったら婚活で生き地獄を味わわされて——挙句、あのマリエとかいう小面憎い転生者の女がゲームを引つ

掻き回した尻拭いをやらされて、公国と戦わされて――。

本当に――なんで俺ばっかり。

俺は何も贅沢な望みや野心なんて持ってない。ただ慎ましく、平穩無事に生きたい、それだけなのに。

なのに――何なんだよこの邪魔な黒い粗大ゴミは。

――どげよ。

操縦桿を握る手に力が戻る。

「いっ……んのおおおおおおお!!」

力の限り――俺は叫ぶ。

決着

込み上げてくる吐き気をなんとか堪える。

——仕方なかった。俺が助かるには仕方なかったのだ。

黒騎士の大剣に貫かれた黒騎士は背中中的重要機構を破壊されたのか、一瞬で爆散する。

アロガンツには傷ひとつ付かないが、黒騎士の方は機体に破片が幾つも突き刺さっていた。

そのダメージに加えて味方を誤殺してしまった心理的ダメージも大きいのか、距離を取る俺を追うのにタイムラグがあった。

あの大剣が俺を貫く寸前、俺はアロガンツのスラスターを吹かし、アロガンツを羽交い締めにしていた黒騎士を背負い投げのような形で正面に移動させ、盾にしたのだ。

剣先を逸らす余裕は全速力で突っ込んでくる黒騎士の隊長機にはなかったらしく、大剣はアロガンツではなく、アロガンツを羽交い締めにしていた黒騎士を貫いた。

——結果俺は助かった。

だが——自分自身の手で人を死に追いやった。その事実が俺にのしかかる。

さつきまでは王国艦隊という「共犯」がいて、自分でトドメを刺さなかったからまだ目を逸らしていられたが——今となってはもう、無理だ。

黒騎士と俺は命の奪り合いをしていて——俺は黒騎士を殺してでも、生き残りたいと思つて、実行に移してしまった。

——受け入れるしか、ない。俺の手はもう汚れてしまった。

もうこうなつたら腹を括る。味方を救うためとか、アンジエを守るためとか、そんな他人本位な綺麗事じゃなく——俺が生き残るために、邪魔な黒騎士を倒す。

俺はアロガンツを反転させた。

『マスター！敵接近して来ます！』

ルクシオンがうるさくアラートを鳴らす。

黒騎士は背中から噴き出るマゼンタの炎を更に強く大きくして襲いかかって来た。だがこつちの準備はすでに整っている。

——今度は俺も逃げない。

——来い。ここで終わらせてやる！

黒騎士が振り下ろして来た大剣を右腕で受け止めると、大剣が深々と食い込む。

左手で黒騎士を捕まえようとするが、虚しく空を切る。

黒騎士は危険を察知したのか、乱暴に大剣を引き抜いて離れてしまった。

かと思えば、アロガンツの頭上を飛び越えて後ろに回り込んでくる。

一文字に振るわれた大剣が背部のコンテナの1つを切り裂く。

切り裂かれたコンテナをパージし、こちらから距離を詰める。

1発もらうのは覚悟の上でタツクルを仕掛けると、右肩に大剣が喰い込んだ。

構わずに掴みかかり、衝撃を放つが、脚ごとパージされ、逃げられてしまう。

パージされた黒騎士の左脚が粉碎されるが、アロガンツの背中にも大剣が直撃する。

『エネルギー回路損傷。性能35%低下しています』

ルクシオンが機体状況を説明する。

——クソが。

肉を斬らせて骨を断つ覚悟で接近戦を挑んだのに、ちつとも捉えられない。

さつき俺が盾にして死なせた黒騎士みたいに上手い具合に足止めしてくれる味方も

いないし——というか、周りには王国軍の鎧だつて無数にいるのに、なんで俺は1人で

こんなチート野郎と戦ってるんだ。

黒騎士には飛び回る俺を羽交い締めにして動けなくする、というスーパードアアシストが

来たというのに、俺には来ない。

——いや、分かっている。来ないのではなく、来られないのだろう。

黒騎士に追い回されてた時、奴に飽和攻撃を仕掛けて援護してくれた味方がいたが、

勢いを盛り返した公国軍の相手で手一杯らしい。

「ドローンを出せ！突っ込ませるんだ！」

『了解』

大腿部から矢の形をしたドローンが展開し、光学兵器を撃ちながら黒騎士目掛けて突っ込んでいく。

しかし、黒騎士は後ろ向きのまま王国艦隊の飛行船の間を縫って飛び、攻撃の方向を限定することで突っ込まれる前にドローンを全機撃墜してしまった。

「ああクソッ！」

ドローンを先に突っ込ませて隙を作る作戦も失敗した。

ドローンのすぐ後に続いてきたアロガンツ目掛けて黒騎士が大剣を振るうが、手前で急減速して回避する。

しかし、黒騎士は大剣を振った勢いをそのまま右脚での回し蹴りに転用してきた。蹴られた衝撃でコックピットが激しく揺れる。

もちろんどうということはないし、ひしやげたのは黒騎士の右脚の方なのだが、それでも操縦者である俺が一瞬機体制御を失えば——体勢が崩れる。

黒騎士はひしやげた右脚をパージすると、アロガンツ目掛けて大剣を突き刺してきた。

——今だ！

僅かに身を振ってパイロット——俺への直撃を回避すると、ハッチを開放する。俺は生身で外へと飛び出した。

『貴様、勝負を捨てたか！』

黒騎士が驚いた声を上げた。

何気に声を聞くのは初めてだが、初老くらいの激渋イケボである。

「いいや？俺の勝ちだ。ルクシオン！」

そう言つて俺はアロガンツから飛び降りた。

黒騎士は大剣を引き抜こうとするが抜けない。アロガンツが黒騎士の手首をガツチリと掴んでいた。

そこから一瞬で黒騎士の胴体部を手繰り寄せ——左腕の装甲が展開して光を放つ。

『インパクト！』

『何?!』

鎧が無人でも動く、というのは流石に黒騎士も想定外だったらしい。

飛び降りた俺に目を奪われてアロガンツが動いていることに気付かず、モロに衝撃を喰らう。

鎧が粉碎され、パイロットは落下していく。

——まあ、落下しているのは俺も同じだったが、心配はいらない。

ルクシオンがアロガンツを操縦し、俺をキャッチしてコックピットに戻した。

黒騎士の方は海へと落ちていった——かと思いきや、残り2機の黒騎士が急降下していき、ギリギリでキャッチした。

そのまま2機の黒騎士は公国軍の浮島へと飛び去っていく。

『追撃しますか?』

ルクシオンが伺いを立ててきたが俺はかぶりを振った。

「厄介なのは排除できた。後は王国軍がやるだろ。それより、今度こそ敵のお姫様を連れて帰らないとな」

アロガンツに突き刺さった黒騎士の大剣を引き抜いていると、味方の通信が騒がしくなっていた。

『おい、黒騎士が退いていくぞ!』

『あの大剣、黒騎士のだぞ?!分捕ったのか?』

『つてことは——バルトファルト男爵が黒騎士をやったのか?』

『信じられねえ——あの黒騎士を1対1で——』

『す、素晴らしいぞ!!あの仇敵をよくぞやってくれた!』

味方の歓声で通信がうるさくなる。

艦隊からも俺の名を連呼する通信が入り、俺は公国艦隊の旗艦へ向かうタイミングを見失う。

「なんだこれ——すつごく気恥ずかしいんだけど」

『おや、いつものように自慢気に喧伝しないのですか？』

「いや、結局最後の一撃はお前に丸投げしてたしさ？ さすがにあれで自慢する気にはなれねえよ」

『意外ですね。マスターのことですから嬉々としてその大剣を掲げて「見たか！」とでも言うと思いましたが』

——こいつは俺を何だと思ってるんだろうか。

ルクシオンとまったくだらない会話をしている間にも、戦況は変わっていた。

不意に新たな照明弾が上空に上がったかと思うと、それらを背にして新たな鎧の団が降下してくる。

一瞬敵かと思つて身構えたが——

『流星騎士団だ！』

『王都からの援軍か！』

『予定を繰り上げて来てくれたか！』

味方の通信が歓喜に沸く。王国の増援らしい。

そういえばルクシオンは王都からも艦隊が出動していると聞いていたな。そこから発進してきたようだ。

【流星騎士団】と呼ばれた集団はユリウス殿下が俺と決闘した時に使ったものによく似た鎧を駆っていた。

盾とライフルを持ち、両肩には回転式の弾倉を備えたキャノンを搭載している。

流星騎士団の鎧が一斉に頭を下げ、両肩のキャノンから青白い光の尾を引く砲弾を発射した。

敵味方入り乱れる乱戦にも関わらず、発射された砲弾は的確に公国の鎧だけを爆砕していく。恐ろしく正確な攻撃だ。

一気に数を減らした公国の鎧に上空から襲いかかる流星騎士団。

青白い炎を噴き出しながら降下してくる姿はまさに流星のようだ。

増援が加わった王国軍は再び勢いを盛り返し、公国軍を圧倒し始める。

『前進だ！敵艦隊を叩け！』

『侵略者に思い知らせてやるのだ！』

『公国の悪魔共め！戦友の仇を討ってやる！』

我先にと公国艦隊に襲いかかっていく王国軍。

艦隊直掩に就いていた公国軍の鎧が必死で抵抗しているが、数の暴力に吞まれて次々

に叩き落とされていく。

王国艦隊は二手に分かれて左右から公国艦隊を挟み込み、砲撃を叩き込む。

「——さてと、逃げられる前にヘルトルーデと魔笛を取りに行くか」

黒騎士も排除したし、後はほとんど消化試合になるだろう。

俺は今度こそ、ヘルトルーデ捕縛作戦を再開する。

◇◇◇

公国艦隊旗艦の艦橋。

ゲラットは挽回しかけた劣勢を再び強いられる公国軍を見て冷や汗が止まらない。

「で、殿下。もはや反撃も撤退も困難です。ここは殿下の名で降伏を——」

恐る恐るヘルトルーデに降伏を進言するが、ヘルトルーデはそれを一蹴した。

「今更降伏など問題外よ。相手は王国。しかも怒り狂っている。受け入れるわけがない

わ

「し、しかし既に損害が——」

「あれだけ大口を叩いておいて随分と弱気なことを言うのね。この日和見主義者が。大体、バンデルを出撃させれば何とかかなると言ったのも貴方ね。その結果は何かしら？」

ヘルトルーデの追及に言葉に詰まるゲラット。

「もはや私たちには徹底抗戦しかない。戦って、抗って、抗い抜いて、公国の誇りを思い知らせてやるのよ！ 私たちの意志は後の者が継いでくれる！」

ヘルトルーデが檄を飛ばし、周囲の軍人たちが覚悟を決めた表情で敬礼するが、ゲラットは違った。

（ふざけるな！ 誇りに殉じるならお前たちだけでやれ！ 私を巻き込むな！）

今すぐにもここから逃げ出したいゲラットだが、どこにも逃げる場所はない。

その時、艦橋の天井から巨大な剣の切っ先が顔を出した。

「——は？」

茫然自失になるゲラットの目の前で艦橋の天井が引き剥がされ、黒騎士が持っていたはずの大剣を持った巨大な灰色の鎧が姿を見せる。

「ば、化けも——」

口にし終わる前にゲラットは無数の弾丸を浴びせられて意識を失った。



ヘルトルーデの周りにいた公国軍人たちをゴム弾を装填した短機関銃で薙ぎ倒すと、

ヘルトルーデに実弾入りの拳銃を突きつける。

「降伏しろ」

「お断りします。殺すなら殺しなさい」

——即答だった。

ならば仕方ない。

引き金を引くと弾丸が発射され、ヘルトルーデは倒れた。

「よし、眠ったな」

撃つたのは実弾とは言っても睡眠系の魔弾だ。

ヘルトルーデが気絶したのを確認すると、握り締められていた魔笛を取り上げる。

「これでよし、と。後はこいつらの誰かを問い詰めて情報を聞き出すだけだな」

薙ぎ倒された公国軍人たちを見回して俺は呟く。

倒れた軍人たちの中に随分と身なりのいい奴がいたので、司令官クラスだと判断した。

「コイツにするか」

身なりのいいその男をヘルトルーデの横まで引き摺っていく。

コイツには個人的に聞きたいことが山程ある。

なぜ公国がこのタイミングで王国に攻めてきたのか、なぜピンポイントで学園生の乗

る豪華客船を襲ったのか、そして公国は王国の誰と繋がっているのか。

ゲームでは空賊の背後にいたオフリー家の更に背後にいた、ということだったがどうにも違う気がする。

うまくパズルが組み上がらないが、今回豪華客船を襲ったのがどうにも引つかかる。

公国と繋がってる奴はまだ王国内に存在している——そう思えてならない。

「ルクシオン、2人をパルトナーに運ぶぞ」

アロガンツが腕を伸ばし、空になったコンテナにヘルトルーデと身なりのいい男を収容する。

俺はアロガンツに乗り込み、公国艦隊の旗艦を後にした。

程なく王国軍が押し寄せ、公国艦隊は遂に降伏の印を掲げた。

王国、公国共に多数の死傷者を出して、ようやく戦いは終わった。

傷つき、疲弊した両軍を東からの光が照らす。

長い長い夜が明けていた。



公国の浮島で停戦処理が行われていた。

生き残った公国軍は捕虜となったが、黒騎士を含めた一部は逃走したらしく、見当たらなかったようだ。

面倒な停戦処理をアーヴィングさんはじめ王国のお偉方に押し付——任せた俺はパルトナーの一室で捕らえたヘルトルーデと身なりのいい男——ゲラット伯爵といった——を尋問したが、期待したほどの情報は得られなかった。

ヘルトルーデはひたすら黙秘し、ゲラットの方はみつともなく命乞いをするばかり。分かったのはヘルトルーデが率いていたあの艦隊が先遣隊でしかなかったということ、ヘルトルーデの「代わり」がまだいるということ、公国艦隊に豪華客船の居場所を教えていた裏切り者が学園生の中にいたことくらいだ。

——ルクシオンに調べさせるか。裏切り者に関しては何生きてるかどうかも定かじやないけど。

ちなみに俺を苦戦させた黒騎士の名前はヘルトルーデから聞き出せた。「バンデル・ヒム・ゼンデン」というらしい。

俺が黒騎士から凶ならずも分捕って艦橋の天井を引っぺがすのに使った、あの大剣を見て俺がバンデル氏の仇だと悟ったようだ。恨めしげな目をしていた。

先に殴りかかってきたのはそっちの方で俺は自分の命を守るための正当防衛——のはず——をしただけなのに。

まあそれはさて置き。

これ以上は聞き出せないと判断し、ヘルトルーデとゲラットは王国軍に引き渡した。

——終わった。これでやっと一息つける。

どつと疲れが襲ってきた。

考えてみればクラリス先輩と別れて、ハツランドからエアバイクでパルトナーまで飛んで、沈没する豪華客船の救助をやって、アンジエを奪還して、公国と戦って——昨日から一睡もしていないではないか。

16歳の身体に徹夜はきつい。

俺はパルトナーにある自室に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

すぐに意識が遠のく。



翌日。

「パルトフアルト」

声を掛けてきたのはクリスだった。

「黒騎士を倒したと聞いた」

噂が広まるのは早いな。

そりゃあ、あれだけ派手に俺を讃える通信が飛び交っていれば学園生たちの耳にも入るだろうけど。

「ああ——まあ、なんとかな」

俺は言葉を濁す。

クリスは少し俯いて言う。

「——お前は凄いな。私の父ですら倒せなかった相手を倒して、得物を分捕るとは。私はお前の技量を測ることが出来なかった。恥ずかしい限りだ」

うーん、コイツ勘違いしてるな。

お前に勝ったのも、黒騎士を倒したのもアロガンツの性能あってこそであって、俺はただの小心者のモブだ。

だがクリスは顔を上げ、決意を新たにしようとしたような表情で告げてきた。

「必ず追いつく！私はお前に認められるくらい、強くなる。お前は——私の目標だ」

そう言つてクリスは去つて行つた。

勘違いを訂正しようかとも思ったが、面倒なのでやめた。

どいつもこいつも改心するのが遅すぎるだろ。

「——そうかよ。ならお前も道連れだ」



学園の自室。

「戻ってきたあ〜！」

ベッドに大の字になるが、ベッドには少々複雑な思いがある。

眠ると俺が死なせた黒騎士が夢に出るのだ。

飛び起きる度に、自分の手が汚れてしまったことを嫌でも思い出させられる。

だが今俺はものすごく疲れている。

帰って来て早々、散々取り調べを受けたのだ。

特に豪華客船の救助に行った経緯とアンジエを奪還するために勝手に公国艦隊と交戦した件については、かなりしつこかった。

なんで「終わりよければ全てよし」とはいかないのだろうか。

まあ、アンジエ奪還は学園生たちの意志だったと役人に吹き込んでおいたけど。

「あー疲れる」

『マスターは普段怠けていますので、たまにはこれくらい忙しく動き回っていた方がよろしいかと』

俺にあくせく働けというのか？そんなのもう前世の分で飽き飽きしたわ。

『それにしても、黒騎士の大剣を献上してしまつてよかつたのですか？』

「あんな呪われてそんなもの持つていたくないの。何人の血を吸つてきたか分かつたもんじゃないだろ。それに同じようなものならお前が用意できる。違うか？」

おまけに俺はその大剣で黒騎士の1人を死なせているのだ。

『可能です』

「なら問題ない」

その時、ドアがノックされた。

「バルトファルト男爵。アンジエリカ・ラファ・レッドグレイブ様が訪ねておいでです」

——やっぱり、言う時が来てしまったか。

俺は重い身体を起き上がらせてドアを開けた。

空葬い

「リオン——リビアはどこにいる？」

アンジエは不安と怒気が入り混じった声と表情でそう言った。

隠し通せるものじゃないのは分かっていたが、アンジエにこんな声と表情を向けられるのはつらい。

「お前はリビアをちゃんと助けたと言ったよな？だがパルトナーにリビアはいなかった。収容された生存者のリストにもリビアの名はなかった。それどころか役人に聞けば行方不明者扱いだったぞ。——どうということだ？」

アンジエの赤い瞳が真っ直ぐに俺を見る。

嘘を吐いていた俺への憤りとそれでも信じたいと思う気持ちがせめぎ合っているよ
うな——そんな視線を向けられると何もかも見透かされているような気になる。

考えていた言い訳も全て霧散し、俺はただ一言しか言えなかった。

「——ついて来て」

俺は歩き出した。

アンジエは黙ってついてくる。

俺たちが向かったのはエアバイクの駐機場だった。

置いてあつたエアバイクを1台拝借し、アンジエを後席に乗せるとすぐに離陸する。学園を離れ、港を飛び越えて、30分ほど飛んでパルトナー——ではなくルクシオン本体に着艦する。

ルクシオン本体に他人を入れたのは初めてだが、アンジエなら秘密を守ってくれと思う——というか、信じたい。

「リオン、この船は——パルトナーとは違うのか？」

アンジエが違和感を口にする。

当然だろう。SFチックな内装は以前から時間をかけて隠させていたが、何もかもパルトナーと同じにはなっていない。パルトナーに乗ったことがあればすぐに別の船だと分かるだろう。

だが俺はその質問には答えない。

「リビアはこの船の医務室に収容してる。この先の部屋だよ。ただ——」

俺は一旦話を区切り、アンジエに向き直る。

「ここで見たことは一切秘密にしておいて欲しい」

アンジエは頷いた。

「あ、ああ。分かった」

俺は医務室の扉を開ける。

リビアは医療カプセルの中で眠っていた。

呼吸に合わせて胸が上下しているが、それ以外は全く動かない。

「リビア！」

アンジエがカプセルに駆け寄るが、その手はガラスに阻まれてリビアに届かない。

「どうなってる？リビアは生きているのだろうか？何故こんな所に」

アンジエがまくし立ててくる。

——植物状態ってどう説明したものかな。

「生きてはいる。でも——目を覚まさないんだよ。助けに行った時、リビアは船の牢屋に閉じ込められて、溺れてたんだ。この船の医療設備のお陰でなんとか死なずに済んだけど——いつ覚めるかもわからない、下手すれば二度と目覚めない——そんな眠りに入ってしまったんだよ——」

聡明なアンジエは俺の拙い説明でもリビアの現状を理解できたらしい。

「なんだ——それ」

アンジエは目を見開く。

「嘘、だよな？いつもみたくふざけているだけだよな？悪いが笑えないぞ？」

アンジエが俺の肩を掴んで揺するが、まるで力が込もっていない。

「俺は嘘は言わないよ。本当に——リビアは目を覚まさない」

アンジェエが力が抜けたようにへたり込む。

そして涙をぼろぼろと流し始めた。

「——奴が男爵家以上の者は捕虜として扱う、それ以外の者は必要ないと、そう言ったから私は投降したんだぞ——そうすればリビアを助けられると思っただ——なのに——こんなことに、なるとは——私はどうすればよかつただ？」

アンジェエがうわ言のように呟き始める。

「なあ、答えてくれ。私は——何がいけなかつただ？ 何もしない方が良かったのか？」

その問いに対する答えなど俺は持ち合わせていない。

俺を責め立てて、怒鳴り散らしてくれた方がまだ楽だった。

たぶんアンジェエが投降しようがしてなからうが、犠牲は大勢出たのだろう。

もしアンジェエが投降せずにいたとしても、リビアは普通クラスの生徒たちや船員、専属使用人たちと一緒に豪華客船に残されて、沈められただろう。

だがそんなことを今のアンジェエには言えない。口が裂けても。

「分からない——分からないよ。何もかも。リビアが閉じ込められてなければ——いや、そもそも公国が襲ってこなければ——」

俺は答えになつていない答えを返す。

なぜ公国がこのタイミングで攻めてきたのか、何があったのか——未だに分からない。

リビアをこんな状態に追いやったそもその理由が、分からない。

これから明らかに——できるだろうか？

「——許さない」

不意にアンジエが低い声で言った。

アンジエの声色はどんどん不穏なものになっていく。

「絶対に許さない。私からリビアを奪った——許せるわけがない——」

俺が声をかけようか判断に迷っていると、アンジエは顔を上げて叫んだ。

「この借りは返してやる！必ず!!」

アンジエの目を見た俺はゾツとした。

その瞳に凄まじい怒り——否、殺気が宿っていた。



公国との戦いから1週間が経った日。

王都にある神殿に学園生や貴族が大勢詰めかけていた。

集まる人々の気持ちが反映されているかのような肌寒い曇り空。薄い雲が何層にも重なって太陽の光を拒んでいる。

公国による襲撃で犠牲になった学園生たちの合同葬儀——その会場はかなり広かったが、空席はなかった。整然と並ぶ参列者は千人単位にも見える。

学園生たちは制服姿、大人たちは黒やダークグレーの喪服姿。

彼らは皆、並べられた多数の棺を見て涙を浮かべたり、悲痛な表情をしている。

並べられた棺はほとんどが空で名前だけが刻まれているのも悲しみに拍車を掛けているのだろう。

あの戦いの後、豪華客船が沈んだ海域の搜索が行われたが、遺体はほとんど回収できず、船の破片にしがみついていた手とか、食い荒らされた溺死体くらいしか見つからなかったらしい。

黒い喪服姿の貴族男性——学園長が弔辞を読み始める。

時折言葉を詰まらせている。こみ上げる涙が喉を詰まらせているのだろう。

読み終わる頃にはボロボロの泣き顔になっていた。

別れの言葉など告げたくないと、その顔は言っている。出来の悪いのが多くても、大切な生徒たちだったのだろう。

学園長だけではなく、会場の誰も彼もが早すぎる別れに戸惑い、悲しみに暮れている。

次に弔辞を読んだのはシェフイールド伯爵家の女当主だった。

末娘を喪つたその女性も弔辞を読み始める前から泣き崩れてしまい、まともに弔辞を述べられる状態ではなかった。

後続の人たちが彼女を支える。皆で涙を流しながら別れの言葉を告げていた。

臆病で、卑屈で、卑怯で、日和見主義な似非貴族共——俺を蔑み、憎み、逆恨みし、見栄の張り合いとマウンント合戦——と、婚活に明け暮れていた憎らしい奴らにも、その死を悲しむ人がいるんだな——俺はその姿を見てそう思う。

その後も何人かの弔辞が続き、それらが終わると教典（？）の朗読が始まる。

この世界の宗教はよく知らないが、葬儀は基督教式と仏式が混ざつたような内容だ。朗読が終わると参列者たちが次々に棺にコインを入れていく。

俺も「オリヴィア」と刻まれた棺にコインを入れる。「ステュクスの渡し銭」と呼ばれる作法なんだそうだ。

ステュクス——日本で言う三途の川を渡つた先の神界で、人は神の手で輪廻に戻され、新たな生を受ける。その川の渡銭を棺に入れて死者に持たせるのがしきたりらしい。

コインを入れる人がいなくなると、神官がひとつひとつ棺を回って聖印を切っていく。

神官が全ての棺を回り、一巡りすると、もう一度祈りを捧げた。

「彼らに輪廻の果報があらんことを」

その文句を合図に弔砲が発射され、それが終わると棺は神殿の中にある火葬場へと運ばれていく。

俺は胸中に憤りを抱えつつ「オリヴィア」と刻まれた棺を見送る。

——見送るのは俺だけだ。

アンジェはヴィンスさんやギルバートさんと一緒にいて離れられない様子だったが、リビアの家族は平民であるという理由だけでこの葬儀への参列を許されなかったのだ。

本当にこの世界って理不尽だ。

死んだ娘にお別れも言えないリビアの家族の気持ちは如何ばかりか。

いや、実際にはリビアは死んでないんだけど、俺とアンジェしか、そのことは知らない。
い。

俺の抱える秘密を守るために、「リビアは死んでいない」と言えない自分自身にも——
嫌気が差す。

火葬場へと送られていく棺の列はなかなか終わらない。



長い長い葬儀が終わった。

参列者たちは馬車で学園や港へと向かっていったが、俺は一人徒歩で学園への帰途に就いた。

人と顔を合わせるのが億劫だった。

殆どの遺族たちは手ぶらで神殿を去った。

彼らは子供たちの骨を故郷に埋めることもできない。

——「空葬い」——そんな言葉が頭に浮かぶ。

意味合いとしては違っているかもしれないが、他に的確な言葉は出てこない。

「おい」

不意にそんな声が聞こえた。

「お前、リオン・フォウ・バルトファルトだよな？」

どうやら俺に話しかけているらしいので振り返る。

いたのはセミロングの赤毛の女子生徒だ。3年生の制服を着ている。

俺より背が高い。それと、泣き腫らした目をしている。

「そうですけど？」

答えるといきなり赤毛先輩が殴ってきた。

俺は受け身を取れずに地面に倒れ込む。

「なんで——なんでロイスを乗せたまま公国と戦ったんだ！」

俺の胸倉を掴んで赤毛先輩が怒鳴ってくる。

ロイス？知らねえよそんなやつ。そう言いたくなるのを堪える。

「治療を始めるのがもう少し早かつたらつて——言つてたんだ。お前が——お前が公国と戦つて、時間を潰さなければあいつは助かったのに！お前は！」

とんだ八つ当たりだ。

アンジエとは大違いで本当の敵の公国を柵に上げて、俺を責め立てる。

これだから学園女子は嫌いなんだ。

でも——ロイスという人は知らないが、この先輩にとってはすごく大切な存在だったんだらう。

——その人が死んだ原因を作ったヤツに直接怒りをぶつけたくなるほどに。

「なんとか言えよ！」

赤毛先輩がまた俺を殴りつける。

そんなこと言われても——なんて言えいいのか分からない。

そもそも言葉が出てこない。

思考がフリーズしている。

なんで俺はこんな八つ当たりをされなきゃいけないんだ？

アンジエを公国に差し出して、リビアを閉じ込めて、海の上でみつともなく泣き喚いでたあいつらを助けてやったのは俺だ。

俺が駆けつけなかったら今頃アンジエ以外は全員死んでいる。むしろ感謝して欲しいくらいだ。

なんで俺はこんなに苦勞して頑張ってるのに、毎回酷い仕打ちで返されるんだ？

こつちの事情も知らないくせに理不尽なことばかり言いやがって。

最初に聞いた片側からの事情を信じて、相手の事情も知らないくせに勝手に誤解して、一方的に責め立てて。

そんなことして面白いのか？

こつちは何も知らない人に事情を話しても拗れるだけだから黙っているだけなのに。

本当に世の中、当事者の事情も知ろうとしないで、自分に都合の良い言葉だけ信じて、無駄に高い行動力で人を追い詰める馬鹿ばかりだな。

それなら、もういつそのこと――

「そいつまでこなさい」

不意に凜とした声が響く。

俺を責め立てていた赤毛の先輩が顔を歪める。

「クラリス——」

赤毛の先輩が俺から離れる。

見ると制服姿のクラリス先輩と首の太い3年生——エリオット先輩が立っていた。

「リオン君を責めればロイスさんが還つてくるというなら、私は喜んで貴女の手伝いをするわ。でも——そうじゃない。こんなことをしても何の意味もない。それは貴女も分かつているでしょう?」

クラリス先輩が諭すような口調で赤毛先輩に言う。

怒り狂った3年生の女子相手に随分肝が据わつてるな。

「——貴女の言葉は薄っぺらいのよ、クラリス。意味がない? だったら何よ? 大体コイツが——」

赤毛先輩が言い終わる前に「パシンッ!」といい音が響く。

クラリス先輩が赤毛先輩を張り倒していた。

「なら言い方を変えるわ。【メルセデス・フォウ・ランカスター】、今すぐここから去りなさい。リオン君にこれ以上危害を加えるなら——覚悟することね」

クラリス先輩がドスの効いた声で命令する。

メルセデスと呼ばれた赤毛先輩は頬を押さえながらクラリス先輩を睨みつけていたが、よろよろと立ち上がると、踵を返して歩き出す。

「——ああ、そういうことか。本当に——」

最後に暗い笑みを浮かべて呟いたメルセデス先輩は悄然と歩き去っていく。

何て言おうとしたのか気になるが——どうでもいいか。

クラリス先輩はしばし去っていくメルセデス先輩の背中を複雑な表情で見つめていたが、俺の方に向き直り——

「大丈夫？ 災難だったわね」

心配そうな表情で俺の顔を覗き込む。

「大丈夫に見えますか？」

意地悪く問い返したが、うまく口が動かない。

——痛い。痛すぎる。

リビアがいればすぐに治してくれるのだろうけど、そのリビアはここにはいない。

「——見えないわね。手当てするわ。屋敷にいらつしやい」

クラリス先輩の合図でエリオット先輩が俺を担ぎ上げた。

俺はぼんやりとなぜあのタイミニングでクラリス先輩が来たのか、問いかけていた。



クラリス先輩の実家はとんでもない豪邸だった。

アンジエの実家には規模で少し劣るが、噴水のある広大な庭に4階建ての白い荘厳な建物が映える。

これで晴れていれば、絶景だったのだろうが、生憎と曇り空。

「降りるわよ。歩ける？」

クラリス先輩が聞いてくる。

俺は無言で頷いて馬車を降りる。

エリオット先輩は馬車から降りるクラリス先輩に手を貸してあげていた。

「ありがとう、エリオット」

「いえ」

エリオット先輩は一礼して馬車に戻る。

馬車が離れていくと、クラリス先輩は俺の手を引いて屋敷へと歩いていく。

アトリー家お抱えの医者が使った治療魔法で殴られた傷は治ったが、治療魔法でも傷つき、悲鳴を上げる心は治せない。

「今日は両親は帰って来ないわ。ゆっくり休んでいって」

そうクラリス先輩は言った。

屋敷に男連れ込んで大丈夫なのかと思ったが、メイドや使用人も多くいる。

それに大臣の娘に手なんて出したら首が飛ぶ。

アンジェエパバという後ろ盾があつてもそんな向こう見ずな真似はできない。

しかし——收穫祭の時といい、クラリス先輩は何を考えているのか。

当てがわれた部屋のベッドに座り込んで俺はひたすら無言だった。

いつもなら皮肉や嫌味のひとつでも飛ばしてくるルクシオンはアロガンツとパルト

ナーの整備にかかりきりでいない。

コンコン、とドアがノックされる音がした。

返事をしない俺だったが、ノック音の主は「入るわよ」と言つて部屋に入ってくる。

部屋着姿のクラリス先輩は俺の隣に座った。

「特待生の娘——オリヴィアさんのことは残念だったわね」

本当にそうだ。

そして——浮かんできた考えに自己嫌悪が湧き起こる。

もし、クラリス先輩の誘いを断つて予定通りスメラギ島に行つていたら——そもそもクラリス先輩が俺を收穫祭に誘わなかったら——そうしたらリビアもアンジェエも——ロイスさんもあんなことにならずに済んだんじゃないかって一瞬思つてしまった。

「仕方ないことですよ。あんなことになるとか——誰も想像もしてませんでしたし、どうにもならないですよ」

目も合わさずにニヒルに笑って呟く。

「嘘ね」

投げやりな感じで吐いた嘘はあっさりから見破られた。

「嘘じゃないですよ」

「嘘よ。貴方は自分を責めている」

クラリス先輩は真つ直ぐに俺の目を見て断言した。

透き通った緑の瞳が怖い。

「なぜ自分を責めるの？」

俺がもつとうまく立ち回っていたらこんな悲劇は避けられた。

リビアは植物状態にならずに済んだ。アンジェや、葬儀に来ていた大勢の人々にあんな悲しみを味わわずに済んだ。メルセデス先輩はロイスさんを喪わずに済んだ。

そう思えてならないから、とでも言ったらクラリス先輩は何て言うんだろう。

クラリス先輩は答えに困る俺を見て何か感じ取ったのか、小さい子供に言い聞かせるようにゆっくりと、だがしっかりと話し始める。

「——リオン君。例え未来を見通すことができたとしても、運命を思い通りにすることはできないの。私たちは神とは違う。人間よ。どんな力があっても、どんなに聡明でも運命は手に負えるものではないの。だから——そう気に病まないで」

「でも俺は——」

言いかけて止めた。

俺は前世の記憶を持っている。この世界のこと、最終的に辿り得る結末も全て。

下手を打てばこの世界が滅ぶ、ということを知った上で、何もせずに心の隅でビクビクしながら生きていくなんて俺には無理だ。

俺がゲーム知識もルクシオンもまともに使いこなせなかった結果がああ悲劇だ。

この上世界が滅んだら——俺はルクシオンに乗って逃げられるかもしれないけど、絶対後悔して一生悩むだろう。

——でも、こんなこと誰にも言えない。

同じ転生者以外には絶対に話せない、墓場まで持っていかなければならない秘密。

「リオン君——」

クラリス先輩はそう呟くと、不意に俺の頭を抱きしめた。

「え？あの、先輩？」

困惑する俺にクラリス先輩は先程とは打って変わった悲痛な声で言う。

「貴方がそんな風に苦しむのを見ているのはつらいのよ」

俺を抱きしめるクラリス先輩の腕は微かに震えていた。

「貴方が何を知っていて、何が見えているのか、私には分からないけれど——貴方がとて

も優しくて、人知れず人のために頑張っているのは知っているわ。私のことを救ってくれたのも貴方だし——」

クラリス先輩が俺の頭に頬を載せる。

「だからリオン君が苦しんで自分を責めているのを見ていると——つらいのよ」
予想だにしていなかった言葉に俺は驚く。

そして——俺の目から涙がこぼれ落ちた。

指で拭ったがすぐにまた新しい涙が出てきてこぼれ落ちる。

泣きたくないのに。勝手に涙が止めどなく溢れてくる。

俺はまた泣いた。本当にこっちの世界に来てから泣いては立ち上がり、立ち上がっては疲れ果てて泣いて、また——その繰り返しだな。

でも——一緒に泣いてくれる人がいるのは初めてだ。

たとえ泣いている理由はズレていても、俺のことを想って泣いてくれる人がいる。それがたまらなく——嬉しかった。

疑惑

冷たい暗闇の中を彷徨っている。

上下も左右も分からない無重力の闇の中で俺は出口を探している。

早くしないと、ヤツらが来る。

俺を殺そうとするヤツら。

必死で周りを見回していると微かな温かさを感じた。

微かな光が見える。

出口だと思つて俺は走る。

後ろから声が聞こえる。

その声に籠もつた感情は読み取れないが、俺に対する敵意がビリビリ伝わってくる。

振り返つてはならない。

全速力で光に向かって走れ。

光がだんだん強く、大きくなる。

そこで誰かが呼んでいる。

早く、早く、そう言っているように見える。

しかし、光を目前にして何かが立ちはだかる。

(どけよー！)

俺を通せんぼする何かを必死で払いのける。

光が揺れた。

後ろから聞こえてくる声と、光の中から俺を呼ぶ声が大きくなる。

俺は焦る。

早く！早くあの光の中に！

あの光が消える前に――

背後からの冷たい気配が俺の背筋を震わせる。

ソレが俺に触れる直前――俺は光の中に飛び込んだ。

全身が不思議な温かさに包まれる。

どっと溜息を吐いて俺は倒れ込んだ。

なぜだろうか――もう動けないのに、なぜか安心する。

そういえば――暗闇から抜け出したはいいけど、ここはどこなんだ？

そんな疑問すら浮かんですぐに霧散する。



目が覚めると知らない天井——じゃなくて天幕が目に入る。

俺は天蓋付きのベッドに寝かされていたらしい。

何だか今日は寝覚めが良い。

ここの所ずっと死なせた黒騎士に襲われるか、あるいはあのまま黒騎士の大剣に刺し貫かれる悪夢を見て夜中に飛び起きていたが、昨夜は見なかったようだ。

ベッドの寝心地が良かったからかと思つたが、ふと手に違和感を覚える。

側に目をやると、右手が誰かの手に包まれている。

クラリス先輩が俺の手を握つたままベッドに突つ伏していた。

上半身だけベッドにもたれかかった姿勢ですうすう寝息を立てている。

どうやら俺は昨夜あのまま寝落ちしてしまつていたらしい。

クラリス先輩は自分の部屋に戻らず、俺と一緒にの部屋で一夜を明かしたようだ。

どうしたものかと思つているとクラリス先輩は目を覚ました。

「おはよう」

女神のような微笑みを向けてくる。

「あの——先輩、もしかしてずっとそこで——」

「——尋常じゃないうなされ方だったわよ。私が手を握っていたら、段々落ち着いたけ

れど」

その答えからするとどうやら俺は昨夜も悪夢を見ていて、クラリス先輩はうなされる俺の手を握り続けてくれたらしい。

なんか申し訳ない気持ちになる。

——どうして俺みたいなモブのためにそこまでしてくれるのだろうか。

「でも、今は落ち着いているようで良かったわ。さあ、顔を洗っていらっしやいな」
クラリス先輩が立ち上がり、洗面所に続く扉を指差した。

俺もベッドから降りた。

ふと服装が変わっていることに気付く。

たしか昨日は制服のままだったはず。なのに今はバスローブみたいなゆったりした服を着ていた。

いつの間に着替えたのか疑問に思いつつも、俺は洗面所に向かう。

大理石の洗面台にはまるで生活感がなかった。

曇りや水垢ひとつない大きな丸鏡やきつちりと端を揃えて掛けられた真っ白いタオルを見ると、使うのを躊躇してしまう。

ピカピカに磨かれた真鍮製の蛇口を捻り、隣に置かれていた固形石鹸を使って顔を洗う。

随分と高級なものらしく、もっこりした泡が肌に馴染む。

前世だったら洗顔グッズとして大人気になっただろう。

泡を流し、寝癖を直して、洗面所を出ると、扉に制服が掛かっていた。

アイロンがけされたらしく、新品のようにパリツとしている。

着替えて外に出ると、クラリス先輩が待っていた。



（嘘は言っていない——けれど——）

クラリスは昨夜のことを思い出す。

抱きしめていたらしいの間にか眠ってしまったリオンをベッドに寝かせた後——う

なされ始めた彼を放って置けずに手を握っていた。

何の夢を見ているのかは分からなかったが、恐らく戦いの夢だろう。

人伝てに聞いた情報では、リオンは黒騎士に蹂躪される味方を救うため、単騎で黒騎士に挑み掛かったらしい。

クラリスは黒騎士については一般的に流布されている程度の情報しか知らないが、それでも凄まじい強敵であることは知っている。

先の戦争では名の知れた王国の騎士が何十人も討ち取られ、当時から「劍聖」の称号を持つていた「ウイリス・フィア・アークライト」ですら、敵わなかった。

そんな相手にたった一人で挑む恐怖はとても想像できない。

戦いが終わった後も悪夢を見続けるほどに、心の奥深くに刻まれてしまった恐怖。それが和らぐのなら、何でもしてあげたいとクラリスは思ったのだ。

だから——ベッドに引きずり込まれた時も、抵抗はしなかった。

(所詮——汚れた身体だし)

今更惜しむ気持ちなどなかった。

だが——どこかで心が痛む。リオンは間違ひなく憶えていない。

学園に戻ったなら、彼はまた元通り——一人の学園男子生徒に戻るのだろう。

婚活のために女子生徒に声を掛けて、時々アンジェリカとお茶をして——自分のことは一人の先輩としてしか見てはくれない。

そしてクラリスは自分の心に潜む欲望に気付く。

(——本当に、汚いわね)

自分だけが知っている事実——それをダシに使って強引にリオンを自分のものにしてしまいたいという欲望。

それを満たしても、幸せな未来は誰にも訪れないと分かっているのに。

それでも——クラリスはリオンが欲しかった。

(駄目よ——そんなの、愛じゃなくて所有欲じゃない)

囁く自身の心の声を振り払う。

リオンが欲しいのは確かだが、それ以上にリオンを不幸にしたくはなかった。

◇◇◇

アトリー家の朝食は実家の規模の割には質素なものだった。

熱々のお茶に始まり、ベーコンエッグと豆のスープと、サラダとトースト。

バルトフアルト家の普段の朝食と大して変わりなかった。

もちろん食材は違うのだろうが、アトリー家は豪勢さよりも栄養バランスを考えた堅

実な食生活をしているらしい。

ゾラの一家にも見習って欲しいものである。

あの連中が実家に来る度にやたらと豪勢な食事を要求されて、しかも文句まで言われる。

何度「だったら食うな」とか、「そんなに言うなら自分で作れよ」と言っただけでやりたいたいと思っただけか。

まあそれはさて置き、昨日晩飯を食べないまま寝落ちしてしまつたせいで空腹だったので、余計に美味しく感じた。

クラリス先輩は微笑みを浮かべて俺の方を見ていたが、どこかその笑顔に翳りがあるように感じた。

「先輩？どうかしました？」

一応聞いてみる。俺が何かしでかしたのが原因なら、平身低頭して謝り倒す所存である。

「うん？どうもしないわよ。どうして？」

クラリス先輩はきよとんとした顔で言う。

「——いえ、何となく——何か考え込んでるみたいだったので」

何か考え込んでるみたいだったので、という最強の誤魔化しを使用する。

「大丈夫よ。それより今日は予定あるのかしら？」

予定——特にはないが、俺にはやることがある。

「——はい。食べたからお暇します」

また？を吐いた。

「そう。貴方も大変ね」

そう言うクラリス先輩の表情に翳りは見えなくなっていた。

——さっきのは何だったんだろう。



アトリー家の屋敷を出た俺はまた学園の寮に戻ってきた。

ノートを広げてタスクを書き出していく。

やることは沢山ある。

取り急ぎ優先度が高いのは公国に関する情報収集。

ヘルトルーデが言っていた「代わり」とは何なのかを明らかにしたい。

もしかしたらゲームには出てこなかった別の何かが存在しているのかもしれない。

考えてみれば、ゲームでエンディングを迎えても、現実はそれ以降も続くのだ。

ならば、今のうちに公国に関する情報を細大漏らさず集めておかないと、後で予想外の事態に陥りかねない。

リビアが意識を取り戻す見込みがない以上、彼女の力に頼らずに破滅を回避する方法を模索しなければいけないのだ。

ルクシオンに命じればパパスと調べてきてくれそうだが、ルクシオンはアロガンツとパルトナーの整備にかかりきりであと何日かは留守だ。

ちなみにヘルトルーデから奪い取った魔笛も調べるよう命じておいたが、これも後回しにされている。

そして公国と繋がっている奴の特定。

怪しいのはオフリー伯爵家の関係者だ。

オフリー伯爵家は取り潰され、当主と後継ぎは処刑されてしまっているが、オフリー伯爵家が属していた派閥を調べれば目星がつかだろう。

これについてはレッドグレイブ公爵家の力を借りられそうだ。アンジェに口添えを頼めば協力してくれるだろう。

俺は宮廷での派閥争いの事情など知らないのです、協力者は必要だ。

他にも聖女の力のこととか、「王家の船」のこととか、後はマリエのこと。

リビアのポジジョンを奪っている時点でマリエのゲーム知識に期待はできないが、もしかしたら、俺の知らないことを知っているかもしれない。

俺が適当に読み飛ばしたキャプジョンの内容とか、あるいは俺が知らない攻略情報とか裏設定なんかを知っていたら儲けものだ。

ついでにリビアのポジジョンを奪った目的についても問い質す必要があるな。

問題はどうかやってマリエとサシで話をするかだが——お茶会に誘うってわけにもいかないしな。

ルクシオンと相談しよう。

先にレッドグレイブ公爵家の協力を取り付けることから始めるか。



数日後。

俺はアンジエと一緒にレッドグレイブ公爵家の屋敷に来ていた。

ヴィンスさんは留守だったのでギルバートさんが話を聞いてくれた。

「つまり——内なる敵はまだ存在していると、君はそう考えているわけか」

「はい。内通者の生存は定かではありませんが、彼らに指示した者がいるはずです」

それを聞いてギルバートさんは溜息を吐いた。

「厄介だな。その内通者が誰なのか分からないことにはこちらとしても動きようがない。君の言うことを確かめようにも、生存者への事情聴取をやり直すことから始めなければならぬ」

難しい顔をするギルバートさんに俺はひとつ、提言する。

「心当たりはありますか。オフリー伯爵家の関係者に的を絞れば良いかと」

ギルバートさんは目を細めて問うてくる。

「そう考える根拠は？」

「先日自分が討伐した空賊団、オフリー伯爵家、公国、この三者は繋がっていたと自分は考えています。件の空賊団を討伐した際、疑問に思ったのですが、空賊にしては装備が極めて充実していました。オフリー家が横流ししていたにしても些か高性能すぎるものをいくつか見かけました」

そう言つて俺は空賊団からの分捕り品目をギルバートさんに見せる。

分捕つた時には詳しく調べなかつたが、飛行船に積まれていた大砲や鎧用のライフル——それらは明らかに王国製のものではなかつた。

にも関わらず、かなりの高性能で下手な軍隊よりも充実した装備体系だったのだ。

スクラツパーギルドにも問い合わせ、売り飛ばした空賊の武器を調べさせてもらったが、これがビンゴ。

公国製だった。巧妙に銘を隠していたが、スクラツパーギルドの目利きが見つければ出てくれた。

「分捕つた空賊の武器を調べた結果、公国から密輸された新型でした。つまり、公国との繋がりがあつたのです。ですが、空賊と繋がっていたオフリー伯爵家と公国との間で直接のやり取りがあつた証拠は見つかつていないと聞きます」

「——続けたまえ」

「オフリー伯爵家と公国の双方にパイプを持つていた——いえ、今も持つている人物がいると考えられます。内通者に指示したのはその者かと」

ギルバートさんは考え込む。

「ふむ——オフリー伯爵はフランプトン侯爵の派閥に属していた。同じ派閥の貴族か、あるいは侯爵自身か——絞り込めるとはいえ、容疑者は多いな。しかもおいそれとも探れない大物揃いときた」

フランプトン侯爵、か。ゲームにはそんな名前のキャラは出てこなかったな。

オフリー伯爵家の後ろ盾——その割には随分あっさりとおフリー伯爵家を切り捨てているが。

「フランプトン侯爵は今回の交戦を機に公国に接近しようとしているらしい。ゆくゆくは公国を再び王国の傘下に加えたいのだろうが——処分は手緩いものになりそうだが。リオン君の話と照らし合わせると、今回の交戦自体、侯爵と公国軍が共謀したのではないかと思えてくる」

「仮にそうだと——何の目的でそのようなことを？」

アンジェが質問した。

「——侯爵は公国軍を利用して政敵を物理的に排除しようとしている——確証はないが、十分あり得る」

政敵を排除するために自国を憎む敵国と手を組む——馬鹿じゃないのか？

そんなことをしても「相手を利用していたと思つたらこちらが駒にされていた」という状況になるのがお決まりのパターンなのに。

「調べてみる価値はありそうだが——なかなか尻尾は掴めないだろうな。発言力が下れば情報力も下がる」

ギルバートさんは溜息を吐く。

アンジェはしばらく難しい顔で考え込んでいたが、ふと気付いたように再び質問した。

「ヘルトルーデ殿下の処遇はどのように？」

俺も聞き耳を立てる。

「意見が割れているな。シエフィールド伯爵をはじめ犠牲になった学園生の親たちは戦争犯罪人として処刑するよう求めている。だがフランプトン侯爵と彼の派閥はそれに反対している。一時は学園に留学させるという話まであった」

いや学園に留学つてそれはないでしょ。

多くの学園生を死に追いやった相手が受け入れられるわけがない。

本当にそのフランプトン侯爵とやらは何を考えているのか。

「さすがに留学は反対多数で流れたが——今のレッドグレイブ家に発言力はほとんどな

い。去年までなら鶴の一声で流れが決まったものだが——今の王宮は予測不能だ」

レッドグレイブ公爵家は予想以上に弱体化していたらしい。

この分だと俺の後ろ盾としてのパワーも怪しく思えてくるな。かといってほかに頼る相手もないしな——。

「何はともあれ、リオン君、情報提供には感謝する。今後の方針を決めるにあたって、大いに役立つだろう」

ギルバートさんは先程までとは打って変わって笑顔で言った。

「いえ、情報は持っているだけでは意味がありませんから」

そう、情報は適切に処理・利用できる立場の人に届けられて初めて意味がある。

ルクシオンが戻ったらあいつにも伝えなければ。

ふとギルバートさんが俺に質問してきた。

「時にリオン君。つかぬことを聞くが、結婚相手の目星はついているのかな？」

ギルバートさんの問いは答えに困るものだった。

質問の意図を確認する。

「いえ、まだですが——なぜそれを？」

「我々としても君の後ろ盾になる以上、君のことは調べさせてもらっているが——結婚相手が決まったと言う話は聞こえてこないものでね。正直なところ、下手な相手と結婚

してもらっては不都合も出てくるだろうと思つていた」

——なるほどな。要するに俺をレッドグレイブ派閥により深く取り込みたいのだから。

そのためには敵対派閥に属する家の娘と結婚などされては困ると見た。

だが——心配は無用である。マイナスの意味で。

「ご存知でないかもしれませんが、俺はほとんど全校生徒に嫌われてしまつてね。お茶会に誘つても梨の礫、けんもほろろです。女の影もありませんよ」

なぜかアンジエが少し不機嫌そうな顔をする。

「そうなのかね？ 独力で昇進し続ける五位上の騎士が身向きもされないというのは些か信じ難いのだが——」

いやいや、独力じゃないです。

ユリウス殿下たちとの決闘に勝つたのも、空賊をあつさり討伐できたのも、アンジエを救えたのも、公国と戦えたのも全てルクシオンがいたからこそであつて——

——ん？ ちよつと待つて。今さつき聞き捨てならない単語が聞こえたんだけど？

「え？ 俺の階位は五位下で卒業後に昇進という話では？」

ギルバートさんは少し首を傾げ、続いてはたと気付いたような仕草をすると、恥ずかしげに微笑みながら爆弾を落としてきた。

「ああ、君にはまだ伝わっていないのだったね。実は——」
その続きを聞いた俺は血の気が引いた。



学園に戻る俺の足取りは重い。

なんと俺はまたしても意に反した出世をしてしまうことになったのだ。

要約すると、今回の公国との戦いで最大の功績を挙げたのは俺なのだそうだ。

学生や船員たちを救助した功績に、1人の死傷者も出さずにアンジエを奪還した功績、王国艦隊に公国艦隊の情報を伝え、迅速な会敵に貢献した功績、ヘルトルーデを捕らえた功績、さらには誰も討ち果たすことができなかった黒騎士こと【バンデル・ヒム・ゼンデン】子爵を単独で破ったのが決定打となった。

俺は【従軍勲章】と民間人に贈られる【奉仕勲章】に加え、20年前の公国との戦争以来、受章者がいない【白金双翼章】なる勲章を授与されることになった。

これに留まらず、アークライト家、フィールド家、セバーク家、ローズブレイド家、そしてなんとミレーヌ様までが俺に推薦状を出し、俺はこの度【四位下】の【子爵】に陞爵することになってしまったのである。

アンジエもこのことは知らなかったらしく、血の気の引いた顔で冷や汗を流す俺を見て気の毒そうにしていた。

望まぬ出世の悪夢再び——全く想定してなかったと言えば嘘になるが、さすがに頭がクラクラしてくる。

子爵——子爵って！

俺に一体どんな働きを求めるんだ！そんなに期待されても困る！

男爵相当の貢献ですら、できるかどうか甚だ怪しいのに子爵になってしまおうとか——どうすればいいんだ!?

これじゃもし無事にゲームクリアまで辿り着けても俺にとっては結局バッドエンドじゃないか！

——本当にこの世界はモブに厳しい。

『おや、この世の終わりのような顔をしていますね。まさかまた昇進したのですか?』
部屋に戻るとルクシオンが早速核心を突いてきた。

「四位下の子爵に昇進だつて——また負担が増える——ははは、悪夢だ——」
乾いた笑いを漏らしながらベッドに倒れ込む。

だがルクシオンは至つて真面目な声で言ってきた。

『そうでしょうか?むしろ良かったのではないですか?』

「え？なんで？」

ルクシオンは右肩辺りに寄ってくると耳打ちするようにつてきた。

『——クラリスと結婚できますよ』

掴み取る幸せ

『クラリスと結婚できますよ』

ルクシオンのその言葉に俺はハツとした。

クラリス先輩と結婚——身分が違いすぎて無理だと思つてたけど、子爵に陞爵したら
大手を振つてできるようになるじゃないか！

クラリス先輩は俺のこと好き（？）な素振りを見せてるし——これって千載一遇の好
機なのでは？

うまくいけば俺には勿体ないほど魅力的な女子と結婚できて、婚活地獄からも解放さ
れる！

「それはいいな！」

ガバツと起き上がる俺にルクシオンは呆れていた。

『現金な方ですね』

「今度開くお茶会には真つ先にクラリス先輩を誘うとするか。クラリス先輩の気持ち
確かめられたら、その場で——いやいやそれはさすがにないか。でも——」

どうやったたらスマートにクラリス先輩との婚約を取り付けられるか、考え始めた俺は

ハツと思いい出す。

「そうだルクシオン、魔笛の解析はどうなってる?」

ルクシオンは珍しく興奮したような口ぶりで話し始める。

『驚きました。あの道具は全く未知の技術で作られています。年代測定の結果、作られたのはホルファート王国の建国よりも前のことだと判りました』

「え? 公国が作った道具じゃないのか?」

『はい。公国は魔笛を解析し、利用しているだけで作ったわけではありません。定義上はあの魔笛もロストアイテムの一種ということですよ』

——知らなかった。

「モンスターを操るカラクリは解ったのか?」

『はい。魔法的な契約によってモンスターたちを従えているものと思われます。その際の触媒は、術者の命ですよ』

「え!」

俺は思わず声の上擦った。

命を吸う道具とか、怖いんだけど。

『そこらのモンスター程度では命を奪われることはありません。精々、精神的な疲労感を味わうだけでしょ。ですが、あの魔笛に封印されている人工的に作り出されたモン

スターは別ですね』

魔笛に封印された巨大モンスター。移動するだけで地震を起こし、何度倒しても復活する厄介すぎるラスボスだ。

『封印というのは不正確ですね。魔笛には巨大モンスターの元になる情報が保存されています。術者は自身の命を触媒に、周辺の魔素を集めて巨大モンスターを実体化させるのです』

「つまり倒せない原因は魔笛だったってことか——」

てつきりラスボスはリビアの持つ力でなければ絶対に倒せないと思っていたが、無限復活のタネが分かれば対処のしようはある。

「だったら魔笛を壊してしまえば心配はいらないってことじゃないか？それとも壊したら何かまずいことになるか？」

『周囲に影響なく破壊することはできません。ですが使用されている魔法と科学技術に価値があるので、解析を続けたいのです』

さつさと破壊させるべきかどうか少し考えたが——魔笛は手元にあることだし、面倒なことにならないなら構わないか。

「分かった。けど終わったらちゃんと壊せよ」

『もちろんです』

ふっと息が漏れる。

最大の懸案事項の1つが解消された。

「それとルクシオン、もういくつか調べてもらいたいことがあるんだが——」

『何ででしょうか?』

ルクシオンがセンサーアイを光らせた。

◇◇◇

数日後。

真新しい茶器から透き通った赤い液体をカップに注ぐ。

今日も今日とてお茶会に精を出す俺だが、今回の相手はクラリス先輩である。

前回クラリス先輩の方から誘って頂いたお返しという体で招待状を渡したら、その日のうちに承諾の返事をくれた。

新しいティーセットを購入し、師匠に茶葉・菓子選びに付き合ってもらい、レイアウトもいくつか試して一番良いと思ったのを念入りに整えた。

そして今、会心の出来と自負するお茶をお出ししているわけである。

「貴方のお茶を頂くのは初めてね」

クラリス先輩は嬉しそうにしているが俺の方は内心穏やかではない。

俺のお茶など、この前クラリス先輩の淹れてくれたお茶に比べれば月とスッポンだ。いくら会心の出来でもクラリス先輩にお出しするのは正直凄く恥ずかしい。

「——どうぞ」

「ありがとう」

ティーカップを受け取ったクラリス先輩は余裕を見せるかのように香りを楽しんだ後、ひと口飲んで——笑顔になる。

「美味しいわ。これ、ヌワ||リエリアね。私の好きな味よ」

ひと口飲んだだけで銘柄を当ててきた。

「分かるんですか？ さすがですね」

やっぱりあんな美味しいお茶を淹れるだけあつて利き茶もできるらしい。

「ふふ、淹れた人がお茶の持ち味を引き出せているからよ。努力したのね」

——喜んで貰えてよかった。

というか今までそんな褒め言葉掛けられたことって——なかったよな。

これまで誘った女子はもちろん、リビアとアンジエにも言われたことはない。

リビアはお菓子に夢中だったし、アンジエは俺のこと茶狂いって言うし。

思わず嬉し涙が出そうになる。

自分が一番情熱を注いだものを褒められるってこんなに嬉しいんだな——。涙腺が緩むのを堪えて自分の分を注ぎ、ティータイムを楽しむ。

お茶請けを食べてしまつて、お茶の一杯目が空になったタイミングで話を切り出す。

「あの——クラリス先輩」「——リオン君」

見事に質問のタイミングが被つた。一瞬気まずい空気になる。

「えつと——お先にどうぞ?」

俺は先を譲る。

「聞いたわよ。子爵への陞爵が内定したそうね」

どこか嬉しそうな顔でクラリス先輩は言う。

「はい。レッドグレイブ公爵家から伝えられました」

「——公爵家は貴方の結婚について何か言っていたのかしら?」

「相手の目星は付いているかは訊かれましたけど——どうしてそれを?」

「ふふ——子爵になれば選択肢は広がるわね。下は男爵家から上は伯爵家まで——寄つてくる娘も多くなるんじゃないかしら?」

それはどうだろうか? 今まで恨みを買ひ過ぎたからな。

仮にそうなたとしても、今までこちらを見下してきた相手が華麗に手の平を返して媚びてくるなんて、気持ち悪いだけだと思うのだが。

自分でも気付かないうちに難しい顔をしていたらしい。

「——嬉しくないの?」

クラリス先輩が心配そうな顔で言ってくる。

「いい、いえ——嬉しいですよ」

クラリス先輩と結婚できるようになったから——そう言いかけたがクラリス先輩の追及の方が早かった。

「そうは見えないのだけど? やっぱりアンジェリカ狙いかしら?」

え? なんでここでアンジェエの話?

俺ってアンジェエのこと好きないように見えてたの?

「いや、違いますって。アンジェエはその——そう、友達ですよ。貴重な友達です」

「ムキになるところが怪しいわね」

クラリス先輩が目を細めて愉しそうな微笑みを浮かべている。

「公爵令嬢ですよ。狙うなんて畏れ多いです」

「あら、好意は否定しないのね」

「それは——というか、どうしてそんな話になるんですか?」

「ふふ——どうしてかしらね」

うーん調子狂うな。なんか今日のクラリス先輩は俺を煙に巻こうとしている。

溜息を吐きたくなるのを堪えて2杯目のお茶を淹れていると、クラリス先輩が不意に真顔になり、呟くように訊いてきた。

「ねえ——私はどうなのかしら？」

その表情は——何というか、期待とか不安とか、色々混じり合つた翳りのある笑顔だった。

一瞬その表情に気を取られて言葉が出てこなかった。

慌てて口を開くが、クラリス先輩がそれを遮つた。

「今ここで答える必要はないわ」

「——先輩？」

クラリス先輩はお茶が注がれたティーカップを自分で取つてソーサーに置いた。

角砂糖を入れてかき混ぜながらクラリス先輩は言つた。

「収穫祭2日目、一緒に回る約束をまだ果たしてもらつていないわ。その埋め合わせをしてから聞かせて」

埋め合わせ？それってどういうこと——？

クラリス先輩は2杯目をひと口飲んでから言つた。

「デザートに行くのよ」



お茶会の時間が終わり、クラリスは女子寮への帰途に就く。

（あれで良かったのかしらね）

リオンに自分はどうか映っているのか——好意があるのか、それとも単に善意で助けた人の一人なのか——その答えを聞くのが怖くなつて彼の言葉を遮った。

（いつから私はこんなに臆病になつたのかしら——）

自問するが、実のところ考えるまでもなく答えは分かっている。かつて愛して^ルいた男に捨てられてからだ。

あれから女性としての自信をほぼ完全に喪失してしまつた。

おまけに収穫祭で考えつく限りの誘惑を試みてもなお転ばず、自分の前でオリヴィアとアンジェリカへの想いを滲ませたりオンを見て、僅かに残っていた歪んだ自信も完全に打ち砕かれた。

そしてリオンが自分を求めてきたのは夢心地の時、それも目の前の相手が誰かも分かっている状態だった。

——好きな人に愛されない苦しみをまた味わうことになる予感がする。

だから——仮に両思いだったとしても、予感通りあえなく振られることになるとして

も、その前にもうひとつだけ思い出が欲しかった。



ルクシオン本体。

その医務室でリビアはまだ眠り続けている。

俺はカプセルの横に「聖なる首飾り」を置いた。

本来ならリビアが持つことになっていたもの。

『権威の象徴とも考えましたが、エネルギーを内包しています。何かの効果があるのは間違いありません』

ルクシオンはそう言っていた。

何の効果かは分からなかったが、リビアが持つと凄いパワーを発揮するアイテムだ。

チートレベルの防御力とか、ダメージを受けた味方の回復とか、モンスターへの強烈な攻撃力とか。

もしかしたらリビアも助けてくれるかもしれない——そう思っただけでリビアの傍に置くことにした。

「ごめんな——渡すのが遅くなった」

もし修学旅行の前に渡していたらどうなっていたらだろうか。あの悲劇は防げただろうか。

——考えても仕方ないか。

今はただ回復を祈るばかりだ。

「そういえばさ。俺、子爵に昇進することになったっちゃったんだ。リビアを助けに行つてアンジェを奪い返して、ちよつと王国軍のお手伝いをするだけのはずだったにさ。黒騎士つていう出鱈目に強い敵が出てきて、仕方なく相手したんだけど——死ぬかと思つたよ」

何も返つてはこないが、リビアに俺の奇譚を語つて聞かせる。

「何とかかんとか黒騎士を撃退したら、周りから英雄扱いされちゃつてさ。凄くレアな勲章まで貰うことになったんだ。そんなもの俺は興味ないんだけど。で、色んなところから推薦状出されて、ミレーヌ様にまで後押しされて、子爵になることが決まつたつてわけ。本当に——なんで毎度毎度厄介事に巻き込まれる度に出世しちゃうんだか——」

——いけない。愚痴になつてしまつていた。

空気が重くなるようなこと言つちや悪いな。

「でも——今回は悪いことばかりでもなかつたな。今度の週末クラス先輩とデートすることになつてさ。うまくいけば——やつと婚活から解放されそうなんだよ」

リビアが眠ってなかつたら、この話にどんな反応をしただろうか——そんなことをチラツと考える。

リビアのことだから素直に祝福してくれるとは思うけど——ひよつとしたら心配するだろうか。初対面の時クラリス先輩はかなりグレてたしな。

でもクラリス先輩は本当はととても健気で、優しくて、凄く魅力的な人なんだって教えてあげたい。

正直——目を覚まさないリビアや、悲しみと怒りで近寄り難い雰囲気を纏うようになったアンジェを差し置いて、俺だけが幸せを掴もうとするのはどこか気が咎めたが、どの道婚活からは逃げられない。

それにクラリス先輩との婚約に成功すれば、婚活に割かれていた時間と資金をもっと有効に使える。

「また来るよ」

俺はそう言つて部屋を出た。

今度【聖なる腕輪】も回収して持つて来よう。



クラリス先輩は白いブラウスに黒のロングスカートという垢抜けた格好で来た。

いつものようなサイドアップではなく、三つ編みを組み合わせたお洒落なハーフアップ。

クラリス先輩って本当に髪型のバリエーション多いな。

「待ったかしら？」

「いえ、さつき来たばかりですよ」

「良かった。リオン君、新しい上着買ったの？」

クラリス先輩が俺の上着を見て尋ねてきた。

「はい、空賊退治の報酬で買ったんですよ」

「そう。似合ってるわよ」

クラリス先輩が褒めてくれた。ここは褒め返すべきだよな。

「クラリス先輩も似合ってますよ。——大人っぽく見えます」

褒め言葉としてはありきたりだが、俺に女性ウケする褒め方を求められても困る。

だって——絶対似合わないし。

そういえばジルクってクラリス先輩とデートしたことあったんだらうか。

マリエとはしよっちゆうしてたけど——もししてたならどんな風に褒めてたんだらう。

——つまらない疑問だな。俺が気にしても仕方ない。
クラリス先輩はベタな褒め方でも笑顔を見せる。

「ありがとう。さ、行きましようか」

クラリス先輩が俺の手を取った。

収穫祭の時みたいに腕を組んできたりはしない。恋人繋ぎでもない、普通の握り方。
前回よりかはプラトニツクな雰囲気であれは王都を歩く。

「あ、あの店行ってみない?」

クラリス先輩がとある店の前で立ち止まった。

アクセサリーを売っている店のようだ。

「いいですよ」

2人で店に入ると、店内にいたのは殆どが貴族女性だった。

専属使用人を連れて高価そうなネックレスやらイヤリングやらを物色している。

——近付きたくないな。

クラリス先輩は他の客がいない所に歩いていく。

「これ、リオン君に似合うと思うわよ」

クラリス先輩が手に取って見せてきたのは木彫りのネックレスだった。

シンプルだが、大人っぽい魅力を感じる。

「着けてみる?」

どうやら試着できるようだったので、鏡の前に行つて着けてみた。

——結構印象変わるものなんだな。ネックレス侮り難し。

「気に入ったならプレゼントするわよ」

クラリス先輩が微笑みながら言った。

マジか——正直凄く嬉しい。

女子からプレゼント貰えるのって何気に今世じゃ初めてじゃないか?

——だが、一方的にプレゼントされるつてのは気が引けるな。ここはひとつ俺からも何か——。

辺りを見渡した俺はすぐ横にあつたものに目が留まつた。

「あ、じゃあクラリス先輩にも。これなんてどうですか?」

俺は簪のようなヘアアクセサリーを手に取つた。

「あら、マジエステ? リオン君センス良いわね」

いや、それほどでもないです。

前世で妹がよく着けてたヘアアクセサリーにそっくりで、なんとなくクラリス先輩にも似合うかなと思つただけなんだけど——あれマジエステっていうのか。

妹のアクセに興味なんてなかったから知らなかった。

「気に入ったわ。ありがとう」

クラリス先輩がマジエステを挿した後ろ髪を見せてくる。

橙色の髪に白と黒のマジエステはよく似合う。

「よかった。とても似合ってますよ」

何ていうか——こんな時間はこそばゆいけど心地良い。

購入したアクセサリをすぐに着けて、俺たちは店を出た。

外に出ると日の光が当たる分、アクセサリも着けているクラリス先輩も綺麗に見える。

クラリス先輩はお茶会で見せたような鬢りなど微塵もない笑顔だった。



昼。

アクセサリーの店を出てから、もういくつかの店に立ち寄り、魅力的な商品の数々に心躍らせ、空腹になった俺たちはオープンテラスのあるレストランで食事していた。

「うーん、美味しいですね」

料理に舌鼓を打つ俺は実にも上機嫌である。

クラリス先輩と一緒になので、普段は行かないようなお高めの店に入ってみたら、値が張るだけあってかなり美味しい。

特に今俺が食べている、湖で獲れた新鮮な魚を使った焼き魚料理は脂が乗っていて絶品だ。

スパイスと柑橘系の汁のいい香りが味を引き立てる。

「本当ね。来たことなかったけれど、いいものね」

俺よりだいたい舌が肥えているであろうクラリス先輩も満足してくれているようだ。

彼女は蟹を丸ごと茹でて、それをニンニクの油と沢山のスパイスで豪快にローストしたものを注文していた。

俺が注文した焼き魚と双璧を成すこの店の看板メニューなんだそうだ。

蟹が丸々一匹殻ごと出てくると、驚くほど大きく感じる。

実際に一人で食べるには大きすぎたようで、いくらか分けてくれた。

蟹自体はさっぱりした味だが、スパイスの混じった油を付けると途端に濃厚な味わいになる。こんなの前世じゃ食べたことない。

この世界に転生して数少ない良かったことは美食を楽しむことだな。

「いかがですか？」

ウェイターが声を掛けてきた。

「今まで食べた中で一番美味しい！」

キリツとした笑顔で感想を言う。

「大袈裟ですね貴族様。デザートは如何されますか？」

ウエイターが若干苦笑しながらデザートメニューを渡してきた。

「俺は葡萄のタルトで。クラリス先輩はどれにします？」

「私はマロンシャンテリーにするわ」

「かしこまりました」

ウエイターが下がると、俺たちは急ぎ足でメインディッシュを平らげた。

「お待たせしました。デザートと紅茶でございます」

ウエイターがデザートと食後のお茶を運んできた。

収穫祭の時みたいになんか少しずつ交換する。

秋らしい味わい——豊穡の味、とでも言うおうか。お茶請けとしては最高だ。

なるほど、お茶には季節のものを取り入れることが必要、と。

師匠も言っていたが、改めて再確認できた。

「リオン君。口を開けて」

不意にクラリス先輩がフォークに刺したケーキを差し出してきた。

これはあれだ。あーん、ってやつだ。

「え？——クラリス先輩？」

「こういうの一度やってみたかったのよ」

やってみたかった、ってことは初めてのことか？ 凄く照れくさい。

でもこれはチャンスだ。今なら真意を問い質せる。

「あの——先輩、なんでその相手が俺なんでしょう？」

するとクラリス先輩はスツと顔を近づけてきた。

「——知りたい？」

「——はい」

え、待って何これ。凄く近いんだけど。まさか俺ここで告白されるの？

いやまあ、それはそれで嬉しいけど——

内心ドキドキする俺の口にケーキを押し当ててクラリス先輩は言う。

「それはね——誰かさんが鈍いからよ」

「——え？」

「ふふ——さ、口を開けて」

誤魔化すようにケーキを押し込んでくるクラリス先輩。

でも——これで俺にも分かった。

やっぱりクラリス先輩は俺に好意を持っている。そして——俺の方から告白された

がっている。

でなきやこれまでの言動の説明がつかない。

——よし、決めた。このデートの終盤に、もうちよつとムードのある所に行つてから、告白しよう。

あーんされたケーキをもぐもぐしながらする決断ではなかつたかもしれないが、大事なのは決断をしたということ、そしてその結果である。

さて、ムードを作れそうな場所といつたら——

「先輩、この後ですけど、よかつたら公園に行きませんか？」

俺の提案にクラリス先輩は頷いた。

「いいわよ。楽しそうね」



陽が暮れていく。

この所冬が近づいてどんどん日の入が早くなっている。

レストランを出た後、港の近くにある大きな公園でボートに乗ったり、屋台でおやつを買って食べてみたりしてのんびり過ごしていたらあつという間に陽が傾き、夕方に

なつてしまった。

俺たちは公園の隅にある小さな展望台に来ていた。

夕陽に照らされた王都の街並みがよく見える。

何というか——凄くムードがある場所なのは俺にも分かる。

ここならクラリス先輩に告白するのにお誂え向きなのではないか？

そう考えた途端に猛烈にドキドキしてきた。

「——今日は楽しかったわね」

クラリス先輩が展望台の柵にもたれかかって言った。どこかしみじみとした声色だ。

心なしか、デートが終わってしまうことへの寂しさなどとは違う、哀愁がこもつてい

るように感じる。

「そうですね——」

平静を装って返したが、心の中はもはや嵐のような混沌状態である。

今だ、言つてしまえという声とやっぱり怖いという声がせめぎ合つて鼓動だけが速

く、大きくなつていく。

くそ、こういう本気の告白なんてしたことないから、頭が働かない！

え？ミレーヌ様の時？あれは——何ていうか、接待みたいなものだ。今とは訳が違

う。

というか、頼むから落ち着いてくれよ俺の心臓！いや、脳か？

先程から腹式呼吸を試みているが、全く効果がない。

このままじゃ、プロポーズしても吃つて折角のムードが台無しになりかねない。

「——帰りましょうか」

クラリス先輩が柵から離れた。

——クラリス先輩が行ってしまふ。

呼び止めないと。ここで「はい」などという返事をしたら多分二度とチャンスは来ない。

今は呼び止めるだけでいい。それくらい出来るだろ俺！

言葉選びをする余裕もなく、口を開く。

「待ってくださいー！」

クラリス先輩が一瞬ビクツとしたように見えた。

しまった。声量を間違えたか。だがもうこのまま突き進むしかない！

「——どうしたの？」

クラリス先輩が振り返る。

風が吹いてクラリス先輩の髪が靡く。

夕陽を浴びて輝く橙色の髪と緑色の瞳に目を奪われる。

鼓動が更に激しくなり、全身が心臓になったかのように錯覚する。

「クラリス先輩——先輩さえよかったら、その——」

あまりの緊張で言葉が途切れてしまう。

すっかりしろ俺。俺にとつて一生に一度のビッグイベントだろ！

落ち着いて、はつきりと言わなければ。

高まつていく鼓動を抑えるためにひと呼吸おいて——クラリス先輩としっかり目を合わせる。

深く息を吸い込む。

いつせーの、と掛け声に合わせるように俺は続きの言葉を発する。

「結婚してくれませんか？」

するとクラリス先輩の両眼から涙が零れ落ちた。

——え？な、なんで泣くの？ちよつと予想外なんですけど!?

慌ててハンカチを差し出そうとするが受け取ってくれない。

クラリス先輩は零れるままの涙を拭おうともせずにはし泣き続けた。

俺は何も言う気がなくなった。

ただ——クラリス先輩がひと心地着くまでじつと待つ。

クラリス先輩が手で涙を拭う。

そして眩しいほどの笑顔を俺に向けて——ただ一言、答える。

「はい。」

新たなる波乱の予感

クラリス先輩に告白してから1週間。

子爵になることが決まって、クラリス先輩と結婚できるようになって、浮かれた気分でお茶会に誘い、デートして、プロポーズまでしちゃって、OK貰った方がいいが——大丈夫なのか？クラリス先輩の実家から反対されやしないか？

そんな俺の心配は杞憂だった。

クラリス先輩のパパさんのバーナード大臣は俺の活躍——だいぶ誇張されていたが——を聞いていたようで、「騎士の中の騎士」だの「王国開闢期以来の英雄」だのと褒めちぎられた挙句、「むしろクラリスを貰ってくれないかと思っていたところだ」なる発言まで出てきた。

褒められたのは嬉しいが、俺に対する評価は殆ど誤解である。俺は英雄などではないし、騎士道精神なんてのも碌に持ち合わせていない。

とまれ、話し合いはスムーズに進み、現時点で婚約内定、俺に子爵位が授けられた後に正式に婚約、冬休みに婚約式を行うことが決まった。

両家がいろいろ取り決めのために話し合っていた時に親父が終始緊張でカチコチに

なつてたのは印象に残った。

ただ——「王太子殿下に喧嘩を売って、公爵令嬢を実家に連れてきたと思えば、今度は大臣の娘さんと婚約つて——お前は俺を殺す気か!」などと意味不明な恨み言を宣う親父に、「あの子にこんないいお嫁さんが来るなんて」と言つて泣くお袋を見ていると、何かが心に突き刺さつた。

たしかに婚活から逃れるという目的は達成し、数あるストレスの原因の中で最大級のものが解消された。

もう女子にペコペコ頭を下げてお茶会に来てくださいと頼み込まなくていい。

田舎の芋男子はお呼びじゃないとか、男爵家なんて論外だとか、平民でも誘つていろとか、そんなことを言われなくていい。

——自由だ。

でも——冷静になってみると、どうにも素直に喜べない。

この心の奥底に燻るしこりはどうしたものか——



両家の話し合いが終わり、学園に戻ってきた頃にはすっかり日が暮れていた。

夏ならまだ明るくて暑い時間だが、今は暗くて寒い。

クラリス先輩の希望で星空がよく見えるテラスに来た俺たちはベンチに2人で寄り添って座り、満点の星を眺めていた。

「綺麗ね——」

クラリス先輩が呟く。

「そうですね——」

玉響の沈黙。

だが俺に以前から疑問に思っていたことを訊くことを決意させるには十分長い沈黙だった。

「先輩——ひとつ訊いてもいいですか？」

「何かしら？」

クラリス先輩は先週までとは打って変わって上機嫌なのを隠そうともしない笑顔である。

「プロポーズまでしておいてこんなこと言うのもなんですけど——なんで受けてくれたんですか？俺はそんな美形でもないし、子爵なんて名ばかりで稼ぎもないし——正直俺より良い男は沢山いたと思いますけど」

クラリス先輩の顔から笑顔が消えた。

代わりに微かに苛立っているような、不安を押し殺しているような、よく分からない表情になる。

クラリス先輩はそのまましばし沈黙した後、俺から目を逸らして淡々と話し始める。

「——正直、貴方よりも美形な男や都合の良い男は大勢いるし、そういう男たちと寝たことだって1度や2度ではないわ。でもね——」

言葉を区切り、クラリス先輩が俺と目を合わせる。

「あの時——終わりの見えない悪夢の中にいた私を引つ張り出してくれたのは、貴方よ。荒んで、落ち込んで、腐り切っていた私を貴方が立ち直らせてくれた。私はそんな貴方と一緒に人生を歩いていきたいの」

「——どうしよう。ものすごく照れ臭いことを言われてどう返したらいいか分からない。い。」

なんか嬉しいような申し訳ないような複雑な気分だ。

保身のために不本意ながらジルクの野郎の尻拭いをやって、メソメソ泣かれて気分悪かったから俺なりに慰めの言葉を掛けただけである。

弱つてるところにつけ込んだような感じがして収まりが悪い。

クラリス先輩はすごく魅力的で、そんな素敵な女性に好かれたのは嬉しい限りだが、俺を好きになったのは精神的に追い詰められていた状況下でガードが緩んでたから

じゃないのか、ちゃんと立ち直って自信を取り戻して、更に魅力的になったクラリス先輩の相手が俺のようなモブに務まるのか——そんなことを思ってしまう。

「——今度は貴方の方が自信をなくしてようね」

クラリス先輩はつい目を逸らした俺を見てそう言うと、俺の両肩を掴んでゆつくりと、だが力強く語りかけてきた。

「私に貴方の代わりなんていないわ。他の誰が何と言おうとも、貴方は私にとってかけがえのない人なのよ。他の誰にも——渡したくないくらいにね。私が貴方と婚約したのは、貴方が好きだからよ」

耳を赤くしながらも目は真っ直ぐに俺を見つめての告白。

それで俺は自分が情けなくなる。

俺が一番信じていないのは自分自身なのだ。

根底にあるのはこの世界が乙女ゲーの世界だと知っていること。

今まで乙女ゲーの知識に何度も救われたが、今はそれが恨めしい。この世界が乙女ゲーの世界だと知らなければこんな気分を味わうこともなかっただろうに。

——尤も、乙女ゲーの知識がなければ学園にも入れず、妖怪婆に売られて軍人として使い潰されて終わってただろうから、考えても詮無いことではあるのだが。

でも——こんなに真っ直ぐに想いをぶつけられてそれに応えずに逃げるなんていく

らなんでも酷すぎるよな。

この人はかつて愛していた相手にこつ酷く振られて自信喪失するほどのショックを受けた。

それがどれほどの苦痛だったか俺には想像するしかないが、この人にはもうそんな思いをさせたくない。

——それに逃げたら報復が怖い。

よし、もう腹を括ろう。なるようになれだ。

「——情けないこと言ってます。俺、これからは先輩を幸せにするために頑張ります」

名ばかりの子爵で稼ぎも保証できないし、攻略対象男子のような魅力もないが、だからといって腐ったままじゃいけないよな。

婚活から逃れられるという希望に縋って勢い任せにしたとはいえ、プロポーズしてしまつて、それをあんないい笑顔で受けてくれて、その上今度はクラリス先輩の方から告白された以上、絶対に彼女を幸せにしなければ。

俺の言葉を聞いてクラリス先輩は笑顔に戻り、俺の唇に指を当てて言った。

「何を言っているの？ 幸せは2人で作るもの、でしよう？」

な、なんという名言！ その言葉、他の女子たち——特にジェナ——にも聞かせてやり

たいものだ。

こんな名言が口から飛び出すような素敵女子と婚約できている——それだけで俺は最高に幸せな気分になる。

クラリス先輩は指を離すと、更に畳み掛けてきた。

「それと、その先輩って呼び方はよそよそしくて嫌よ。クラリスと呼んでくれないかしら？」

——そうだよな。俺たちは婚約者同士になるんだもん。全然実感湧かないけど。

たしかにクラリスと呼び捨てで呼んだ方が良いのだろうけど——ちよつとハードルが高い。

「えっと、努力します——クラリス先——クラリス」

先輩の2文字が完全に取れるには長くかかりそうである。

「——つしゅん」

不意にクラリス先輩が可愛らしくくしゃみをした。

強めの風が吹いて寒さに思わず震える。

「そろそろ帰りましようか」

「——そうね」

クラリス先輩は一瞬残念そうな表情を見せたが、すぐに腕を絡めてきた。

「寒いわ」

言い訳しつつも収穫祭の時より密着してくるあたり語るに落ちている。

そういう所、可愛いと思う。

「送ってくれてありがとう。おやすみなさい」

そう言つてクラリス先輩は女子寮へ入つていった。

笑顔だったがやはり少し残念そうな表情が混じつていた。

もしかすると「今夜は一緒にいたい」的なサインだったのかもしれないが、だからと言つて手を出すのはまだ憚られる。

『おや、先週とは打つて変わつてチキン野郎ですね』

聞き覚えのある声だったので振り返ると、ルクシオンが浮かんでいた。

「戻つたのか。ていうか、いつから見えたんだ？」

『プロポーズまでしておいてこんなこと言うのもなんですけど——なんで受けてくれたんですか？のあたりからですね。自信のない臆病な男性を女性は嫌います。マスターがこのまま卑屈ではいずれ愛想を尽かされますよ』

「お前本当にいい趣味してるよな」

数日ぶりに相棒と軽口を叩き合いながら俺は寮に向かう。

ルクシオンを公国への情報収集任務に送り出してからクラリス先輩に告白して、その

後連日のアトリー家との話し合いに出席したりで忙しく、寮に戻れば1人だったので皮肉や小言が懐かしかった。



俺は部屋に戻ると、ベッドに仰向けになったまままでルクシオンの報告を聞いた。

「ヘルトルーデに妹が？」

『はい。こちらの女性です。名前はヘルトラウダというようです』

映し出された映像はヘルトルーデによく似た、でも少し幼気な少女だった。

ヘルトルーデに妹がいたなんて設定はなかったはずだが——ゲームと現実の違いの
ひとつか？

「代わりつてこの娘のことだったのか」

『間違いありません。さらに言うともう一つ存在します』

「——は？」

それも初耳——どころでは済まない重大すぎる情報である。

てつきりヘルトルーデと魔笛を奪って公国の切り札はなくなっただと思っていたのに。

「また公国が仕掛けてくる可能性は消えてなかったのかよ——」

『むしろその可能性が消えたといつから錯覚していたのですか?』

ルクシオンが呆れたようなトーンで言ってくる。

「ゲームにはヘルトルーデの妹なんて出てこなかったぞ。もう一つの魔笛だって——」
今の状況はあの乙女ゲームの設定との乖離が激しすぎる。

「こうなったら公国に潜入してもう一つの魔笛を盗み出すしかないか——」

公国に切り札がまだあったのは誤算だが、それも奪えばいい。

ルクシオンがいる俺なら出来ないなんてことはないはずだ。

だがルクシオンは冷酷な未来予測を口にする。

『この際言っておきますが、切り札を全て奪ったとしても公国は止まらないと予想します』

「なんでだよ?いくら何でも勝てないって分かかってて王国に戦争を仕掛けるほど公国も馬鹿じゃないだろ?」

ルクシオンはセンサーアイを左右に動かし、淡々と告げてきた。

『公国の国民は多少の個人差こそあれ、王国への反感や憎悪を持っています。勝てないと分かっているなお、戦いを挑むことも度々あるのが人間です。マスターの母国もかつてそうだったのでは?』

——日本のことを言っているのか。

あの時代の人々の考えは俺には理解しかねるが、反論もできない。

「理解できないな。何のためにそこまでやるんだ」

『真の目的は王国本土を浮かせている浮遊石を回収することですね。魔笛を使って巨大モンスターを召喚し、王国を沈めるのはそのための手段です。が——今や公国は手段が目的と化しています。戦争を有利に運ぶために煽った反王国感情が暴走した結果でしょう』

「それって——もう詰んでるってことか？」

『はい。公国の切り札を奪ったところで戦意まで完全に奪えはしません。戦いの火種は燻り続けます。そして戦いが始まってしまえば、どちらかの目的が完全に果たされるか、勝って得られる利益に見合わない程の犠牲が出るまで終わらないでしょう』

「——どうしたらいいんだ」

ゲームだと戦争を終わらせたのは聖女の力とリビアの持つ力と「愛」だった。

だが今話を聞いていると、あのゲームのエンディングって現実だとどういふものなのか疑問に思えてくるな。

何をどうやったらかこんな詰んでる状況からハッピーエンドに持って行けるんだ？

戦争を終わらせた「愛」って何なんだ？

考え込む俺にルクシオンが献策してくる。

『ですからマスター、公国は沈めてしまった方がよろしいかと。ご命令くだされば一日、いえ、一晩でやってみせます』

——また始まった。答えは決まっている。

「却下だ。俺は大量虐殺なんて御免だぞ」

『マスターの考え、決断の如何に関わらずいずれ戦いは起こるでしょう。そうなった時には両国に多大な犠牲が出るのは確実です。公国だけの犠牲でマスターの望む平和がやってくると考えてはいかがですか？』

コイツは本当に——油断も隙もないな。

あの手この手で俺を唆し、「新人類の末裔」と呼ぶ現在の人類を滅ぼそうとしているコイツも公国と同じ穴の貉なのではないだろうか。

「戦いにならないようにするんだよ。力を貸せ」

『——難しいことを言ってくれますね。ゲームで戦いを終わらせてハッピーエンドに持ち込んだのは聖女の力とオリヴィアの力、でしたか？その代わりは用意できないのでしょうか？』

「無理だな。どっちもリビアにしかない。——待てよ。あいつはそれをどうするつもりだったんだ？」

思い出したのはマリエのことだ。

あのゲームをプレイしていたのなら聖女の力とリビアの力が必要不可欠だと知っているはず。

なのにリビアを追い落として自分がその立ち位置に成り変わったのは不可解だ。

もしかしてあいつはゲームクリアのために何らかの算段を持っているのか？

これはすぐに問い質す必要があるな。

「マリエと話をしないとな」

『彼女がマスターの期待する情報を持っていると？』

「分からない。でもあいつは間違いなくあのゲームを知っている転生者だ。もしかしたら何か考えを持っているかもしれない。何とかあいつと2人で話せばいいんだけど

——

『それは難しいでしょうね。彼女は学園ではあの5人の誰かと一緒ですし、寮では専属使用人がいます。それこそ拉致するのでもなければ彼女と2人きりで話などできませんよ』

拉致とは物騒だが、手段を選んでもいられないか。

「まあそれでも仕方ないか。でも怪しまれないようにやれるのか？」

心配する俺にルクシオンは自信たっぷりに言った。

『お任せください。証拠ひとつ残さず消してみせますよ』



レッドグレイブ公爵家。

「それは本当なのですか？」

俄かには信じられない情報にアンジエは思わずヴィンスに聞き返していた。

「本当だ。裏も取れた」

ヴィンスは淡々と答え、難しい顔をする。

「この情報が広まればどうなるか——影響は小さくないだろうな。私を含め、事情を知らない者の目には彼がレッドグレイブ家の庇護下から抜けたと映るだろう」

「——初耳です。いつの間にあの2人はそこまで関係を——」

リオンとクラリスの婚約が内定したという情報にアンジエは動揺する。

クラリスの実家——アトリー家は代々大臣の役職に就いている家系で、どの派閥にも属さずに中立を保っている。

リオンがクラリスと正式に婚約すれば、それは中立宣言に等しい。

レッドグレイブ派閥にしてみれば、看過できないことである。

リオンは所有するロストアイテム故に味方にできれば大きな力になる。

また、制御しやすいという面もある。

公国との戦闘が終わった後、停戦処理に口出しすることも戦利品の所有権を主張することもなく、自分が倒した黒騎士の大剣さえも献上したのがその証拠だ。

そんな好都合な人物が離れていくことは戦略的に大きな損失であり、下手をすれば新たな脅威を生むことになりかねない。

「これは彼に我々を見限る意図があつてのことだと思ふか？」

ヴィンスがアンジエに問いかける。

アンジエはかぶりを振った。

「いえ、リオンがそこまで考えているとは思えません。リオンは——読めない人物ではありませんが、宮廷での政治的判断や駆け引きには疎い人物です」

アンジエの返答にヴィンスは腕を組む。

「ふむ——彼はクラリス嬢と恋愛結婚することの意味を理解していないということか」
ヴィンスはしばし窓の外に目を向けて遠くを見るような表情になる。

リオンに対して不快感を持っているのではないかとアンジエは思う。

貴族の結婚は所属する派閥や後ろ盾となつていゝ家に対する政治的配慮がなされる。

後ろ盾であるレッドグレイブ公爵派閥に対する忖度をせず、中立の家の娘と恋愛結婚しようとしているリオンを面白くないと思つても仕方がない。

尤も、彼はレッドグレイブ家の寄子でも子飼いでないため、表立って干渉はできないのだが。

ヴェインスは身構えるアンジエに向き直り、静かに命令を出した。

「彼に話を聞くのだ。クラリス嬢との関係の経緯を知りたい。それとなく彼に忠告もしておくように」

リオンにレッドグレイブ派閥に加わる気がないならば、せめて敵対派閥に加わったり、担がれて新たな勢力を作ったりしないように釘を刺しておく必要がある、ということだとアンジエは理解する。

「分かりました」



公国との戦いに参加した学生たちの叙勲式が冬休みの初日に行われることが発表され、学園に熱気が戻ってきた。

彼らに授与されるのは「頑張ったで賞」のような【奉仕勲章】だが、それでもそう簡単に貰えるものでもないし、箔がつくので楽しみにしているようだ。

俺が口を酸っぱくしてアンジエ救出は皆の意志だったと吹き込んでおいたせいかは

知らないが、王宮は公国と戦った学生たちの話をクリスを主役にした英雄譚に仕立て上げていた。

クライマックスなんて傑作である。「私たちを守るために単身敵に降ったアンジェリカを置いては行けない。今度は私たちが彼女を助ける番だ」と勇敢に主張したクリスに心動かされた学園生——俺を含む——たちは無謀にも思える救出作戦を敢行。見事成功させた上、1人の死傷者も出すことなく増援到着まで持ち堪え、冒険者の血の流れる王国貴族の誇りを示した。

ということになっている。

とんだ捏造だが、俺としてはそうなってくれた方が都合は良かった。

——良かったのだ。

結局俺も同じように、いやそれ以上に英雄扱いされて出世してしまうことが判明した今となつては、徒労感が凄まじい。

呑気に勲章を貰える日を楽しみにしているおめでたい連中を見て羨ましくなる。

さて、俺はこれからマリエとのお喋りに行かなくてはならない。

校舎を出て、中庭の人氣がない場所に行くと、光学迷彩で隠されたエアバイクが現れる。

「シュヴェールト、だっけか」

青色混じりのメタリックカラーに塗装された大型エアバイクに乗り込むと、光学迷彩のホログラムが俺の姿を隠した。

エンジン音が響かないように離陸し、ルクシオン本体を目指す。

「話が分かる奴だといいいんだが」

どうにもあのマリエという女は前世の妹に似た感じがする。

正直言つて嫌いなタイプだが、世界の命運がかかっている。心して相対しなければ。俺はシュヴェールトの操縦桿を握りしめる。

マリエの正体

「珍しいな。マリエが休むなど」

学園の食堂でユリウスは首を傾げた。

今までマリエが周囲に何も言わずに学園を休むことはなかったのに、今日は朝からマリエの席が空いたままだ。

「こんなこと今まではありませんでしたね。辛い時でも逃げなかった彼女が——」

ジルクがマリエがいじめられていた時期を思い出して呟く。

「新しい鎧をお披露目できると思ったのだが」

「あれを見せればきつと喜んでくれたでしょうにね」

マリエとの付き合いを巡って起きた決闘でユリウスたちは全員鎧を破壊された。

しかし、それでもめげずに使えるパーツを集め、足りない分は手分けして買い集め、自分たちではどうしても手に負えない作業は腕利きの鎧（音）製作者（音）に依頼して、これまでで最高の鎧だと思えるものが完成したのである。

それを今日、マリエに見せようと思っていたのだが、昼休みになっても登校してくる様子がない。

ユリウスは一抹の不安を覚える。

「――放課後にカイルに訊いておくか」

「そうですね」

ジルクもマリエが心配なようだった。

◇◇◇

「あれ？……どこ？……」

マリエが目覚めた時、そこは見知らぬ部屋だった。

寮のベッドより幾分か狭いベッドに。パジャマのまま寝かされていた。

『お目覚めですか？』

不意に妙な声が聞こえてきたので振り返ると、ドアの前に赤いひとつ目を持った球体が浮かんでいた。

「ちよつと……どこ？……あんな何者よー」

『お静かに願います。それと、叫んでも誰も来ませんよ。ここはマスターの船ですからね』

自分が眠っている間に拉致されて飛行船に寄せられていると悟り、マリエは蒼白にな

る。

球体はマリエに近づいてくる。

『マスターが貴方との対話をお望みです。無事に帰りたければ質問には全て正直に答えるように。逃走を試みた場合は——』

表情のない機械が赤いひとつ目を光らせ、電光を纏いながら脅迫の台詞を口にするのは純粹に恐ろしかった。

冷や汗を浮かべてこくこくと頷くマリエに球体は踵を返して部屋を出て行った。

入れ違いに入ってきたロボットが食事を運んでくる。

ロボットは皿を机に置くと、後ろ向きに進んで部屋を出ていった。

ドアが横にスライドして閉まり、ガチンと音を立てて施錠される。

「なんでこんなことに——私はどうなるの?」

マリエは嘆いた。

誰が何のために自分を拐うのか、マリエにはさっぱり分からない。

(マスターって誰なの? 質問って何? まさか私の秘密を知ってる奴がいるの?)

自分に質問があるらしい「マスター」について考えるマリエだが皆目見当がつかない。

考えているとお腹が鳴ったので出された食事に手を付ける。

「あ、美味しい」

特別贅沢なわけでもないが、日々の経費を切り詰めた質素な食事よりは美味しい。夢中で食事を平らげると、ロボットが入ってきて食事を下げていった。

「ねえ！マスターって誰なのよ？質問って何？」

ロボットに問いかけてみたが、全く反応せず、後ろ向きに進んで部屋を出て行く。突破しようかとも思ったが、ロボットの腕に銃口のような穴があったため、怖くなつて諦めた。

「いつまでここにいればいいの——」

閉じ込められたまま暗くなっていく外の景色を眺めながらマリエは呟く。

もうかれこれ半日も部屋に閉じ込められたままだ。

何もすることがないのは本来マリエにとっては安息を意味するが、見知らぬ部屋に閉じ込められていてはそうはいかない。

心細さでどうにかなりそうだった。

（助けてよ——）

ユリウス、ジルク、ブラッド、グレッグ、クリス、カイルの顔が思い浮かぶ。

そして最後に浮かんだ顔は臙げで判然としなかったが、それまで思い浮かんだどの人よりも頼りになる人の顔だった。

（——お兄ちゃん——助けて）

不意に聞き覚えのある声が微かに聞こえてきた。

『この部屋です』

扉のロックが解かれ、あのひとつ目の球体が入ってきた。

そしてその後ろに続いて入ってきた人物にマリエは目を見開く。

「あ、あんたは——」

◇◇◇

マリエは俺を見て驚きと怯えの入り混じった表情になっていた。

「おい、お前何かしたんじゃないだろうな？こいつ怯えてるじゃないか」

『何もしていませんが？逃走防止のため立場を教えただけです』

しれつと言うルクシオンだが、マリエは明らかにルクシオンを見て怯えている。

「ね、ねえ——そいつのマスターって、あんたなの？」

マリエが恐る恐る訊いてくる。

「そうだが？」

「お願い！何を知りたいのか知らないけど、分かることは何でも答えるから！逃げたりしないから！だから、拷問はやめて！」

マリエが涙目で懇願してくる。

ルクシオンを睨みつけると、そっぽを向いた。

『拷問とは人間きの悪い。大人しく従えば無事に帰れるというのに』

「嘘よ！あんた電撃打とうとしてたじゃない！」

ルクシオンのやつそんな風にマリエを脅迫したのか？

胡散臭いにも程があるだろ。

「お前——もうちよつと穏便なやり方あるだろ」

『新人類相手に気を使うつもりはありません。私が気を使うのは人類だけです』

——こいつ、サラツと俺のことを認めていないって言っているように聞こえるな。

普段から俺を馬鹿にしているのも、新人類だからって理由だろうか？

今度しつかり上下関係について話をしよう。

「お前——まあいいや。それよりマリエといったな？お前には聞きたいことがいくつもあるんだが——主人公が死んだのは知ってるな？」

本当は死んでいないのだが、死んだことにしておいた方が都合が良い。今はまだ。

マリエは一瞬表情を強張らせたがすぐに戻る。

「——そうみたいね」

「これからどうするつもりだ？公国はまだ王国との戦いを続ける気だぞ。おまけにヘル

トルーデ以外にも王女がいて魔笛がもう一つ、公国の手に残ってる。お前が主人公のポジションを奪ったのはこれ全部解決できると見込んでのことか？」

一番知りたいことを真っ先に聞いておく。

するとマリエは不敵な笑みを浮かべてとんでもないことを宣ってきた。

「ええそうよ。私が全部代わりを務めればいいのよ」

「——は？」

聞き間違いだろうか。

「お前——冗談なら笑えないぞ」

「冗談じゃないわよ。私が聖女になればいいのよ。【聖なる腕輪】は私を聖女と認めたわ」

もう回収していたのか。

いや、それよりコイツがキーアイテムに聖女と認められた？なぜ？

固まった俺にマリエは袖をまくって腕輪を見せつけてきた。

腕輪が白い光を発する。

信じ難いが、この反応は間違いなくマリエを聖女と認めている。

「ほらね。私にも聖女の資格はあるの。そういえばあんた、【聖なる首飾り】はどうしたのよ。持ってた空賊を潰したの、あんたでしょ？」

「——何がどうなってるんだ？」

俺は頭を抱えたくなる。こんな設定ゲームにはなかった。

ルクシオンが会話に割り込んでくる。

『なるほど——本来主人公にしか使えなかったはずのアイテムが実はそうではなかったと。興味深いですね。一度双方の持つ知識の突き合わせが必要と判断します』

ルクシオンの提案に、俺もその必要性を感じた。

あの乙女ゲーをクリアしているなら、自分が聖女になろうなどは考えないはずだ。

「つまりお前はリビアの力と聖女の力を混同してたってわけだな？」

「だ、だって知らなかったのよ。戦闘パートが難しすぎて——それ以降はセーブデータと攻略情報で見ただけだったの」

どうやらマリエはゲームを自分でクリアできず、中途半端な知識のまま主人公に取って代わろうとしていたようだ。

「そんな中途半端な知識を当てにしているこの世界を引つ掻き回したのかよ。しかも逆ハレムとか——どれだけ迷惑なことしてくれたんだよ」

直後、俺はこの発言が完全に地雷だったと思い知る。

「だって！それしか思いつかなかったのよ！前世じゃとことん不幸せだったし、今世

だってそうよ！転生した家が領地も小さくて凄く貧乏で——家族もプライドだけは高い両親と、屑な兄姉ばかりなの！」

マリエが涙目で訴えかけてくる。

「小さい頃から邪魔者扱いされていじめられるし、服のひとつも買って貰えないし、ロクな食事にもありつけないし！おまけに7歳の時に森の中に1人で置き去りにされたのよ！その時は死ぬかと思ったわ！その時治療魔法の才能があるって分かって、私はまだやれるって思ったわよ！なのに——なのに森から帰ったら、皆なんだよ生きてたのかよって目で私を見るし、ただでさえ厄介者扱いされてたのが更に酷くなるし！その時から私は自分の力で家を出て行って、誰よりも幸せになつてそいつらを見返してやるって誓つたのよ！」

「お腹が空いて仕方ないから、森で草とか木の実を採って食べて、動物を狩って生きてきたわ！何度も死にかけてたし、それ以上に怖い目に遭つたわよ！それこそ死んだ方がマシなんじゃないかって思えるくらいに！そんな生活に耐えられたのも、いつか学園に行けば王子様たちと出会って、幸せな暮らしを手に入れられると思えばこそよ！そのために治療魔法だつて沢山練習したわ！私は——私はドン底から這い上がって幸せになりたかつただけなのよ！」

泣きながらまくし立てるマリエの言葉には激情がこもっていた。

怒り、悲しみ、悔しき——それらがミックスされた感情をぶつけられた俺は思わずたじろいだ。

「お、おう——それは、何て言うか——大変だったな」

コイツが主人公に成り代わろうとした理由が想像以上に重かった。

よりにもよって攻略対象全員に粉をかけて逆ハーレムを作ったのは頂けないが、その考えに至るまでの経緯があまりにも不憫すぎて怒るに怒れない。

「ま、まあ、過ぎたことを言っても仕方ないよな。——おい、いい加減に泣き止めよ」

不意に泣いているマリエのお腹から「グウウウ」という音が聞こえた。

マリエがピタリと泣き止み、お腹を両手で押さええて恥ずかしそうにする。

「お前——腹が減ったのか？」

マリエが小さく頷く。

仕草が前世の妹に似ていて、どうにも放っておけなかった。

「ルクシオン、食事を用意してやれ」

『はい』

ルクシオンが部屋を出ていくとマリエは少し落ち着いたようで、荒くなった呼吸を整えていた。

ふと疑問に思ったことを訊いてみた。

「ところで——さ？お前はゲームをクリアしたわけじゃないんだよな？ならセーブデータはどうやって手に入れたんだ？」

マリエは俯いて言い難そうに答えた。

「兄貴——お兄ちゃんにクリアして貰ったのよ。その後すぐ死んじやったけど」

こいつにも兄貴がいたのか。

奇遇だな。俺にも妹がいたよ。

——ん？ちよつと待て。兄貴にクリアさせた？その後すぐにその兄貴が死んだ？

「え？俺は妹が海外旅行に行くからその間にクリアしてつてあのゲームを押し付けられたんだけど？——え？お前、まさか——」

マリエの両眼が驚愕に見開かれる。

「お兄——ちゃん？」

俺はマリエの顔をまじまじと見つめた。

このムカつく顔は——間違いない。

マリエは前世の妹だ！

「お兄ちゃあああああん!!」

マリエがまた泣き出し、思い切り抱きついてきた。

振り解くのは簡単だったが、さっきの話を聞いた後ではそんな気にはなれなかった。ただでさえ転生者は心の奥底に心細さを抱えているのに、こいつは呪われているのではないかと思うほどの苦勞をしてきたのだ。

俺は溜息を吐いてわんわん泣くマリエの背中をさすってやる。
妹に対するわだかまりなどとつくに消え失せていた。



——夜。

俺は愕然としていた。

「あの乙女ゲーに続編だと?」

「そうよ。兄貴が言ってたヘルトラウダともう1つの魔笛は3作目のラスボスなの」

マリエが空になった皿にシチューのおかわりをよそいながら言った。

既に3杯目である。こいつの胃袋はどうなっているのやら。

まあそれはいい。

それよりあんな無理ゲー甚だしいゲームに続編作れるだけの人気があつたなんて、とても信じられないんだが?

マリエはシチューを食べながら説明してくる。

「2作目はアルゼル共和国が舞台で、3作目でホルファート王国に戻るの。ちなみに3作目はユリウスたちが3年生でユリウスの弟が入学して来るのよ。1作目のイベントを別視点で見られて、卒業後の様子も楽しめるわ」

「ちよつと待て。ユリウスの弟が入学してくるイベントなんてなかったはずだぞ?」

「そりやそうよ。後付け設定なんだから」

——身も蓋もない説明をありがとう。

それにしても、ゲーム知識が不完全だったのは俺も同じだったらしい。

困ったな。

「俺たち以外にも転生者っているのかな? いたとしたらそいつらから情報を聞き出した
いんだけど」

「——まあ、無理よね。この世界ってSNSとかないし」

世界のどこかに俺たち以外の転生者がいたとしても探し当てる手段がない。

「結局俺たちだけで何とかかしないとイケないのか」

「で、でも無限復活のタネは魔笛って分かったんでしょ? だったらそれを盗み出せば解
決じゃない?」

「——だといいいけどな」

魔笛を奪つても国家間の根深い対立は解消できないとルクシオンは見ている。

それにまだ何か切り札を隠している可能性も否定できない。

やはり保険が必要だ。王家の船と——リビアの力が。

今のところ確実にハッピーエンドに導けると分かっている手段はそれだけだから。

「——ところで、お前に見てもらいたいものがある」

「何よ？」

「さつきは死んだって言ったけど——主人公は生きているんだ」

「——え？」

医務室。

カプセルに收容されたまま眠り続けるリビアを見てマリエは目を見開いていた。

「——どうにかならないか？」

無駄だとは思ったが一応訊いてみた。

俺の知らない【聖女】に関する知識をマリエが持っていることに期待したのだ。

「こんなの——禁術レベルでもなきや無理よ。私が今ここで聖女になったとしてもどうにかなるとは思えないわ」

マリエはかぶりを振った。

『禁術とは何でしょうか？』

ルクシオンが質問した。

「私も詳しくは覚えてないけど——3作目で聖女が主人公の恋人を救った時に使っていたのよ。たしか、あの世に行こうとする魂を無理やり連れ帰るの。そのためのキーアイテムが要るし、それに代償があるのよ」

——何となく分かるが一応続きを促す。

「何だ？代償って？」

「——もう一つの魂よ」

マリエは重い声で言った。

やっぱりか。よくある設定だ。

リビアを復活させたいのは確かだが、そのために生贄が必要となると——俺にはとてもそんな残酷な決断はできない。

誰だって死にたくはないし、死んだら悲しむ人がいる。

この前の合同葬儀で俺はそれを思い知った。

「ゲームだとその代償をどこから用意したのか結局分からなかったし——植物状態の相手にも使えるのかは分からないし——」

「つまり、リビアの復活は望み薄ってことか——」

俺は頭を抱えたくなる。

『生命維持は可能ですが、意識中枢の修復は私の医療設備では不可能です。現状、オリヴィアの意識を回復させる手段は——ありません』

ルクシオンも言い難そうに告げてきた。

『都合よく最高グレードの医療設備を備えた施設や艦艇が稼働状態で残っていれば、まだ希望はありますが——その可能性は限りなくゼロに近いでしょうね。私がいた基地の医療設備も完全に失われていました』

——ルクシオンでもどうにもならないのか。

「2作目と3作目の課金アイテムはどうなんだ？ルクシオンみたいな船はないのか？」
「うーん——2作目にもあったことはあったんだけどよく知らないわ。私は買わなかったし」

マリエはかぶりを振った。

残念ながら俺の当ては外れたようだ。

あのゲームでルクシオンは課金アイテムとして登場していたから、続編にも同じような課金アイテムが登場していれば、それもこの世界に存在するのではないかと思っただが。

一応ルクシオンにも訊いてみる。

「他にお前の味方が生き残ってるかどうかは調べられないか？」

『——生憎ですが私にはそのための手段がありません。データのリンケージは基地内部に限定されておりましたし、軍用の周波数やビーコンの使用権限も与えられませんでした』

「つまり無理なことだな？」

『——はい』

聖女の魔法は使えないし、旧人類の科学技術も頼れない。

リビアを救う手立てが一つも見つからない。

「あ、待つて。ダンジョンは？幾つかのダンジョンは古代遺跡だったはずだけど？」

『最高グレードの医療設備を備えた施設が稼働状態で残っている可能性は極めて低いでしょう。あつたとしても見つけるのにどれだけ時間がかかるかは分かりません』

古代遺跡を風潰しに探せば僅かながら可能性はあるようだが、それだと何年かかるか分かったものではない。

公国と王国の情勢は俺の予想以上に危ないようだし、間に合わない可能性の方が高い。

どうすればいい？

頭を抱える俺にマリエが提案してくる。

「やっぱり私が聖女になるのが今のところは一番いいんじゃない？魔笛さえ確保すれば

ラスボスは出てこないから聖女の力だけで済むんだし。聖女になれば神殿の禁書庫にも入れるから禁術について何か分かるかもしれないわよ？もう一つ魂を用意しなくて済む方法とか」

マリエの提案は理に適っているように思えたが、その後続いた私欲塗れの理由で台無しになる。

「それに聖女になれば私は神殿から毎年お金貰えるし！私は贅沢な暮らしができて、貴は蘇生魔法の情報を私を通して手に入れられて、WIN—WINじゃない」

「お前——贅沢がしたいからって理由で聖女になるのかよ」

別に止めはしないが、どうにも複雑な気分だ。

「いい、いいじゃない。これまで散々な人生送ってきたんだから。私は着飾ってご馳走食べて輝いていたいのに！」

——クソツ。こいつの悲惨すぎる過去を聞いてしまったせいで言い聞かせる言葉が浮かばない！

俺は根負けした。

「そうかよ。じゃあ聖女にでも何でもなればいいだろ。【聖なる首飾り】だってそこにあるしや」

カプセルの横に置かれた【聖なる首飾り】。結局リビアの力にはなっていないようだ。

だったらマリエを聖女にするのに使った方が有効だろう。

「やったー！」

小躍りしそうなマリエを見ているとどうにもモヤモヤする。

そもそもコイツが逆ハーレムを作ってゲームを引つ掻き回さなければ、リビアはこんなことにならず、俺たちが頭を悩ませることもなかったのだ。

「贅沢にかまけてないでちゃんと調べて情報を渡せよ」

嫌味も兼ねて釘を刺しておく。

「分かってるわよ」

マリエはすっかり上機嫌だった。



翌日。

しれっとした顔で学園に戻って来た俺はアンジエに呼び出しを受けた。

「放課後に313号室に来てくれ。話がある」

有無を言わさない妙な迫力がある声でアンジエはそう言った。

別に俺としては断る理由はなかった。

なかつたのだ。

「ねえ、リオン君。放課後面白い物に付き合つてよ」

昼休みにクラリス先輩からお誘いを受けた俺は完全にダブルブッキング状態になつた。

どうすればいい!? アンジエに呼び出されていると正直に言うか?

でもそうしたらクラリス先輩に自分を優先して欲しいって言われるだろうし、そうなつたらアンジエを、引いてはレッドグレイブ家を怒らせかねない。

かといってアンジエを優先したらクラリス先輩に恨まれる。

バレなきゃいい、とはいかないだろうし、アンジエからの呼び出しであることを隠せばバレた時に余計ヤバいことになる気がする。

「えーと、実は用事があつて——」

目が泳ぎ、返事を濁す俺にクラリス先輩の表情が少し硬化する。

あ、これマズい、とはつきり分かつた。

「用事つて何かしら? 私に話しくいことなの?」

これは——下手に隠すと却つて良くないことになりそうだ。

直感でそう判断した俺は素直に白状することにした。

「実は放課後はアンジエから呼び出しを受けています——」

「あら、そうなの？」

クラリス先輩は驚いた素振りを見せなかった。

——まるで予期していたかのようだ。

そしてクラリス先輩は更にとんでもないことを言い出した。

「なら私もついて行くわ。間違いなく私と貴方の婚約絡みの話でしょうし」

——修羅場の予感に冷や汗が噴き出る。

クラリス先輩は笑顔を崩さなかったが、目が全く笑っていないかった。

本当に——なんで俺にはこうも厄介事ばかり降りかかってくるのだろうか。

長いお話

アンジエはお茶会に使う部屋の1つで俺を待っていたが、クラリス先輩を見て表情が少し険しくなる。

「1人で来るようにと言っておかなかった私のミスか——」

アンジエは目を閉じ、額に手を当てて呟いた。

それを見てクラリス先輩が挑発的な言葉を発した。

「あら、ミスならもう1つあるわよ。今日という日を指定したことね」

やめて！そういう陰険な言葉の駆け引きはやめて！俺が居た堪れなくなるから！

俺の内心の叫びなど露知らず、火花を散らし始めるお嬢様方。

「クラリス、私はリオンに話がある。彼の今後に関わることだ。首を突っ込まないで貰いたい」

「あら、私は仮にも彼の婚約者よ。彼の問題は私の問題でもあるわ。いずれ夫になる彼の今後に関わる話なら私も聞く必要があるとは思わない？」

クラリス先輩が同意を求める目で俺を見る。

やめて！俺にそんな質問を振らないで！

2人の視線の板挟みに遭う哀れな俺はどう答えたらいいか分からない。

助けてルクシオン！

——ていうかルクシオンどこ行きやがった!?

アイツこういう大事な時に主人である俺を助けないとかなんて役立たずなんだ！

——まさかわざとか？わざと俺をド修羅場に置き去りにして嗤ってるのか!?

だとしたら絶対許さねえ！

騒がしい俺の脳内に比例するかの如くお嬢様方の火花も激しさを増していく。

「彼の後ろ盾になっているのはレッドグレイブ家だぞ」

「彼は寄子や子飼いではないでしょう？干渉される謂れはないと思うのだけど」

「彼の安全に関わることだ。下手を打てば彼にとっての脅威が増えることになるんだぞ

？」

「レッドグレイブ家にとっての、と修正が必要じゃないかしら？」

ヤバイ！

俺を守るためという名目での取り合いが白熱していく。

何だよこの当人の意思を無視して「安全」だの「守る」だの「干渉」だの欺瞞に満ち

たワードを連発される状況。

これじゃまるで大国の軍事基地を至る所に造られた小国の島みたいじゃないか！

何だって俺がこんな目に遭うのか。

誰か！誰でもいい！この戦場みたいな空気をなんとかしてくれ！

俺はただひたすらにそう祈った。

すると――

ドタドタと騒がしい足音が近づいてきたと思つたらドアが勢いよく開き、マリエが部屋に飛び込んだ。

「大変よあに――え？」

アンジエとクラリス先輩に睨まれたマリエは蒼ざめた表情で固まる。

だが助かった！今日だけはお前を救世主と崇めてもいいぞ妹よ！

「何だ？」

アンジエとクラリス先輩が何か言う前に口を開いた俺に、マリエは我に返つたようにまくし立てる。

「ユリウスたちがあんたに決闘挑むって言ってるの！勝つたら私との関係に口を出すなって。しかも――しかも壊された鎧を継ぎ合わせただけのダッサい鎧作って、そのためだけに共有財産から50万ディアも使い込みやがったのよおおお！」

途中からへたり込んで泣き出すマリエ。

俺もアンジエもクラリス先輩も完全にドン引き状態である。

ユリウス殿下は俺との決闘で「負けたらマリエと別れる」という条件を呑み、そして負けた。

なのに今になってそんな決闘を申し込んでくるとか——神聖な決闘を何だと思つているのだろうか？ 負けた側だと理解していかないのか？

そしてそれ以上に呆れたのが使い込んだ金額である。

何だよ50万ディアって。日本円だと5000万だぞ？ それを鎧ひとつ作るのに使つたとか——想像を超えた馬鹿だ。

「私が頑張つて貯めたのに——生活のために何回もダンジョンに潜つて必死で貯めたお金だったのに——私に何の相談もなしに職人まで雇つて——ほとんど全部なくなつちやつたのよお——」

マリエが泣きじやくる。

まるで夜な夜な内職をしてコツコツ貯めた生活費を馬鹿旦那によつて酒とギャンブルに注ぎ込まれる哀れな妻のように見えてくる。

チラツとアンジェとクラリス先輩の方を見てみたが、2人の表情は「無」だった。

マリエやユリウス殿下やジルクに対する怒りやら恨みやらそんなものを通り越してしまつていようだった。

愛していた相手が他の女のために2度も決闘を起こせばこうもなるか？

（どうしたもんかな——）

考えろ俺。これはチャンスだ。

修羅場が静まり返った隙に気を落ち着ける必殺の方法を使えば——

「——ひとまずお茶を飲んで落ち着こうか」

◇◇◇

誰だよお茶を飲めば心が落ち着くとか言った奴は。

熱い修羅場が冷たい修羅場になっただけじゃないか！

さっきまでアンジェ対クラリス先輩だったのがアンジェ&クラリス先輩対マリエに変わったただけだった。

お茶会——と言っていいのかすら分からないが——の席は重苦しい沈黙が支配し、俺がお茶を淹れる音だけがやけに響き渡る。

「——どうぞで」

声が震えないようにするだけで精一杯である。

「頂こう」

「ありがとう」

マリエの前にティーカップを持っていくと2人の視線が厳しくなった。

俺が「仇敵」に自分たちと同等のサービスをしていることが不快なようだ。

「あ、ありがとう」

ティーカップを受け取るマリエは吃るのを抑えられずにいた。

——そういえばコイツはどうやって俺の居場所を知ったのだ？

アンジェが俺に313号室に来るよう要求したのを聞いていたのか？

その疑問はすぐにマリエに投げかけられた。投げかけたのは俺ではない。

「それで？ どうしてリオン君の居場所があそこだと分かったの？ そもそも貴女はいつからリオン君に泣きつける仲になったのかしら？」

クラリス先輩がマリエに質問を投げかける。

学園祭の時とは違って落ち着いた声だが、それが却ってマリエにとっては恐ろしいようだ。

「え、えっと——その——」

逡巡する様子を見せるマリエ。

「私も知りたい。さっさと話して貰いたいな」

アンジェがクラリス先輩に同調する。

クラリス先輩に比べて明確に苛立ちを感じる声音である。

マリエが一瞬助けを求めるような目でこちらを見る。

「——話せ」

そう言うともリエは白状した。

「ルクシオンが313号室にいるって言ってた——んです」

やっぱりルクシオンの仕業か。主人である俺をこんな修羅場から助け出そうともしないのはひとまず置いておくとして——これであいつの存在が2人にバレる。

こうなったら存在自体は認めて正体だけは隠し通す方向に変えるか。

「ルクシオン？ 誰なのそれは？」

クラリス先輩は怪訝な表情になるが、アンジエは思い当たる節があったようで俺に視線を向けてくる。

「その名は聞いたことがある。リオン、公国の旗艦に私を救出しに来た時にお前はこう言っていたな。「ルクシオン、迎えに来てくれ」と。そしてお前の鎧が迎えに来た。あの鎧の中にもう1人誰かいたのか？」

——そういえばそうだった。

アンジエにはルクシオンの名前をポロツと聞かれてたんだった。

今までそれに対する追及がなかったのはむしろ幸運だったくらいだ。

「ルクシオン、いるんだろ。出てこい」

命令するとルクシオンが俺の右肩あたりに出現した。

アンジェとクラリス先輩が目を丸くする。

「何だこれは？」

「こいつがルクシオンだよ。俺の使い魔だ」

「使い魔？変わった形ね」

凝視してくるお嬢様方に対してルクシオンは説明を垂れ始めた。

『使い魔とは納得できませんね。私は魔法ではなく科学の産物です。初めましてお嬢様方。私はマスターのサポートをしています。ルクシオンと申します。使い魔ではなく、人工知能を搭載した——』

しかし、ルクシオンの説明は敢えなく流されてしまい、再び修羅場の空気が部屋に充滿する。

「お前の使い魔がこの女に私たちの居場所を教えたと？リオン、これはお前の意思が絡んだことか？」

アンジェが疑念のこもった目で俺を見る。

しかもマリエをこの女呼びしてて、俺の方にまで敵意の余波が来ている。

そんな視線をアンジェから向けられるなんてついこの間まで考えもしなかった。

「いや——こいつの独断だよ」

それだけ言うのが精一杯だった。下手な言い訳をしたらそれこそ物理的に墓穴を掘る羽目になりかねない。

「そうなのか？ 使い魔の独断専行を許すとは頂けないな。手綱をもつとしつかり握っておく必要があると思うぞ」

アンジェがルクシオンを睨みつける。

ルクシオンはとぼけて口笛でも吹いているかのように明後日の方向を向いていた。

挑発的とも取れる態度にアンジェの表情が硬化する。

やめろ！ マスターである俺の胃を労われ！

『マスター。今盛大なブーメランになることを考えていますね』

俺にだけ聞こえるように言ってくるルクシオン。

俺が何をしたというのか。俺が人の胃に穴を開けるようなことしたことは——あ、何度もあったわ。

反対を押し切って一人でボート同然の小さな飛行船で未知の領域に旅に出たこととか。王太子殿下を決闘でフルボッコにして、煽り倒して説教まで垂れたこととか。その決闘で自分に大金を賭けて大勢を破産させて、絶叫する彼らを嘲笑ったこととか——。

そうか。あの時の俺は親父や他の家族に今の俺と同じ思いをさせていたのか。

すまん親父。実家への投資増やしとくわ。

精神的ダメージに苦しむ俺にクラリス先輩が助け舟を出してくれた。

「リオン君を苛めるのはそれくらいにしてくれないかしら、アンジェリカ」

アンジェエがクラリス先輩の方を向く。

クラリス先輩の方はマリエに向き直る。

「それで？ 貴女がリオン君の居場所を知っていた理由は分かったわ。ならば来られた理由は何かしら？ 貴女はいつからリオン君に泣きつける仲になったの？」

そう問いかけるクラリス先輩は笑顔だった。でもその笑顔が怖い。

無言の圧というか、アンジェエとは違った恐ろしさを感じる。

「え、えっと——それは、その——」

しどろもどろになるマリエ。まさか前世で俺と兄妹だったとは言えないのだろう。

俺の方も俺の方でマリエに接近したのはゲームクリアに必要な情報を聞き出せること期待してのことだったのだが、それを正直に言う訳にはいかない。

となると——2人を納得させられそうな理由は1つだけだ。

「マリエ——腕輪と首飾りを見せてやれ」

「え？ あ、うん」

マリエは制服のシャツの袖をまくり、襟元のボタンを外す。

現れたのは【聖なる腕輪】と【聖なる首飾り】だ。

正直賭けだったが上手くいった。こいつが腕輪と首飾りを肌身離さず持ち歩いてたのは好都合だったな。

「マリエは【聖女】だ」

マリエが氣を利かせて腕輪と首飾りを光らせた。

「俺がこの前空賊を討伐した時に【聖なる首飾り】を手に入れた。腕輪の方はマリエがダンジョンで見つけたんだ。俺たちが接触したのはそれがきつかけだよ」

「——信じられない。本物の失われた宝だと？」

「2つの宝は長い間行方不明になっていたと聞いたけれど——神殿がこのことを知ったら何と言うかしら——」

アンジエとクラリス先輩の目が驚愕に見開かれる。

それと同時に2人の表情に名状し難い悔しきや葛藤のようなものが混じる。

婚約者にこつ酷く振られ、陰口を叩かれたり取り巻きに離反されたりと酷い目に遭った元凶が【聖女】の地位を手に入れる資格を持っていると見せつけられて面白くないのは俺にも分かる。

俺だったら彼女あるいは奥さんを奪った男が成功して幸せを掴んでいくのを見たら、発狂するかもしれない。

だがそれでも俺はマリエを聖女にする方針を曲げるわけにはいかない。

それがリビアを救えるほぼ唯一の可能性だから。

俺は2人を説得するために拙い言葉でプレゼンを開始する。

「俺だつて正直信じたくはない。でもマリエが宝に聖女と認められたのは紛れもない事実だ。聖女の力は王国最大の切り札になり得る。どんな鎧や飛行船よりも強力な戦力だ。もしまた公国が戦争を仕掛けてきたり、他の国が侵攻してきても、聖女の力があれば圧倒的に有利に立てる。それに——だ」

紅茶を一口飲んで口の中を潤す。

アンジェとクラリス先輩の反応は上々だ。

「聖女の魔法の価値は戦力としてだけじゃない。戦いで傷ついている多くの人を救えるんだ。特に聖女にだけ使える『禁術』には条件次第で死者の復活さえも可能にするものがあるそうだ」

暗にリビアを救える可能性を示すことでアンジェの興味を惹く。

その試みは上手くいったようで、アンジェは明らかに「死者の復活」に反応した。

「だから俺はマリエを聖女に推挙するつもりでいる。こいつには思うところもあるし、個人的には嫌いなタイプだけど、マリエが聖女になることは国のため、ひいては俺と家族の利益になることなんだ。私情は捨てる。俺とマリエとの関係はそういうことだ」

アンジェとクラリス先輩は複雑な表情で俺の話聞いていた。

クラリス先輩が溜息をひとつ吐いて紅茶を飲み干し、口を開いた。

「いいわよ」

「えっ？」

何がいいのか一瞬分からなかったが、すぐにクラリス先輩が話を話し始める。

「私はいいいわよ。リオン君がその決闘を受けても。前と同じように叩きのめして勝つてもいいし、勝ちを譲って負けてもいい。それであの5人の中で決着が着くのなら、もう好きにさせてやるわ」

「——私もだ。正直、殿下には文句のひとつでも言ってやりたいけどな。だが、言い方は悪いが殿下に対する気持ち冷めてしまったらしい。むしろリオン、お前を余計なこと巻き込んですまないと思っているよ」

アンジエも決闘を受けることに賛意を示してきた。

「——それってマリエがあの人と付き合うことに文句はないってことかな？」

2人のお嬢様とマリエを交互に見て俺は確認する。

マリエの方は困惑していた。

「——え、えっと、私としては、その——」

本当は決闘など拒否する方向に持って行きたかったのかもしれないが、そんなことを言い出せる空気ではない。

クラリス先輩がマリエの方を向いてきっぱりと言った。

「勘違いしないで。リオン君を煩わしきから解放するためよ。貴女を許したわけではないし、この先貴女があの人とどうなろうと興味はないわ。ああでもね、貴女には感謝しているの。貴女があの人を私から引き剥がしてくれたおかげで私はずっと素晴らしき伴侶を得られたのだから」

元婚約者で、不良堕ちしてまで振り向かせたいと願った程に愛していたジルクを「あの男」呼ばわり——女って切り替えがハッキリしてて恐ろしいね。

しかも言葉の上では感謝を伝えているように見えてその実「俺と婚約（仮）して幸せを得た自分」を強調し、ジルクをはじめ略奪した恋人たちに金銭的に苦しめられているマリエを嗤っている——やっぱリクス先輩って腹黒だな。

ま、俺もクラリス先輩の立場だったら同じように煽るだろうけどね。

結果的に幸福をもたらしてくれたとしても、それは怒りや恨みを忘れる理由にはなり得ないのだから。

ただ——マリエの正体を知っている俺としてはあまり苛めないでやって欲しいと思う。

「まあその——なんだ。あいつらもせつかく鎧作ったんだしさ？拒否したら作った鎧もかかった金も全部無駄になっちゃうだろ？決闘が終わったら他のことに使うとか売る

とかすればいいと思うぜ？ それにあいつらのことだから拒否しても諦めるとは思えないし——」

男目線からの意見でやんわりと説得するとマリエはようやく折れてくれた。

「わ、分かったわ。その代わり、あの5人が作った鎧は絶対に壊さないでよ？ あの鎧がユリウスの鎧みたいに吹っ飛んだら私の全財産が鉄屑になるんだからね」

真剣な表情で念押ししてくるマリエ。

まあ、保証はできないが留意しておこう。

「決まりだな。決闘は受ける。俺は負けようと思う。そうすればあいつらも満足してもう絡んで来なくなるだろう」

お嬢様方も文句はないらしい。

「——そうだな。賛成だ」

「私も文句ないわ。あ、貴女の用件はこれで済んだかしら？」

マリエは頷いてそそくさと部屋を出て行った。



「いやーびつくりドン引きだったけどこれでとりあえずは片付いた——な？」

これにて一件落着とばかりに紅茶のお代わりを淹れに席を立とうとしたが、アンジェに袖を掴まれる。

「話は終わっていないぞ。リオン、お前には訊きたいことがいくつもあるし、話すことも沢山ある」

どうやら逃がしては貰えないようだ。

俺の代わりに紅茶を淹れるクラリス先輩がアンジェに問いかける。

「貴女がリオン君を呼んだ理由は見当がつくわ。家の指示ね？」

「——そうだ」

「リオン君が私と婚約することを貴女の家——いえ、レッドグレイブ公爵派閥は警戒している。だからその経緯を聞き出してあわよくば翻意させようとしている——といったところかしら？」

アンジェはクラリス先輩を睨みつけていたが、溜息を吐いて紅茶を一気に飲み干して、言った。

「——さすがは大臣の娘と言ったところか」

「どうも。私だつて考えなしに婚約するわけじゃないわ」

クラリス先輩が全員のカップにお茶を注ぎながら言う。

紅茶を一口飲んだアンジェは幾分か落ち着いた声で話し始める。

最初はクラリス先輩を追い出したがっていたのに、今はそうはしていない。なぜだろうか。

「クラリスが言ったことも間違いいではないが——私はリオンの意思を確かめたいのだ。リオン、お前の望みは自分の領地で平穩に暮らしたい、だったな？」

アンジェの問いに俺は頷く。

「ならばなぜクラリスとの婚約に同意した？」

「なぜ、と言われても——」

唐突にクラリス先輩と婚約する理由を訊かれて俺は返事に困る。

婚活から逃れるのに絶好の機会だったから？クラリス先輩が俺のこと好きな素振りを見せてたから？

でもそれだと「ではクラリスでなくても良かった、ということか？」って訊き返されるだろうし——

上手い返しを思いつかない俺にクラリス先輩が追い討ちをかける。

「リオン君が婚約に同意したのではないわ。彼の方から結婚を申し込んできたのよ。私が見て受けた。リオン君が好きだからよ」

自分への惚気を聞かされる気持ちで分かるだろうか。

つい数分前まで修羅場だった部屋で、しかもその修羅場の中心にいた人に。

アンジエは裏切り者を見るかのような目で俺を見るし、本当に居た堪れない。

「本当か？」

「——はい。そうです」

アンジエは少しシヨックだったようだ。

目を瞑つて少し考えるような仕草をしたかと思うと——

「お前は確かに父上の寄子や子飼いではない。だがレッドグレイブ家の庇護下にあるのは周知の事実だ。そんなお前がクラリスと結婚するということは、ただでさえ微妙な立場を更に危うくしかねないのだぞ」

「——え？なんで？」

そんなの聞いてない。クラリス先輩は別にレッドグレイブ家と敵対しているわけではないはず。むしろどの派閥にも属さない中立で政略結婚という観点から見ても別に問題があるとは思えないのだが。

「まあ、お前が政治に興味がないのは気付いていたが——アトリー家は中立の立場であることは知っているだろう」

「え？——はい」

「お前は何か勘違いしているようだが、中立というのは全てを敵に回す覚悟が必要なのだぞ。どの派閥にも味方も敵対もしないというのは聞こえが良いかもしれないが、その

結果、誰からも信用されないのでは意味はない。特にお前はな」

なんで俺が中立派に立つと危ないんだ？

頭に疑問符を浮かべていると、アンジエが解説してくる。

「考えてもみろ。お前が所有するロストアイテムの船と鎧はそれこそ誰もが喉から手が出るほどに欲しいものだ。特に公国との戦いでのパルトナーの活躍が知れ渡り、お前に対する注目と警戒が集まっている。これまではレッドグレイブ家の影響力もあつて表立って妙な行動を起こしたりはしていなかったが——これからはそうもいかない。お前がクラリスと結婚するということは中立のアトリー家と同盟する——つまりレッドグレイブ家の庇護を蹴るといふ宣言に等しい。そうすればお前は今以上にお前のロストアイテムを狙う者たちの脅威に晒される。場合によっては父上もお前を危険分子と判断するかもしれない。つまり——お前は下手をすれば全ての派閥を敵に回すぞ」

アンジエが表情に影を落とし、低い声で言った。

そんなの困る！

「ええ——俺は権力争いに参加する気なんてないのに」

「その気があるうがなかるうが争いに巻き込まれるのが政治の世界だ。もう一度聞くと、クラリスと結婚する理由は何だ？何かお前自身の考えがあつてのことか？」

——言えねえ。あの時は婚活から逃れたい一心でそんな大層な考えは——ミリもな

かったなんて。

クラリス先輩という俺にはもったいないほど素敵な女子が俺を好いてくれていることに舞い上がって、このチャンスを逃せるかと青臭い勇気を振り絞って後先考えずにプロポーズしたが——こんなややこしい政治案件になると分かっていたら、間違いなく二の足を踏んでいただろう。

そのことを隠しつつアンジエとクラリス先輩双方を納得させられそうな答えは——

「——好きだからだ。クラリス先輩が」

手の込んだ口上など考えつかず、シンプルにクラリス先輩が好きだから、という理由しか提示できなかった。

アンジエが拍子抜けしたようにふつと笑う。

「——やはりか。お前に政治センスなど期待できないとは思っていたが——ただの、普通の恋愛だったというわけだな」

なぜかアンジエの表情が少し翳る。

「クラリスとの結婚がお前の意思なら私には止めることはできないが、これから先お前は難しい立場に追いやられることになるだろう。私としてはお前が危険に晒されるのは——」

するとクラリス先輩が反論した。

「レッドグレイブ家の庇護を受け続けるにしても危険度は大して変わらないと思うわよ？ 派閥は縮小して発言力も低下していることだし」

アンジエは否定しなかった。

俺もふと思いついた。公国と繋がっている奴の特定に協力を依頼した時だ。

ギルバートさんが「今のレッドグレイブ家に発言力はほとんどない」って言ってたわけ。

あの時たしか俺は後ろ盾としてのパワーを疑ったけど他に頼る相手がいないと思っ
て忘れていた。

アンジエが自嘲するような笑みを浮かべたかと思うと、クラリス先輩に問いかけた。

「お前の家ならばリオンを守れると？」

クラリス先輩は自信に満ちた笑みで答える。

「アトリー家の情報力を甘く見ないで欲しいわね。代々大臣職を引き継いできた力よ」

アンジエとクラリス先輩の視線が交錯する。

その視線に込められた感情や考えは俺には読み取れない。

アンジエが口を開く。

「神殿の方はどうする気だ？ リオンがあの子を聖女に推挙すれば神殿とのつながりができる。リオンにその気がなくとも、神殿によって新勢力の旗印として担ぎ上げられでも

すれば王宮全体を敵に回すぞ。そうなればアトリー家にとつても不利益ではないか？」
「そんなことになるのはリオン君よりもユリウス殿下たちではないかしら？リオン君は単に失われた宝と聖女の資格を持つ者を見つけただけ、という立場を取って距離を置けるけど、ユリウス殿下たちはそうもいかない。むしろ警戒すべきはフランプトン侯爵の派閥よ」

クラリス先輩は立板に水の勢いで政局予想を並べる。

俺にはさっぱりだが、宮廷貴族の生まれで根っからの政治家の令嬢はやはりその辺りの感覚が発達しているらしい。

「フランプトン侯爵はリオン君を明確な脅威と見做して排除しようとしている節があるわ。レッドグレイブ家はリオン君を派閥の一員として取り込む方針だったようだけど、侯爵は違う。それこそ抹殺してロストアイテムだけ取り上げることが企んでいてもおかしくない相手よ」

え、何それ怖い。

そういうえばフランプトン侯爵はヘルトルーデを学園に留学させようとしていたと聞いた。

公国と共謀してこの前の公国による侵攻を引き起こした疑いがある、とも。

本当にそのフランプトン侯爵とやらは厄介な相手のようだ。

『ご心配なく。マスターを抹殺などさせませんよ。お望みであれば侯爵の方を抹殺することも可能です』

空気状態だったルクシオンが物騒なことを言ってくる。

だが、ルクシオンを使って王宮での情報収集を行えば危険を減らせるのは間違いない。

よし、決めた。フランプトン侯爵派閥に関することはレッドグレイブ公爵家に丸な——任せていたが、これからはルクシオンにもやらせるとしよう。

尤も、ルクシオンは今公国に関する情報収集やら実家や領地での工場の立ち上げで忙しそうなので本格的にやるのは公国からもう一つの魔笛を奪った後になるだろうけど。

俺を取り残して議論を始めていたお嬢様方に割り込む。

「アンジェの言いたいことは分かった。でもクラリス先輩との結婚をやめるつもりはない。色々やややこしいことになるのは分かったけど、俺にも対策はある。ルクシオンだっているから、手に入れようと思えばそれなりに情報も手に入るし」

2人が俺の目を見つめてくる。

「もう一度はつきり言っておく。クラリス先輩と結婚するのに変な意図があるわけじゃないし、レッドグレイブ家とも協力関係は維持したい。公国と——フランプトン侯爵とやらの派閥という共通の敵があるからね」

アンジエがゆっくりと口を開く。

「お前の意思は分かった。父上に伝えておく。私としてもお前と敵対はしたくない。その——恩人だからな」

やっと長いお話が終わりそうだ。

そう思つた俺だがお話はまだ続く。

「だが、意外だよ。お前とクラリスが知り合つたのは学園祭の時だったな。それほど日は経つていないのにもう婚約内定とは——どういう経緯でこうなったのか聞かせてくれないか？」

そこからクラリス先輩との馴れ初めを学園祭の時から話す羽目になった。



やっとお話が終わつて部屋を出た時にはすっかり夜になっていた。

ほとんど真つ暗闇の中にポツンポツンとある外灯が道を淡く照らしている。

俺はクラリス先輩と並んで寮への道を歩いてしたが、どうにもクラリス先輩の機嫌が悪いように感じる。

どこか不機嫌なオーラが出ているというか——この前一緒に帰つた時には腕を絡め

てきたが、今日は手も繋いでこない。目も合わせてこない。

女子寮が見えてきた時、俺はたまりかねて質問した。

「あの、先輩。俺何か気に障るようなことしました?」

するとクラリス先輩は立ち止まって溜息を吐いた。

「——鈍感」

そして俺の方に振り返ったかと思うと悲しげな微笑みを浮かべて言った。

「アンジェリカのこととは愛称で呼び続けるのに——私のことはクラリスと呼んでくれな
いのね」

俺はハツとした。

この前、一緒に帰った時「クラリスと呼んで」と言われたばかりではないか。

「——すみません」

クラリス先輩は少し頬を膨らませていたが、すぐに溜息を吐いて笑顔になる。

「じゃあこうしましょう。私もこれからは君付けをやめるわ。これからはお互い呼び捨て。それならイーブンでしょう? リオン」

呼び捨てで呼ばれてドキツとしたのは久しぶりに思う。

俺を呼び捨てにする相手といったら家族か、ダニエルやレイモンドくらいしかいなかった。後はアンジェだな。いずれも恋愛対象にはならなかった。

でも好きな人に呼び捨てにされるって——心地良いな。

「そうですね」

するとクラリス先輩がスツと身体を寄せてきたかと思うと、人差し指を俺の唇に押し当ててくる。

「それと、2人きりの時は敬語もなし。いいわね？」

緑色の瞳に有無を言わせない迫力が宿っていて、逆らう意志を奪われる。

「わ、分かったよ。クラリス」

クラリス先輩——クラリスはパツと明るい笑顔になった。

「よろしい」

クラリスが俺の手を握って指を絡めてくる。いわゆる恋人繋ぎつてやつだ。俺たちはそのまま手を繋いで女子寮まで歩いた。

フエイタルダメージ

王宮の会議室の1つにヴィンスと彼の派閥に属する貴族たちが集まっていた。

上座にヴィンスが座り、隣に立つ腹心の貴族がアンジエから報告された内容を聞かせていた。

「つまり庇護を蹴ると認めた上で、かつ協力関係も維持したい、と?」

「虫の良い話ですな。公爵の尽力で命を救われ、あまつさえ出世までさせて貰っておきながら——恩知らずなことだ」

「全く何なのでしようね。痴情の纏れに首を突っ込んで宮廷を引つ掻き回したかと思えば、公爵に媚を売り——今度はアトリー家に取り入るとは」

「やはり小狡い成り上がりですな。恩義に報いる忠誠心がない浮気者だ」

「野心がないとは言いが、どこまで信用できることやら」

貴族たちが口々にリオンに対する不満を露わにする。

リオンがここにいたなら公国との交戦前は大して興味もなかったくせに随分と手前勝手だと思っただらう。

ヴィンスが貴族たちを宥める。

「彼に庇護を蹴られたことには今更驚きはせん。元々彼が私を頼ってきたのも伝手がなく他に頼れる相手がいなかったから、というだけの話だ。その私が宮廷での影響力を落としたと彼が知った時点でこうなることは決まっていた。むしろ金輪際関わるなど言われなかっただけマシと考えるべきだろう」

魍魅魍魎の蠢く貴族社会において裏切りや忘恩などよくあること。特に力なき者たちは時局を見て頼る相手を簡単に変える。

ヴィンスはそれをよく知っていた。というより、今も現在進行形で思い知っている。だが「仕方なかった」と割り切れるものでもない。

「惜しむらくは——彼を取り込む手段として結婚相手の用意を選択しなかったことだ。それでは弱いと思つたのだが——アンジェによれば出世は彼の望みではないとのこと。こうなつた以上は我々も方針の修正をせねばなるまい」

だがヴィンスは具体案をすぐには出さない。

そしてその玉響の沈黙は意見を募るものと解釈される。

若手の貴族が過激な意見を口にする。

「敵対派閥よりも先に彼のロストアイテムを押さえるべきではありませんか？」

しかし、彼の対面にいた派閥の最古参の貴族が反対した。

「却下だ。そんなことをすれば確実に彼を敵に回すぞ。それに黒騎士を破つた実力の持

ち主から奪えるとも?」

「取引ですよ。彼が欲しがるとを調べて——」

反論する若手貴族に資料を読んでいた別の貴族が水を差す。

「彼が欲しているものは領地での平穩な生活、それだけだ。度し難い無欲さだが、それ故に厄介だ。彼はあのロストアイテムを自分の安全と平穩を担保するものと捉えている。他者に渡すはずはない」

「子爵というのが歯痒いですね。伯爵であればアンジェリカ様を正室に迎えさせ、強固な縁を作れたものを」

「我々が用意できる中でクラリス嬢を凌ぎ正室に収まることのできる娘は——」

「おりませんな。身分だけならサマーズ辺境伯の次女が当てはまりますが——あの性格では拒絶されるでしょう」

次々に発言する貴族たち。

議論で一気に部屋が騒がしくなるが、ヴィンスは静観していた。

ついこの間——アンジェが決闘沙汰を起こすまでこういつた会議は不文律に縛られて本音の半分も出ておらず、問題解決に役立つことは殆どなかった。

それに比べれば騒がしいこのの方が断然マシだ。

議論が少し騒がしさを落とした所でヴィンスは手を打って周囲を黙らせる。

「今更言つても詮ないこと。我々が彼に提示できる対価、それは情報だ。彼が協力を求めてきた内通者の炙り出しはどうなっている？」

ヴィンスの問いかけに腹心の貴族が答える。

「はい、正直に申し上げて難航しております。件の豪華客船の乗客と船員全員分の事情聴取を精査した結果、公国に客船の位置を知らせていた者を一人発見し、確保しました。我々の派閥に属していた家の娘です」

貴族たちの間に動揺はあまり見られない。

「締め上げた所、指示した者の名を吐きましたが——その者は遺体で見つかりました。家の当主は関与を否定。蜥蜴の尻尾切りをされた形です」

貴族たちの顔が歪む。

ヴィンスも眉間の皺が深くなる。

「思ったよりも動きが早いな」

「それともう一つ。今回の調査以降、敵対派閥に忍ばせていた【耳】からの連絡が相次いで途絶しました」

「どこかの耳だ？」

「【離宮】及びフランプトン侯爵派閥です。語るに落ちているものですが——いかんせん証拠がなく、上手く用意する手立てもない以上手の出しようがなく——」

あちこちから溜息が漏れる。

ヴィンスは目頭を揉んでゆつくりと口を開いた。

「リオン君はアンジェに張らせる。彼のいる寮の職員にも声を掛けておけ。それからヘルトルーデと侯爵に付けた「カナリア」に通達を。これ以降は耳としての任務に移行せよ、だ」

「承知致しました」

「——勢いのある相手との謀略戦は容易ではないな」

ヴィンスは背もたれにもたれ掛かりたくなるのを堪えて呟いた。



長かった2学期が終わりを告げ、学園は異様な熱気に包まれていた。

公国による豪華客船襲撃で大勢が死んでからしばらく明るい話題がなかった所に降って湧いた再びの決闘のせいである。

終業式が終わった後、闘技場には大勢の学園生が詰めかけた。

その殆ど全員がユリウスたちを応援している。

「ユリウス殿下たち、あの外道に勝つために5人で頑張ってきたんだって！」

「夜な夜な鎧の修理のために5人で集まってたつて」

「よ、夜な夜な」

「負けても諦めずにまた挑むって凄いやな」

「ああ、きつと今度はやれる！」

「精一杯応援するぞ！」

女子はユリウスたちの不屈の闘志と一途な愛に熱狂し、男子は5人で鎧を用意した話に感動している。

闘技場の端に出された5人の鎧はお世辞にも格好が良いとは言えなかったが、それを笑う者はいない。

リオンの方は前回の決闘での悪印象が強く、襲われた豪華客船の救助を行なったことや黒騎士を打ち破った活躍は捨象されている。

クラリスは最前列でユリウスたちを称賛する声を聞いていた。

周りには取り巻きたち——特にクラリスに忠実な男子たち——が陣取り、苦々しい表情を浮かべている。

「能天気なもんですね。黒騎士を破ったやつにあんな寄せ集めの鎧で勝てると本当に思ってるんでしょうか」

クラリスの隣に座る「エリオット・ファイア・リーガン」が毒づいた。

「そうぼやくものでもないわよエリオット。所詮は因縁を終わらせるための八百長試合。周りの反応なんて気にするだけ損よ」

クラリスがエリオットを嗜める。

彼女はこの決闘が最初から八百長だと知っているため、鷹揚に構えている。

「八百長？あのバルトファルトが八百長なんてするんですか？」

エリオットからすれば少々意外だった。

リオンは空気を読むことをせず、「予定調和など糞食らえ」とでも言わんばかりに大番狂わせを連発する。

そんなリオンが八百長をしてまでユリウスたちを勝たせるといふのは不可解だった。

「彼にとつてはあの5人との因縁が決着すれば勝利なのよ。決闘で負けてもそれは問題じゃないわ」

クラリスに諭されてエリオットは黙ったが、忌々しげに闘技場の端を睨みつける。

ユリウスたちは5人で集まって最後の作戦会議でもしているようだった。

敬愛するクラリスを苦しめた男が「バルトファルトに勝って前に進む」などというふざけた言い草にクラリスにも見せたことがないような良い笑顔で賛同し、勝ちを譲られて手を振ってマリエと交際する——面白いわけがなかった。

「——ふふ」

不意にクラリスが笑い出した。

「どうされましたか？ お嬢様？」

エリオットが怪訝に思つて問いかけるが、クラリスは目を合わさず、暗い笑みを浮かべて言った。

「あの鎧、貴方は寄せ集めと言つたけれど、わざわざ職人を雇つて造らせたそうよ。それで空賊退治の報酬と、あの5人、いえ、6人で儉約しながら貯めた生活費の殆ど全てが吹っ飛んだと聞いたわ。それをあの5人は自分たちの愛の通過儀礼と肯定的に考えているけれど、あの女は真逆。わざわざリオンにあの鎧を壊さないように懇願してきたのよ？ あの5人が自己陶醉に浸っている中であの女だけが現実を見て不安に押し潰されそうになっている——最高に笑えると思わない？」

そしてクラリスはハイライトの消えた目で言った。

「もし——私がリオンにあの鎧を破壊するよう頼んでいたらどうなったのかしらね——」

「お嬢——様？」

エリオットがドン引きした表情になっていた。

クラリスはすぐに眩しい笑顔に戻る。

「冗談よ。そんなことを言ったらリオンに嫌われてしまうわ」

それってリオンには言わないだけで、あの鎧が壊れることを望んでいるのは否定しないってことだよな、とエリオットは思ったが、口には出さない。

「あ、バルトファルトが来ました」

エリオットが空を指差すと、アロガンツがスラスターを噴射しながらゆつくりと降りてくるのが見えた。

闘技場から一斉にブーイングが上がる。

ふとクラリスが呟く。

「本当に——嫌な奴ね」

誰に向かってのものだったのかも分からないその呟きは誰の耳にも届くことはなかった。



ちよつと趣向を凝らして空から登場してみたら、着地する前からブーイングの嵐だった。

やっぱり必要以上に煽ったのと、賭けで大損して絶望する所を嘲笑ったのを根に持たれているようだ。

まあ、同じことされたら俺も恨むけどさ。

そういえば今回は賭けをやっていなかったな。

今回は俺が自分に賭けることをしていないから賭けが成立しなかったのかもしれない。

いつでもいいけど。

「さてと、どうやって負けたもんかな？ あんまりあからさまに八百長しても却って良くないことになりそうだし——」

『マスターは一応、黒騎士を倒した英雄として知られていますからね。少しは真面目に相手してやった方がよろしいかと』

ルクシオンの言う通り、黒騎士を破った功績が既に学園中に広まっていて消極的に戦う選択肢がない。

確かに俺が負けるのは決定路線だし、皆が望む予定調和でもあるのだが——あんまり簡単に終わってもお互い体裁的に面倒なことになりそうだ。

だがアロガンツが本気で戦えばあの鎧は間違いないく破壊される。

となると間を取って——あの5人の熱い想いを正面から受け止めて、宿命のライバルっぽい対話を挟みつつの激闘の末に、彼らの思いを乗せた渾身の一撃で倒されて負けを認める、っていう筋書きが良いだろうか。

まあ、途中であの鎧に傷の1つや2つ——いや、たぶん傷だらけになるだろうが、要はスクラップにならなければ良いのだ。

それに、どの道マリエにはいくらか援助してやるつもりでいる。

「よし、この線で」

頭の中でシミュレーションしていると、腐の人が歓喜のあまり昇天しそうな熱い展開を繰り広げるユリウス殿下たちが見えた。

会話は拾えないが、どうやら乗り込むのはグレッグのようだ。

たぶんあとの4人は「お前に託す」とか「俺たちは離れていても心はお前と共に戦っている」とかそんなことを言っているんだろう。

彼らの友情を前に会場は感動の嵐に包まれている。

女子たちの黄色い声援と男子たちの熱い応援が響き渡る。

呆れる一方でちよつと羨ましい気持ちもある。

まさに青春！ って感じだもんな。

グレッグが鎧に乗り込み、胸元が閉まる。

進み出てきた鎧が右手に槍、左手にライフルを携えてアロガンツと向かい合う。

マリエはダサイと言っていたが、こいつの価値は見た目ではないのは俺にも分かる。

言うなれば夏休みに作った人力飛行機だ。

どんなに不格好で、他人からはガラクタにしか見えなくても、作った者からすれば思ひ出が詰まった何物にも代え難い宝物なのだ。

——そのために生活費全部吹っ飛ばしたのは頂けないが。

試合前の口上を述べ、決闘の誓いを立てると、審判が開始を告げた。

『両者はじめー！』

グレッグは一気に距離を詰めて槍を横薙ぎに振るってきた。

魔力が込められた強烈な一撃を俺はヒラリと躲し、お返しにライフルをぶっ放した。

グレッグは素早く横に飛んで弾を躲し、左手のライフルを発砲してきた。

アロガンツには効かないが、炸裂した弾の煙が視界を遮り、生じた一瞬の隙に距離を

詰められる。

突き出された槍をブレードでいなし、上空に舞い上がる。

高度の有利を得た俺は上からライフルを撃ち込むが、グレッグは全弾回避した。

しかし、回避に意識を取られたグレッグは姿勢が乱れ、一時的に俺への攻撃ができな

くなる。

その隙に俺は落下速を乗せて斬りかかる。

回避は間に合わないと思つたららしいグレッグは槍とライフルを十字形に交差させて

振り下ろされたブレードを防ぎ、そのまま罅迫り合いになる。

グレッグの鎧はアロガンツのパワーと重量で押さえつけられたにも関わらず、それをものともせず巧みに機体を回転させて逃れ、その勢いのまま槍を振るってくる。

槍の穂先がアロガンツの肩を掠め、火花が飛び散った。

それがどうという訳でもないが、アロガンツに一太刀浴びせたグレッグに会場から盛大な歓声上がる。

距離を取った俺は一息吐いて呟いた。

「あいつ、成長したな」

動きが前の決闘の時とは全く違う。

最初から全力で自分の膂力と技量の限りを尽くして立ち向かってきているのが分かる。

おまけに鎧の性能も段違いだ。パワーもスピードも以前戦ったどの機体よりも上。

その鎧とグレッグの動きは人馬一体と言ってもいいほどだ。

再びグレッグが向かって来たので、アロガンツを前進させる。

互いにライフルで牽制し合いながら距離を詰め、弾倉が空になった所でグレッグが一気に加速して超速の衝突をお見舞いして来た。

アロガンツは躲し切れずにモロに衝突をくらって尻餅をつく。

グレッグが追撃をかけてくるが、横向きに転がって躲し、素早く体勢を立て直す。

弾切れのライフルは投げ捨ててもう一本のブレードを取り出し、二刀流の構えをとるアロガンツ。

グレッグの方もライフルを捨てて銃一本になっている。

「ルクシオン、ドローンだ」

『ドローン、展開します』

アロガンツのコンテナから球形のドローンが飛び出し、グレッグの鎧に襲いかかる。

だがグレッグは素早く闘技場の壁際に移動し、攻撃の方向を限定してドローンを一機ずつ的確に撃墜していった。

俺はドローンがやられている間に距離を詰め、2本のブレードで斬りかかったが、グレッグは後方倒立回転跳びで躲し、槍を振るってアロガンツのコンテナを切り裂いた。

ドローンの迎撃に気を取られているように見えてちゃんと俺の方も見ていたらしい。やるじゃないか。

距離を取るためにスラスタを吹かして上昇するが、グレッグの鎧が跳躍して飛びかかってきた。

両脚を揃えて曲げ、空中衝突の直前で瞬時に伸ばすことで放たれた強烈な屈伸蹴りにくらったアロガンツはバランスを崩して背中から墜落した。そのままズルズルと闘技場の端まで滑って行き、壁にぶつかって止まる。

グレッグの鎧は反動で後ろ向きに大きく宙返りして反対側の端に着地した。サマーソルトキックのようなアクロバティックな技が決まったことで観客席から割れんばかりの歓声上がる。

アロガンツが巨体に見合わない軽快な跳ね起きで立ち上がり、ブレードを構え直すと、グレッグの鎧も突撃の構えを取る。

そろそろクライマックスといこうか。宿敵同士の対話の時間だ。

どちらからともなく走り出し、再び俺とグレッグは接近戦に入る。

グレッグは途切れることなく刺突を繰り返し、俺は二刀流でそれをいなす。

これで周囲には俺が防戦一方になったように見えるはずだ。

音声を外に出してグレッグに声をかけてみた。

「やるじゃないか。この前とは機体も動きも段違いだぞ」

『お前に勝つために鍛えた成果だ！マリエと皆の——想いと願いと未来を背負って俺はここにいます！』

またクツサイ台詞を吐きやがって。

まあ、鍛えてきたのは事実だろうから突っ込まないで置いてやるが。

「おお〜青春だね〜」

ケラケラ笑いながら俺はグレッグにぶっ飛ばされる用意をする。

アロガンツの脚部を狙ったグレッグの刺突で一瞬構えが崩れた俺にグレッグが渾身の一撃を繰り出す。

『そこだああああああ!!』

喉元にクリティカルヒットを貰ったアロガンツは派手に吹っ飛び、闘技場の壁に激突する。

一方のグレッグも槍の穂先が欠けてしまい、肩で息をしているような仕草を見せる。だがそれでも槍を構え直し、こちらに近づいてくる。

——頃合いだな。

この後は最後の足掻きのポーズをつけて、その後は「参りました」と言っただけで綺麗に決闘を終わらせ——

『マスター！すぐ脱出するようグレッグに伝えてください！あの鎧は爆発寸前です！』

不意にルクシオンがアラートを鳴らした。

「何?! どういうことだ?」

『先程から動力部をはじめ機体各部の熱量が異常に増大しています。スキャンしましたが、内部構造がデタラメです。改造で出力を上げたのではなく、暴走しているだけです!』

「何だっつて!?!」

慌てて俺はグレッグに警告した。

「おいグレッグ！お前の鎧おかしいぞ！今すぐ降りるんだ！」

だが――

『はっ！俺を惑わせるつもりだな。そうはいくか！見え透いた心理作戦には引つかからないぞ。だが、それだけお前を追い詰められたってことだよな！』

グレッグは俺を信じなかった。

俺は審判に向かって叫ぶ。

「審判！中止だ！こいつの鎧は暴走している！」

だが審判の教師がかぶりを振る。

『見苦しいですよバルトファルト君。彼らの思いを真正面から受け止めてあげなさい』

「ふざけんよ！お前はまず俺の言葉を真剣に受け止める！緊急事態なんだよ！」

クソツ。さつきまで演技とはいえグレッグの猛攻に追い詰められていたせいで、俺が

苦し紛れのデタラメを言っているようにしか見えないではないか。

観客の中にも俺の言葉を信じている者はいない。

「負けそうになったからってあんな姑息な手を使うとか、最低ね」

「もしかして僻み？気持ち悪く」

「さすがバルトファルトだ。やり口が卑怯なんだよな」

「グレッグ！そんな奴に騙されるな！」

マズい！俺が決闘を綺麗に終わらせるために書いた筋書きが完全に仇になつてるじゃねーか！

ルクシオンが呆れていた。

『身から出た錆ですね。日頃の行いが悪いから誰にも信用されないので。解析完了しました。いつでも爆発させずに破壊できます』

「——嘘だろオイ」

俺に壊せと言うのか？

あの5人の青春の一部で、マリエの全財産でもあるあの鎧を？

「い、嫌だ。そんなことができるか！あいつらが頑張つて作つて——マリエの全財産が注ぎ込まれているんだぞ？」

拒否する俺にルクシオンは無慈悲な選択を突きつける。

『では爆発でグレッグが死ぬところを見るおつもりですか？』

——認めよう。確かに何度かグレッグに対して死ねとか思つたことはある。

でもだからって今死んで欲しいわけじゃない。いや、死なせるわけにはいかない！

なりふり構わずアロガンツの出力を上げてグレッグの鎧に飛びかかり、体格差を活かして押さえつけようとしたが、グレッグは必死にアロガンツから離れようと抵抗する。

「いいから降りろ！頼むから降りてくれ！」

『まだ言うか！まだだ！まだ俺は負けてねえ！』

「いやだから本当にヤバいんだって！その鎧は暴走しているんだ！」

『戯言を！これは俺たちの闘志に相棒が共鳴してるんだよ！お前を倒そうと昂っているんだ！』

「戯言を言っているのはお前の方だ馬鹿野郎！本当に危ないんだって！」

『お前の口車にはもう騙されないぞ！俺たちにイカサマをしたことは忘れてねーからな！』

——しまった。

空賊退治の時、船賃代わりにイカサマトランプで金を巻き上げたんだった。

しかも後で種明かしをして「世の中にはこういうイカサマで金を騙し取るヤツが普通にいるから注意しろよ（笑）」と言ってやったのもマズかった。

いくら馬鹿なこいつらでもそんなことされて俺を信用するわけがない。

なんであんなことしたんだ俺の馬鹿！大馬鹿者！

それ以上に——

「少しは学習しろよ！詐欺師に騙されやがって！」

おそらくこいつらは腕利きの鎧製作者を騙る詐欺師に引っかけたのだろう。

それでデタラメな組み上げをされて欠陥品を押し付けられたというわけだ。

これだからボンボンは！取引とか契約をする時は少しくらい相手を疑えよ！

アロガンツの出力を最大まで上げてグレッグをpushさえつげようとするが、それに呼応してグレッグの鎧も出力を上げる。

あろうことか、アロガンツとパワーで拮抗していた。

なんてしぶといんだよ！

会場はグレッグへの「負けるな！」コールで満ち溢れている。

ユリウス殿下たちも声をからしてグレッグを応援している。

『皆の応援が力になっているみたいだな！いくぜええええええ！』

応援でパワーアップとか——幼稚園児向けのヒーローショーじゃあるまいし！

だが実際鎧は出力を上げ続け、アロガンツが押し返され始める。

熱量も上がり、おそらくグレッグの鎧の中はサウナ状態だ。

なのに戦いに夢中でグレッグは気付いていない。

ルクシオンが急かしてくる。

『マスター、タイムリミットが近いですよ』

——もうこうなったらなりふり構っていられるか！

「ああもう！ルクシオン！グレッグを黙らせろ！」

『了解です』

アロガンツの左腕の装甲が展開して光を放つ。

『あーバルトファルト！その手はグヘッ！』

何か言おうとしていたグレッグが衝撃を受けて気絶し、鎧はようやく大人しくなつた。

だが爆発はもう免れない。

胸元をこじ開けるとグレッグを掴んで引つ張り出し、鎧を思い切り遠く目掛けて蹴飛ばした。

直後、鎧は背部から大爆発を起こしてバラバラに碎け散った。

四方八方に凄まじい勢いで爆風と破片が飛び散り、闘技場の観客席を守るシールドが強い光を発してそれらを受け止める。

シールドに当たって跳ね返った破片が闘技場の中を跳び回り、行き場をなくした爆風と共に暴れ回る。

アロガンツにも無数の破片がペチペチ当たった。

俺は助け出したグレッグを守るためにアロガンツをしばらくうずくまつた姿勢にさせ続けた。

破片と爆風の嵐が収まったのは爆発から数分後のことだった。

煙が晴れると、原型を留めないほどに四散した鎧の残骸が闘技場に散らばっていた。ちぎれ飛んだ手足はまだ辛うじて形を保っているが、たぶん売り物にはならないだろう。

良くてスクラップパーギルドで部品として叩き売りだ。

俺は座席にぐったりともたれかかる。

「こんなことなら——受けなきやよかった」

会場は静まり返っていた。

皆何がどうなっているのか分からない、という顔をしている。

そしてその静寂を破って響き渡るのは——マリエの悲鳴だった。



「イギヤアアアアアアアアアアアア!! 私の50万があああ! 全財産があああ!」

絶叫するマリエの隣でカイルが耳を塞ぐ。

そのままマリエは真つ白に燃え尽きて卒倒する。

カイルが慌てて駆け寄った。

「ちよつと! 主人様!?! き、気絶してる——お医者様あああ!」

カイルは慌てて医者を呼びに駆け出した。

取り残されたマリエはうわ言のように呟く。

「こゝ、これは夢——そう悪い夢よ。ユリウスたちが共有財産を溶かして作った鎧を自慢してきて——決闘を起こして——お兄ちゃんに壊されるなんてあつてはならないわ——私の50万ディア——生活費が——借金は嫌——そう、これは夢——私は悪夢を見ているだけ——誰か——誰か私の目を覚ましてよ——」

かくしてユリウスたちが時間と情熱を注いで作り上げた鎧は構造上の欠陥が原因で大爆発を起こして失われ、学園中が熱狂したりベンジマツチはユリウスたちの鎧が吹き飛んだことでリオンの判定勝ち、しかも搭乗者グレッグはよりにもよって仇敵たるリオンに爆発寸前の機体から引つ張り出されて命を救われる、という誰も予想だにしない結末を迎えたのだつた。

冬休み I

王宮の会議室。

そこでレッドグレイブ派閥と敵対する派閥の幹部が集まって会合を開いていた。

「聞きましたかな。殿下たちはまたあの成り上がり者に負けたそうですよ」

「使った鎧に欠陥があったとの情報もあります。自分たちだけでは仕上げられず、職人を雇ったとか。——それで詐欺に遭ったようですが」

「やはり世間知らずですな。担がなくて正解でした」

次々にユリウスたちを唾う声上がるが、1人の貴族がリオンの話題に触れる。

「それよりもあの成り上がり者——このまま放置しておいてもよろしいのですか？ レッドグレイブ家に擦り寄ったかと思えば今度は大臣に取り入ってクラリス嬢を娶るようです。奴をこのままのさばらせていては我々の計画の障害になるかと」

その発言で会合の緩んでいた空気は一変する。

「確かに——当初の予定が狂ったのはあの成り上がり者が飛行船を出して戦いに首を突っ込んだから、と考えられますな。フィールド家だけではあの軍勢に対処し切れなかったはずですよ」

「奴の目的は何でしょうか？善意だけであれだけの働きをすることも思えませんが——」
「我々の計画に勤付いている可能性は？」

「ない——とも言い切れません。どうにも最近レッドグレイブのモグラが活発ですかな」

「おや、捕らえられたので？」

「左様。貴殿の家も一度掃除が必要では？」

「ご忠告には感謝しますが——うちの庭は狭く、土も少ないのですよ。寂しいものですが大掃除の労力が不要なのは気に入っておりますね」

「おや、これは一本取られましたな」

フフフ……。ハハハ……。

冗談を交えつつの情報交換と議論の末に、やがて彼らの視線はボス——マルコム・フォウ・フランプトン侯爵へと集まる。

「侯爵、如何致しますか？」

その問い掛けに侯爵は勿体ぶって葉巻を吹かし、ゆっくりと口を開く。

「——奴のロストアイテム——公国との戦いで見せた飛行船と鎧は我らにとつても有用なもの。これは好機だ。相互不干渉と引き換えに奴のロストアイテムを王宮に献上させる方向で接近しろ。周りの人間を使って多少追い込んでも構わん。従わぬ場合は敵

と見做し、追い落とせ。ただし、こちらから直接的な手出しはするな。我々の動きは
 ヴィンスに勘付かかっているだろうからな」

「ちなみに【取引】は口頭で？」

「——当然であろう」

「愚問でしたな。ハハハ」

政界において口頭での取引ほど信用ならないものはない。そのことは普段から宮廷
 で権力争いに明け暮れている者からすれば常識だが、そういつた薄暗い争いとはあまり
 縁がない領主貴族——彼らの場合、武力での直接的な争いの方が馴染み深く、搦手を得
 意としていない——ならば面白いくらいに騙されてくれる。

彼らからすれば自分たちの目的が果たされること何よりも重要——失敗すれば良
 くて失脚、下手をすれば一族郎党処刑だからである——であり、そのためには手段など
 選んではいられないのだ。

自分たちの手を汚さずに脅威を取り除けるのなら、多少吹っ掛けられても取引で解決
 しようではないか。

牙を抜くか、潰すか——その選択ができる余裕がこの時の侯爵、そして彼の派閥には
 あった。



決闘の翌日。

「なんで俺ばっかり——詐欺師に引つ掛かつて共用財産吹っ飛ばしてあんな欠陥品押し付けられたのはあいつらの責任だつてハッキリしてんだろうが。しかも俺はグレッグを助けてやったんだぞ。あそこで俺が助けてやらなかったらアイツ今頃死体も残っちゃいないだろ。確かにインパクトは使ったよ。でもそうでもしなきゃアイツあのまま抵抗し続けて爆死してただろ。——なのにといつもこいつも俺が壊したって疑いの目で見ると。そんなにあいつらのヘマだつて思いたくないのかよ。——思いたくないんだろうな。そうだよ。俺は嫌われ者の悪役だもんな。俺が何かしたつていう甘い嘘の方がよっぽど受け入れやすいもんな」

ぶつくさ文句を言いながら礼服に着替える。

調査の結果、ユリウス殿下たちが作った鎧が爆発したのは構造上の欠陥——魔力回路にやたらと質の良い素材を使っているせいで魔力のオーバーロードを起こしたとか冷却用パーツの致命的な不足で動力部が融解したとか言っていた——ということがはっきり分かったにも関わらず、俺が何かしたという根拠のない陰謀論は消えなかった。

お陰で学園生とすれ違うたびに疑惑の表情で見られるし、背中越しにヒソヒソ話す声

が聞こえてくるので、俺の繊細な心は悲鳴をあげている。

例外はクラリスと——師匠くらいなものだ。

「今は誰にも認められなくとも貴方は確かにミスタグレッグの命を救ったのです。誇りなさい、ミスタリオン」

師匠のお言葉が胸に染み入る。やっぱりあの最強紳士だわ。

思わず流れ出した涙をハンカチで拭い、ドアを開けて外に出る。

部屋の外に出ると、俺は一瞬気圧された。

「似合っているわよ。リオン」

「立派だぞ。リオン」

「そに^そこ^しり^し笑^てって褒^めて^るくるクラリスとアンジェ——
「そこにいたのは彼女だけではなく——」

「あら、公国との戦いでの雄姿を思い出しますわね」

女王様——じゃなかった、ディアドリー先輩が胸の前で両手を合わせていた。

他にも——

「お前って奴は——どこまでも驚かされるぜ。しよつちゆう変なこと言ってたガキが今や子爵様だなんて——本当に凄いな。畜生、涙が止まらねえ」

どこかの涙脆い執事みたいに感涙に咽ぶ親父に、ハンカチを何枚も持って親父に一枚

ずつ差し出しているお袋。

「お前——なんか知らないお嬢様が増えてないか？」

ニツクスが疲れた顔で問いかけてくる。

どうにもクラリスにアンジェにデイアドリー先輩ととんでもなく身分が高い令嬢揃いで落ち着かないようだ。

そして後ろの方で小さく文句を言っているジェナ。

「——何よ。結婚してあげるって言ったのに。私も親友も拒否して。『いや、ちよつとないです』なんて酷いじゃない」

俺が子爵になると聞いて、狙っていた男子を思い出しているんだろう。

ジェナは結局狙っていた子爵家のご子息とは結ばれなかった。

そういうえば討伐したウィングシャー空賊団をその子爵家に鉦夫として引き渡したんだつたな。

姉が申し訳ないと謝罪して迷惑料代わりにサービスだつてしてきた。

俺つて出来た弟だよね。

ジェナはそんな弟に感謝のひとつもないような女だから振られたのだ。自業自得である。

ちなみにジェナはその子爵家のご子息を巡って親友と険悪になったのだが、振られた

者同士で愚痴り合っていたらいつの間にか仲直りしていたらしい。

雨降って地固まる、ってやつだろうか。

そんなジェナにからかいの言葉のひとつでも掛けてやろうとしたが、クラリスに手を握られる。

「さあ、急がないと式典が始まるわよ」

とびきりの笑顔のクラリスを見てみると、少し気が治まる。

皆に疑われて陰口叩かれて、ただでさえ嫌われていたのがさらに酷くなったけど、それでも変わらぬ笑顔を向けてくれる人がいる。

たった一人でも自分を愛してくれる人がいたら、それ以外の全ての人に嫌われてもいい、という考えにはこれまで納得できなかったけど、今ならその気持ちに近いかもしれない。

愛した男に捨てられて酷く傷ついた女と、蔑まれて恨まれて嫌われている男の傷の舐め合いだと——心ない連中はそう言うかもしれないが、そんなのただの幸せに対する嫉妬だ。

クラリスは有象無象の女性とは比較にならない魅力的な女性だし、俺がクラリス以上の女性に好かれることなど到底望めないだろう。

だから——クラリスのことは一生大事にしよう。

クラリスと一緒にするのに必要だと言うのなら、子爵の地位くらい受け取ってやろう。

そう、はつきりと思った。



叙勲式が執り行われた王宮の大広間は大勢の貴族で埋め尽くされていた。

アロガンツとクリスが乗っていた大型の鎧、そして黒騎士の大剣が目立つ所に飾られ、窓からは庭の上空に浮かぶパルトナーが見える。

公国との戦いに参加した者全てがここに集い、活躍に見合った勲章と叙勲記念品を受け取るのだ。

最初にアンジエを助けるための陽動作戦を行った学園生たちに【奉仕勲章】が渡された。

軍属ではないが、軍に対する貢献が認められた者に授与される勲章で、戦争中に軍と共に戦った義勇兵とか、輸送のために飛行船を差し出した船主とかに授与されるものらしい。

普通は授与されてお終いなのだが、学園生たちは貴族である。

そこで男子たちは正式な騎士として認められ、女子たちは僅かばかりではあるが年金が出ることになった。

肉の壁に囲まれて後ろからシールドを展開するか、大した威力もない魔法を撃つていただけの女子を命懸けでモンスターの大群から守り続けたにも関わらず、男子に年金は支払われない。

ここにもこの世界の厳しさが現れている。

ちなみにクリスは豪華客船が攻撃された時点から鎧に乗って抗戦し、アンジエを助けた後もフィールド辺境伯軍と共に公国軍と戦ったので、追加で【従軍勲章】を貰い、廃嫡も取り消し。晴れてアークライト家に復帰を許された。

次に公国軍と直接交戦したフィールド辺境伯家の軍人たちや流星騎士団のメンバーに【従軍勲章】とか【戦功章】とか【名誉戦傷章】とか色々授与された。

鎧で戦い、敵を撃墜した者は授与の際にスコアを読み上げられ、飾り盾とか剣とかの記念品を受け取る。

艦隊の乗組員は数が多過ぎるので、艦長が代表で【艦隊従軍章】や【艦隊戦功章】を受け取る。

黒騎士に撃沈された戦闘艦【ドントレス】の乗組員や鎧での戦闘で撃墜された戦死者たちには【捧心章】という名誉の戦死を遂げた者に贈られる勲章が授与されると発表

された。

ふと妖怪婆に売られそうになった時のことを思い出した。

あのまま俺が売られて軍人になって、どこかで戦死していたとしたら——俺はあの捧心章なる勲章を貰っていたのだろうか？

——貰つても全然嬉しくないな。

親父もお袋も悲しむだろうし、せめてもの慰め——になるのかどうかはさて置き——の遺族年金も妖怪婆のものになって実家には入らない。

——そういえば【淑女の森】はまだのさばっていたんだったな。全てが片付いたらルクシオンと一緒に潰しにかかるか。

俺が考え事に浸っている間にも式典は進み、フィールド辺境伯家の軍人たちを指揮したアーヴィング・フォウ・フィールド辺境伯の名が呼ばれた。

俺よりも段違いに豪華に着飾ったアーヴィングさんには戦争で大きな戦果を挙げた指揮官に贈られる【殊勲賞】と豪華な装飾の付いた剣が授与された。

そして——

「リオン・フォウ・バルトファルト男爵、前へ！」

俺が呼ばれる。

席を立て赤い絨毯の上を進んでいく。

玉座に座る国王陛下と隣に立つ王妃ミレーヌ様の眼前でお辞儀をし、片膝を突く。プレートに載せられた豪華な勲章——双翼を象った白金製のやつ——が運ばれてくると、ミレーヌ様が直々に感状を読み上げる。

やたらと仰々しく俺の功績を並べ立てた格式ばった文章はいくらミレーヌ様の美声を以つてしても頭に入つては来ず、早く終われという願いといつまでもミレーヌ様の美声を聴いていたいという欲望がせめぎ合う。

神妙な顔で頭を垂れている最中にこんな私欲塗れなことを考えている俺はどう考えてもこの「白金双翼章」なる勲章を受け取るに相応しい英雄ではないだろう。

「——し、敵の氣勢を挫きたるは王国軍の勝利に寄与すること極めて大にして、その武勲顕著なり。以上の功績及び其の勇気を讃え、茲こゝに「白金双翼章」を授与し、宮廷階位四位下、子爵に封ず。ホルファート王国国王ローランド・ラファ・ホルファート。代読、ミレーヌ・ラファ・ホルファート。おめでとう」

長つたらしい感状の読み上げが終わると、ミレーヌ様が勲章を手に取り、礼服の左胸に着けてくれた。

会場から盛大な拍手が上がる。

ミレーヌ様が手の甲を俺の顔の前に差し出した。

国王陛下あるいは王妃様から直接授与される榮譽を得た者はその手の甲に口付けす

るのが慣しなんだとか。

手の甲にとはいえミレーヌ様にキス——ゾクゾクする。

いかん！いかんぞ俺！

ミレーヌ様は王妃で、人妻で——俺にはクラリスがいるんだから。

ポーカーフエイスを維持しながら恭しくミレーヌ様の手を取る。

でもやっぱり——ミレーヌ様の柔らかな手の感触には劣情が湧き上がるのを完全には止められなかった。



グレッグが目を覚ますと、そこは学園の医務室だった。

「目が覚めたか！」

ユリウスたちが安堵の表情でグレッグの顔を覗き込んでいる。

グレッグはまだ頭がはつきりしていなかったが、医務室にすることで結果を察した。

「ああ——そうか。俺は負けたのか。皆すまねえ」

謝罪するグレッグだが、誰も責めはしない。

「グレッグ君に任せたんです。それで負けたのなら、皆の敗北です」

「気に入るな。また次の機会があるだろう」

ジルクとユリウスがグレッグの肩に手を置いて慰める。

「殿下？」

「ユリウスでいい。グレッグ、俺たちはこれで終わるつもりはない。いつかまた必ずバルトファルトに挑む。そしてその時こそは勝つ。お前も手を貸してくれるか？」

グレッグが上半身を起こして小さく笑った。

「そんなの決まってるだろ。皆がやる気なのに俺だけ引き下がれるかよ。俺はやるぜユリウス。何度でもな」

力強く笑い合う5人。

だが清々しい友情シーンはいつの間にか医務室に入ってきていたマリエによつてぶち壊される。

「あんたら——」

俯いてワナワナと震えるマリエの表情は影になって見えない。

「ああマリエ、来たのか。グレッグが目を覚ましたんだ。それで——」

ユリウスが言い終わる前にマリエの拳が医務室の扉を叩き、大きな音を立てて凹ませる。

「マリエさん？何をしているんですか！血が！早く手当てを！」

オロオロするジルクが戸棚を漁り始めるが、マリエの声で手が止まる。

「またリオンに挑むって——そう聞こえたんだけど」

その声は今まで5人が聞いたことのないような、底冷えのする低い声だった。

「あ、ああ。そうだ。あいつに勝って初めて俺たちは晴れてお前と——」

ユリウスが戸惑いながらも答えるがそれをマリエの怒鳴り声が遮る。

「それより先にやる必要があるでしょう!!」

凄まじい表情で怒気を放つマリエに5人は思わず震え上がる。

「調査結果を聞いていなかったの？あの鎧は内部構造が、デタラメな欠陥品で、あんたたちが雇った職人は詐欺師よ！鎧ひとつ作るために空賊退治の報酬も、学園祭で稼いだ共有財産も溶かして、その結果は何よ!?鎧は爆発して売り物にもならないし、私たちの生活費も殆どゼロのままよ！そんな状況でよくもそんな戯言を言っていられるものね！」

マリエの剣幕に言い返せないユリウスたちだが、ジルクが苦しい弁解をする。

「で、ですがマリエさん、あの職人が詐欺師であるなどは——マイスターの証書だって持っていましたし——」

だが、マリエはそれを一蹴した。

「マイスターだかユアスターだか知らないけど、証書なんてやろうと思えば幾らでも偽造できるのよ！それに、暴走して爆発した結果が何よりの証拠でしょうが！」

激昂したマリエは少し呼吸を整えてから宣告する。

「あいつへの再戦を考える前にあんたたちを騙した詐欺師の屑野郎を捕まえてきなさい。それから、そいつに騙し取られた50万ディア取り返して私の前に持ってきなさい。それができるまで私はあんたたちと一切口利かないからね！」

言い終わるや否や、肩を怒らせて去っていくマリエに五人はしばし茫然としていたが、はっと気が付いたユリウスが後を追いかける。

彼は初対面でマリエに平手打ちを貰っていて、マリエの怒りに若干耐性があつたのかもしれない。

「待つてくれマリエ！」

廊下に出たユリウスだが、マリエの姿はどこにも見えない。

そのユリウスの後ろで我に帰った4人が青褪めている。

「——マリエが怒ったぞ」

「確かに、こうしてはいられない」

「失敗すればマリエに見放されるぞ」

「そんな！」

彼らを見てマリエに見捨てられる自分を想像したユリウスは恐怖に震える。

鬱屈していた自分に光をくれた女神のような人に見捨てられるなど耐え難い苦しみ

だ。

「——皆。急いであの職人——詐欺師を探すぞ」

ユリウスの言葉に全員が頷いた。



叙勲式から二日経ち、俺は白いスーツに身を包んで神殿にいた。

隣にはやはり白いドレスに身を包んだクラリス。お洒落に巻いた髪には花を挿し、ベールを被っている。——凄く綺麗だ。

今日は俺とクラリスの婚約式の日だ。

遂に——遂にここまで来てしまった。

思えばクラリスとまともに面識を持つてから数ヶ月しか経っていないんだな。

我ながらどうしてこうもトントン拍子に関係が進んだのか、不思議に思えてくる。

面識を持つ前は雲の上の人だったクラリスが、今や俺の婚約者。そしてあと2年弱経って俺が学園を卒業すれば妻になる。

——その時、この世界はどうなっているだろうか。

扉が開く。

俺たちは腕を組んで赤い絨毯の上を歩いた。

割れんばかりの拍手が鳴り響く。

参列者は大物貴族揃いだったが、ヴィンスさんやギルバートさん以外は殆ど顔も知らない。

並んだ長椅子を通り越して部屋の最奥部まで進むと、神官がいた。

その神官が俺とクラリスの婚約が正式に認められたことを告げ、祝福の言葉を紡ぐ。

次に婚約誓約書の朗読。

叙勲式を思い出す格式ばった堅い文章で、読みにくいだが、暗記した通りに読み進める。そして俺とクラリスは婚約記念品の交換をする。

俺からは婚約指輪、クラリスからは懐中時計。

運んできた神官から指輪を受け取ると、クラリスの左手を取って薬指に指輪を嵌める。

クラリスがふっと息を漏らす。ベールの下で愛おしそうに指輪を見つめている。

そういえば——ルクシオンが婚約指輪を作ろうかと提案してきた時は笑えたっけな。

大きな宝石を取り付けようとか、全て違う宝石が付いた指輪を10個用意しようとか、普段の優秀さは何処へやらふざけているのかと思うようなトンチキぶりを見せてくれた。

思い出し笑いを堪えていると、クラリスが懐中時計を俺のスーツのジャケットに付けてくれた。

ポケットに入る直前にチラッと見たが、白金製で、裏に俺の名前が彫ってあった。こんな高級なものに自分の名前が入ってるって何だか気が引ける。

最後に二人でいくつかの書類に署名して婚約式は終わりだ。

だがその後にはパーティーが待っている。

俺史上最高に長い1日になりそうだ。



賑やかなパーティーと関係者への挨拶から解放されて学園の寮に戻ったのは夜になつてからだった。

この冬休みは王都で色々やる事があつて帰省はできないので、俺は学園の寮に留まっているのだ。

「あー疲れた」

ベッドの上に大の字になって寝転がる。駄目だもう立てない。

「後2日は休みたい」

その眩きに辛辣な反応を返してくるルクシオン。

『クラリスは今日よりも遥かに忙しい日々が後1週間は続くようですよ。この程度で音を上げるとはマスターは怠惰ですな』

——怠惰という評価には同意しかねる。

「酷いな。俺ほど国の未来のために頑張ってる奴いないだろ。どうすれば公国との戦争を防げるか、もし起こってしまった時にどうするか、こここの所一所懸命考えてるんだぞ？」

するとルクシオンはいつもみたく皮肉で返してくることなく、真剣な声色で告げてきた。

『それなのですがマスター。公国と王国の戦争を回避する目処が立ちました』

「何？本当か!？」

思わずガバツと身体を起こす。

『はい。継続調査の結果、両国の公式見解と矛盾する情報、及びヘルトルーデ・ヘルトラウダ姉妹に関する新しい情報を多数発見しました。これらの情報の活用次第で公国との戦争の回避は可能でしょう』

「聞かせてくれ。どんな情報だ?」

ルクシオンは勿体ぶった質問で返してくる。

『どちらからにしますか？公国の歴史に関することや、王女姉妹に関することや。どちらにしても長くなりますよ』

「——じゃあ、姉妹に関することからで」

するとルクシオンは一つの書類——と言うより、メモ書きのようなものを映像で映し出した。

『これは姉妹の両親——先代の公王夫妻が計画していた王国との和平に関するものです』

「和平？公国が？」

『はい。この書類を分析した結果、先代公王は王国との際限のない対立構造と戦争の再来を憂えていたようです。実際、王国の侵攻により、一時は公都を包囲されるという事態にも陥りましたからね。もしかた戦争になれば多くの犠牲が生まれ、そうでなくとも過度な軍拡が国庫を圧迫する。王国と敵対し続けることはいずれ公国を破滅に導く悪手——彼はそう考え、王国との和平を計画したと思われます。ですが——』

ここでルクシオンは言葉を区切り、人物リストに映像を切り替えた。

『これに主戦派が反発しました。王国による侵攻の記憶がまだ鮮明に残っていた時期でしたから、貴族だけでなく、国民の大多数も報復を叫んでいました。そして彼らは公王夫妻を暗殺し、魔笛に適性のあった姉妹を後継者として担ぎ上げたのです。このリスト

は調べた限りでの今生きている主戦派のメンバーです』

ルクシオンが言うリストをさつと読んでみたが——

「要職全部占めてるじゃねえか——」

摂政、大蔵卿、兵部卿、外務尚書卿、内務尚書卿、その他諸々——政権は完全に主戦派に乗っ取られていた。

『ヘルトルーデ・ヘルトラウダ両姉妹が物心ついた頃には周囲には主戦派しかいなかったということです。つまり、姉妹は傀儡です。ですが、これからお話しする公国の真の歴史と合わせて両親の死の真相を知れば、こちらの思惑に乘せられるかと』

「真の歴史ってどういうものなんだ？」

ゲームでは殆ど説明がなかったし、学園でも習っていない。

『ファンオース公国の起源からお話しする必要がありますが——簡単に言うと、王国本土への侵攻を度々繰り返したファンオース大公家がホルファート王国直臣から除名されたのがファンオース公国の始まりです。王国は軍事力に優れたフィールド家に辺境伯の地位を与えて国境の守りに置きました。ですが、公国となった後もファンオース家は王国への侵攻を繰り返し、遂にはグリーンカ島の破壊を機に全面戦争に発展。この戦争については両国で見解が異なります。王国側では公国が人の住む浮島を破壊し、数千人もの命を奪ったことに対する報復攻撃とされていますが——公国側では不平等な通商

条約を課せられたことをきっかけに独立を決意した大公家が民を率いて圧政に抗った独立戦争とされています』

「ちよつと待て。公国が元々王国の臣下だったってことなら——なんで王国は大公家を武力で潰さなかったんだ？いくら大公家が強力でも王国が本気で攻めたら保たなかったんじゃないのか？」

率直な疑問だった。

王国が領主貴族たちを纏めていられるのは一重に強力な正規軍の軍事力があるからに他ならない。

それを行使して大公家を潰そうとしなかったのは不自然だと思えたのだ。

『ええ、大公家も単独では王国相手には分が悪いと理解していました。ですので、周辺国家と協力して同時に攻めたのです。王国軍は複数の戦線に戦力を割かれ、大公家に集中することができなかつた。だからこそこのような周りくどいやり方を選択したのでしょうか』

「となると——公国がまた仕掛けてくる時はまたほかの国を巻き込んで攻めてくるのか？」

『可能性は非常に高いですね。そちらの方面も調査しますか？』

「——ああ。頼む。それで、今聞いた情報をどうすれば戦争を防げるんだ？」

ルクシオンはセンサーアイを不気味に光らせて冷徹な計画を告げてきた。

『ヘルトルーデ・ヘルトラウダ姉妹、及び公国内の非戦派を利用し、公国で内戦を起こすのです』